

# Animal Nursing (アニマル・ナーシング)

Vol.12 No.1 (第12巻 第1号)

2007

12

Dec.

投稿論文

動物看護研究 6報

院内業務研究 2報

動物看護職研究 1報

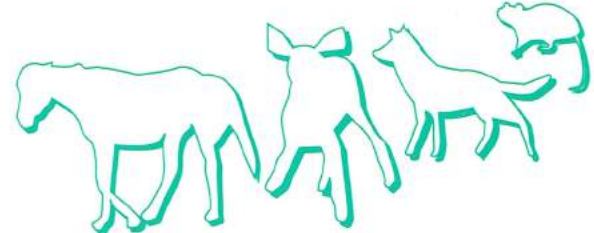
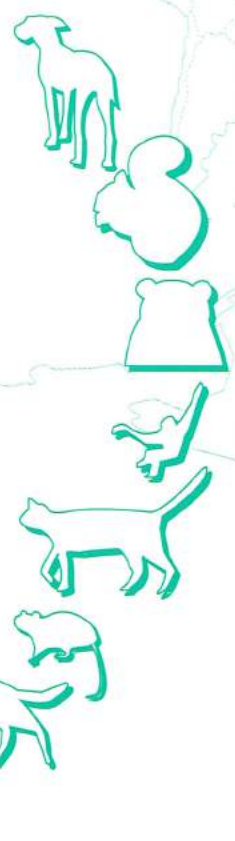
HAB(ヒューマン・アニマル・ボンド、人と動物の絆)研究 3報

〈意見・提言〉「動物看護専門職」としての自立へ向けて  
動物看護専門学校生による発表  
各種行事の詳細レポート

大会に参加して／発表を終えて

動物病院において動物看護師が担うべき  
大切な役割とは何か

——本学会認定動物看護師の声——



動物看護師による多彩な研究報告  
小動物看護に関する問題提起  
「人と動物の関係学」に関する最新の話





# 日本動物看護学会 主催

## 第7回「動物看護師資格認定試験」

### 《実施概要》

わが国の動物看護を育み導く、実力ある動物看護師を認定するための試験

日本動物看護学会は、動物看護学確立のための様々な活動に加えて、〈動物看護教育の向上〉と〈動物看護師の社会的地位の確立〉をめざしてこの認定試験を2003年より実施しています。この試験の合格者すなわち「本学会認定動物看護師」とは、〈動物看護についての一定の知識と技術を持ち、動物看護師としての適格な資質を有する〉と本学会が認定した方々です。認定者には、今後のわが国の動物看護を先頭に立って担うことが期待されています。そして獣医師や飼主・広く社会の人たちと協力して、さらに充実した動物医療の発展のために貢献することが求められています。

【試験日】 **2008年3月9日(日)**

【試験会場】

札幌	酪農学園大学	北海道江別市文京台緑町582番地	JR大塚駅・新札幌駅
仙台	仙台市戦災復興記念館	仙台市青葉区大町2-12-1	地下鉄広瀬通駅
東京	日本獣医生命科学大学	東京都武蔵野市境南町1-7-1	JR武蔵境駅
大阪	千里ライフサイエンスセンター	大阪府豊中市新千里東町1-4-2	地下鉄・モレール千里中央駅
福岡	福岡建設会館	福岡市博多区博多駅東3-14-18	地下鉄東比恵駅

・試験会場への行き方は受験願書内に記します。

【受験資格】 <受験資格1> **新卒者(2008年3月に、卒業見込および大学4年次へ進級予定の者を含む)と既卒者**

- 1) 文部科学省の定める高等学校を卒業し(または同等以上の学力があると認められ)、動物看護専門教育機関において、2年以上の専門教育課程を修了した者(修了見込の者を含む)。
- 2) その他、1)に相当すると日本動物看護学会が認める者。

<受験資格2> **現職者(動物看護の現職者)**

動物看護にかかわる実務期間(就業年数)を4年間以上有する者。ここでいう「実務期間4年間」とは、以下の①～④のいずれかであればよい。

- ① 動物看護専門教育機関を卒業していない場合は、実務経験が4年間以上
  - ② 動物看護専門教育機関1年制を卒業した場合は、実務経験が3年間以上
  - ③ 動物看護専門教育機関2年制を卒業した場合は、実務経験が2年間以上
  - ④ 動物看護専門教育機関3年制を卒業した場合は、実務経験が1年間以上
- ・<受験資格2>は2009年の試験までの施行とする(その後の継続についてはあらためて検討される)

【受験料】 15,000円

- ・受験料は<受験資格1><受験資格2>共通
- ・合格時には登録料10,000円が必要。また、2年ごとの更新時に資格更新料として本会会員10,000円、非会員20,000円が必要

【受験願書の入手請求】 **2007年12月10日(月)より開始**

- ・FAX・E-mail・郵便により受付(郵便番号・住所・氏名・電話番号・請求部数を必ず明記のこと)
- ・受験願書は1名(1通)につき1,000円。ただし、「団体受験(学校単位で10名以上)」による場合は1名(1通)800円。受験願書送付時にこの振込用紙も同封します

【受験願書の受付期間】 **2008年1月15日(火)～2月29日(金)**

- ・期間内に本学会事務局へ必着

【合格発表日】 **2008年3月31日(月)**

- ・合格者の受験番号を学会ホームページにて発表(受験者へは合否通知を郵送)

【試験時間割】

筆記試験Ⅰ	10:30～11:50 (80分、五肢択一式30問)	筆記試験Ⅱ	13:00～14:20 (80分、五肢択一式30問)
実地試験	15:00～16:00 (60分、20問)		

- ・<受験資格1><受験資格2>ともに、3試験すべてを受験します
- ・試験時間割は全国5会場共通(同時進行)
- ・受験者は、試験会場への交通と所要時間、試験開始時間などをよく確認の上、時間厳守にて入場すること

【出題範囲】 筆記試験——本学会編集・発行の教科書『動物看護学(総論・各論)』に準拠・関連した内容より出題する(下記は、同書の主要目次)。

総論◆動物看護概論/動物看護における業務と技術/看護の対象動物(イヌ、ネコ、ニワトリ、小鳥、ウシ・ウマ・ブタ、ウサギ、モルモット・ハムスター、マウス・ラット ※フェレット、その他エキゾチックアニマル、野生動物、学校飼育動物も含む)/動物看護学研究法/動物看護師にかかわる法律問題

各論◆解剖生理学/内科看護学/外科看護学/薬理学/感染病学/繁殖と遺伝/動物心理学/動物行動学/動物栄養学/動物看護公衆衛生学/動物看護師のための輸液学/動物看護師の放射線学

実地試験——動物看護にかかわる業務全般(臨床検査の方法等を含む)について、写真などにより出題する(実地筆答形式)。

【資格認定】 本会が認定する動物看護師資格は、この認定試験に合格後、所定の手続を済ませた者に与えられる。手続完了後に、「本学会認定動物看護師」の認定証(IDカード・認定証書・ステッカー)が交付される。

- ・この認定資格は「永久資格」ではありません。資格継続のためには、資格取得後も引き続き、本学会の内外において学習活動を続けていただくことが必要となります。これは、試験合格後も動物看護師としての高い実力を維持し、研鑽を続けていただくためです。したがって、「本学会規定による学習ポイント」を2年間で10ポイント以上取得することが2年ごとの資格更新時の条件となります(ただし、妊娠・出産・育児・病気・海外留学などの場合には対応規定があります)。
- ・学習ポイントの取得方法は学会ホームページに掲載しています。
- ・本資格取得中に動物看護師の職を辞しても、資格を喪失するものではありません。

#### ◆お問合せ先◆

日本動物看護学会 事務局 (平日10:00～18:00)

〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町2-23 アクセス御茶ノ水2F

TEL. 03-5298-2850 FAX. 03-5298-2851 E-mail info@jsan.gr.jp

- ・E-mailとFAXでは24時間受付いたします
- ・学会ホームページ( <http://www.jsan.gr.jp> )に、「試験の趣旨」「第7回試験のより詳しい案内」「認定者の声」「前回出題テーマ」などを掲載中

写真/上2枚は、試験内容との関連はありません。下2枚は、試験会場風景(東京・福岡)です。





さまざまな **FLUTD** に  
1つのフードで対応します。



**NEW**

**低塩分**



ヒルズのプリスクリプション・ダイエット

## 〈猫用〉c/d マルチケア 誕生

FLUTDの中で多く見られる特発性膀胱炎、ストルバイト、シュウ酸カルシウム。〈猫用〉c/dマルチケアはさまざまな状態を考慮した優れた栄養組成により、初診時から適切な食事管理が始められます。また、腎疾患に配慮した低塩分の組成で、リスクの少ない長期の食事管理を実現できます。〈猫用〉c/dマルチケアを栄養学的効果の高い第一選択の療法食としてさまざまなFLUTDの管理に継続してお使いください。



販売元：  
日本ヒルズ・コルゲート株式会社  
〒135-0016 東京都江東区東陽3-7-13



販売総代理店：  
大日本住友製薬株式会社 アニマルサイエンス部  
〒553-0001 大阪市福島区海老江1-5-51

獣医師専用の食事療法情報テレホン  
0120-211-317  
<http://www.hills.co.jp>

ヒルス・ホームページから獣医師専用サイト“Hill's Vet's Site”をご覧ください。その際には、IDとパスワードが必要となりますので、ヒルス・ファックスサービス事務局【0120-105-466】へお問い合わせください。

**意見・提言**

「動物看護専門職」としての自立へ向けて

西谷孝子 (広島県・西谷獣医科病院 動物看護師、日本動物看護学会 理事) 1

**MEMBER'S EYE!** 第16回大会に参加して／発表を終えて 5

**投稿論文**

目次には筆頭発表者だけを表記しています

**動物看護研究**

- 短報 犬の前立腺癌の看護—私の愛犬の短い一生—  
大島梨沙 (神奈川県・相模原プリモ動物病院 動物看護師) 10
- 短報 犬のしつけに困った飼い主との関わり—“ドッグデイケア”を利用して—  
小川千加美 (広島県・西谷獣医科病院 動物看護師) 14
- 短報 起立困難な犬の看護  
西谷孝子 (広島県・西谷獣医科病院 動物看護師) 20
- 短報 口腔内熱傷の犬の看護—入院受け入れから退院後の支援まで—  
西谷孝子 (広島県・西谷獣医科病院 動物看護師) 25
- 短報 当院における看護計画用紙(看護記録1号用紙)の分析  
—看護基準の作成をめざして—  
西谷孝子 (広島県・西谷獣医科病院 動物看護師) 30
- 短報 犬の帝王切開における母犬と新生子の看護—動物看護師の立場から—  
三浦 望 (新潟県・小島動物病院アニマルウェルネスセンター 動物看護師) 36

**院内業務研究**

- 短報 動物病院における受付の対応マナー  
松沢ふみ (埼玉県・フジタ動物病院 動物看護師) 45
- 短報 動物病院における面会時の対応  
大谷美紀 (埼玉県・フジタ動物病院 動物看護師) 50

**動物看護職研究**

- 原著論文 動物看護学生が抱く動物看護職のイメージ—学年差についての検討—  
小嶋未来 (東京都・ヤマザキ動物看護短期大学 3年生) 54

**HAB (ヒューマン・アニマル・ボンド、人と動物の絆) 研究**

- 原著論文 特別養護老人ホームでの動物介在実習前後における  
動物看護科学生の「気分」の変化  
熊坂隆行 (静岡県・静岡県立大学 看護学部 成人・老人看護領域 助教) 64
- 原著論文 ペット喪失時における対応についての調査  
大路朋子 (山梨県・帝京科学大学 アニマルサイエンス学科 4年生) 69
- 短報 ドッグラン施設における現状と課題  
依田久美 (山梨県・赤池ペットクリニック 動物看護師) 77

**動物看護専門学校生による発表**

- ペンギンとカモ、ニワトリ、野鳥の羽毛の比較 田村沙耶 84  
未病学的診断としてのポータブル ECG の小動物への応用 横道佳代 89  
天然ミネラル(リモナイト)含有食を犬、猫に経口投与した前後の便臭、尿臭、血液性状の変化 松木恵子 92  
動物飼育室におけるナノテクビーム空気清浄機設置前後の落下細菌数の変動 佐々木美保 95  
肝機能検査のためのイヌ、ネコの尿中硫酸抱合型胆汁酸の測定 福谷由美 99

以上、福岡動物病院看護士学院 第2期生

**行事レポート**

第24回 例会 / 102

第25回 例会 / 103

JAHA・本学会 共催 動物看護師シンポジウム「動物看護師は本当に専門職と言えるのか」  
/ 104

第16回 大会 / 106

日本獣医内科学アカデミー学術大会・JAHA・本学会 合同 動物看護師シンポジウム  
「動物看護職の国家資格化を考えるー動物医療の将来をふまえてー」 / 113

日本動物看護学会 教育講演 / 115

本学会理事の他団体における講演・第6回「動物看護師資格認定試験」終了 / 116

あ ん ぐ る —— 動物看護師が担うべき、大切な役割とは何か  
〈本学会認定看護師の率直な声から、動物看護職のあり方を考える〉 / 117

美術作品に見る動物たち (第3回) 123

2007年度 動物看護研究 助成金事業 (アニコム助成金) 応募要領 124

学会規約 126

役員各委員一覧 127

投稿規定 128



本誌の発行にあたり、次の各社様よりご協賛(広告掲載)をいただきました。

厚く御礼申し上げます。

**株式会社 インターズー**

**日本ヒルズ・コルゲート株式会社**

**マスターフーズ リミテッド**

**森久保薬品株式会社**

(五十音順)



大豆由来のまったく新しい皮膚洗浄成分を採用し、ペットと飼い主にやさしく、そして優れた洗浄力の洗浄入浴剤、及び洗浄美容液です。



総代理店  
レオニス・コーポレーション

■モンシュシュ  
ペットが洗える入浴剤【200ml】  
すすぎの必要はありません。  
入浴だけの簡単ケア。

■モンシュシュ  
ペットが洗える美容液【400ml】  
美容成分シャンプーです。肌を  
守りリンス効果も。

犬用総合栄養食(成犬用) マイリトルワン

# MY LITTLE ONE

製造元  
マカハグループ  
**AIXIA**  
アイシア株式会社

かわいい愛犬の健康を第一に考えて作りました

- 国産品で安心安全。
- 食べやすい小粒タイプ。
- オリゴ糖(ラクトスクロース)配合。腸内細菌の善玉菌を増やす、おなかに優しいフード。

原材料：トウモロコシ、大豆粕、脱脂糠、コーングルテンミール、牛脂、ミネラル類、オリゴ糖(ラクトスクロース)、ビタミン類、コーンスターチ



2kg/袋

【330kcal/100g】

**M 森久保薬品株式会社**

〒243-8531 神奈川県厚木市栄町 1-8-17

TEL 046-222-2333 FAX 046-222-1266 (営業本部)

神奈川：046(221)0620 東京：042(564)2381 埼玉：042(968)0881 三郷：048(948)2112 成田：0476(40)5811 茂原：0475(24)1613  
つくば：0296(43)1661 茨城：029(241)3131 群馬：027(230)3322 栃木：028(661)9581 山梨：055(224)5278

## 「動物看護専門職」としての 自立へ向けて



西谷 孝子 (広島県・西谷獣医科病院)

日本動物看護学会認定動物看護師・日本動物看護学会 理事  
(岡山大学医学部看護学校卒・神奈川県立看護教育大学校卒  
日本獣医生命科学大学大学院修士課程在学中)

### ◆動物看護職を取り巻く状況の変化

ここ2～3年、動物看護職について、これほど多く公の場で語られることがあったでしょうか？

2005年2月「本学会 第19回例会」における『動物看護師によるティーチ・イン 私たちの手で育むこれからの動物看護学—現状の課題と解決方法について皆で話しましょう！—』を皮切りに、2006年2月「本学会 第23回例会」における『シンポジウム・動物看護師が抱える問題を考える—院内および社会的立場、職域、学習方法ほか—』、2006年3月「日本獣医師会・日本獣医学会連携大会」における『シンポジウム/動物看護師認定の現状と今後の職域について』、2007年6月『JAHA・本学会共催シンポジウム/動物看護師は本当に専門職と言えるのか—各院の実情を通して問題点を考える—』、2007年8月「日本獣医内科学アカデミー・JAHA・本学会共催シンポジウム/動物看護職の国家資格化を考える—動物医療の将来をふまえて—」など多くの場で、動物看護師が自らの職業についての考えを述べる機会をいただきました。

これらを通して、同じ職業に従事している仲

間の意見を聴くことができ、動物看護師一人一人が、自分自身の職業について考える機会を得ることができたと感謝しております。

このような動物看護職を取り巻く状況変化の背景には、ここ10年ほどの小動物医療の発展に伴って表れた次の傾向があると思われます。

「獣医業」全体の従業者規模が拡大する中、「獣医業」に占める従業者の職域別割合において、1990年からの15年間で獣医師が6割から4割へと転じたこと。すなわち人数ではこの間、「獣医業」に従事する獣医師数は5,800人ほどの増加だが、それ以外の職種はおよそ16,800人増加していると推計できる。つまり、動物看護師やトリマーといった職種の人数増加が推計される。

現在の獣医療は、国家資格を有する獣医師だけでなく、それ以外の職種といわれる人たちが共に一緒に支えているという現状にあります。それゆえに、獣医師以外の職種の人たちも「私たちの職業は何が専門なのか。私たちの資格制度や社会的地位はどうあるべきなのか」に



ついて、自分たちで真剣に考える時代が来たのだと思います。

#### ◆「動物看護師」という呼称へのこだわり

現行の獣医師法や獣医療法では動物看護のあり方は規定されていません。「小動物獣医療に関する検討会 報告書」(農林水産省 2005 年 7 月)では「獣医療補助者」、2006 年 12 月に発足した「日本獣医師会 小動物臨床部会」内の委員会名称では「動物診療補助専門職」の呼称が採用されていますが(動物診療補助専門職検討委員会)、私自身は「動物看護師」という呼称にこだわりたいのです。

動物看護師が働く小動物医療の現場である動物病院では、来院される飼い主と動物を対象に動物医療が展開されています。動物医療の中心はまさしく飼い主と動物であり、それを取り巻くようにして、獣医師は診療、動物看護師は看護と、チーム医療としての役割を分担し合いながら業務が進められています。

それでは、飼い主(や動物たち)に私たちの存在はどのように映っているのでしょうか? そこが、今後私たちの存在を考える上で最も重要な点ではないでしょうか?

#### ◆社会からの要望と飼い主のニーズ

先日、トリミングのため当院に連れられて来たシーズーがいました。毎回クレートやケージ内で吠えて暴れて、安全・安楽にお預かりすることができません(当院でのトリミングは、診療と並行して行われるため、その日の診療状況によってお預かり時間も長くなります)。

こうした状況を考慮して、その日お迎えに来られた飼い主の奥様(50歳くらい)に、安全にお預かりすることができない旨を告げました。

その後、ワクチン接種に来院された際、奥様から、「吠えているこの子を見て、家庭に何かあったと気づいてほしかった」「この子をかわいがっていた主人が亡くなったのです。そういうことに気づくのが、あなたたちの仕事ではないのですか?」と言われて迫られました。

振り返って考えてみると、犬の様子は以前と同じだったのですが、トリミングのお迎えがいつものご主人ではなかったと気づきました。

飼い主に“犬の様子から飼い主の心情も察してほしい”と要求されたことによって、動物看護師に対する期待の大きさをあらためて知ることができました。また、日本人の“相手を立てて察することを期待し合う文化”も再認識することができました。

社会情勢に目を転じると、「2000 年 動物愛護に関する世論調査」(内閣府-現 内閣府-)における「今後、少子高齢化や核家族化が進むなかで、人とペットの関係はどのようになっていくと思うか」という将来展望についての質問では、「家族の一員同様に共に生活する世帯が増える」が 43.3%、「老後のパートナーとしてのペットの重要性が増す」が 39.8%となっています。

「2001 年度 国民生活選好度調査」(内閣府)において「ペットは家族の一員である」と思う割合は 60%を超えており、「2003 年 動物愛護に関する世論調査」(内閣府)におけるペット飼



育率は 36.6%となっています。

そして、「2005 年 家計調査年報」(総務省)における動物病院代を見ると、最も多いのは 50 歳代で、次に 60 歳代、40 歳代と続き、中高年世帯の飼い主がひんぱんに動物病院を訪れていることが確認できます。

飼い主の退職後、余生と言うには長すぎる日々を動物と共に暮らしたいと願う気持ち、動物と共に暮らすことで人生の豊かな日々を送りたいという気持ち、こうした飼い主の気持ちにアプローチしていくことも、看護者としては大切な役割なのです。

だからこそ、私は「動物看護師」という呼称で飼い主の横に寄り添いたいと思います。動物看護の本質を明らかにし、動物看護学を確立し、加えて、動物看護師法のような法律が立法されることが、飼い主・社会側の要望ではないかと考えます。

#### ◆動物看護職の自立への道

「賢者は歴史に学び、愚者は経験に学ぶ」という言葉があります(ドイツ初代宰相・ビスマルク)。人医療における看護の発展を見ると、このまま応用することはできませんが、そこから学べる部分は多くあります。

私は、動物看護の本質を明らかにするための方法論として、人医療の「看護過程」※における考え方と手法を基に、これに独自の解釈を加えて作成した「動物看護過程」に沿って動物看護を実践・考察しています。

2007 年 7 月「本学会 第 16 回大会」では、私の恩師である岐阜大学医学部看護学科教

授・箕浦とき子先生をお招きし、『人医療の看護に学ぶ—その進展経緯と職業観に学ぶ・家族看護学と動物看護学の接点を考える—』というテーマの下、講演と公開ミーティングを行いました。

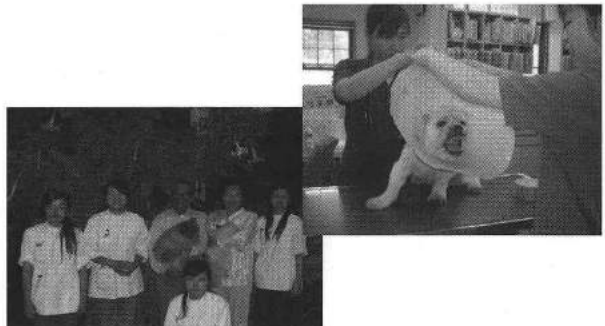
人医療の看護の過渡期の時代に、“看護とは何か”“看護師とは専門職であるのか”などの一つ一つの問題に対して真剣に取り組み、看護について考えることに突き進んでくださった諸先輩方のおかげで、いまでは社会も看護職の重要性も認め、看護大学の数も 150 校になろうとしています(2007 年 4 月現在)。“看護の実践には、看護者自身の豊かな人間性が求められる”という志が発展してきたように思われます。

人医療の看護師と動物看護師では、絶対数があまりにも違いすぎますが、逆に言えば、動物看護師一人一人の力や行動が、動物医療に与える影響は大きいとも言えます。したがって、一人一人が行っている動物看護の事例を各自が語ることは、大変重要であると考えられます。

そもそも看護業務における事例研究は、他分野の学問の研究とは少し意味合いが異なるかも知れません。事例研究はあくまでも一例の事実すぎません。その中で用いられた方法や結果を、そのまま一般化してすべての対象に当てはめることはできません。

看護は実践的科学と言われています。対象と全体の関連で、個々のニーズについて研究し、様々な条件を持つ個人にどのような援助が有

※看護過程：人医療の看護において、人々の健康にかかわる個別の問題を解決するために用いられる系統的な問題解決技法。「情報収集→診断→計画→実施→評価」の 5 段階から成る。これを基に科学的な問題解決方法によって看護を展開していく。



効であるかを探る研究、すなわち個別事例的アプローチがなくてはならないのです。このことが日々の看護実践をより良くすることに通じます。

いま行っている看護実践を言語化し、看護記録という手段によって残すこと、つまり、看護記録の記載そのものが研究学習活動と言えます。これが、自分が実践している動物看護の本質を追究することにつながります。さらには、これを学会で発表する過程を経験していくことです。自分の動物看護を明文化し、学会で発表するという体験を通して、初めて、専門職業人としての入口に立てるのではないのでしょうか？

2000～2004年の5年間の動物病院の収益は鈍化傾向にあります。また2001年以降は、動物病院の開業・廃業共に増えている現状があります。

飼い主による動物病院の選択志向の強まりが考えられます。こうした状況は逆に、動物医

療における動物看護師の役割を評価していただける機会ではないかと考えます。

動物看護師自身がつねに高い看護を提供できるように、個人の責任において継続学習に努めることが求められます。看護実践の水準を高め、より良い看護ケアのために動物看護研究に努めることを心に思い、日々邁進していただきたいと思います。

そのためにも、動物看護研究を発表できる学術団体である日本動物看護学会を大いに利用し、これに参加していただきたいと考えます。2008年2月17日(日)には大阪で初めての「本学会 関西地区第1回例会」が行われます。東京での参加が日頃難しい方は、ぜひ参加していただき、動物看護を真剣に考えている仲間がいることを感じてほしいと思っています。

文中の経済データは、『最新 病院経営指針』(桜井富士朗 監修、チクサン出版社-緑書房-、2006年)を参照しました。



## 第16回大会に参加して／発表を終えて

2007年7月8日(日)、日本動物看護学会第16回大会が盛況のうちに開催されました。講演と発表の内容は、p106～113で詳しくお伝えしていますので、そちらをご覧ください。ここでは、大会参加者3名の皆さんの当日の感想記をご紹介します。

### 第16回大会に参加して

瀬戸晴代

広島県・西谷獣医科病院 師長

本学会認定動物看護師

このたび、学会発表のため日本動物看護学会第16回大会に参加させていただきました。会場は広いホールで、動物看護師や獣医師の方々そして専門学生もいたようで、約200名以上も来場されていました。発表演題も、私のものを含め今までにない数の15題と、昨年の3倍にもなっていました。予想を上回る演題数となり、時間の関係上発表時間が1人7分と短縮されることとなってしまい、発表内容が十分伝わらなかったものもあり残念に思いました。

日本動物看護学会では、回を重ねるごとに来場数や会員数も増えているということを知り、実際に今回、会場にたくさんの人たちが参加されているのを見て、研究や学会に興味を持ち新しい知識や情報・互いの交流などを求めている動物看護師の方たちが増えているのだと改めて実感しました。

#### 第1部／講演と公開ミーティング

##### 人医療の看護に学ぶ

—その進展経緯と職業観に学ぶ—

家族看護学と動物看護学の接点を考える—

講演者：箕浦とき子先生

(岐阜大学 医学部看護学科

成人・老年看護学講座 教授)

「人医療の看護に学ぶ」ということで、人医療の看護学分野から箕浦先生にお越しいただき、興味深い貴重なお話を聴講することができました。

まず“看護とは環境を整えることが重要で、患者の病を治す力を増強させることである”というナイチンゲールの言葉から始まり、看護の発生から今に至る発展過程へと看護の歴史について、また、動物看護師は専門職として主体性、自立性、奉仕性を重要とし誇りをもって働くことが大切だとお話がありました。

家族看護学については、動物看護学と照らし合わせて分かりやすくお話してくださいました。人医療の家族看護学は、患者だけでなくその家族も含めて看護の対象としてとらえる考え方です。

患者の治療回復において、その家族の理解や協力、援助は欠かせません。看護師が患者や家族の生活背景までも把握、理解した上での看護介入が必要であるというものですが、動物看護に置き換えてみると、患者は動物、家族は飼い主となります。同じく対象動物の治療回復において、飼い主の理解と協力は不可欠であり、人医療の看護とほとんど変わりはないものだと思いますし、箕浦先生も非常に類似していると言われていました。

いつも当院の上司(動物看護師・マネージャー)から「言葉も通じない動物が対象である動物看護とは、人医療分野における小児看護と同じで、専門性の高い仕事である」という話を聴きます。

ペット動物も人と同じく高齢化をたどっており、生活習慣病も増えている中で、今後の動物看護師の役割においてはさらに専門的な知識や技術が求められ、人医療と同様に飼い主からの大きな期待を背負っているのだと、箕浦先生のお話を聴きし実感しました。

動物看護学への期待では、教育の必要性を話されました。教育体制の拡充として①カリキュラム

の充実、②どのような人が教育に携わるか、に加えて、③研究の推進を言われていました。

現役ベテラン動物看護師の方々の発表がまだまだ少ないのは、やはり研究の方法が分からないという理由が一番だと思います。

今や動物看護系の専門学校は山ほどありますが、動物看護研究の授業をされている専門学校は本当に少ないのだと思います。これからこの領域を授業内容に組み込んだ学校が増えてくると、卒業後に働きながらも興味をもち看護研究をしてみようと思う人がもっと増えると思うので、今後ぜひこうした面も改善・進歩して行ってほしいと思います。

また、動物看護の専門学校であっても獣医師が教える場合が大半であると思われるため、結局、獣医師の視点でものを見る、すなわち補助的役割として働く動物看護師しか育たないというのが現状のようです。箕浦先生は、動物看護師が動物看護師を育てるような教育制度が必要ではないかと言われていました。しかし実際は、動物看護師の教員は少ないようです。人医療を見習って「動物看護師の教員」を育てるシステムが必要なのだろうと思いました。

コミュニケーション能力育成のための教育が必要であるというお話もされていました。

動物病院は動物との、そして人と人との関わりで成り立っているのです。コミュニケーションは意志交流のために重要であり、もし相手からの反応が返ってこなくても、興味を持って、その人や動物の思いを想像し考えていくこと、分かろうとする気持ちや姿勢が大切であると話されていました。

私自身まだまだそういう部分でも未熟なので、反応の薄い相手（人・動物共に）であっても、できるだけその対象の情報収集を行い、そこから想像し考えて対応できるように努力しなければならないと思いました。

質疑応答で印象に残ったのは、現時点における動物看護は、かつての過渡期における人の看護の状況と同じではないかというお話です。

かつては人医療においても、医師は自分の思うように動く看護師を必要とし、看護師は医者の下に置かれていた時代があったそうです。

まさに今、獣医療もその過渡期であり、獣医師の配下であった動物看護師が、自分たちの仕事である看護とは独自性を持つ職業であるということに気づき、それを獣医師や社会に訴え出した移り変わりの時期であると思います。

獣医師に認められるためには、動物看護師がもっと看護の専門的知識や技術を勉強し、自分の意見を持ち、獣医師に指示されたことだけ動くのではなく、自分の考えで動ける人になること、そして、獣医師に信頼され安心して仕事を任せてもらえるナースになることが必要でしょうと箕浦先生は言われていました。

私もそうなりたいですし、他のスタッフにもそうしてもらいたいと思いました。それが結果として動物看護師の地位向上につながっていくと思うので、病院全体で向上していけるように師長としての役割をもっと勉強し、他のスタッフにもよい影響を与えられるように頑張っていきたいと思いました。

今回は、箕浦先生の実体験も踏まえいろいろな話を伺うことができ勉強になり、本当によかったです。有難うございました。

#### 発表を終えてー反省と感想ー

今回は、院内で発生するインシデント・アクシデントについて調査し分析した結果を、まとめて発表させていただきました。そのため事前に当院側の配慮により、KYT（危険予知トレーニング）のセミナーにも参加することができました。

今回のように調査し現実態を把握して、それを集計・分析した結果を考察するという研究発表は初めてで分からないことが多く、まとめ方や結果をグラフにするなどの作業も、本を開いて一から試行錯誤しながらだったため、少しずつしか進められませんでした。

しかし、自分の中で目標にしていた期日より少

し遅れましたが、何とか形にすることができました。多忙な中、自分の仕事が山ほどあるにもかかわらず、長い原稿に目を通しアドバイスくださった上司（動物看護師・マネージャー）、そして診療が終わったあとと疲れているにもかかわらず、パワーポイントを確認訂正くださった院長に感謝しています。有難うございました。

またスタッフの方々には、忙しい中ミスが発生するたびに、自分そして自分以外の人のミスもノートに記帳してもらい、本当に大変だったと思います。大変有難かったです。

私自身ミスを記帳していくうちに、思っていた以上にいろいろなミスが院内で日々多発している事に気づき、自分もかなりのうっかりミスをしているのを実感しましたし、他のスタッフにおいても、ミスについて以前に比べて意識するようになったように思います。発表をしてよかったと思いました。

発表では、自分の番まで12題もあり、かなり緊張している時間が長く続き、いざ発表となると練習の甲斐もなく呂律が回らなくなり、あまりうまく読めませんでした。

また質疑応答もなく、桜井先生から少し質問していただいたのみとなり少し残念でした。やはり、人医療の看護界では当たり前に行われているヒヤリハット帳も、動物病院では知らない、実践していないのが現状なのだろうと思いました。興味も持ってもらえたかどうかわかりませんが、これを機に他の動物病院でも「ミスを記録してみよう」と思ってもらえればと思います。

今後も、大変ですがスタッフの皆さんに協力してもらい、ヒヤリハット帳は続けていきたいです。4月からスタッフもかわっているのも、また今までにない内容のミスや事故、そしてミス自体が増える可能性が高いと思われます。大きな事故にならないように、未然に防げるようにみんなで注意を払い、ミスを減らせるようにしていきたいです。

そして1年に1回でも集計して調査し、結果をスタッフに報告し、スタッフそれぞれが自分や他のスタッフのミスしやすい部門や内容を理解・把

握して動けるようになればよいと思います。KYTトレーニングも、初めのうちは時間がかかるかもしれませんが院内で実践してみたいと思います。



講演者の箕浦とき子先生(左) 真剣に聞き入る場内(右)

## 第16回大会 発表を終えて

中井江梨子

東京都・どうぶつ眼科 EyeVet 本学会認定動物看護師

自分のこれまでの発表と今回の発表とで、大きく違うと感じたことがある。それは、自分の一部分を公表したような感覚を味わったことである。

今までは、数字的なデータをとったり、私でなくとも同じような結果になったであろう内容の発表だった。もちろんそれでも発表するには苦勞の連続であったが、苦勞の内容は技術的なことが中心であった気がする。

今回一番頭を悩ませたのは、自分の頭の中で行われたことを思い出す作業だった。患者やご家族との関わりの中で絶え間なく行われる、情報収集・判断・実行の繰り返しを、外来看護記録という形に残してはみたが、整理する段階でいろんな書き漏れに気が付き、無意識に省いてしまっていたやり取りをまた書き出し、ご家族の言葉だけでなく、反応はどうだったか、自分はどういう表現でどのように伝えたのか、何度も振り返ることになった。

加えて、自分が判断した一つ一つの根拠を客観的に文章化することにも苦勞を強いられた。記録

に残している時点では、当たり前前の判断だったと思っていても、発表原稿にし、裏付けをとるうちに、違った判断もできたのではないかと、この根拠だけでは不十分だったのではないかと、などと更に冷静に振り返ることができた。

今回、次郎ちゃんの状態は改善する結果になったものの、もっとこうしたらよかったなどの反省点もあり、悔しいような申し訳ないような感情を伴ったが、きっとだからこそ、今回の看護が記録や発表によって次に生かされるのだとも実感した。

日頃何気なく行っているやりとりは、自分にも相手にも様々な影響を与えている。病院という、非日常的でストレスや不安の伴う状況下では尚更であると思う。だからこそ、何気ない行動で患者は安心したり、何気ない一言でご家族は少し気持ちが楽になったりするのであろう。

それを提供する者を専門職と言うのなら、「何気ない」ことの連続で流してしまうのではなく、なぜそう思い、判断し、何をしたのか、客観的に評価することで、それを定着あるいは改善させ、更なる向上に繋げるべきなのだと思う。

経験上、あるいは知識や病識からも、当然のように行っていることや、伝えていることは、過ぎてしまえばそれ以上でもそれ以下でもなくなってしまうが、振り返ると多くの感情や、情報、知識の基に判断し行ったことであると分かった。また思い込みや自己満足にならないためにも、記録に残し、客観的に評価することで、初めて意義が生まれるのだと思った。

QOLという言葉は既に定着して久しいが、生きている以上、どんな生き物にも死や病気が避けられのなら、同じ時間をどれだけ共に幸せに過ごせるのか、それは診断や治療以外の要素も大いに重要であり、あるいはそちらの方がはるかに患者に影響していることもある。

そうしたことは常識的に認識していると思っていたが、医療側の人間として、看護師として、自分が提供する側であるとどれだけ自覚していたのか、改めて考えさせられた。

刻々と流れてゆく外来の中であっても、そこに

いる患者やご家族に真剣に向き合い、動物看護師として責任と自覚をもって介入していけるように、看護の質の向上に努め、少しでも患者やご家族に安心安楽な時間を過ごして頂きたい。

---

## 第16回大会 発表を終えて 遊座晶子

茨城県・つくば国際ペット専門学校・教諭

本学会認定動物看護師

---

臨床動物看護研究会に参加して2年が過ぎました。その間、私にとっては、初めて学ぶことだらけで、正直言って驚きの連続でした。

看護という言葉も、何となくイメージしてはいたものの、その何たるかを改めて考えたことなどなく10年も過ごしていたのです。今となっては、恥ずかしさと動物や飼主さんに対する申し訳なさが残ります。大きな反省点です。

今回、研究会で検討した内容を発表させていただくこととなり、最初は、研究会でまとめた内容を発表すればよいのだと、ちょっと甘い考えを持っていました。しかし、書いている途中でいろいろと疑問が湧いてきました。中途半端な内容だとは思ったのですが、実際にはどうして良いのか解らずにいました。

本学会理事・西谷様に原稿のチェックをお願いしたところ、最終的にはすっかり内容を再構成する形となり、本当に胸の中のつかえが取れた感じでした。指導するとはこういうことなのだと、深く感銘を受けました。と同時に、今までの自分を反省しました。

それにしても、発表がこんなにも大変なもので重労働であるとは思ってもみませんでした。正直言って、体力を使い果たした感じです。

でも、今回だけで終わるのでは始めた意味がありませんので、引き続き目標を持って進んで行こうと考えています。ありがとうございました。



# 投稿論文 (計12報) p10~81

日本動物看護学会は1995（平成7）年に発足して以来、＜学問としての動物看護学の進展＞＜動物看護師の職域拡大と地位確立＞を目的とした活動を行っている学術団体（いわゆる学会）です。

学会とは何でしょうか。その定義をあらためて確認します。辞典には、「学者（編注：学ぶ人全般の意）相互の連絡、研究の促進、知識や情報の交換、学術の振興をはかる協議などの事業を遂行するために、組織する団体」（広辞苑）とあります。

つまり日本動物看護学会とは、動物看護の発展をめざす会員の皆さんが、積極的に集い、動物看護に関する研究結果を報告・考察し合うための、開かれた交流の場です。動物看護を研究する上で、わからないことがあって困った時、行き詰まった時など、当学会へ来て問題提起すれば、それについて一緒に考えてくれる人がいる——これが学会としての役割・使命です。

このための主要な手段が、＜大会での発表・報告＞＜学会誌への論文投稿＞といえます。＜大会での発表・報告＞は各開催に先立ち募集を行います。事前審査はありません。＜学会誌への論文投稿＞は、査読（識者による内容審査と疑問指摘による指導）後の「投稿者による修正・再提出→再審査」を経て掲載に至ります。当学会誌の査読は、「落とすため」ではなく「よりよい内容で掲載するため」に行うものです。

「問題意識や工夫事例等を織り込んだ動物看護報告」「動物看護やHAB研究についての研究成果」などをまとめて、ぜひ投稿されてください。今号の投稿論文が、執筆方法やまとめ方の手本になると思われます（p128に投稿規定を載せていますが、投稿方法などの詳細は学会事務局までお問合せください）。

動物看護研究を互いに発表・報告して、成果を共有し合うこと——その集積が、わが国の「動物看護学の確立」「動物看護師の地位向上」「獣医療の進展」をもたらします。なお、当学会誌では引き続き、「ヒューマン・アニマル・ボンド (Human Animal Bond : HAB/人と動物の絆)」研究についての、あらゆる学問領域からのご投稿もお待ちしています。

●短報●

## 犬の前立腺癌の看護

## —私の愛犬の短い一生—

大島梨沙 (相模原プリモ動物病院 動物看護師)

Case of nursing canine prostate cancer : A short life of my beloved dog

Risa Oshima

〒229-1124 神奈川県相模原市田名 2804 番 9 号

## はじめに

前立腺腫瘍の発生率は犬では低いものだが、犬の前立腺疾患の5%を占めると言われている。前立腺の腫瘍には腺癌・平滑筋肉腫・移行上皮癌などが挙げられるが、その多くは腺癌である。

前立腺癌は非常に悪性度の高い腫瘍で、隣接臓器への侵入もしくは転移は早い速度で確実に起こる。症状は、便秘・しぶり・排尿・排便困難などが一般的に見られ、前立腺肥大と類似するが、癌進行して周囲へ広がっていくと後腹部や胸部に痛みが生ずるために、歩行を嫌がり跛行することがある。また、癌が脊髄・肺などに転移するとそれらの部位に障害が現れる。

今回、私の飼っている犬が前立腺癌と診断され、対症療法を受けてから亡くなるまでの約1ヶ月間その介護をする中で、動物看護師としての立場と飼い主としての立場の両方を体験することができた。

この経験を通して、終末期の動物に対する介護の実際と飼い主の気持ちの両方が明らか

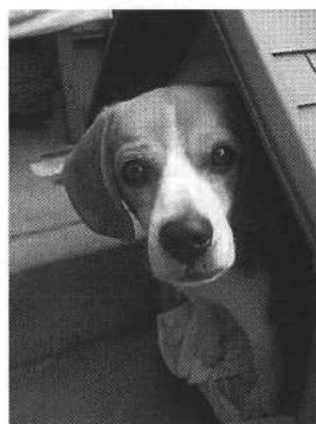


図1 ジョナン

になり、今後の動物医療の現場で生かせると思ったのでここに報告する。

## 1. 症例紹介

〈犬の紹介〉

名前：ジョナン(図1) 年齢：8歳

犬種：ビーグル 体重：6.5kg

性別：未去勢オス

〈既往歴〉

マラセチア症および肝機能障害。

共に内科的治療とシャンプー、食事管理で



すでに完治。

〈主訴〉

元気と食欲はあるが、数日前からの排便困難。

## 2. 検査・診断と経過

2006年1月28日

レントゲン検査とエコー検査で前立腺肥大が確認された。

1月29日(第2病日)

良性の前立腺過形成を疑い去勢を行ったが、術後も排便状態は改善されず浣腸処置も行った。

2月6日(第11病日)

排尿困難となり、尿道の狭窄が考えられたので尿道カテーテルを挿入し、同時に前立腺部の組織を吸引し病理組織検査を行った。

その結果、①前立腺上皮細胞原発の悪性腫瘍、②脊椎・骨盤骨転移の可能性あり、と診断された。

2月18日(第21病日)

尿検査の沈渣で白血球・桿菌・球菌が多数見られた。血液検査でも腎臓の値が高く、腫瘍が増大し尿管も圧迫されている事がわかった。

食餌量も減り、亡くなる前日には体重が5.65kgまで下った。

## 3. 看護の実践

母に、「3～4日前から便をしぶっている」と聞き、心配になり2006年1月28日にジョナンを連れて出勤した。レントゲン検査やエコー検査で前立腺肥大が確認された。私はその病気についての知識が乏しかったが、院長から前立腺肥大と前立腺腫瘍の違いを聞き、「良性の前立腺肥大であれば、去勢をすればよくなる可能性が

ある」と言われて試験開腹の話もされたが、良性だと信じてまずは去勢することにした。その日はそのまま入院させた。家族には私から説明し、次の日に去勢することを伝えた。

### 第2病日

7歳という年齢を考えて手術の前から静脈点滴を行い、去勢手術を実施した。執刀医は院長で、助手は当初、他の獣医師が行う予定だった。しかし私の気持ちの中で、自分の眼と手で愛犬の去勢手術の助手を務めたいと思い、責任をもって私が助手を務めた。

前立腺の縮小をより促すためウロエース(犬前立腺肥大症治療剤)を投与した。そして前立腺手術をするかどうかの話をされ、手術法が骨盤を外して行うと聞き、家族と相談してこれ以上傷を付けたくないという父に家族皆が納得し、前立腺手術をしないことにした。

その間、排便状態は改善されず何度か浣腸処置を行った。最初の浣腸処置では元気があり、もともと病院嫌いな犬だったので暴れて危険が生じるため、鎮静をかけて行った。この時の浣腸処置の方法は、肛門にカテーテルを入れ、温水と2倍希釈したグリセリンで便をやわらかくして出すことであった。詰まっていた便がやわらかくなりたくさん出てこれで少し楽になるとホッとしたが、3日後にはまた詰まってしまい、再度温水で浣腸処置を行った。この時は、多少元気が落ちておとなしく処置が出来そうだったから鎮静をかけず行った。

自力で便を出そうと頑張ってる姿を応援し、少しでも便が出た時には一緒になってうれしくなり「頑張ったね」と誉めてあげた。

### 第11病日

「尿道も狭くなり排尿困難となったので尿道カテーテルを挿入した」とその日休みだった私に病院から電話があり、それを聞いて落胆した。さらに、尿道カテーテルを挿入したときに前立

腺部の組織を吸引し病理検査に依頼したと聞き、悪性腫瘍ではないことを祈ったが、次の日の病理検査結果から、悪性腫瘍であることがわかった。また、脊髄・骨盤骨に転移の可能性ありと診断され、言葉がでないほどショックだった。しかし、この時期は看護師が私しかおらず、いつまでも悲しんでいられず、受付に立つのはつらかったが笑顔で心がけ日々の業務をこなした。また、愛犬に私の気持ちが伝わるような気がしたので悲しい顔を見せないようにしていた。

家に連れて帰っても夜中に便をしぶることが多々あったので、家族で交代して夜中も世話をした。

病院にいる時は静脈点滴をしていたが、初診日から14日目には右後肢と左後肢の浮腫を起し一時静脈点滴をストップした。浮腫を起したところの血液循環をよくするマッサージを、詳しい獣医師から教わり、昼休みや家に帰ってからやってあげた。マッサージをすると気持ちよさそうに静かにやらせてくれた。

#### 第 21 病日

徐々に食欲も落ち、血液検査を行ったところ数値上でも状態が悪化していることがわかった。血液検査で数値が高かったことから、愛犬が大変な状況におかれているということが想像できた。同時に、BUN や CREA などの血液検査が何を現しているのか興味が出てきた。

しかし、愛犬の状態は悪く顔もこけてきていた。そうした中でも落ち着きなくウロウロしながら少量の排便をした。吐くことも多くなり、水を飲んでも吐くようになってしまった。元気な時は勢いよく食べていたご飯も食欲が落ちほとんど受け付けない状態になり、先生から栄養ドリンクの作り方を教わり飲ませたが、そのドリンクも飲んでくれなかった。ポカリスエットも飲ませようとしたがそれも受け付けなかったため、静脈点滴を再開した。

#### 第 22 病日

「家に連れて帰った方がいい」と院長に言われ「もう死が近いのかな」と思い、今まで愛犬の前では泣かないようにしていたが、この日は愛犬を抱きながら家路に向かう中、「この腕の中にいる犬がもうすぐ亡くなってしまうのか」と思ったら、涙があふれてきた。家に着くなり家族の前で泣いてしまった。私の姿を見た家族も愛犬の命が短いことを気付いたようだった。

しかし、こうした状況の中、愛犬はウロウロし、最後の力を振り絞って、ものすごく時間をかけながら便を出した時は、病氣と闘って一番つらいのに一生懸命生きようとしている姿に、やはり愛犬の前では泣いてはいけなさと再び決意した。この時出した便が生涯最後の便となった。

#### 第 24 病日

今までよりも状態が悪く心配だったため、この日は愛犬を入院させることにし、私は仕事を終わらせ帰宅した。

午後 10 時頃病院から電話があり、名前を呼んでも反応が悪いから家に連れて帰ったほうがよいとのことで父と迎えにいき、点滴セットも付けたまま家に連れて帰った。

家に連れて帰ってからサークルの中のベッドに寝かせていたが、気がつくとき少し移動していたので、私の横に寝かせ飲まないかとも思いながらポカリスエットを飲ませたら、少し飲んでくれて、これで次の日に抗がん剤治療が出来ると思いちよっとほっとした。その日は、点滴が途中で止まったりしたら家族は何も出来ないと思い、心配だったため私が愛犬の横で寝た。

#### 第 25 病日の未明

痙攣を起こしその後死亡。

前日迎えに行ったときに院長から、「腎臓が悪くなっているから痙攣を起こすかも知れない」と聞いていたので、痙攣が起きた時戸惑わずに、すぐに父と母を起こすことができた。5～

10 分間程の痙攣で父の腕の中で静かに息を引き取った。ちょっとでも息をして欲しいと少しでも心臓マッサージを行ったが、つらく短い闘病生活を送った愛犬はすでにたくさん頑張ったと思い、すぐに心臓マッサージをやめた。あまり苦しまず亡くなった。

#### 4. 考察

私の愛犬が前立腺癌になり、飼主の立場として愛犬が日に日に衰弱していく姿を見るのはとても悲しかったが、一方で動物看護師の立場として来院される患者さんへの対応やその他の業務などをこなさなければならず、2つの立場でかなりの葛藤があった。また、愛犬に不安を与えてはいけない、など常に気を張っていた。

この時、他に動物看護師がおらず日々の業務が大変だったので、もう少し院内スタッフに協力を仰いだ方がよかったと思った。また、気持ちの問題として、その時は私のことを分かってもらえる人が獣医師しかいなかったため、やはり他の動物看護師がいた方がよかったと思った。

今回、自分の愛犬が前立腺癌になったことで、未去勢の犬が排便困難を主訴に来院した場合、前立腺に問題があるのではないかと疑えるようになった。

家族の一員だった大切な存在を失ってしまったが、愛犬の死が私に大切なものを残してくれ、この死を無駄にしないためにも動物看護師として更なるレベルアップを図っていきたい。

#### おわりに

相模原プリモ動物病院に動物看護師として勤務し、3年目が経過した。

元々、専門学校ではしつけ訓練科だった私ですが、家から近くしつけ教室を開催している病院だったので、初めはしつけ教室の実習をさせていただいた。徐々に病院の方にも興味が出てきて病院実習もさせていただき、そのまま看護のことが全く分からない状態で働くようになった。

まだ勤務期間が浅く、同期の看護師の人が辞めたばかりの時期に私の愛犬が前立腺癌になり、病院内のスタッフが少ない中で愛犬の世話や業務は大変だったが、このような経験は他の看護師が経験しないようなことだと思うので少しでも参考になればと思い、記させていただきました。

#### 参考文献

- 1) 小野憲一郎・今井壯一・多川政弘・安川明男・後藤直彰 編(1996)『イラストでみる犬の病気』講談社
- 2) 動物臨床医学研究所・山根義久 監修(2006)『イヌ+ネコ 家庭動物の医学大百科—イヌ・ネコからフェレット・ウサギ・ハムスター・小鳥・カメまで—』ピエ・ブックス
- 3) D.R.Lane, B.Cooper eds.by(2005)『小動物 獣医看護学—小動物看護の基本と実践ガイド—(第3版) 下巻』(西田利徳 監訳) インターズー
- 4) 岩井郁子他著(1990)『系統看護学講座 専門3 基礎看護学3 臨床看護総論』医学書院

## ●短報●

## 犬のしつけに困った飼い主との関わり

## — “ドッグデイケア” を利用して —

小川千加美<sup>1)</sup>、西谷孝子<sup>2)</sup>、西谷利文<sup>3)</sup>

Our relation with dog owner in trouble on dog's discipline : using "dogs' day care"

Chikami Ogawa, Takako Nishiya, Toshifumi Nishiya

1)西谷獣医科病院 動物看護師 2)西谷獣医科病院 マネージャー・動物看護師

3)西谷獣医科病院 獣医師・院長

〒721-0902 広島県福山市春日町浦上 2016 番 1 号

## はじめに

犬のしつけとは、犬と人間が快適に暮らすために、飼い主が犬に教えるマナーである。飼い主が犬と接するときには、犬の気持ちを大切にしながら共に生活するにはどうすれば良いのか常に工夫と努力をしなければならない。しかしながら、多くの飼い主は、犬の生理、生態、習性などをよく理解できていない為、問題行動の解決に苦慮している場合がある。また、犬との時間が十分取れないため、問題行動が起きてしまっている場合も少なくない。

当院では、来院される飼い主を対象に、犬を飼うために必要な知識とトレーニング方法を学ぶためのしつけ教室と、飼い主の代わりとなり遊ぶ時間や作業する時間を設け飼い主をサポートするドッグデイケアサービスを行っている。

今回、生後4ヶ月から当院のしつけトレーニングを利用していただいていた飼い主が、家庭の事情によりしつけトレーニングを定期的に継続することができず、お家での犬の問題行動に困り、当院の

ドッグデイケアを利用することとなった。その結果、犬の問題行動も改善し、飼い主の表情も明るくなり、飼い主の負担も軽減したと考えられた。今回のケースを振り返り、犬のしつけに困った飼い主との今後の関わりについて示唆が得られたので、ここに報告する。

## 1. 研究目的

当院でのドッグデイケアを振り返り、今後の飼い主への関わりについて示唆を得る。

## 2. 研究方法

- ・ケーススタディ：ドッグデイケアでの飼い主との関わりと日誌の分析
- ・ケース紹介：  
〈対象〉犬(ウエルシュコーギー)、去勢雄、1歳、  
〈利用期間〉平成17年5月20日～7月12日  
〈飼い主〉30代の夫婦(2人家族)で初めて

犬を飼った。

〈ドッグデイケアご利用の理由〉

- ・トイレトレーニングができない。
- ・なかなか時間が取れずしつけを続けるのが難しい。
- ・飼い主より「ノイローゼ気味になっている」と言われていた。

### 3. ドッグデイケアの実際

#### 1) ドッグデイケアの目的・目標

- ① トイレトレーニングの確立
- ② 家での犬の作業力をつける
- ③ オビディエンス(服従訓練)の強化
- ④ 社会化トレーニング

#### 2) トレーニング計画

- ① クレートトレーニングにて1時間ごとに排泄を促す(5分間)。
  - ・排泄しなければ、無表情でそのままもう一度クレートに入れる。
  - ・クレートに静かにいたら、フードを入れる。
  - ・コマンドをかけ、排泄をしたら、ビスケットをあげる。
  - ・排泄をしたら、アイコンタクト、オスワリ、フセ、マテ、オイデ、ついて歩く等5分間ほど一緒にトレーニングする。
- ② 「もってこい」を教える。
  - ・ひっぱりっこを覚える。
  - ・運ぶことを覚える。
  - ・アジリティに挑戦する。
- ③ 遠隔でコマンドを聞ける(ポジションチェンジ)。
  - ・手、声、両方を理解する。
  - ・ついて歩く。
- ④ 当院スタッフとトレーニングする。
  - ・当院の犬と同じ時間を共有する。

※当院のデイケアの進め方

- ・場所：病院と別棟にあるトレーニングルーム。

- ・当院のしつけトレーニングを受講されている飼い主を対象とする。
- ・飼い主の希望と目的を明らかにする。
- ・病院にて予約していただく。
- ・日々の目的と目標を明らかにする。
- ・ファイル日誌をつけ、自宅と病院での様子のやりとりする。
- ・お預かりできる時間は診療時間内であり、午後から合計約1時間をトレーニング時間とする。

#### 4. デイケアの実際(ファイル日誌より)

##### 1回目～5回目

〈病院にて〉

1時間おきに排泄を促すと失敗せずできるので、少しずつ時間を延ばす。

トレーニングルームにて他の犬と一緒にトレーニング。他の犬が気になる様子。

ポジションチェンジ、コマンドでおすわりがすぐに伏せになってしまう。アジリティでは少し疲れ気味で、集中力が続かない。

〈飼い主より〉

トイレトレーニングがなかなかうまくいかずイライラが続いていたのですが、迎えに行ったときにマネージャーさんや他のスタッフの方が言って下さった一言で気持ちが楽になりました。帰宅後、自分からクレートに入りすぐに寝ていました。夜には「トイレ、トイレ」と言って排泄をさせたら、な、な、なんとウンチをしてくれました。この先は長いので長い目でみてイライラせずにしようと思えることができました。私の理解が足りなかったように思います。

〈飼い主より〉

散歩先で尿を電信柱やマンホールにマーキングしてしまう。ヒールポジションにつかせる時に何が原因か分からないが急に「ヒール」という言葉を聞くと嫌がってやらなくなってしまいました。耳をピンと立てて逃げてしまいます。「オスワリ」もなんとなく嫌々しているような感じでした。何

が原因なののでしょうか？ 80分おきにトイレという事でさっそくやってみました。全部できました。明日からまたやってみます。

〈スタッフより〉

においを嗅がさないように散歩してみてください。オビディエンス(のトレーニング)では飼い主さんの態度や声の雰囲気はどうですか？ 楽しそうですか？

〈飼い主より〉

アジリティをうれしそうにしていると聞かされたとき、私もすごく嬉しかったです。家では気分が乗らない感じです。多分私の一生懸命という雰囲気が伝わってしまっているのではないかと思います。笑顔もなかったように思います。一緒に楽しみながらするがいいのですね。今はデイケアに行くことが一番楽しいのではないかと思います。徐々に私といる時が楽しいようになればいいな。トイレトレーニングも皆さんにさせていただいて、すごく効果があるのだと実感しています。

最近、イチローと散歩に行くことが徐々に楽しくなってきました。以前は「行かなきゃ」と思っていたのですが、今は「よし、散歩に行こう」と、ボールやfrisbeeなどで、主人共々楽しく遊んでいこうと思います。

## 6回目～10回目

〈病院にて〉

トイレトレーニングを100分おきにすると失敗することはなかった。アジリティのスピードサークルも上手に出来ている。犬の表情もいきいきしている。いろいろな事に我慢ができるように、オビディエンス、マテの時間を少しずつ延ばす。コマンド「立って」がなかなかできなくなる。

〈しつけ教室中級クラスに飼い主様と一緒に参加〉

4頭の犬と一緒にトレーニングするがフード誘導で集中できる。

〈飼い主より〉

コーギーのスズちゃんの飼い主さんと少しだ

け話ができるのでよかったです。やはり「コーギーは大変ですよ」と言われていたので、内心私と一緒にだと思い、ホッとしたような。私だけではないんだと思えました。

トイレトレーニングも出来ているので気持ちが楽になってきて余裕がでてきた。少しずつゆっくりにできてくれればいいなと思う。

〈しつけ教室上級クラスに飼い主様と一緒に参加〉

5頭の犬と一緒にトレーニングするので吠える心配があったが、初め数回だけしか吠えなかった。スピードサークルも楽しくできた。

〈飼い主より〉

他の飼い主さんが今まで苦労されてきたことを話したり、アドバイス等をされ、とても気持ちが楽になったような、視野が広がったような… 参加して本当によかったです。主人が以前からアジリティをしたいと言っていたので、上級クラスに参加して楽しんでもらおうと思いました。

社会化をさせてあげることが本当に「大切」というより「必要」なのではないかと感じています。子犬の頃からもっと理解してあげておけばよかったと思う時がありますが、今、徐々に慣れてきていますので、このまま続けて、少しでも良い状態になれば、イチローも私も主人も、もっと楽しい生活が送れるようになると思います。

## 11回目～14回目

〈病院にて〉

トイレトレーニングは失敗もなく出来るようになった。立っての強化をする。ポジションチェンジでは立つけれどもぐるりと回ってしまうので、「回れ」も入れて区別するようにした。「テイク」「持って来い」も上手にできるようになった。リピータークラスに参加する。アジリティも確実に上達している。

〈飼い主より〉

最近、散歩中にすれ違う犬に吠えていきま。いままではフード誘導ですれば、私の方に

注目していたけれど、向かっていく方が多いようです。上級クラスやリピータークラスは私にとっても刺激になります。ありがとうございました。

## 5. 考察

今回、ドッグデイケアをご利用頂いた飼い主は、家庭の事情により、しつけ教室に定期的に通うことが難しく、個別トレーニングの時間を利用されている方であった。

飼い主がフードを買いに来院された際に、「トイレのトレーニングがまだうまくいかない」とご相談を受けた。本来、しつけ教室は、飼い主がしつけの仕方を学ぶことを目的としている。今回の場合は、犬のトレーニングもさることながら、飼い主への精神的なサポートが必要と感じ、当院のドッグデイケアを説明し、ご理解いただき利用していただく事となった。週に2回の間隔で約2ヶ月半通っていただき、日誌を交換しながら自宅と病院での様子をやりとりした。

まず、飼い主様の一番の悩みであるトイレトレーニングの確立を第一目標とした。事前に、獣医師による診察、尿検査もし、泌尿器系の疾患がないかを確認した上で、デイケアを導入した。

飼い主に普段使用しているクレートを持参してもらい、クレートトレーニングも同時に行いながら、初めは失敗をさせないように1時間おきに運動場に出し、「トイレ」と声をかけ排泄があればごほうびのフードを与え、5分程度トレーニングをして成功したら、その都度ごほうびを与えて良いイメージで終わることとした。

1時間おきのトイレトレーニングはすべて成功したので、2日目は80分に時間を延ばしてみたが、失敗することはなく出しても排泄しないことがあったので、160分我慢することもできていた。こうして少しずつ時間を延ばして失敗することのないようにした。

デイケア1日目の飼い主の日誌には「帰宅した後、イチローは自分からバリケンに入り、すぐ

に寝てしまいました。夜には、「トイレトイレ」と言って排泄させたら、な、な、なんと・・・！！ウンチをしてくれました」と書いてあり、デイケア2回目終了後の日誌には「80分おきにトイレということで、さっそくやってみました。全部できました。明日からもまたやってみます」とあった。デイケアでの第一の目標であるトイレトレーニングの確立は、早期に達成することができた。

トイレの間隔は2時間おきまで我慢ができるようになった。テリーリは、「トイレトレーニングを始めて初めの数日間失敗が避けられたなら、あなたのトイレのしつけは成功間違いなしといえます」と述べている。失敗をさせないようにすることは犬に失敗を覚えさせないことであり、成功を繰り返し、自信をつけさせる為にもとても大切なことだといえるだろう。また、飼い主も最もトイレトレーニングで悩んでいたのが、早期に解決したため、気持ちにもゆとりができ、前向きになったと考えられる。

次に、飼い主に犬との生活を楽しんでもらうため、ボールをもってきたり、ハードルやトンネルなどアジリティを楽しんだり、また、コマンドにしたがって動くことができると考えた。デイケアの第二、第三の目標を、作業能力をつけることと服従訓練の強化とした。

デイケアのトレーニングの中に、ボール遊びやハードル、トンネル、オビディエンスのトレーニングも段階を踏んでレベルを上げるように計画立案した。2ヶ月半の最後には、ボールを確実にもってきてくれるようになり、布ディスクに挑戦というところで終わった。ハードルやトンネルも楽しくできるようになり、スタッフが出来たことを誉めると嬉しそうに駆け寄ってくる様子も見られた。オビディエンス、遠隔コマンドでポジションチェンジもほぼできるようになった。

目標としては、まだ完全ではないが、部分的に達成できたと考えられる。飼い主の日誌にも、ボール遊びやオビディエンスのトレーニングをし

ている様子があり、「最近、イチローと散歩に行くことが徐々に楽しくなってきました。以前は、「行かなきゃ」と思っていたのですが、今は「よし！散歩に行こう！」と。ボールやフリスビーなどで、主人共々楽しく遊んでいこうと思っています」とあった。犬だけでなく、飼い主もともに楽しんでいる様子が感じられた。

続いて、デイケアに来る機会を利用して、他の犬になれることや飼い主以外の人になれるように社会化トレーニングすることを目標にした。

トレーニングを当院の犬と一緒に رفتり、しつけ教室のクラスにスタッフと参加したり、時間置きのトイレのトレーニングもスタッフ全員がなるべく関わるように配慮した。そして飼い主自身も、時間がある日に、グルーブレッソンでのしつけ教室に参加してもらうようにすすめた。

その結果、初めは周りの犬が気になり、なかなか集中できず、吠えてしまう場合があったが、その後ほとんど吠えなくなり、集中して出来るようになった。しかしながら、家での散歩では、まだまだ犬に吠えてしまうことがあったようである。飼い主の日記には、社会化させてあげることが「大切」というより、「必要」なものではないかと感じております。イチローも子犬の頃から私がおもっと理解しておけばよかった…と思う時がありますが、今徐々に慣れてきてくれていますので、このまま続けて、少しでも良い状態になれば、イチローも私も主人も、もっと楽しい生活が送れるようになると思います」とあった。飼い主が、犬にとっての社会化の必要性を認識する機会となったと考えられる。ダンバー<sup>2)</sup>は、「社会化は継続したプロセスであり、イヌの一生を通じて持続するものである」と述べている。

このように、今まで個別のトレーニングしか受けていなかった飼い主さんが、グルーブレッソンを受けることで、飼い主自身の視野や考え方が広がり、あらためて犬と向き合うことも出来たよう

だ。日記には、「コーギーのスズちゃんの飼い主さんと少しだけ話げできたのでよかったです。やはり『コーギーは大変ですよね』と言われていたので、内心私と一緒にだと思ひ、ホッとしたような…私だけではないんだと思えました」「他の飼い主さんが今まで苦勞されてきたことについて、アドバイス等をされて、とても気持ちが楽になったような、視野が広がったような…参加して本当によかったです！」とあった。ともに、トレーニングしている仲間の存在を知り、自分一人ではないことや、今が成長するための過程であることも理解できたようである。

デイケア2ヶ月半合計14回のご利用で、「グルーブレッソンなどに参加することは、私自身にとっても刺激になります。ありがとうございます」と、今後は自分自身でしつけトレーニングをしながら、犬との生活を楽しまたいということで終了した。また、デイケアを振り返ってもらくと、愛犬が生後1歳を迎えたところで、自宅でのしつけもなかなかできず、問題行動に悩まされ、実はあのかきは「もう、手放してしまおう」と思っていたことも話してくれた。

最後に、今回のケースを振り返り、犬のしつけを通して一番大切なことは、飼い主の気持ちであり取り組み方であると痛感した。このことは、トレーニングの結果を左右するものである。

今回、ドッグデイケアの目標を達成しようと、デイケアの日記を交換することで、飼い主の気持ちを知ることが出来、犬の自宅での様子や飼い主が困っていることも把握しやすく、飼い主の精神的サポートができたのではないかと考えられる。そして何よりも大切なことは、来院される機会に飼い主の気持ちを知りたいという姿勢、つまり、飼い主の気持ちに共感したいという姿勢である。

乳児をもつ家族への援助として、渡辺<sup>3)</sup>は「同じような条件で乳児を育てていても、『幸せ』『満足』と感じる両親もいれば、『何か物足りな



い』『満たされていない』と感じる両親もあり、育児に対する感じ方はさまざまである。(略)子供を育てているのだからある程度仕方がないといった考え方を相手に押しつけるのではなく、子供を育てている両親が現状をどのように評価しているのかを敏感に捉え、少しでも負担に感じているのであれば、積極的に援助の対象として捉えていくことが重要である」と述べている。つねに動物看護師として、そこに必要な援助がないかを考えることが、重要であることが明らかになった。

### おわりに

今回のドッグデイケアを通して、あらためて、動物看護は動物の健康不健康を問わず行われるものであり、また、動物看護の対象は動物と飼い主であることが再認識された。

つまり、様々な問題を抱えた飼い主の良き相談者であることを実感した。また、日誌を交換することで飼い主との絆も深まった。

飼い主の言葉にいつも耳を傾け、私たち動物看護師は飼い主から何を求められているのか？ 必要な援助はないかどうか？ をつねに考えながら日々の業務に取り組んで行きたい。

### 引用文献

- 1) テリー・ライアン(1998)『ほめてしつける犬の飼い方』p70, 池田書店
- 2) イアン・ダンバー(2002)『イヌの行動問題としつけ』p2, モンキーブック社(レッドハート)
- 3) 鈴木和子, 渡辺裕子(1999)『家族看護学—理論と実践—(第2版)』p158, 日本看護協会出版会

## ●短報●

## 起立困難な犬の看護

西谷孝子<sup>1)</sup>、瀬戸晴代<sup>2)</sup>、小川千加美<sup>2)</sup>、西谷利文<sup>3)</sup>

Care for the dog hard to rise up and stand

Takako Nishiya, Haruyo Seto, Chikami Ogawa, Toshifumi Nishiya

1)西谷獣医科病院 マネージャー・動物看護師 2)西谷獣医科病院 動物看護師

3)西谷獣医科病院 獣医師・院長

〒721-0902 広島県福山市春日町浦上 2016 番 1 号

## はじめに

原因不明の脳疾患のため、動物が長期にわたり寝たきりの状態に陥ると、筋肉の萎縮や腱・関節の拘縮、褥瘡を起しやすくなる。これらは、動物の苦痛を増加させ、疾病の回復の遅れへとつながっていく。したがって床上での関節の屈曲・伸展運動が重要となる。このことは早期離床へと導くためにきわめて大切なこととなる。

今回、運動失調症と診断され、起立困難となったフレンチブルドッグが、自力での起立をめざし治療入院となった。入院当初は自力で動くこともままならず寝たきり状態であったため、入院中に筋肉の萎縮や腱・関節の拘縮、褥瘡を起すことで疾病の回復が遅れないような看護が必要となった。

そこで当院スタッフ一同でよりよい看護を行うために看護計画を立案し、看護を実践した。その結果 15 日間の入院となったが、褥瘡や筋萎縮を起すことなく、さらに退院時には立って歩くまでに回復することができた。これらのことよ

り、今回の看護を振り返ることで、起立困難な犬へのよりよい看護方法や工夫が明らかになり、次回に向けての示唆が得られたのでここに報告する。

## 1. 研究目的

起立困難な犬の看護を通して経験した事柄をもとに、よりよい看護方法や工夫を明らかにし、示唆を得る。

## 2. 研究方法

## ＜症例研究＞

## 症例紹介

- ・動物:犬(フレンチブルドッグ)、雄(去勢済み)、1歳7ヶ月
- ・診断名:運動失調症
- ・入院期間:平成17年7月25日～8月8日
- ・既往歴:  
平成16年7月 膿皮症  
平成16年9月 尿道炎

平成 16 年 12 月 瞳孔散大、対光反射消失

平成 17 年 3 月 外耳炎

・現病歴:

平成 17 年 3 月 23 日

耳の再診と後ろ足がフラフラするという主訴で来院。飼い主は、前日に子供たちと激しく遊んでいたのがフローリングですべったのかもしれないと言われたが、レントゲン検査の結果、椎間板ヘルニアが疑われた。

その後、定期的にレーザー治療を実施したところ、経過は良好であった。

平成 17 年 6 月 13 日

犬が立てられなくなったという主訴で来院され、すぐに点滴入院となる。翌日には自力で立つことができ、退院となる。

平成 17 年 7 月 25 日

「食欲はあるが今朝からほとんど水も飲まず、ずっと立ってなかったが伏せすらできなくなった。今朝からかぼそい声で鳴く」という主訴で来院。立たせても前肢は多少つっぱるが、後肢は全く力が入らない状態。脳圧を下げるためすぐに点滴入院となった。

- ・生活習慣:100%室内飼いで自由に放してある。排泄も自由にトイレでさせている。
- ・性格:穏やか、なつっこい。
- ・治療方針:点滴治療(脳圧降下剤)、ステロイド療法
- ・薬物:  
(点滴)ラクテック液+マンニトール+アルキオーネ  
(注射液)プレドニン  
(内服薬)プレドニン+グリセリン原液
- ・食餌:皮膚の健康を保ち、胃腸にも優しいドライフード(ベツツプラン 3)、水

### 3. 看護の実際

#### 1) 看護上の問題点

- ①脳圧が改善せず状態が悪化する可能性がある。
- ②起立困難なため褥瘡になる可能性がある。
- ③ステロイド療法により免疫力が低下し二次感染を起こす可能性がある。
- ④退院後、飼い主が適切な介護ができない可能性がある。

#### 2) 看護目標

- ①状態が悪化することなく退院できる。
- ②褥瘡にならない。
- ③二次感染を起こさず入院生活を送れる。
- ④退院後飼い主が自宅にて適切な介護ができる。

#### 3) 観察項目

バイタルサインチェック、尿・便の有無(尿量・色・回数・便の状態等)、眼振の有無、痙攣・発作の有無、褥瘡の有無・生じやすい部位(骨ばった所や床にあたる所に赤味がないか確認)、麻痺の程度・深部痛覚の有無、嘔吐・嘔気・よだれの有無、目ヤニ・充血の有無、食欲・飲水量の確認。

#### 4) 看護計画

- ・観察項目を観察ごと(8時・12時・18時)にチェックし、獣医師に報告する、
- ・褥瘡予防のためスポンジマットを使用し、隙間をタオルで埋め保護する。
- ・2時間おきに体位変換を行い、嘔吐の有無がなければ(ベツツプラン③)を20粒と水をスポイドで与える。
- ・四肢硬直しているため、2時間おきの体位変換時に四肢屈伸運動とマッサージを行い、1日1回(午後の観察時)レーザーを3セット行う(血行促進効果)。

- ・自力排尿がなければ圧迫排尿を獣医師の指示により行う。
- ・排泄物にて体が汚染され二次感染等の恐れがあるため、2時間おきの体位変換時に尿・便の有無を確認し、あればオムツシートやタオルを交換しケージ内を清潔に保つ。
- ・目ヤニがあれば洗眼を行う。
- ・退院時、自宅での介護(食事の介助・圧迫排尿・体位変換・屈伸運動・マッサージ等)ができるように指導する。

## 5)看護の実践

### 入院ケージ内の環境

皮膚にかかる圧迫を軽減するため、入院ケージ内はスポンジマットを使用した。隙間にはタオルを敷き詰め犬が落ちないようにした。また、排泄物で皮膚が汚れたり蒸れる可能性があったためオムツシートを使用し、頻回に交換した。

### 入院1日目

入院当初は伏せもできず横臥状態だったので、褥瘡ができないよう2時間おきの体位変換を行った。同時に手足を動かすことが困難だったため筋肉が拘縮する恐れがあり、それを防ぐために、また足先に冷感があったためその改善策としても、四肢の屈伸運動とマッサージを行った。また何度も嘔吐があったため、頻回に観察を行いケージ内を清潔に保った。

### 入院2日目

嘔吐もおさまったので獣医師の指示によりドライフードを10粒ずつ頻回に(1時間おき)与えた。その後も嘔吐の有無を確認し、なかったので徐々にフードの量を増やしていった。同時に水も少量ずつ与えた。横臥状態だったのでフードは1粒ずつ手で与え、水はシリンジで少しずつ与えた。夜には、体を起こしてやると伏せの状態を保つことができるようになり、フードも水も皿から口にできるようになったので、さらにフード

量を増やしていき、逆に頻度を減らしていった。

この日の夕方、飼い主様が面会に来られた。それまでほとんど動かなかつたが、自力でケージの前まで動いた。

### 入院3~6日目

食欲も出て自分で踏ん張り起き上がろうという姿勢がみられた。また前肢で這いながら移動をし、時折自ら体位変換を行うようになっていた。その後、自ら伏せの状態に起き上がり、さらには立ち上がろうとするが後肢に力が入らず断念する。入院当初より表情がとでも明るくなった。

### 入院7~8日目

ヨロヨロと立ち上がり2~3歩歩いた。ケージ内でもよく動くようになっていき、その後もケージ内で数秒間ではあるが立ち上がるようになってきた。そこで起立のリハビリを行うことにした。ケージより出し、後肢を支えて立ち上がらせる。

### 入院9~14日目

自力で立ち上がり、立ったままの状態フードと水を食べるようになった。そこで筋肉をつけるため歩行のリハビリを行うことにした。1日3回(朝・昼・夕)、外で5分程度ずつ歩行練習を行った。後肢がヨロつきながらもなんとか歩く。翌日には後肢がだいぶしっかりし、歩行時に方向転換もできるまでになった。またフードを与える際もケージ内にて立ち上がり待つようになった。

歩行練習を始めた頃より、飼い主様が面会に来られた時は、歩行練習も兼ねて一緒に散歩に行っていたことになった。

### 入院15日目

退院。退院時、飼い主様に退院後の過ごし方を書いたお手紙をお渡しした。お渡しする際、口頭でも分かりやすく説明した。

### 退院翌日

退院後の様子をうかがうため、お電話する。「食欲はあまりないが、昨日より後肢がしっかりと歩きました。フラフラ歩いています」とのことだった。

#### 4. 考察

今回の症例は、原因不明の運動失調症であり、獣医師より大学病院での精密検査もすすめられたが、飼い主は希望せず、治療としては対症療法という形になった。

そのため、看護上の問題点として第一に、脳圧が改善せず状態が悪化する可能性があった。そこで看護目標①として「状態が悪化することなく退院できる」とした。異常を早期に発見するために、観察項目を細かく挙げ、状態を獣医師に報告できるように計画を立案した。入院ケージも処置室内にし、つねに動物看護師の目が行き届くようにした。点滴により脳圧降下剤を投与していたので点滴を確実にを行うため、1日3回(朝・昼・晩)の観察以外でも、ケージ前を通るときは必ず観察し点滴を確認した。

また原因不明ということもあり、入院時には、入院生活もどのくらいになるのか、予測が立たなかった。看護目標には挙げていなかったが、入院生活が長期になれば、ストレスを受け状態が悪化する可能性があった。しかしながら、穏やかでなつっこい性格だったため、スタッフ一同声かけ等を積極的に行い、少しでも不安や恐怖感を軽減できるよう心掛けた。また、飼い主様に面会に来ていただき、歩行可能になってからは、一緒に散歩に行っていたなど積極的に働きかけた。

その結果、長期入院になったにもかかわらず、嘔吐や下痢などのストレス症状は出ず、状態も悪化することなく順調に回復した。また入院生活の中で、名前を呼ぶとこちらを見たり、なでると気持ちよさそうな表情を見せるといった反応が見られた。このことからスタッフになついてくれた

と考えられる。最終的には、治療の経過もよく、看護目標①は達成できたと言える。

第二に、入院時、自力でフセや寝返りもできず、横臥位状態のままであるため褥瘡になる可能性があった。そこで看護目標②として「褥瘡にならない」とした。褥瘡とは床ずれともいわれ、長時間の圧迫により皮膚に十分に血液が流れなくなり、組織が圧迫壊死してしまう状態である。そこで皮膚への負担を軽減するため、入院ケージ内の床はスポンジマットを使用した。次に血流を妨げないように、動物看護師の勤務時間内において、2時間おきの体位変換を行った。また筋肉の萎縮や、腱・関節の拘縮を防ぐため、四肢のマッサージや歩いているように四肢を動かし、関節を柔らかくした。そして血行促進のため1日1回レーザー治療を行った。

その結果、退院するまで褥瘡や浮腫を起こすことが一度もなかった。これらのことから看護目標②も達成できたと考えられる。福島ら<sup>1)</sup>は「血流が2~3時間以上止まってしまうと、皮膚は最も外側の層(表皮)から死んでいきます」と述べている。このことから、2時間おきの体位変換が皮膚組織の壊死を防ぎ、このため褥瘡にならなかったと考えられる。また、2時間おきの体位変換による気分転換や、人とのかかわりによる孤独や不安感の解消もできたと考えられる。

第三として、ステロイド療法により免疫力が低下し、気道内感染や尿路感染等の二次感染を起こす可能性があった。そこで看護目標③では「二次感染を起こさず入院生活を送れる」とした。

寝たきり状態だったために、排泄物等で体が汚染される可能性があった。そこでオムツシートを使用し、体への汚染を防いだ。さらに頻回に観察し、タオル等が汚れていたら交換し、ケージ内をつねに清潔に保つようにした。また、体が

排泄物等で汚染されていたときは、すぐに中性水等で洗浄し、清潔を保つようにした。その結果、二次感染をおこすことなく入院生活を送ることができた。

第四として、疾患の原因がわからないために退院後も症状が悪化したり、また、現状を維持するために運動を続ける必要があった。そのため、退院後に飼い主が適切な介護ができない可能性があった。そこで看護目標④として「退院後飼い主が自宅にて適切な介護ができる」とした。

そこで退院時に、自宅での介助法を手紙にし、飼い主に詳しく説明して渡した。そして、退院翌日にお電話した結果、「今日は昨日と比べて後肢がしっかりしてきました。今日はもう放していました。フラフラ歩いています」とあり、経過も良く、指導した内容も続けていてくれた。この結果、看護目標④は達成したと考えられる。

最後に、このような経過の中で、飼い主さんの心理状態は、大変不安が大きかったと考えられる。面会に来られる機会を利用して抱っこしてもらったり、散歩に一緒に行ってもらったり、ケアに参加してもらえるように配慮した。

吉田ら<sup>2)</sup>は、家族内に病人が出て入院するということについて、「(略) 病人は家にいる方がもっと幸せではなからうかと感じて罪悪感をもってしまうものである。(略) 看護師はこのような家族の欲求を察知したときは、患者ケアの適当な部分(たとえば食事摂取時の援助)を家族に依頼するようにすれば、家族に安楽な気持ちを起こさせ、また患者の回復を早める結果に結びつくこともある。すなわち、家族が最小限に早期に危機を克服して、その役割を再組織化できるように援助していくことが大切である」と述べている。

飼い主の気持ちを感じ取り、ケアに参加することで気持ちを安楽にしてもらい、飼い主の不

安や思いを表出してもらえるような関係づくりが最も大切であると考ええる。

#### 参考文献

- 1) 福島雅典日本語版総監修・監訳「床ずれ」『メルクマニュアル家庭版医学百科(オンライン版)』  
<http://mmh.banyu.co.jp/mmhe2j/sec18/ch205/ch205a.html> (2007.6.20 確認)
- 2) 吉田時子(1991)「健康と疾病の理解」『標準看護学講座 第12巻 基礎看護学 1.看護学概論(第2版)』(沢禮子編)p120, 金原出版

## ●短報●

## 口腔内熱傷の犬の看護

## —入院受け入れから退院後の支援まで—

西谷孝子<sup>1)</sup>、瀬戸晴代<sup>2)</sup>、小川千加美<sup>2)</sup>、西谷利文<sup>3)</sup>

Taking care of dogs with mouth burn : From hospitalization to discharge and thereafter

Takako Nishiya, Haruyo Seto, Chikami Ogawa, Toshifumi Nishiya

1)西谷獣医科病院 マネージャー・動物看護師 2)西谷獣医科病院 動物看護師

3)西谷獣医科病院 獣医師・院長

〒721-0902 広島県福山市春日町浦上 2016 番 1 号

## はじめに

熱傷とは一般に「やけど」と言われ、ごく身近に見られる疾患である。熱傷の看護にはショック状態を改善する、環境の調整、栄養管理、感染防止、疼痛の管理、不安の緩和が挙げられる。熱性物質が皮膚に作用し、水泡、潰瘍などが局所に起こり、広範囲な場合は局所のみならず全身的にも変化が見られる。熱傷の病態は多様で治療法によっても治療過程が違いが生じる。

本症例は、電気コードをかじって口腔内熱傷と診断された室内犬である。熱傷部が口腔内であったため、創部の管理のため入院となった。感染防止、栄養管理、また退院後の過ごし方への支援を考慮して看護計画を立案し、看護を実践した。今回、口腔内熱傷の犬の看護について示唆が得られたので報告する。

## 1. 研究目的

口腔内熱傷の犬の看護を実践し、考察する

ことで今後の示唆を得る。

## 2. 研究方法

## &lt;症例研究&gt;

## 症例紹介

- ・動物:犬(プードル×マルチーズ Mix)、雌、1歳6ヶ月 体重 1.75 kg
- ・診断名:口腔内熱傷
- ・入院期間:平成 18 年 4 月 1 日～4 月 12 日
- ・既往歴:平成 17 年 10 月 6 日 タマネギ中毒で2日間点滴入院

## ・現病歴:

平成 18 年 4 月 1 日 19 時 15 分

こたつの電気コードをかじって感電して気絶した。今は意識を取り戻したが念のため診てほしい、という主訴で来院。

右口角の皮膚及び口腔粘膜、歯肉、舌にまで熱傷がみられた。組織が壊死、脱落する可能性があり、癒着防止のため入院し抗生剤およ

びステロイド療法を行うこととなった。

- ・性格：人なつっこい、さびしがり
- ・治療方針：抗生剤・ステロイドの投与、点滴治療、生理食塩水にて口腔内洗浄
- ・薬物：
  - (点滴)ラクトリンゲル+アンピシリンナトリウム
  - (注射液)メロキシカム+プレドニン+エンプロロキサシン
  - (内服薬)塩酸クリンダマイシン
- ・飼育者：70歳代の女性(つえを使って歩行)、息子、娘
- ・生活環境：室内にて自由に飼っている、多頭飼育(プードル：雌7歳、マル×プー：避妊済み雌7歳、プードル：雌11歳)

### 3. 看護の実際

#### 1) 看護上の問題点

- ①口腔内熱傷による疼痛がある。
- ②熱傷が口腔内であるため、二次感染を起ししやすい。
- ③飼い主の飼育管理による事故のため、再度起こる可能性がある。

#### 2) 看護目標

- ①疼痛が緩和され、食餌ができるようになる。
- ②口腔内の清潔が保たれ、二次感染を起さない。
- ③飼い主が、事故が起こらない飼育管理を理解できる。

#### 3) 観察項目

バイタルサインチェック、点滴管理、尿の有無(尿量・色・回数など)、疼痛の有無、元気・食欲の有無(動き・表情など)、熱傷の状態(腫れ・赤味・癒着など)、皮膚の色調、飲水チェック(ウォーターバランス)。

#### 4) 看護計画

- ・観察項目を1日3回の観察ごと(8時・12時・18時)に観察し、獣医師に報告する。
- ・口腔内を清潔に保つため、食餌後は口の周りをきれいにし、生理食塩水で熱傷部位である右口角を洗浄する。
- ・舌を熱傷しており飲水が困難である可能性があるため、飲水がないようならこまめにシリンジにて水を飲ませる。
- ・皮下注射を毎晩忘れずに行う。
- ・点滴管理(漏れや腫れ・静脈炎などないか)を行う。
- ・退院時、二度と同じことが起こらないよう飼い主に飼い方を理解していただく。

### 4. 看護の実際

#### 入院1日目(来院) 時間外で来院

「こたつのコードをかんで感電して、3分位気絶していた。今は意識を取り戻したが、念のため診てほしい」という電話があったため時間外で来られる。

診察の結果、右口角の皮膚および口腔粘膜、歯肉、舌にまで熱傷が見られた。組織が壊死、脱落する可能性があったため、創部の管理のため入院となり、抗生剤およびステロイド療法を行うこととなる。

#### 入院2日目

獣医師の指示により食餌と水を与える。口腔内の痛みを考え、缶詰を与える。すぐには食べないが口の中に入れると食べ始める。飲水も見られなかったため、口腔内の痛みを考え、シリンジで少しずつ飲ませる。表情も明るく、入院ケージの扉を開けると飛びついてきたりすることから元気はある様子だったが、時折クンクン鳴くことからやはり寂しいと思われた。

熱傷部である右側の舌が赤くなっており、右頬全体が腫れていた。



### 入院 3～4 日目

熱傷部前日より赤くなっており、缶詰の食べかすが右口角に詰まっているので生理食塩水で洗浄すると、膿のようなものが出ており洗浄液が白く濁った。臭いもあった。缶詰も自分で食べるようになり、水も皿から飲むようになる。食欲も出てきたため明日退院予定となる。

### 入院 5～6 日目

右口角の部分が白くなっており赤味はひいているが、膿んでおり臭いはかなりきつくなっていた。組織が白くなり壊死していると考えられた。嘔吐も見られ、食欲も減退したことから点滴を再開することとなり、退院が延期となった。また口臭がきつくなったため、塩酸クリンダマイシンの投薬を開始した。

### 入院 7～8 日目

食欲が戻り、嘔吐もおさまった。口臭も少しずつ改善傾向であった。右口角の壊死組織がはがれてきて、食後の洗浄時に一緒にはがれてしまう。口唇のふちは赤味や腫れもなくきれいなピンク色であった。獣医師の診察でも経過は順調とのことだった。

### 入院 9～12 日目 (退院)

点滴も終了し留置も抜去したので、エリザベスカラーをはずすが、自分で熱傷部をかき歯肉から出血がみられたため、カラーはつけたままにした。口角の赤味も減り、口臭も日に日に改善されてきた。獣医師の指示によりドライフードを与えてみても、食べようとはするが噛めずに出してしまう。粒が大きいと噛めずに熱傷部も痛むと思われるので、割って食べやすい大きさにして与えるとよく食べた。また、缶詰からドライフードに変えたことで口角にたまる食べかすの量も減った。

## 5. 考察

今回の症例は、熱傷部位が口腔内であり範囲も広がったことから、家でのケアが難しいと判断し、創部の管理のため入院となった。治療方針としては、点滴治療と抗生剤とステロイドの投与となった。

看護上の問題点として第一に口腔内熱傷による疼痛があると考えられた。そこで看護目標①として「疼痛が緩和され、食餌ができるようになる」とした。疼痛緩和のため、1日1回の鎮痛剤投与を確実に行った。また、食餌時も少しでも痛みを軽減させるため、ペースト状の缶詰を与え、刺激を減らすため湯せんで温めて3時間おきに与えた。その結果、最初は自分からは食べなかったが、一さじぐらいを口の中に入れるとペロペロ食べ、その後自分から少しずつ食べるようになった。経過良好のため、入院4日目には点滴を終了し、6日目が退院予定となった。しかし、入院6日目に食欲が減退し、嘔吐もみられた。腐敗臭もひどくなったため点滴を再開し、塩酸クリンダマイシンの投薬も開始した。入院9日目にはドライフードを自分から食べられるようになり、点滴も終了した。

疼痛により食欲不振となり、栄養状態の低下、回復の遅れが心配されたが、自分から食べないとき食餌の介助をして、食餌の形状や食べやすい温度を工夫することが効果的であった。また食餌状態を観察し、食欲がない場合はすぐに獣医師に報告し点滴や投薬の指示を仰ぐことで、状態の悪化を防ぐことができた。木村<sup>1)</sup>は、食事の援助として「個人個人がどのように食事を摂取しているかについて観察し、食事上の問題がどこになるのかを判断することが看護の立場からの第一歩の援助である」と観察の重要性を述べている。このことから疼痛は軽減されたと考えられ、食餌もとれるようになったので看護目標①は達成できたとと言える。

第二に、熱傷部は食べ物が出入りする口腔内であることから、二次感染を起こしやすいと考えられた。そこで、看護目標②として「口腔内の清潔が保たれ、二次感染を起こさない」とした。熱傷は皮膚組織が壊死し、感染防止機能などの通常の皮膚機能が損なわれ、感染を起こやすくなっている。本症例の場合も、腐敗臭がひどく入院室中におうほどであった。感染を防止するには清潔を保つことが大切である。まずケージ内を清潔に保つため、排泄などでケージ内が汚れたときは、そのつど掃除、タオル交換などを行った。

また、熱傷部が口腔内であったため、食餌での口腔内汚染は避けることができなかった。そこで毎食後、ノズルのついたボトルを使用し生理食塩水で口腔内、特に熱傷部で食べかすのつまりやすかった右口角部分を重点的に洗浄した。入院 6 日目からアンチロブの投薬を行い、投薬とともに口臭も軽減していった。その結果、入院中に二次感染を起こすことはなく経過は順調であった。

このことから目標②も達成できたと言える。日中約 3 時間おきの食餌の後の口腔内洗浄は、忘れることのないように 1 日のスケジュールが書いてあるホワイトボードに時間ごとに印をつけ、スタッフ全員がかかわった。動物を個別にとらえた看護計画と、1 日の看護業務全体を計画すること、両方を考えていくことが重要である。

最後に、今回この熱傷の原因がこたつのコードをかじったことであり、飼い主の管理下で起こった事故であったことから、再度起こる可能性があった。今回の動物の場合、半年前にタマネギ中毒で 2 日間点滴入院しており、別の同居犬でもネギを食べたかもしれないという主訴で来院されたり、竹串を飲み込んでしまったことで来院されていた。そこで看護目標③として「飼い主が、事故が起こらない飼育管理を理解できる」とした。

この飼い主は 70 歳代の高齢であり、息子たちは仕事のため、日中は 1 人で 4 頭の犬を室内で自由に飼っているという状況であった。

入院中の様子を飼い主から電話で尋ねられた際に、そのつど獣医師側から、今後の飼育環境を整えることが課題であると話をしていた。看護師側からは退院時に、家での過ごし方をお手紙にし、読みながら説明した。お迎えには娘さんと来られ、2 人でうなずきながら熱心に聞いてくださった。

退院翌日に退院後の様子をお電話で伺ったところ、「ご飯もよく食べ走り回っています。やけどの跡はきれいです。奥の方はよく分かりませんがにおいは少しよくなりました。わざわざありがとうございます」とのことで、元気も食欲もある様子だった。退院後約 2 週間後の再診時には、一部癒着は見られたが口臭も改善され、元気も食欲もある様子だった。現在まで同じような事故の再発はないが、飼い主が高齢であること、多頭飼育であるという状況は変わらないので、機会あるごとに飼育環境を確認していく必要がある。

再診から約 2 ヶ月経った 6 月 23 日にご自宅を訪問させていただいた。まず玄関を開けるといきなり犬が飛び出してきた。やはり室内で自由にしていることは変わりないようであったが、お話を伺うと、「あの事故以来、出かける時はコードなどは片付けるようにしてます。目を放すと何をするか分かりませんから」とのことで、事故後飼い主の意識も少しは変わった様子であった。

また、犬が主にいるリビングの部屋は、出入り口が柵のようなもので仕切ってあり、犬が自由に出入りできないような工夫はされていた。しかし、玄関を開けると犬が飛び出してきたりと、完璧なものではないと思われた。

一度に 4 頭の犬を、高齢である飼い主が 1 人で管理するというのは難しいことであると思われる。しかし今回、お宅訪問を快く受けてくださるといったことは、飼い主との信頼関係があるか

からこそ実現したと思われる。今後もこの飼い主とお付き合いしていく中で、飼育管理について支援していく必要がある。

大原<sup>1)</sup>は、『話す・説明する』とは、看護者が患者に何かを分からせることである。自分ではよくわかっていても他の人に理解させることは非常に難しい。これは日常生活の中でも経験することである。このような場合、説明する側と説明を受ける側の間で、言葉の解釈にずれが生じていることが多い。看護場面での説明の食い違いは患者によっては一大事を招く場合がある。一度の説明で全ての内容がわかることは少ないので、繰り返し確認する必要がある」と、継続して支援をする重要性を述べている。

#### 参考文献

- 1) 大原宏子 (2003) 「コミュニケーション」『標準看護学講座 第13巻 基礎看護学 2. 日常生活と看護技術(第5版)』(杉野佳江編集) p58, 金原出版

●短報●

## 当院における看護計画用紙 (看護記録1号用紙)の分析

—看護基準の作成をめざして—

西谷孝子 (西谷獣医科病院 動物看護師)

Analysis of nursing care planning paper (nursing care recording paper No.1) at this hospital

: Actions towards making of nursing care standard

Takako Nishiya

〒721-0902 広島県福山市春日町浦上 2016 番 1 号

### はじめに

看護過程は、クライアントの实在または、潜在する健康問題に対する反応を診断し治療するために、看護者が自らの信念、知識、技術を用いる看護実践のための枠組みである。

当院では、平成 11 年より看護過程の習得をめざし、実践できるように、看護記録の工夫をした。看護過程の段階として、看護に必要な情報収集、アセスメント、看護上の問題点、看護目標、看護計画立案、実践、評価を、それぞれの記録用紙として、思考の過程用紙、看護記録 1 号用紙(看護計画立案)、日々の看護記録を導入した。

しかしながら、看護業務の中で看護記録に費やす時間は多大である。特に、看護上の問題点をあげ、目標を設定し、看護計画を立案する看護記録 1 号用紙(看護計画用紙)においては、担当動物看護師の知識と経験によって、費やす労力にも差があるようだ。また、導入

の調査によって、「収集した情報をもとに、知識と看護経験を使って、現在あらわれている問題点と今後予測される問題点を明らかにすることに手数がかかり、難しさを感じている」ことがあきらかになった。

今回、平成 13 年から平成 15 年の 3 年間に立案した看護計画を振り返り、最も多かった 2 疾患の看護計画用紙を分析した。その結果、当院における標準看護計画(患者である動物グループを想定した計画)とクリティカルパス(医療のスケジュール表)の作成に向けて、いくつかの示唆を得たので報告する。

### 1. 研究目的

当院において立案した看護計画用紙の中で、多い 2 疾患の看護計画を分析し、今後導入する看護基準についての示唆を得る。

## 2. 研究方法

### 1) 対象

平成13年1月4日から平成15年11月26日の間に立案された看護計画298例の中で1番多かった腎不全疾患35例の看護計画用紙と、2番目に多かった乳腺腫瘍の21例の看護計画用紙(合わせて56例の看護計画用紙)を抽出した。

### 2) 分析方法

腎不全疾患35例の看護計画用紙と乳腺腫瘍の21例の看護計画用紙において、看護上の問題の種類と看護目標の種類、を比較、検討した。

### 3) 当院の看護計画用紙

#### (看護記録1号用紙)の概要

当院では、勤務体制が主に2交代制(午前出勤、午後出勤)であり、記録は勤務時間帯で、入院を受け入れた者が担当する。看護計画は、基本的に3日以上入院する予定の動物に立案する。

## 3. 分析

### <腎不全疾患の看護計画用紙35症例の

#### 背景>

- ・犬9例、猫26例
- ・年齢:1歳未満4例、1歳～6歳11例、7歳以上18例、不明2例
- ・急性腎不全9例、慢性腎不全26例
- ・入院期間:2日間6例、3日間14例、4日間3例、5日間4例、8日間2例、11日間1例

#### 1) 看護上の問題点

##### 優先順位1位

- ・尿毒症により(BUN 数値が高いため)全身状態が悪化し、急変するおそれがある、など生命の危険がある問題。
- ・食欲不振などにより、状態が悪化し、二次感

染をおこしやすい。

- ・腎不全による食欲不振がある。
- ・腎機能低下により尿がでない可能性がある。
- ・二次感染による鼻汁がある。
- ・脱水がひどいため、食欲廃絶状態である。
- ・入院によるストレスにより、全身状態が悪化し、二次感染を起こす恐れがある。
- ・舌の壊死による違和感や疼痛があるため、食事がとれず栄養不良になる恐れがある。
- ・慢性腎不全による脱水がある。
- ・カラーがいやなため、点滴治療が確実にできない可能性がある。
- ・成長期で高血糖、尿毒症により、食欲不振のため、成長が阻害される可能性がある。
- ・尿毒症により(BUN 数値が高いため)全身状態が悪化し、急変するおそれがある、など生命の危険がある問題。
- ・食欲不振などにより状態が悪化し、二次感染をおこしやすい。
- ・腎不全による食欲不振がある。
- ・腎機能低下により尿がでない可能性がある。
- ・二次感染による鼻汁がある。
- ・脱水がひどいため、食欲廃絶状態である。
- ・入院によるストレスにより、全身状態が悪化し、二次感染を起こす恐れがある。
- ・舌の壊死による違和感や疼痛があるため、食事がとれず栄養不良になるおそれがある。
- ・慢性腎不全による脱水がある。
- ・エリザベスカラーを嫌がるため、点滴治療が確実にできない可能性がある。
- ・成長期で高血糖、尿毒症により、食欲不振のため、成長が阻害される可能性がある。

##### 優先順位2位

- ・腎不全による食欲不振がある。
- ・入院経験がないため、ストレスにより、十分治療が受けられない可能性がある。
- ・悪心嘔気全身倦怠感などより食欲がもどらず、抵抗力が低下し、二次感染をおこしやすい。

- ・ 全身倦怠感、嘔気、嘔吐により食欲廃絶になり、成長が妨げられ回復が遅れる可能性がある。
- ・ 症状が悪化することにより、食欲元気がなくなり体重が減少する。
- ・ 重度の脱水がある。
- ・ Bite なため、治療がスムーズに受けられない恐れあり。
- ・ 猫エイズに感染しているため、免疫力が低下しており、二次感染を受けやすい。
- ・ 慢性腎不全と鼻汁により食欲低下がある。
- ・ 腎不全による血尿がある。
- ・ 脱水、食欲不振がある。
- ・ 高齢のため低体温になる可能性がある。
- ・ 腎不全による嘔吐がある。
- ・ 入院中の環境変化などのストレスにより、回復が遅れる恐れがある。
- ・ 退院後に家で食事管理ができず、再発するおそれがある。
- ・ 飼い主の病気に対する知識が浅いため、退院後、症状がすぐに悪くなる可能性がある。
- ・ 原因不明の腎不全により、全身状態の悪化および急変するおそれがある。
- ・ 食欲減退、全身の倦怠感など疾病に伴う苦痛により状態が悪化し、合併症をおこす可能性がある。
- ・ 自力排尿が困難である。
- ・ 呼吸器感染症のため、鼻汁、目やに、咳がある。

#### 優先順位 3 位

- ・ 飼い主の病気に対する理解が低いため、自宅で管理できない。
- ・ 退院後、飼い主の家での管理ができない可能性がある。
- ・ 病気と今後の治療について飼い主が理解できず、腎不全が悪化する可能性がある。
- ・ 飼い主の健康管理の意識が低く、再発の恐れがある。

- ・ 退院後、家で食事管理できず、すぐに再発する恐れがある。
- ・ 性格が神経質で臆病なため、ストレスが起こり回復が遅れる可能性がある。
- ・ 入院によるストレスなどにより、暴れたり、十分な治療が受けられない可能性がある。
- ・ 室外にも出る猫なので、入院（ケージレスト）によるストレスにより、症状が悪化するおそれがある。
- ・ 気性が激しい性格のため、点滴がきちんと行えない可能性がある。
- ・ 腎不全による下痢がある。
- ・ 腎不全による貧血がある。
- ・ 嘔吐、嘔気、全身倦怠感などにより、食欲不振となり、回復が遅れる可能性がある。
- ・ ワクチン未接種と免疫力低下のため、二次感染を起こす可能性がある。
- ・ Bite なため、治療がスムーズに受けられない可能性がある。

## **2) 看護目標**

### 優先順位 1 位

- ・ 腎機能改善し、食欲元気が出て、○月○日に退院できる。
- ・ 急変することなく腎機能が改善し、○月○日に退院できる。
- ・ 症状悪化することなく退院できる。
- ・ 腎機能が改善することにより、排尿もきちんとあり、食欲、元気が出て、体重が維持できる。
- ・ 安静に治療が受けられ、状態悪化することなく入院生活が送れる。
- ・ 退院時までには食欲がでる。
- ・ 食欲が出て○月○日に退院できる。
- ・ ○月○日鼻汁が軽減し、食欲がでる。
- ・ 脱水が改善され、食欲元気がでる。

### 優先順位 2 位

- ・ 二次感染をおこさない。
- ・ 尿毒症など悪化見られず、退院できる。

- ・嘔吐が改善し、食欲がでる。
- ・腎機能が改善し、食欲元気が出て〇月〇日予定通り退院できる。
- ・脱水が改善される。
- ・治療がスムーズに受けられる。
- ・合併症を起こさず退院できる。
- ・退院時まで下痢の回数が1日 3 回程度となる。
- ・自力排尿ができるようになる。
- ・血尿が改善される。
- ・低体温になることなく入院生活が送れる。

#### 優先順位 3 位

- ・飼い主が、自宅での管理の方法を理解できる。
- ・病気と今後の治療について、飼い主が理解でき協力できる。
- ・退院時、飼い主が慢性腎不全の生活について理解できる。
- ・退院後、飼い主が病気に対する理解ができ、健康管理がきちんとできる。
- ・入院中、ストレス症状を起こさない。
- ・ストレス症状が出ることなく、治療が確実に受けられる。
- ・二次感染をおこさない。
- ・点滴治療がきちんと受けられる。
- ・治療がスムーズに受けられる。
- ・貧血が改善し、元気がでる。

#### **<乳腺腫瘍の看護計画用紙 21 症例の背景>**

- ・犬 18 例、猫 3 例
- ・年齢:1 歳未満なし、1 歳～6 歳 1 例、7 歳以上 19 例、不明 1 例
- ・入院期間:2 日間 1 例、3 日間 11 例、4 日間 8 例、8 日間 1 例

#### **1) 看護上の問題点**

##### 優先順位 1 位

- ・高齢のため麻酔のリスクが高く、状態が急変

する可能性がある。

- ・高齢で心臓が悪いため、状態が急変するおそれがある。
- ・全身状態が悪く衰弱しているため、麻酔のリスクが高く生命の危険性がある。
- ・術後の疼痛がある。
- ・術野広範囲のため、二次感染を受けやすい。
- ・術野が広いため、創部癒合がうまくいかない可能性がある。

##### 優先順位 2 位

- ・術後の疼痛により、元気食欲が減退する可能性がある。
- ・術野が広く夏場で蒸れるため、二次感染を起こす可能性がある。
- ・術野が腹部で広いため、二次感染を起こすおそれがある。
- ・疼痛と入院のストレスにより、食欲不振・下痢・脱毛などストレス症状が起こる可能性がある。
- ・術野からの出血がある。

##### 優先順位 3 位

- ・初めての入院のため、環境の変化によるストレスから回復が遅れる可能性がある。
- ・術野が広いため疼痛がある。
- ・術後の疼痛により元気食欲がなくなり、回復が遅れるおそれがある。
- ・肥満のため、麻酔の影響が術後も残る可能性がある。
- ・内股に特に漿液がたまり、縫合不全を起こす可能性がある。

#### **2) 看護目標**

##### 優先順位 1 位

- ・状態が急変することなく元気がでる。
- ・創部の癒合がうまくいく。
- ・二次感染をおこさない。

- ・術野からの出血が止まり、疼痛が緩和され、○月○日に退院できる。

#### 優先順位 2 位

- ・術後の疼痛による食欲減退を起こさない。
- ・創部の二次感染をおこさない。
- ・疼痛緩和ができ、最小限のストレスで入院生活を送れる。
- ・体温が維持でき、呼吸が落ち着き回復する。

#### 優先順位 3 位

- ・ストレス症状があらわれることなく退院できる。
- ・疼痛が緩和でき、食欲がでる。
- ・術後合併症が起こらず、軽快退院できる。
- ・浮腫が起こらず、縫合部も経過良好で退院できる。

### 4. 結果および考察

当院における標準看護計画、もしくはクリティカルパスの導入にあたり考えることは、当院で必要な看護基準になり得るため、その作成においては、いままでの看護記録用紙のデータを収集・分析した結果に基づいて設定することが必要である。そのため、過去 3 年間の看護計画用紙を振り返り、中でも多い症例の 2 疾患の看護上の問題点と看護目標について分析した。一番多かった症例は腎不全の 35 例で、次に多かったのは乳腺腫瘍の 21 例であった。

#### 1) 看護上の問題点について

看護上の問題点では、腎不全の症例では、優先順位 1 番「生命の危険性」をあげている者が最も多く、他 10 種類の問題を挙げている。2 番目には、「食欲不振」が最も多く、他 14 種類の問題を挙げている。3 番目には「飼い主の退院後の管理」に関する問題が最も多く、他 10 種類の問題を挙げている。乳腺腫瘍の症例においては、優先順位 1 番「高齢のため急変する恐れがある」をあげている者が最も多く、他 3 種類

の問題を挙げている。2 番目には、「疼痛による食欲不振」が最も多く、他 5 種類の問題を挙げている。3 番目には「ストレスによる回復の遅れ」が最も多く、他 6 種類の問題を挙げている。

優先順位の設定においては、2 疾患の症例とも、生命に危険性のあるものが挙がってきている。2 番目には、動物にとって苦痛があることを挙げている。

また、腎不全という内科的疾患においては、年齢・病状の背景など複雑で個別性が強くあるため問題の種類も多く、また、「食欲がない」と訴えて来院された飼い主が多いため、そのこと自体が問題となっている。入院中においては病気を治すと同時に、退院後の生活を想定してかわることが求められる。退院後の自宅療養における飼い主の知識不足や管理の難しさが問題として挙げられている。このような内科的疾患では、複合疾患や慢性疾患が多いため、多くの情報よりアセスメントし、看護上の問題点を挙げなくてはならない。クリティカルパスのようなものより、標準看護計画での多くの表現の中からその動物に必要な看護上の問題点を選び出せるようなものの方が適するように考える。看護上の問題点を考えていく上で、予測される問題を考えていかなければならないため、問題の成り行きまで考慮できるように、関連性も含んだ内容の看護基準の作成が望ましいと考えられる。

貝瀬<sup>1)</sup>は、「当院の標準看護計画では、予測される患者の看護診断(問題)が、疾患の経過を中心にして、各段階(ステップ)ごとに明示されている。これらは、その段階において、大部分の患者(80~85%以上)が遭遇すると想定される身体的・心理的・社会的問題や合併症や二次的障害(潜在的問題)の看護診断リストである」と述べている。

逆に、乳腺腫瘍のような疾患では、問題の種類も多くなく、入院期間もほぼ変わらず、年齢的な特徴も同じであり、比較的看護計画を立てやすいと考えられる。このような手術を伴う外



科的疾患では、クリティカルパスのような看護ケアのガイドラインとなるものが適するように考えられる。このような形式を導入することで、スムーズに看護計画に移行することができると思う。

阿部<sup>2)</sup>は、「(クリティカルパスは)新人スタッフにとっても、何日目に何をすることが一目瞭然なため、新人オリエンテーション、スタッフ教育としても用いることができます」と述べている。

## 2) 看護目標について

看護目標は、看護上に問題から引き出されることになる。看護計画の立案にあたり、一つの看護上の問題に対して、少なくとも一つの目標が設定される。

腎不全の症例においては、個別性が大きいため、看護上の問題点の種類が多く、看護目標の表現も多くある。しかしながら、看護上の問題点にあった看護目標を設定することができる。このように、個別性の大きい症例の看護計画立案には、担当動物看護師の判断が必要になる。看護過程習得における知識と経験による差も出て来るであろう。そのためにも、標準看護計画を準備し、実際の動物に適するよう、個別性を考慮し「追加・削除」など修正しながら立案できるようにしていく必要がある。

乳腺腫瘍の症例においては、看護上の問題点と連動した看護目標で、ばらつきがなく比較的立案しやすく、入院期間もほぼ一定である。そのため、クリティカルパスの導入が望ましく、時間軸でケアの項目なども入れていくことで、看護の質を維持することもでき、また、新人スタッフの院内教育の資料としても使用できると考える。

## 3) 看護基準の導入に向けて

以上のことより、当院における看護基準においては、症例の特徴により、標準看護計画とクリティカルパスの2種類を導入していくこと。このことにより、看護ケアの質の向上をはかることと、

業務内でスムーズに看護計画の立案ができるようになることを期待する。

## おわりに

今回の看護研究をすることによって、多くの看護計画用紙を振り返り、当院の看護の足跡をかえりみることになった。あらためて、臨床の獣医学には多くの疾患があり、人間の医療とことなり、単科で専門性を追求するものではなく、それゆえ、動物看護も一つ一つの症例を考えていく必要がある。日々の看護が、動物看護という学問につながっていくのだと、強く感じた。

## 引用文献

- 1) 貝瀬友子(2001)「クリティカル・パスと標準看護計画との関連性」『標準ケア指針ークリティカル・パスとケア計画ー 第1巻』(小林寛伊編集) p19, 照林社
- 2) 阿部俊子ら(1999)「クリティカル・パスとは何か:その背景と考え方」『よくわかる よくできる クリティカル・パスー導入・作成・実践の具体的手引きー』(日野原重明特別監修) p4, 照林社

## ●短報●

# 犬の帝王切開における母犬と新生子の看護 — 動物看護師の立場から —

三浦望<sup>1)</sup>、岡村恵子<sup>2)</sup>、岡本晶代<sup>2)</sup>、神林洋子<sup>2)</sup>、斎藤晴美<sup>2)</sup>、  
太田和美<sup>3)</sup>、相田真由美<sup>2)</sup>、小嶋孝代<sup>4)</sup>、小嶋佳彦<sup>5)</sup>

Care for mother and newborn dog under caesarean operation : From animal nurse viewpoint

Nozomi Miura, Keiko Okamura, Masayo Okamoto, Yoko Kanbayashi, Harumi Saito,  
Kazumi Ota, Mayumi Aida, Takayo Kojima, Yoshihiko Kojima

- |                                |                             |
|--------------------------------|-----------------------------|
| 1)小島動物病院アニマルウェルネスセンター 動物看護師・師長 | 2)小島動物病院アニマルウェルネスセンター 動物看護師 |
| 3)小島動物病院アニマルウェルネスセンター 獣医師      | 4)小嶋孝代心理相談室 心理・産業カウンセラー     |
| 5)小島動物病院アニマルウェルネスセンター 獣医師・院長   |                             |

〒956-0832 新潟市秋葉区秋葉2丁目14番68号

## はじめに

動物看護師として生命の誕生に立ち会う喜びは大きい。分娩過程において、特に緊急を要する帝王切開の場合においては動物看護師の果たすべき役割は大きい。飼い主様の不安を取り除き、母犬や子犬の生命を守るために何をしなければならぬのか？

小島動物病院アニマルウェルネスセンターにおける診療を基本に犬の帝王切開における動物看護師の役割をまとめた。

### 1. 帝王切開の適応症とその判断

帝王切開を適応するかの判断は獣医師の提案のもと飼い主様が決断する。しかし動物看護師も飼い主様に知識を提供し、判断を助けられるように帝王切開の適応についての知識が必要である(表1)。

帝王切開は難産の場合、または難産が予想される場合に行われる。難産はチワワやトイプー

ドルなどの小型犬、パグやブルドッグなどの短頭犬種でみられることが多い。また陣痛が微弱な犬、肥満や高齢の犬、初めて出産する犬では、帝王切開が必要になりやすい傾向があるといわれている。

難産の胎子側の要因としては、母犬と比較して胎子が大きい場合や、小型の雌に大型の雄を交配させた場合、初産犬で胎子数が少ない場合などがあげられる。

また前回の分娩時に難産で帝王切開が行われ、今回も難産が予想される場合に、あらかじめ帝王切開が計画されることがある(図1)。

### 2. 帝王切開を行うにあたってのポイントと手術の最終決定

帝王切開を行うポイントとして、危険性も含め飼い主様に十分な説明をして、理解を得ることが大切である。帝王切開において飼い主様と

表 1 帝王切開のタイミングがどのようなときに帝王切開にふみきるかー

<b>1. 飼い主様</b>
① 経済的に問題がない
<b>2. 獣医師・動物病院スタッフ</b>
① 手術の時間は通常(日中)の手術時間帯か、診察時間帯か、 それとも夜間であるか
② 計画的帝王切開か、それとも緊急的帝王切開か
③ スタッフの確保。特に夜間の場合、十分な人手を確認
<b>3. 犬</b>
<b>(1)母犬側</b> (時間的な経過については、あくまで目安であり参考程度とする)
① 体温低下(直腸温)
② プロジェステロン測定キット(日本では未発売)
③ 陣痛微弱
④ 陣痛開始から約 120 分経過しても娩出されない
⑤ 陣痛促進剤を投与後、20~25 分経過しても分娩徴候がみられない
⑥ 胎盤の剥離が起こり暗緑色の分泌液の漏出
⑦ 破水して 90 分以上経過したが、胎子が娩出されない
⑧ 母犬の呼吸が荒い(分娩のためで、呼吸器疾患ではない)
⑨ 分娩予定日を過ぎた(判断基準としては曖昧。犬種によって異なるので参考程度)
⑩ 前の新生子が娩出されてから約 120 分以上経過した
⑪ 全頭出産に約 4~6 時間を超えた
⑫ 子宮脱がみられた(まれに膣脱もみられることがある)
⑬ 子宮無力症
⑭ 母犬が高齢
⑮ 産道の狭窄・奇形そして骨盤骨折
⑯ 子宮捻転・子宮破裂
⑰ そ径ヘルニア・横隔膜ヘルニア
⑱ 膣に腫瘍があり難産の恐れがある
⑲ 母犬の心理状態
⑳ 自然分娩後、胎盤の娩出がない(帝王切開ではないが)
<b>(2)胎子側</b>
① 胎子の心拍数が減少した
② 胎子の過大
③ 奇形胎子(帝王切開で摘出後に判明することが多い。水腫胎など)
④ 胎子の失位
⑤ 死亡胎子の子宮内残存
<b>(3)複合</b>
母犬と胎子、どちらか一方、または両方に原因がある場合

(1)~(3)を総合的に判断して、帝王切開に臨む 小島動物病院アニマルウェルネスセンターにおけるチェックシートより



図 1 難産

表 2 帝王切開におけるインフォームド・コンセントの確立

帝王切開は緊急的帝王切開だけでなく、獣医師と飼い主との話し合いの上で計画的に帝王切開を行う場合もある。

※20 項目の事項について説明し、その同意を得て、帝王切開を行う。

1. 帝王切開にふみきる理由とその結果(予測)、および危険性
2. 帝王切開の準備を進めていても自然分娩に移行することもある
3. 導尿処置・浣腸処置
4. 保温
5. 術前検査(血液・X-Ray・超音波など)
6. 手術と超音波検査のための腹部の毛刈り
7. 会陰切開の可能性
8. 各種薬剤(予測可能な)の説明
9. 輸液
10. 抗生物質の使用(胎子への移行含む)
11. 陣痛促進剤の使用
12. 麻酔(胎子への移行含む)と酸素吸入
13. 呼吸促進剤の使用(主として新生子)
14. 術後合併症の可能性(症例によっては卵巣子宮摘出術)
15. 母犬および新生子の看護
16. 帝王切開後の不妊手術の可否
17. 退院予定日
18. 将来の妊娠と帝王切開の可能性
19. 費用
20. 上記1~19に関して、予測が不可能な場合の対処

小島動物病院アニマルウェルネスセンターにおけるチェックシートより

のトラブルを起こさず、獣医師と動物看護師も知識の再確認を行うという意味からも、帝王切開におけるインフォームド・コンセントを確立する必要がある(表2)。

どの時間帯に手術を行うのかはスタッフの確保も含めて重要である。それぞれの病院の手術時間やスタッフの人数は異なると思うが、通常の診療や予約されている手術や検査などに支障のない時間帯が理想的である。

また飼い主様が初診なのか、再診なのか、それとも他の動物病院からの紹介なのかにより、飼い主様との関わり方が異なってくる。

初診の場合、既往歴や検査などのデータがないためにそれらの収集に時間がかかる。日頃から来院されている飼い主様であれば定期的なレントゲン検査や超音波検査などを行っているため、分娩に備えてある程度の予測と心の準備ができる。他の動物病院からの紹介では、当院を紹介した先生に対して獣医師、動物看護師ともに、いつも以上に気を遣い、慎重に行う。また報告もしなければならない。

犬の状態を把握し手術をいかにスムーズに行えるかは、日頃からのチームワークが試される時でもある。危険度が高くなるにつれて飼い主様の愛犬に対する心配や不安も高まるため、心のケアも忘れてはならない。

手術の最終決定は獣医師が行う。予定のたつ手術であれば、予定日の5~7日くらい前から定期的に体温を測るように飼い主様に指示する。分娩の12~20時間くらい前にはその犬の平均体温より約1℃体温が下がるため、分娩予定の目安となる。同時進行で血清プロジェステロン値の急激な低下を確認する。

日本では未発売であるが「犬血清プロジェステロン定量による犬の排卵日判定キット」(シンビオテック社 Status-Pro)という製品がある。このキットの本来の使用目的は、排卵と同時にプロジェステロン値が上昇し始めることを利用して、犬の行動や膣上皮細胞、外陰部の腫大状況



図2 手術前の超音波検査

などと合わせ総合的に、交配適期を判断することである。

このプロジェステロンの測定キットのもう一つの使い方としては、妊娠後期、つまり分娩が近づくと体温の低下が起こり、それと同時進行でプロジェステロン値の急激な低下が起こることから分娩時期を推定するために用いることもできる。したがって、このキットによる測定と犬の体温測定を併用することは帝王切開を行うかどうか、より確実な判断を下す材料の一つとなる。

また各種検査を行い母体、胎子側の状態を把握する。生死の確認、自然分娩が可能かも含め検査をする。このとき重要なことは、やはり手術時間帯の決定と人員の確保である。無菌手術と新生子の蘇生や看護、また術後の母犬の看護などを考えると、少なくとも4~5名以上のスタッフで臨むべきである。配置は麻酔管理者、術者、手術補助者、新生子蘇生担当1~2名以上となる。緊急の場合にはより迅速な判断が必要である(図2)。

### 3. 手術の決定と手術方法の選択

手術は帝王切開のみを行うのか、胎子を生かしつつ同時に不妊手術を行うのか決定しなければならない。どの方法を選択するのかは飼い主様と相談し、あらかじめ決定しておかなければならない。

獣医師、動物看護師そして飼い主様との意志の統一を図ることが重要である(図3)。

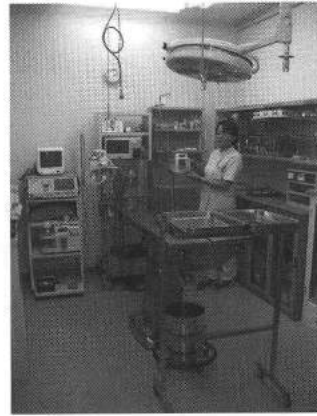
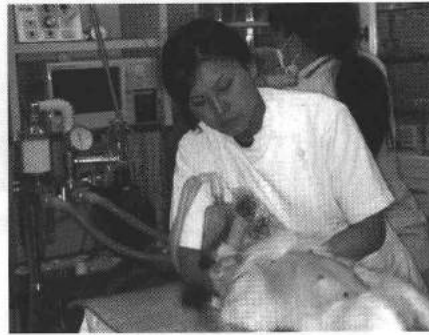


図3 手術前の準備

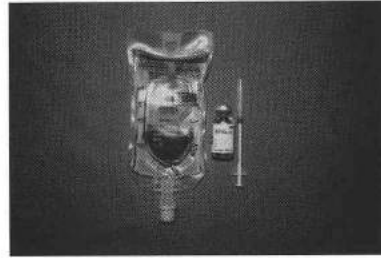


図4 使用器具と予想される薬品や備品の確保

#### 4. 手術前の準備

手術が決定したら準備に入る。使用器具は不妊手術時に使用するものに準ずるが、鉗子類は多めに用意する。また新生子の蘇生やマッサージに使用するタオル類なども多めに準備しておく。吸引器(サクション)を使用する場合もある。器具の滅菌にはじまり、予想される薬品や備品の確保、同時に母犬の看護、新生子の看護準備、緊急時の対処法などあらかじめ再確認しておく(図4)。

#### 5. 母犬の看護

手術決定後には、母犬は輸液や薬剤の投与にはじまり、十分な酸素吸入を行い手術に備える。また、麻酔が短時間で済むように、早急に術野の準備などを行う。術中、術後も低体温を防ぐため体温管理に気を配る。

#### 6. 動物看護師は手術補助をする

手術が始まれば、動物看護師は手術補助をする。麻酔管理も行う。ただし使用する麻酔薬の決定は獣医師の仕事である。麻酔に関しては母体側、胎子側に適切で安全な濃度を見極め維持することがポイントである。手術補助者は新生子のケアも行う。

膀胱に尿がある場合、あらかじめ排泄させておくと手術がやりやすくなる。また手術中、尿カテーテルを挿入しておく。

なお母犬の子宮内にいるときを胎子、体外に出てから約1~2週間の間を新生子という(図5)。

#### 7. 新生子の看護

新生子の看護には新生子1頭につき1名の動物看護師がつくのが理想的であるが、各動物病院により、獣医師や動物看護師の人数は異なるため多少の違いはある。

胎子の摘出と胎膜の除去は摘出後すぐに行

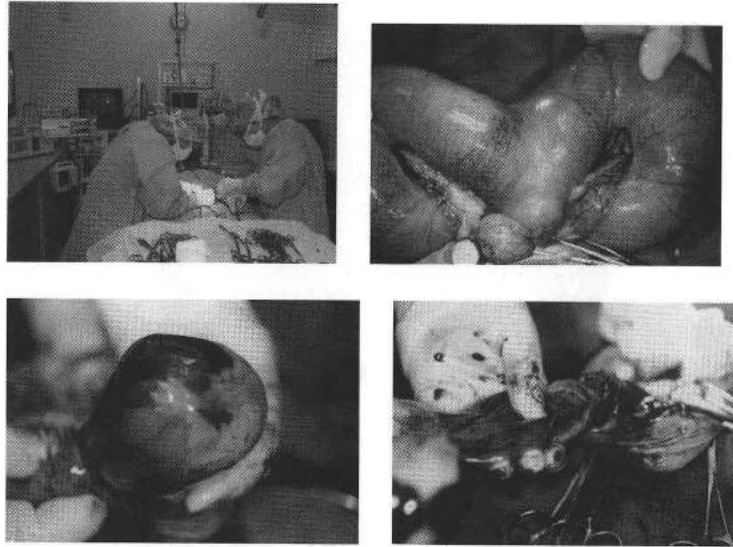


図5 帝王切開手術



図6 新生子の蘇生

う。手術室から処置室へ移動しそこで行なう場合もある。臍帯を結紮し切断、産声の確認、ぬるま湯で洗体またマッサージをする。産声の再確認、呼吸はしているか、心音はどうか、動くかなど新生子の状態を確認する。

臍帯を切断する場合は、1.5～4センチ程度、なるべく長く新生子側に残した状態で切断する。薬剤の投与が必要な時には、この臍帯静脈から注入する場合がある(図6)。



図7 新生子と胎盤数の確認

口腔内、鼻腔内に羊水などの液体がある場合、新生子の頭部と体を両手でしっかりと保持し、大きく弧を描くようにして振りおろすなどして除去する。同時にタオルやガーゼなどを使ってマッサージを行い、呼吸の促進をはかる。マッサージの継続後も反応が見られない場合は必要に応じ獣医師の指示のもと、ドプラムなどの呼吸促進剤の投与を行う場合もある。またマスクを使用し酸素吸入も行う。新生子と胎盤数は同数であるため、確認も忘れてはならない。胎盤の取り残しにより急性子宮炎を引き起こす場合がある(図7)。

新生子の生存を確認し、次は奇形の有無、雌雄の判別、体重測定などを行う。奇形には口蓋裂や鎖肛、四肢骨格系の異常などがあげられる。

蘇生後は帝王切開後であっても、母犬が覚醒したら初乳を与える。初乳は新生子に重要な栄養素である。新生子の眼や耳は当初ふさがっており、鼻は乳が飲みやすいようつぶれている。初乳は弱っている新生子から飲ませ、自力で飲めない場合は初乳をしぼってシリンジに入れて飲ませる。フィーディングチューブ(胃カテーテル)に入れて飲ませる場合もある。

通常は母犬が新生子の面倒を見ることが多いが、世話をしない、産子数が多く乳首が不足しているなどの理由で授乳不足の場合には人工哺乳を行う。犬専用の良質な代用乳を使用し、生後数日間は2~3時間ごとに授乳する。

授乳中は乳の誤飲に注意が必要である。

母犬が育児放棄をした場合、動物看護師や飼い主様が新生子のケアをすることになるが、同時期に出産した同居動物がいた場合には代理母として子育てさせることもある。

そして手術後は、新生子をできるだけ早く退院させる。当院では1日以内を退院の目安としているが、飼い主様の意向、母犬と新生子の状態を確認し決定する(図8)。

### 8. 手術後のケア

帝王切開後の母犬と新生子のケア、そして飼い主様の心のケアも動物看護師の仕事である。母犬は麻酔覚醒時とその後も体温管理や状態の確認を行い、新生子には初乳を飲ませる。特に新生子は状態が変わりやすいため注意が必要である。

飼い主様には術後の経過を報告し、可能であれば面会に来院してもらう。その際、「帝王切開におけるインフォームド・コンセント」に基づき術前から術後までの報告をすることが飼い主様の安心につながる。動物看護師には肌理の細かい気配りやケアが求められる。

### 9. 帝王切開の成功率を高めるために、動物看護師としてできること

帝王切開を行った後、母子ともに経過良好な状態で早期に退院させるため、そして成功率を高めるためには、動物看護師として日頃から飼い主様との良い信頼関係を築くことやコミュ



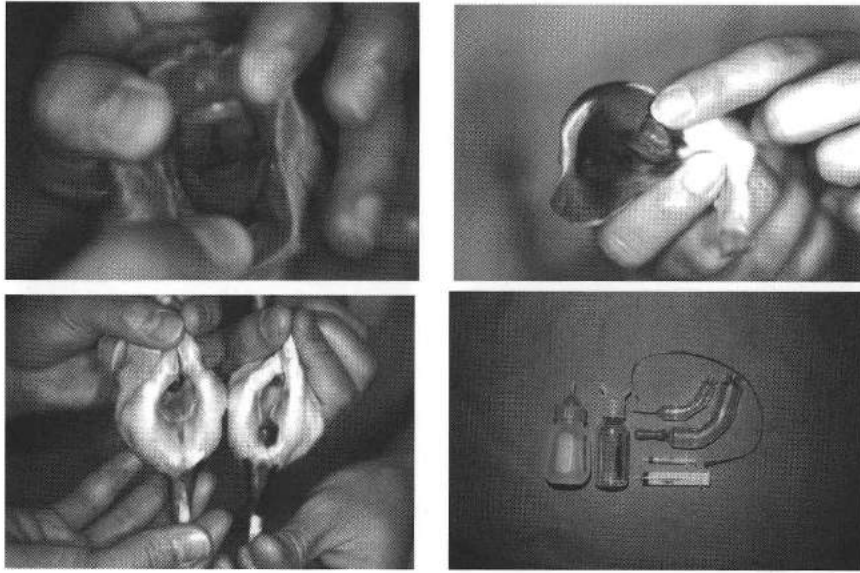


図 8 新生子の看護

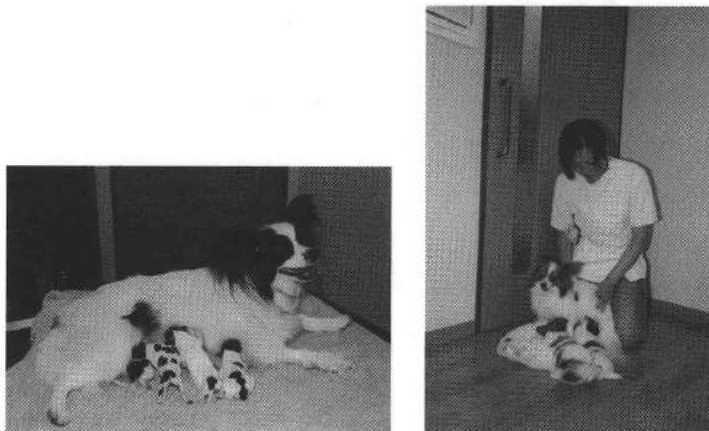


図 9 授乳中の母子

ニケーションをはかることも大切な仕事である。また十分な説明をし、理解を得るためにもインフォームドコンセントは重要である。

人手のある時間帯に手術を行うことができるように、人員の確保と時間の設定、手術決定後はなるべく早期に行えるように準備をする。帝王切開をマニュアル化しておくといよい。

帝王切開は毎日のように行う手術ではないが、特別めずらしい手術でもない。そしてすべての新生子がいつも助かるとは限らない。無事に生まれ、術後の経過は良好にみえても3~7日

後に亡くなるケースもある。動物看護師として飼い主様のおかれている、さまざまな状況を適確に判断して、声をかけたり、そっと気持ちに寄り添う心のケアも忘れてはならない(図9)。

帝王切開は飼い主様、動物たちにとって不安を感じるものであり、計画的だけではなく緊急性を要する場合にはさらにその不安は大きいものがある。母体、胎子の状態を早く把握し、飼い主様に十分な説明をする。これが飼い主様にとっての安心につながる。これは帝王切開を行う場合に限らず、日頃の診療においても同様

である。動物看護師として飼い主様と上手にコミュニケーションをとることは大切な仕事のひとつである。

術前、術中、術後は母犬、胎子、また新生子の状態を常に確認し迅速で的確な行動が求められる。これらは日頃からのトレーニングが重要である。

これらを充実させることで飼い主様、動物たち、獣医師、そして動物看護師にとって良い結果を導きだせるはずである。

#### 参考文献

- 1) 大久保隆行, 筒井敏彦(1997)「帝王切開の術式」  
『SURGEON』第6号, p36~40, インターズー
- 2) 小嶋佳彦, 金子一幸, 川上静夫(1997)「血清 Progesterone, LH 測定による雌犬の授精適期の判定」  
『日本小動物獣医学会(中部)要旨』p86
- 3) 南毅生(1996)「動物病院におけるソーシャルワーカー 米国・ニューヨークアニマルメディカルセンターからの報告」  
『獣医畜産新報』第9号, p758~759, 文永堂
- 4) 獣医繁殖学教育協議会編(2002)『獣医繁殖学マニュアル』p232~236, 文永堂出版
- 5) Gillian M. Simpson, Gary C. W. England, Mike Harvey  
(2000)『小動物の繁殖と新生子マニュアル』(津曲茂久監訳) p131~137, 学窓社
- 6) Shirley D. Johnston, Margaret V. Root Kustritz, Patricia N. S. Olson (2001)『Canine and Feline Theriogenology』p105~128, W.B.Saunders
- 7) 小嶋佳彦, 相田真由美(2005)『Let's 院内業務! 動物看護エキスパート BOOK』p64~67・p101~104, インターズー
- 8) 小嶋佳彦(2006)「犬の難産と帝王切開のタイミング」『SA Medicine』第43号, p29~38, インターズー
- 9) 小島動物病院アニマルウェルネスセンター「産科・生殖器科マニュアル」(未発表)

## ●短報●

## 動物病院における受付の対応マナー

松沢ふみ<sup>1)</sup>、藤田理恵子<sup>1)</sup>、大谷美紀<sup>1)</sup>、宮川則子<sup>1)</sup>、佐藤亜也子<sup>1)</sup>、木村満知子<sup>1)</sup>、  
 庄子さとみ<sup>1)</sup>、森みゆき<sup>1)</sup>、渡辺真由美<sup>1)</sup>、三浦紫陽子<sup>1)</sup>、小林由布子<sup>1)</sup>、平田佳代子<sup>1)</sup>、  
 小林優<sup>1)</sup>、戸野倉雅美<sup>2)</sup>、藤田桂一<sup>2)</sup>

Providing reception service at animal hospital

Fumi Matsuzawa, Rieko Fujita, Miki Otani, Noriko Miyagawa, Ayako Sato, Michiko Kimura,  
 Satomi Syoji, Miyuki Mori, Mayumi Watanabe, Shiyoko Miura, Yuko Kobayashi, Kayoko Hirata,  
 Yu Kobayashi, Masami Tonokura, Keiichi Fujita

1)フジタ動物病院 動物看護師 2)フジタ動物病院 獣医師

〒362-0074 埼玉県上尾市春日1丁目2番53号

## はじめに

受付は動物病院の顔であり、その対応の良し悪しで病院の印象が決まるといっても過言ではない。また、さまざまな病院業務を円滑に進めるためにも受付での采配や気配りは重要である。そこで今回、当院で日頃から心がけている受付の対応マナーについてまとめたのでここに報告する。

## 1. 日頃心がけている事項

## 1) 身だしなみ

動物病院の受付は来院された方に爽やかな印象を与えることが大切であり、清潔な身なりが第一にあげられる。診察時に保定にはいり汚れたり、匂いのついた白衣はすぐに着替えるようにし、一頭一頭の患者を常に清潔な身なりで迎えらるるようにする。髪の毛は顔にかからないようにすっきりとまとめ、相手に表情がよく見えるよう



図1 髪の毛はまとめ表情が見えるようにする

にする。表情を見せることで、飼い主に安心感や信頼感を与え、コミュニケーションがうまくとれるようになると考えられる。(図1)

また、白衣につける名札やフィルムバッジは飼い主にだらしない印象を与えないように、真っ直ぐにつけるようにする。

手は動物に触れることや飼い主の目に触れることを考慮して爪を短く切り、マニキュアはつ

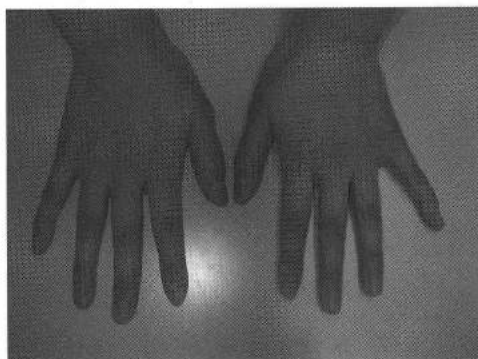


図 2 手の爪は短く切り清潔に保つ



図 3 診察券は両手で受け取る



図 4 受付まで来るのが困難な方への対応

けない。保定時に飼い主の目についてしまうので手の甲や手の平にもメモ書きをしないよう気をつける。また、どんなに忙しくても動物に触れた後には手洗いをする事も怠らないようにする。(図 2)

その他、内履きも動きやすく清潔なものを使用する。手先から足先まで気を配り、自分自身を清潔に保つことは相手に不快感を与えないばかりでなく院内感染を防ぐことにも繋がるので大切である。

## 2) 受付の仕事

### < 飼い主・来客の対応 >

明るい印象を飼い主に与えるため明確な口調と笑顔での挨拶を基本とするが、急患の来院時など特別な場合にはその場に適した言葉遣いや表情、行動を心がけるようにする。診察券などを飼い主から受け取る際は必ず両手で受

け取るようにし、相手を心から受け入れる気持ちを動作でも表すようにする。(図 3)

また、大きな動物を連れている方や小さなお子さんを抱いている方、車椅子などを御使用になっていてカウンターまで来るのが困難な方が来院した際は、カウンターを出てその方のそばへ行き目線を合わせて用件を伺うようにする。(図 4)

犬にリードをつけずに来院された飼い主や、他の動物や飼い主以外の人に飛びついてしまいがちな動物を連れている飼い主には、受付で気づいた際に声をかけ、注意を促すことも必要である。

初診の患者が来院した際は飼い主の不安な気持ちを考慮し、まずは挨拶をきちんとし、安心感を与え、その後主訴を伺い、患者が急を要する状態でなければカルテを作成する。カルテ作成後はお待ちいただく場所を手振り以示

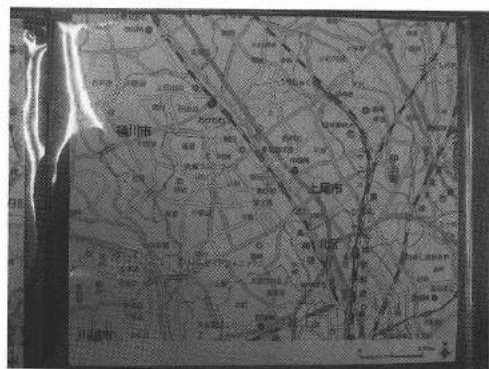


図5 病院までの簡易地図の作成



図6 飼い主に確認をしながら会計をする

し、何番目くらいでお呼びできるかを伝えお待ちいただく。

感染症の疑いがある動物が来院した際は、受付後にいったん、飼い主の車に戻っていただき、順番が回ってきた際に病院のスタッフが迎えに行くようにする。

#### <相談の対応>

飼い主からの相談やクレームは、診療に関わることは必ず担当獣医師に確認をとるようにするが、まずは飼い主の不満をすべて受け止める気持ちで話を十分聞くことが大切である。その後、飼い主が少し落ち着いてから病院側からの話を丁寧にする。自分で判断しかねる場合にはすぐに上司に引き継ぐことで、話がこじれ飼い主の不信を買うことを防ぐようにする。飼い主の気持ちを考慮して落ち着いて話ができるように、空いている診察室にお通しして話を伺う配慮も必要である。

#### <電話の対応>

薬や診療内容に関する問い合わせは獣医師に対応してもらおう。療法食の注文や手術・トリミング・ホテルの予約の場合はカルテを確認後、個々に適切な対応を心がけている。とくにホテルやトリミング予約に関しては健康な状態でお預かりすることが基本であるので、万が一でも院内感染しないよう、混合ワクチンの接種の有無を確認してから予約を受けるようにする。

電話での問い合わせは相手の顔が見えないため誤解が生じやすいので、敏速で適切、かつ誠意を持った対応が必要になる。自分で対応できないと判断したら上司に代わり、対応してもらいようにする。急患時の電話は動物の状態を確認して早急な来院を指示し、既往歴・動物種・来院までの時間・連絡先(携帯電話等移動時にも連絡の取れる連絡先)を敏速に確認する。同時に他のスタッフに伝え、必要な処置の準備をし、来院したらすぐに処置のできる環境を整えておくことが大切である。

また、病院までのアクセスの問い合わせには近辺の簡易な地図を作成し電話機の近くに貼り、これを利用して分かりやすく時間を短縮して説明できるようにしている。(図5)

感染症の疑いがある動物の連絡を受けた場合には、その動物の状態にもよるが、獣医師と相談し、できるだけ診察時間外に来院してもらい、他の動物との接触がないよう配慮する。

#### <会計>

会計の前にカルテに記載されている項目と金額、薬や療法食などお渡しする物を確認する。間違いがないことを確認してから飼い主に声をかけ会計をする。会計時には内容を一項目ごと伝え、ご了承いただいてから会計をする。お金やカードを受け取る際は両手を添えて受け取るようにする。(図6)

薬の処方等で会計の順番が入れ替わってし

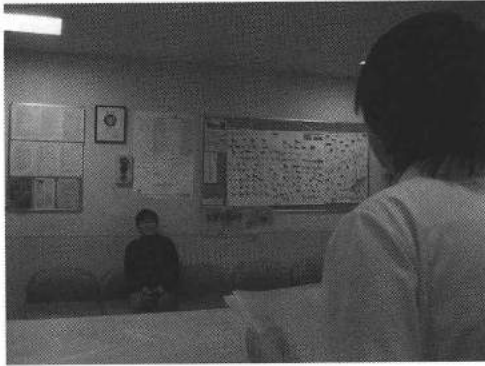


図 7 待合室の飼い主にまめに声をかける

まう場合には、先にお待ちいただいている飼い主が不愉快な思いをしないように、事前に声をかけておく。

## 2. 受付業務に必要なもの

### <判断力>

事象が、どのような状況かを素早くキャッチして、的確に判断・行動する事は、患者の命を救うことにつながる。例えば急患が来院した際、早急に獣医師や他のスタッフに声をかけて必要な処置を伝えることで、一秒でも早く処置を行うことができる。このような場合には、ほかの飼主が不安にならないように急患が来院した旨を伝え、優先して診察することに了承をしていただくことも必要である。

### <観察力・気づかい>

待合室での動物の病状に変化はないか、飼い主に不安や不満はないかなどをよく見極めて、状況に応じて飼主に声をかけて獣医師にその旨を伝えておく。そうすることで、診察をスムーズに行うことができる。

受付では不安な気持ちでお待ちになっている飼い主の気持ちを考慮して診察の順番までの間、声をかけて少しでもリラックスしてもらえよう努めることが大切である。(図 7)

診察や検査、もしくは緊急の手術等で、診察にはいる時間が遅くなってしまい、待ち時間が長くなってしまう場合は担当獣医師に確認し、

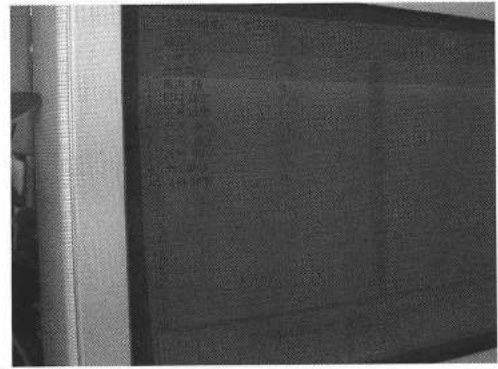


図 8 待ち時間の目安となるようパソコンを使用

なぜ時間がかかっているのかを具体的に飼い主に伝え、了解を得ることも必要である。

混雑時など、あらかじめ飼い主を待たせてしまうことが予想される場合には、患者が急を要する状態でなくお住まいが近い方には、動物の負担を考慮し、時間をずらしての来院を提案させていただくこともある。

また、飼い主が受付を済ませた時間を記入したメモをカルテに挟み、どのくらいお待たせしてしまったかを診察する獣医師にわかるようにし、診察に入る前に看護師からだけでなく、獣医師からも飼い主に一声かけてもらえるようにしている。飼い主には待合室側を向いているパソコンを使い、診察の順番が一目でわかるようになっている。(図 8)

また、亡くなった患者の飼主が来院した際には、すぐに担当獣医師に伝え、飼い主のつらい気持ちを考慮し、別室でお待ちいただくなどの配慮も大切と考える。

### まとめ

ここまで挙げてきた受付業務に関することは当たり前のことかもしれないが、忙しい毎日の業務の中でこれら全てのことを完璧に行うためには、多くの気遣いと配慮、迅速な判断力が求められる。

待合室と診察室の中間に位置する受付は、適切な采配や気配りで診察の流れを円滑にし、飼い主や患者に安心感を与えることができると

考えられる。また受付と診察室にいるスタッフが  
まめに声を掛け合い報告・連絡をすることで、  
飼い主への対応もスムーズに行うことができ、病  
院内の雰囲気も活気のあるものになると考えら  
れる。その雰囲気が飼い主に伝わり、与える印  
象もよいものになっていくのではないかと思われ  
る。

そのために受付業務を行う際は、常に待合  
室と診察室の両方に注意をはらい、それぞれの  
飼主と患者、獣医師と看護師の状況を見極め  
て十分に配慮する必要がある。また、飼い主が  
疑問に思っていることを気軽に声をかけていた  
だけの雰囲気を作ることも受付には必要な要素  
であり、病院にとっても信頼感につながるきっか  
けになるものと考えられる。

これらの事象を適切に行うために、飼い主や  
動物、獣医師および動物看護師にとって最も  
大切なことは何かを常に自問自答して、飼い主  
の気持ちを汲み取った心温かな対応を心がけ  
ていくべきであると考えられる。

#### 参考文献

- 1) 山村穂積 監修(2004)『写真でわかる 動物看護師実践  
マニュアル』 緑書房
- 2) 小宮山典寛(1993)『実践 AHT マニュアル講座』 インター  
ズー

## ●短報●

## 動物病院における面会時の対応

大谷美紀<sup>1)</sup>、藤田理恵子<sup>1)</sup>、佐藤亜也子<sup>1)</sup>、木村満知子<sup>1)</sup>、松沢ふみ<sup>1)</sup>、庄子さとみ<sup>1)</sup>、森みゆき<sup>1)</sup>、渡辺真由美<sup>1)</sup>、三浦紫陽子<sup>1)</sup>、小林由布子<sup>1)</sup>、平田佳代子<sup>1)</sup>、小林優<sup>1)</sup>、藤田桂一<sup>2)</sup>

Our reception manners of meeting at animal hospital

Miki Otani, Rieko Fujita, Ayako Sato, Michiko Kimura, Fumi Matsuzawa, Satomi Syoji, Miyuki Mori, Mayumi Watanabe, Shiyoko Miura, Yuko Kobayashi, Kayoko Hirata, Yu Kobayashi, Keiichi Fujita

1)フジタ動物病院 動物看護師 2)フジタ動物病院 獣医師

〒362-0074 埼玉県上尾市春日1丁目2番53号

動物病院における入院動物の管理の中に飼主との面会時の対応がある。

面会は飼主にとって、動物病院で自分の動物がどのような状態で管理されているかを確認できる、大切な時間であるといえるだろう。そして動物病院スタッフにとっては動物の状態を飼主に報告し、今後の治療についてコミュニケーションをとることができる機会でもある。

そこで本稿では、当院にて私たち動物看護師が飼主に対し面会時に行っている対応について、事例を紹介しながら報告する。

### 1. 面会の流れ

当院での面会は例外もあるが、病状によって飼主の方は通常、面会室が利用できる。面会時間は原則として当院の診察時間内とし、診察時間は次の通りである。

平日 9:00～12:00 15:30～19:00

日・祭日 9:00～12:00 14:00～17:00

### 1)面会時のチェック事項

飼主が面会に来られたら速やかに面会の準備を行い、入院動物の病状の他、次のことをチェックする。

「食欲・元気・排便・排尿等の一般状態の確認」

「天然孔などに汚れはないか」

「患部の出血の有無、テープがはずれていないかなど異常の有無」

など。このようなチェック項目は当院面会室の扉にチェック表として掲示し(図1)、面会準備を行うスタッフは、必ずこのチェック表を確認した後に飼主を面会室に誘導する。

### 2)面会室について

面会は基本的に当院3階の面会室を利用して



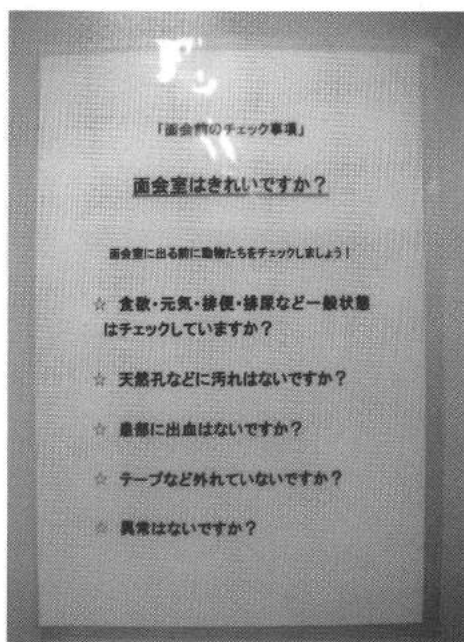


図 1 当院面会室に掲示されている「面会時のチェック事項」表



図 2 面会室の扉に下げておく「面会中」の札

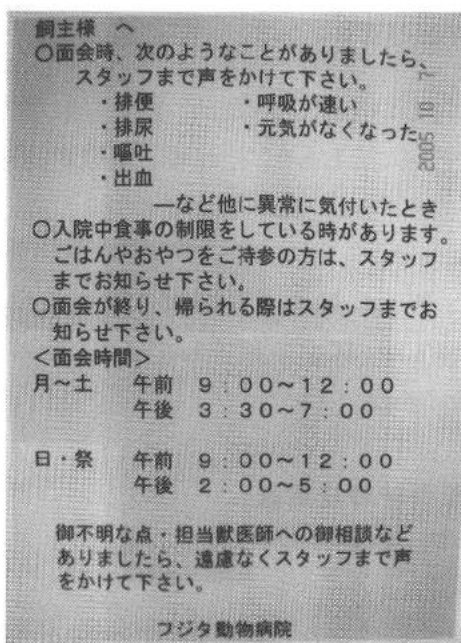


図 3 面会室の掲示板に掲示されているポスター(面会時の注意事項と面会時間を記載している)

いる。面会室の隣は処置室で、2階には受付があり、飼主から声がかかればすぐに対応が可能である。病状によって面会室での面会が難しい動物の面会時には、飼主を直接「入院室」や「隔離室」に誘導し、診察室にある「ICU」の前で

面会することもある。

## 2. 面会室の工夫

面会において当院で工夫をしている事項は、以下の点である。

ひとつは、面会室の扉には「面会中」の札を下げ(図 2)、他のスタッフたちにも飼主が面会していることがわかるようにしている。そして面会室の掲示板には、面会時の注意事項と面会時間を記載したポスターを掲示し(図 3)、これらに関して理解が得られるようにしている。病状により他の事柄があれば、面会時に口頭でお伝えしている。

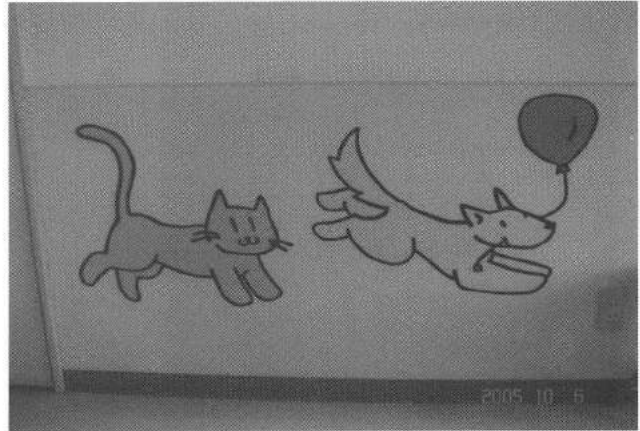
また、面会室は入院している動物の病気に対しての不安な気持ちを考慮して、できるだけ雰囲気明るくあたたかい印象をもたせるために、レイアウトを工夫している。スタッフによる手作りの季節のポスターやイラストのステッカーを壁に貼り(図 4-A・B)、ゆったりとリラックスして面会していただけるようにしている。

## 3. 面会時の流れ

面会時は基本的に動物をケージに入れるが、



A 掲示板に、スタッフ手作りの季節のポスターが貼られている。



B 面会室の壁には、こちらもスタッフ手作りのイラストのステッカーが貼られている。

図4 当院面会室



図5 飼主との面会時に動物の病状と治療方針を話す獣医師

状態によってはリードをつけて、または抱きかかえたままで面会される。

飼主との面会時には、必ず担当獣医師から現在の病状や今後の治療方針について報告を行っている(図5)。検査結果や写真や患部

を確認していただくときには、面会前に診察室で報告することもある。その後、面会終了時には飼主からスタッフに声をかけてもらい、面会終了としている。

なお、担当の動物看護師は入院中の様子などをお話し、飼主の気持ちを配慮した対応を行うように心がけている。

#### 4. 面会時の注意点

面会時、病状によって特に注意している点がある。

整形外科疾患などでケージレストが必要な動物、循環器疾患や呼吸器疾患の動物の場合、面会で興奮し病状を悪化させる可能性があるときには、病態が安定するまで飼主に面会を遠慮していただくこともある。そのような場合には、電話等で病状を報告し、飼主とコミュニケーションをとるようにしている。

また消化器疾患や腎泌尿器疾患では、入院中の排便・排尿・嘔吐物の量や状態を報告し、状況によってはこれらの排泄物を写真に撮るか、

または直接提示することもある。

さらに感染症の場合は、隔離した入院室に入って面会していただいているが、その際、飼主には病状を理解してもらい、退室時には手指、履き物等の消毒をしていただくよう指示している。そのため感染症の面会時には、必ず消毒の準備をしておき、飼主が帰られてからも消毒を徹底し、院内感染が起きないように努めている。

ターミナルケアや重度の病状で入院している動物の場合、面会時には特に注意をして対応している。

飼主は精神的に不安定な状態であることが多いので、状況に応じて心のこもった対応が必要である。そのため、その飼主とコミュニケーションのとれている動物看護師や担当獣医師が中心となって対応するようにしている。

また、面会時には特にスタッフ同士の笑い声や私語などはつつしみ、飼主が不快に感じないように注意する。担当の動物看護師以外でも飼主に可能な限り声をかけ、飼主とのコミュニケーションに努めている。

## 5. まとめ

私達は日頃、抱えている不安や疑問を面会時に動物看護師に投げかけてくる飼主に多く接する。そのような中で、治療や病状に関しては獣医師が対応していくが、入院中の動物のストレスのことや退院後の管理、動物と離れていることの飼主自身の精神的な問題などは動物看護師に相談をされることが少なくない。面会は飼主と動物と動物病院スタッフの大切なコミュニケーションの場であると考えられる。

特に動物看護師は、獣医師と飼主のパイプ役として、双方の意見が一方通行にならないよう注意し、入院管理に際し飼主に理解と信頼が得られるように努めることが大切と考えている。

以上のように飼主と十分なコミュニケーションをとることで良好な関係を保つことができ、その結果、入院動物の治療を円滑に進めることが

可能となり、動物の早期回復にもつながると考えられるだろう。

## ●原著論文●

## 動物看護学生が抱く動物看護職のイメージ

## —学年差についての検討—

小嶋未来、太田千絵、北嶋愛夢、佐藤雅俊、藤田朋美、渡部美樹、濱野佐代子  
(ヤマザキ動物看護短期大学)

Images on roles of animal nurse as seen from students : Study on difference by school grades

Miki Kojima, Chie Ota, Ayumi Kitajima, Masatoshi Sato, Tomomi Fujita, Miki Watanabe, Sayoko Hamano

〒192-0364 東京都八王子市南大沢4丁目7番2号

## 【キーワード】

- ・動物看護学生
- ・動物看護職のイメージ
- ・イメージの学年差

## 【要約】

多くの動物看護学生は動物看護職を目指して入学するが、3年間の学生生活を通して、動物看護師になる人、ならない人に分かれる。これは、学生生活や動物病院研修を経験することにより、動物看護職に対するイメージが大きく変化したためだと考えられる。そこで動物看護学生の動物看護職に対するイメージ、実習・研修を経験したことによるイメージの変化を質問紙調査で行い、1年次と3年次を比較・検討した。

その結果、「動物看護職に憧れを抱いている1年次と、就職を控え、将来の自分の生活などを現実問題としている3年次とでは職業に対する認識が異なること」「3年次は学生生活を通して、漠然と抱いていた動物看護師のイメージが現実化・具体化されたこと」が調査結果から示

唆された。

## はじめに

現在、コンパニオンアニマルは家庭内で家族の一員として飼育されており、人とコンパニオンアニマルの関係は、多くの人にとって重要なものとなってきた。このような背景から、様々な動物関連の職業が必要とされてきた。本学の学生の多くが就く予定である動物看護師という職業もそうである。動物看護職は、動物病院に勤務し、動物看護を行う仕事であり、動物医療現場において重要な役割を担っている。しかし、現在、動物看護師の国家資格はなく民間資格のみであり、動物看護師の仕事内容は勤務先の動物病院によって様々であり、社会的地位も低いのが現状である。その為か人材が育たず、なかなか発展してこなかった分野である。そのような現状の中、本学動物看護学科の学生の多くは動物看護職を目指して入学するにもかかわらず、動物看護職以外の動物園や動物愛護団体、動物介在療法などに関連した職業を希望する学生もおり、動物看護師になる人、ならな

い人に分かれる。これは、学生生活や動物病院研修を経験することにより、動物看護職に対するイメージが大きく変化するためであると考えられる。つまり、動物看護職に対して抱くイメージが大きく影響し、職業選択を左右すると考えられる。このように、学生の将来の職業選択には、職業やその職業に従事する人に対するイメージが大きく作用する<sup>1)2)</sup>と考えられている。そこで、動物看護学生の持っている動物看護師のイメージを調査することは、動物看護学生の動物看護師のイメージを捉えるのみならず、動物看護学生の将来の職業選択、動物看護職の分野にも示唆を与えると考えられる。一方、入学直後の1年次と、2年間の学習・実習を経験した3年次の動物看護職に対するイメージは変化していると考えられる。この動物看護職のイメージの変化を捉えるために、1年次と3年次とを比較検討した。

## 1. 目的

1. 動物看護学生のイメージする動物看護職に関する意識を調査する。
2. 動物看護に関連する学習や実習、動物病院研修を経験することによって動物看護職のイメージが変化したかどうかについて、1年次と3年次を比較検討する。

## 2. 研究方法

### 1) 予備調査

動物看護師のイメージについて、動物看護学生3年次6名で意見交換・情報集数し検討した結果と、「看護学生の看護に関するイメージの学年別による検討<sup>3)</sup>」の研究を参考に、動物看護師のイメージについてのカテゴリを作成した。カテゴリは「外見、性格、仕事、環境、将来性、社会的見地」が挙げられた。このカテゴリごとに質問項目を作成した。そして、2年次15名を対象に質問紙調査を実施し、意見、感想を述べてもらい質問項目を再検討した。以上の

結果をもとに質問項目を作成し、本調査を行った。

## 2) 本調査

### 調査協力者

3年課程の私立の動物看護系のA短期大学に在籍する学生186名(1年次110名、3年次76名)。

回収率:1年次82.6%、3年次63.9%、2学年合計73.7%

### 調査期間

2006年6月上旬

### 調査方法

質問紙調査法にて調査を行った。実施方法は、以下の2通りの方法で行った

- ①留置調査:授業の後に質問紙を配布し、持ち帰ってもらい、後日、短期大学内に設置したポストに投函してもらった。
- ②集合調査:授業中に実施し、その場で回収した。実施時間は約20分であった。

### 質問内容と回答方法

#### (1) 調査協力者の属性

- ①学年
- ②性別

(2) 動物看護職のイメージに関する質問項目は以下の31項目である。回答方法については、1~21項目は、4段階評定法(そう思う、どちらかといえばそう思う、どちらかといえばそう思わない、そう思わない)である。また、21の項目に対してはその理由を自由に記述してもらった。22~28項目の回答方法は、2件法(はい、いいえ)であるが、24、25、26、27の項目に「はい」と回答した場合と28の項目については、その理由を自由に記述してもらった。29~31の項目の回答方法は自由記述法である。以下の左側の

番号は質問項目の番号である。

1. 動物看護師は清潔な格好をしている(以下は「清潔な格好」と表記する)
  2. 動物看護師は感受性に富んだ人が向いている(以下は「感受性豊か」と表記する)
  3. 動物看護師は動物が過ごしやすい環境を自発的に提供するべきだ(以下は「環境提供」と表記する)
  4. 将来、動物看護師になったとき、掃除・洗濯などの雑務を行うのは嫌だ(以下は「雑務は嫌」と表記する)
  5. 動物看護師という職業は一般の人に浸透していると思う(以下は「一般への浸透」と表記する)
  6. 動物看護師は生涯続けられると思う(以下は「生涯の仕事」と表記する)
  7. 動物看護師の仕事内容は統一されるべきである(以下は「仕事内容統一」と表記する)
  8. 動物看護師の仕事内容は多種多様である(以下は「多種多様な仕事内容」と表記する)
  9. 動物看護師は獣医師の指示がなければ何も出来ない(以下は「獣医師の指示の必要性」と表記する)
  10. 動物看護師は動物看護師の認定資格がなくても務まる(以下は「無資格でよい」と表記する)
  11. 今後、動物看護職の国家資格が定められるべきだ(以下は「国家資格の必要性」と表記する)
  12. 獣医師は動物看護職について理解していないと思う(以下は「獣医師の非理解」と表記する)
  13. 動物看護師の価値観により提供する動物看護は変わると思う(以下は「動物看護師の価値観」と表記する)
  14. 動物看護師の生命観により提供する動物看護は変わると思う(以下は「動物看護師の生命観」と表記する)
  15. 動物看護師の性格により提供する動物看護は変わると思う(以下は「動物看護師の性格」と表記する)
  16. 動物看護師の多くは現状満足していると思う(以下は「現状満足」と表記する)
  17. 動物看護師は理想の仕事である(以下は「理想の仕事」と表記する)
  18. 動物看護を学ぶことで、動物看護師は理想の仕事ではないと分かった(以下は「非理想の仕事」と表記する)
  19. 卒業後も動物看護の勉強がしたい(以下は「卒後学習希望」と表記する)
  20. 動物病院の経営者になりたい(以下は「動物病院経営希望」と表記する)
  21. 動物看護師になるのに不安がある(以下は「不安」と表記する)
  22. 獣医師の指示のもと採血をやってもよい(以下は「採血の賛否」と表記する)
  23. 動物看護師の仕事にはトリミングの技術も必要である
  24. 動物看護師は、働いている動物病院以外の動物病院との交流がない(以下は「他の病院との交流なし」と表記する)
  25. 動物看護師は、動物関連の仕事以外の人との交流が少ない
  26. 動物看護師には若い人が多いと思う(以下は「動物看護師は若い」と表記する)
  27. 動物看護という職業に対し、夢や理想をもっている
  28. 獣医師の信頼を得ることで、仕事内容を広げられると思う
  29. あなたは、動物看護師の一番重要な仕事は何だと思いますか
  30. あなたは、動物看護師が何に対してストレスを感じると思いますか
  31. あなたは、人間の看護と動物の看護の一番異なる点は何だと思いますか
- (3)動物看護職に関連するイメージについての質問項目は以下の3項目である。回答方法は、

以下の選択肢の中から最も当てはまるもの3つを選択する。以下の番号は質問項目の番号である。

32. 動物看護師につく人には、どのような能力が必要だと思いますか。  
技術、知識、記憶力、洞察力、包容力、忍耐力、体力、注意力、コミュニケーション能力、意欲、冷静さ、若さ、サービス精神、礼儀、決断力、笑顔、要領のよさ、その他( )

33. あなたは、獣医師をどんな人だと思いますか。

尊敬、信頼、穏やか、指導者、心が広い、おおらか、優しい、頑固、怖い、男性が多い、愛想がない、権力者、冷血、その他( )

34. 動物看護師の労働条件について悪いと思うものは何ですか

労働時間、給料、保険、休暇、ボーナス、昇給、福利厚生、退職金、家族手当、住宅手当、その他( )

(4) 動物病院研修の有無について、「あり」「なし」で回答してもらい、さらに「あり」と回答した場合は、研修を行ったことによって変化したことについて自由に記述してもらった。

以上、計 37 項目からなる質問紙調査を行った。

#### 分析方法

動物看護学生の動物看護職のイメージについて検討した。さらに、入学直後の1年次と、2年間の動物看護に関連する学習・実習を経験した3年次の動物看護職に対してのイメージの変化を捉えるために、1年次と3年次の各回答の平均値の差の検定を行った。具体的には、学年を独立変数、動物看護師のイメージに関する21項目(質問項目番号1~21)の各質問項目の回答の平均値を従属変数として、1年生と3年生の回答の平均値の差の検定をt検

定にて行った。また、7項目(質問項目番号22~28)について、学年によって「はい」「いいえ」の回答の人数に関連があるかを検討するために $\chi^2$ 検定を行った。分析の統計処理は、SPSS for Windows ver.13.0を使用して行った。

### 3. 結果と考察

動物看護職に対するイメージの21項目は、学年差が認められると考えられたので、t検定にて、各項目の学年による平均値の差の検定を行ったところ、有意な学年の差が認められた。学年別の各項目の平均値と標準偏差、t値、有意水準を表1に示す。学年による有意差が認められたのは、

- 「1. 清潔な格好」 t(183)=2.8(p<.01)
- 「2. 感受性豊か」 t(184)=2.9(p<.01)
- 「4. 雑務は嫌」 t(184)=2.7(p<.01)
- 「5. 一般への浸透」 t(183)=2.7(p<.01)
- 「6. 生涯の仕事」 t(184)=2.3(p<.05)
- 「10. 無資格でよい」 t(183)=4.6(p<.01)
- 「17. 理想の仕事」 t(183)=2.2(p<.05)
- 「18. 非理想の仕事」 t(183)=3.0(p<.01)
- 「20. 動物病院経営希望」 t(184)=3.5(p<.01)

の項目であった。

その中で、「1. 清潔な格好」「2. 感受性豊か」「4. 雑務は嫌」「5. 一般への浸透」「6. 生涯の仕事」「17. 理想の仕事」「20. 動物病院経営希望」の7項目で、1年次の方が3年次より有意に平均値が高かった。また、「10. 無資格でよい」「18. 非理想の仕事」の2項目が3年生の方が、1年生より有意に平均値が高かった(表1参照)。このことは、3年次は動物病院研修を通して実際に働いている動物看護師と接し、漠然と抱いていた動物看護師のイメージが現実化・具体化されたためと考えられる。さらに、動物看護職に憧れを抱いている1年次と、研修を経験し、就職を控え、自分の生活面など現実問題として意識している3年次との間に差がでたものと考えられる。

表 1 動物看護職のイメージの各項目平均値の学年差

(M: 平均値, 標準偏差; SD, t値, 有意水準) (1~21 の質問項目のみ記載)

質問項目	1, 3年			1年			3年			t値	有意水準
	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD		
1. 動物看護師は清潔な格好をしている	185	3.55	0.6	109	3.6	0.5	76	3.4	0.6	2.8	1>3(p<.01)
2. 動物看護師は感受性に富んだ人が向いている	186	2.8	0.8	110	3.0	0.8	76	2.6	0.8	2.9	1>3(p<.01)
3. 動物看護師は動物が過ごしやすい環境を自発的に提供すべきだ	186	3.6	0.6	110	3.6	0.6	76	3.6	0.7		
4. 将来、動物看護師になったとき、掃除・洗濯などの雑務を行うのは嫌だ	186	11.6	0.9	110	1.7	0.9	76	1.4	0.7	2.7	1>3(p<.01)
5. 動物看護師という職業は一般の人に浸透していると思う	185	1.9	0.8	109	2.0	0.9	76	1.6	0.6	2.7	1>3(p<.01)
6. 動物看護師は生涯続けられると思う	186	2.4	1.0	110	2.6	1.0	76	2.2	1.0	2.3	1>3(p<.05)
7. 動物看護師の仕事内容は統一されるべきである	186	2.8	1.0	110	2.9	1.0	76	2.7	1.0		
8. 動物看護師の仕事内容は多種多様である	186	3.7	0.5	110	3.7	0.5	76	3.7	0.5		
9. 動物看護師は獣医師の指示がなければ何も出来ない	186	2.3	1.0	110	2.3	1.0	76	2.3	0.9		
10. 動物看護師は動物看護師の認定資格がなくても務まる	185	2.6	1.0	109	2.3	1.0	76	2.9	0.9	-4.6	1<3(p<.01)
11. 今後、動物看護職の国家資格が定められるべきだ	185	3.5	0.8	109	3.6	0.8	76	3.4	0.8		
12. 獣医師は動物看護職について理解していないと思う	183	2.3	0.8	110	2.3	0.8	73	2.2	0.8		
13. 動物看護師の価値観により提供する動物看護は変わると思う	186	3.2	0.7	110	3.2	0.7	76	3.2	0.6		
14. 動物看護師の生命観により提供する動物看護は変わると思う	186	3.3	0.7	110	3.3	0.7	76	3.3	0.8		
15. 動物看護師の性格により提供する動物看護は変わると思う	185	3.1	0.8	109	3.1	0.8	76	3.2	0.8		
16. 動物看護師の多くは現状満足していると思う	182	1.9	0.7	108	1.8	0.8	74	2.0	0.7		
17. 動物看護師は理想の仕事である	185	2.6	0.8	110	2.7	0.8	75	2.4	0.8	2.2	1>3(p<.05)
18. 動物看護を学ぶことで、動物看護師は理想の仕事ではないと分かった	185	2.2	1.0	110	2.0	0.9	75	2.4	1.0	-3.0	1<3(p<.01)
19. 卒業後も動物看護の勉強がしたい	186	3.0	0.9	110	2.3	1.0	76	2.9	0.8		
20. 動物病院の経営者になりたい	186	1.8	1.0	110	2.0	1.0	76	1.5	0.8	3.5	1>3(p<.01)
21. 動物看護師になるのに不安がある	186	3.1	1.0	110	3.1	0.9	76	3.2	1.0		



表 2 学年と質問項目「22. 採血の賛否」のクロス表

学年	採血してもよい	採血してはいけない	
1	71 (65.7)	37 (34.3)	108
3	68 (89.5)	8 (10.5)	76
合計	139 (75.5)	45 (24.5)	184

下段括弧内は%

表 3 学年と「26. 動物看護師は若い」のクロス表

学年	若い人が多いと思う	若い人が多いとは思わない	
1	57 (53.8)	49 (46.2)	106
3	55 (72.4)	21 (27.6)	76
合計	112 (61.5)	70 (38.5)	182

下段括弧内は%

表 4 学年と「24. 他の病院との交流なし」のクロス表

学年	交流がない	交流がある	
1	20 (18.5)	88 (81.5)	108
3	28 (37.8)	46 (62.2)	74
合計	48 (26.4)	134 (73.6)	182

下段括弧内は%

動物看護に関する7項目(質問項目番号22~28)について、学年によって「はい」「いいえ」の回答の人数に関連があるかを検討するために $\chi^2$ 検定を行った。結果、

「22. 獣医師の指示のもと採血をやってもらいたい」 $\chi^2(1)=13.6(p<.01)$

「26. 動物看護師には若い人が多いと思う」 $\chi^2(1)=6.5(p<.01)$

「24. 動物看護師は、働いている動物病院以外の動物病院と交流がない」 $\chi^2(1)=6.9(p<.01)$ の3項目で有意な結果が得られた(表 2・3・4 参照)。

その中の「22. 獣医師の指示のもと採血を行ってもよい」「26. 動物看護師には若い人が多いと思う」の2項目で、1年次の方が3年次よりも「はい」と答えた者の比率が高かった。一方、「24. 動物看護師は、働いている動物病院以外の動物病院と交流がない」の項目では、3年次の方が1年次よりも「はい」と答えた者の比率が高かった。また、「26. 動物看護師には若い人が多いと思う」に「はい」と答えた回答者の自由記述で、1年次と3年次の回答が異なると考えられた。1年次は「動物看護師という職業が最近出来たから」と記述した人が多いのに対し、3年次は「結婚、育児、安価な給与により若い時期に退職、転職をするから」と記述した人が多い。このことから、3年次は、動物看護職が社会的に確立されていないことによる不安定な労働条件や動物看護職の将来に不安を感じていると考えられる。しかし、動物看護職のイメージに関する項目の「11. 国家資格の必要性」で1年次、3年次共に平均値が高かったように、不安を感じていても、動物看護職が国家資格になり社会的に確立された職業となることを望んでいると考えられた。

また、「29. あなたは、動物看護師の一番重要な仕事は何だと思いますか」の自由記述では、1年次と3年次共に「動物の看護、世話」という記述が多く見られたが、3年次は、「動物の気持ちを考えた看護、できるだけストレスのない環境を作ってあげる」「動物の身体、心理の観察」など、どう看護したいかとその方法等、同じ「看護」であっても3年次ではより具体的に書かれていた。また、「話せない動物の声を聞くこと」「動物の負担、不安を取り除く努力をする」など、3年次では自分の動物に対する心構えや気遣いについての記述が多く、実習や研修を通して将来自分がどのような看護師になり、どのように動物に関わりたいたかがしっかりと自覚され始めていると考えられた。

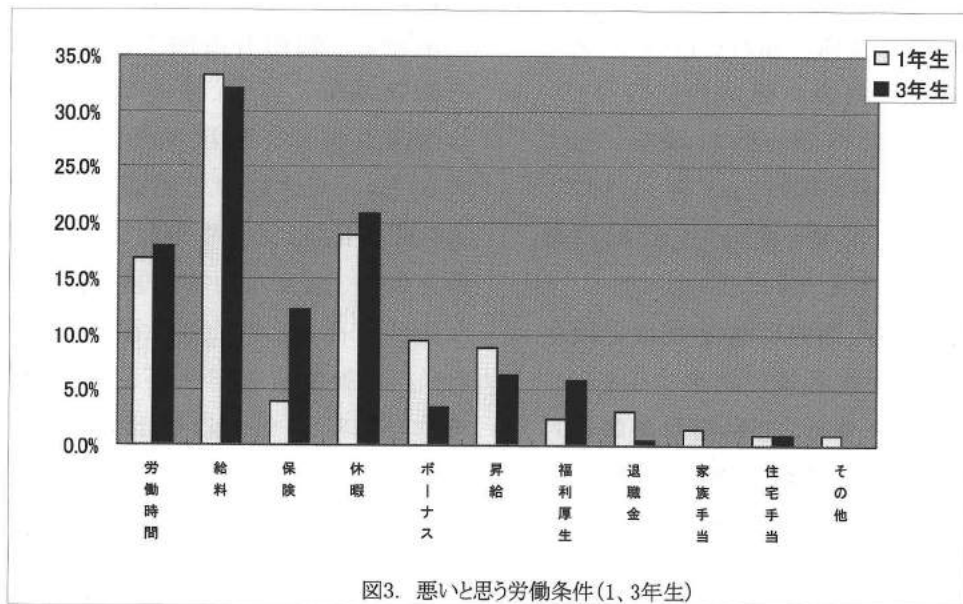
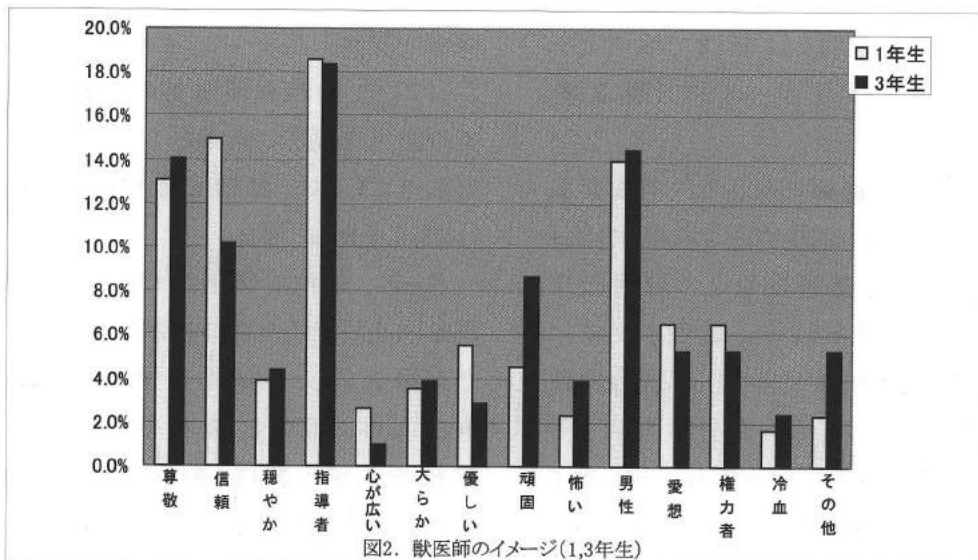
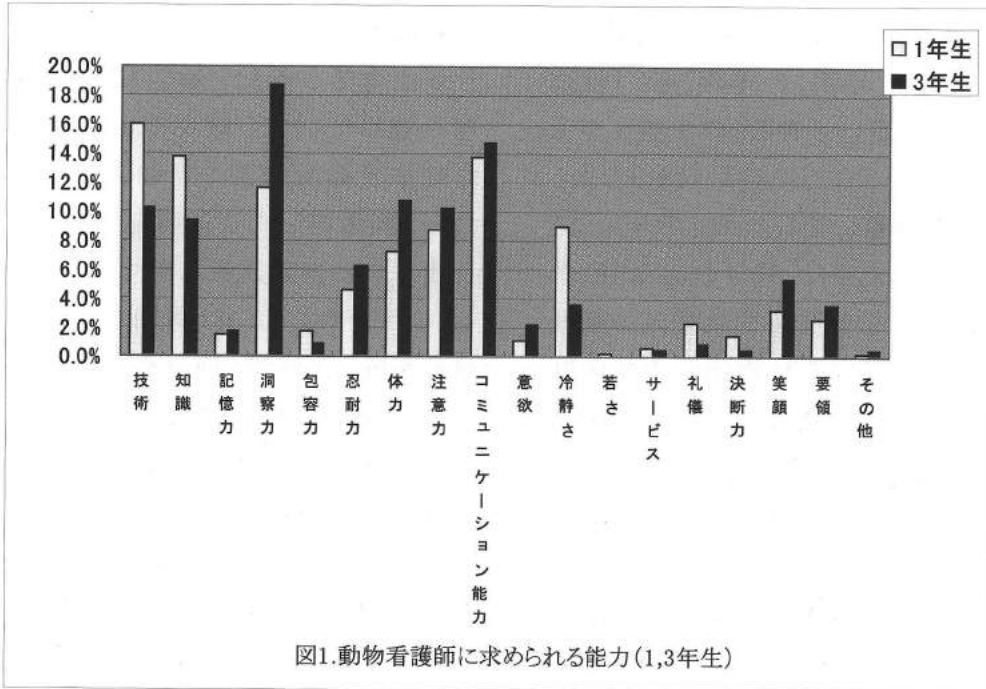
その他にも、1年次と3年次の回答が異なる

と考えられたものは、1年次は「獣医のサポート、保定」の記述が多かったが、3年次は「掃除、院内の衛生管理」「飼主の対応」「動物の観察」と記述する人が多かった。これは「(4)研修に行ったことによって変化したこと」について、3年次では、「保定以外の大切さを知った」「勉強だけではダメだと思った」などと記述されているように、研修を行うことにより動物看護師の仕事に対する考えが大きく変化していると考えられた。このことから3年次は、動物の看護以外に動物看護職には重要な仕事がたくさんあるということを知っていると考えられた。

動物看護職に関連するイメージについての3項目では、回答数の多い順に順位をつけて検討した。「32. 動物看護師につく人には、どのような能力が必要だと思いますか」の回答では、1年次は「技術」が1位、「知識」が2位、「コミュニケーション能力」が3位に、3年次は「洞察力」が1位、「コミュニケーション能力」が2位、「体力」が3位となった。このように、3年次は実際働く上で基礎となる能力を多く挙げている(図1参照)。

一方、項目21の「不安」の自由記述の1年次の回答では、「自分につとまるか」「卒業までに知識を吸収できるか」などの意見が3年次に比べて多く見られた。入学まもなく、動物看護学に関連する実習や学習を始めて日が浅い1年次の多くは、技術の難しさや身につけるべき知識の多さにとまどいを感じているために、動物看護師に必要な能力として技術や知識が多く挙げられたのではないかと考えた。

前述のように、「29. あなたは、動物看護師の一番重要な仕事は何だと思いますか」の1年次の回答では、「獣医のサポート、保定」の記述が多く、3年次は「掃除、院内の衛生管理」「飼主の対応」や「動物の観察」などの記述があり、実習や研修で様々な経験をしているため、動物看護職に必要な能力が具体的にイメージされるためこのような結果になったと考えられる。



「33. あなたは、獣医師をどんな人だと思いますか」の回答では、1年次、3年次ともに「指導者」「信頼」「男性が多い」「尊敬」の4項目が上位を占め、順位に学年による違いはあまり見られなかった(図2参照)。このように、学年による違いが見られなかったのは、我々の出会う獣医師は、大学の教員、研修先の動物病院の獣医師、飼い主として通院する動物病院の獣医師など、自分がどのような立場でどのような獣医師とかわったのかによって、獣医師と自分との関係性は様々で、人それぞれ獣医師のイメージが異なるためであると考えられた。

「34. 動物看護師の労働条件について悪いと思うものは何ですか」の回答では、1年次、3年次ともに、「給料」「休暇」「労働時間」が多い一方で、「保険」については、1年次で6位だったのに対し3年次では4位となった(図3参照)。

また、「21. 動物看護師になるのに不安がある」の自由記述の回答においても、3年次は1年次よりも、給料や労働時間などの雇用面に対して不安に思う人が多くいた。就職を来年に控え、現在就職活動中の3年次は、自分の勤める動物病院のことや来年の自分の生活などを現実問題として意識しているため、1年次よりも「保険」などの具体的なものを多くあげていると考えられた。

以上から、動物看護職に憧れを抱いている1年次と、就職を控え将来の自分の生活などを現実問題としている3年次とでは、職業に対するイメージが異なると考えられた。3年次は動物病院研修を通して、漠然と抱いていた動物看護師のイメージが現実化・具体化されていることが示唆された。つまり、動物看護学生は学校生活3年間の中で、動物看護に関連する授業や実習、動物病院研修を通して動物看護職に対するイメージが現実化してきたと考えられた。

## おわりに

学生生活3年間を通して動物看護の勉強を積み重ねたことや、短大をはじめ、動物病院の研修先や動物看護の勉強会で様々な人に出会い、刺激をうけ、ご指導をしていただけたことが我々の動物看護職に対する意識の変化のきっかけだと考える。また専門ゼミの仲間と、同じ目的を持った仲間と悩みや希望を共有したことにより動物看護職への意識が高まった。

人と話し合うことにより見えてくることは多く、意見・情報交換をすることは大切だと考えた。したがって、本学で今回実施したアンケートをきっかけに、動物看護学生たちに、動物看護職について友人と話し合う機会、自分自身で考える機会、何か将来について考えてもらえるような機会を提供したかった。そのような機会を与えることにより、動物看護学生の動物看護職に対する意識を高め、卒業してからも強い信念を持ち続けてもらい、動物看護職を引っ張って活躍してもらえたらと思う。

さらに、動物看護学生の動物看護職への意識を向上させるために本調査を役立てたい。また本調査から、動物看護学生の意識の認識や向上だけではなく、動物の看護に関する専門学校や大学の教員、動物病院の方々にとっても学生が考えていることを知ってもらい、指導のお役に立ててもらえればと考えている。

最後に、動物看護師の仕事内容は勤務先の動物病院によって様々である。動物看護師は国家資格になる(現在各団体の認定資格はある)という動きもあり、明確でなかった仕事内容も統一化されると考えられる。その時、仕事の幅を広め、高度な動物看護を提供できるようになりたい。そのために動物看護職の移行期にいる私たち動物看護学生が、今から知識・技術・理念を高めていかなければならない。

引用文献

- 1) 石井範子・志賀令明・戸井田ひとみ・伊藤由香(1994)  
「看護学生の看護に対するイメージの変容について－基礎看護学見学実習前・後の比較－」『秋田大学医療短期大学部紀要』Vol.2,p91～97,秋田大学医療短期大学部
- 2) 石井範子・平元泉・志賀令明・堀井雅美(1997)「看護学生の看護に対するイメージの変容について(2)－縦断的方法による検討－」『秋田大学医療短期大学部紀要』Vol.5, p51～56, 秋田大学医療短期大学部
- 3) 白井雅美・渡辺節子・坂梨薫(1995)「看護学生の看護に関するイメージの学年別による検討」『Quality Nursing』Vol.1 No.11, p 65～70, 文光堂

●原著論文●

## 特別養護老人ホームでの動物介在実習前後 における動物看護科学生の「気分」の変化

熊坂隆行<sup>1)</sup>、升秀夫<sup>2)</sup>、川上嘉明<sup>3)</sup>、光石智子<sup>4)</sup>、長谷川由希恵<sup>5)</sup>、菅野裕子<sup>5)</sup>、臼井明子<sup>5)</sup>  
行木ユキ江<sup>5)</sup>、恩田絵里<sup>5)</sup>、笠原かすみ<sup>4)</sup>、齊藤利章<sup>5)</sup>、坂本敏<sup>5)</sup>、山田好秋<sup>6)</sup>

Changes in the feelings of animal nursing students after animal-assisted practice at a nursing home for elderly residents

Takayuki Kumasaka, Hideo Masu, Yoshiaki Kawakami, Tomoko Mitsuishi, Yukie Hasegawa, Yuko Kanno,  
Akiko Usui, Yukie Namiki, Eri Onta, Kasumi Kasahara, Toshiaki Saito, Satoshi Sakamoto, Yoshiaki Yamada

1) 静岡県立大学看護学部 成人・老人看護領域 助教  
3) 社会福祉法人 特別養護老人ホーム パール代官山  
5) 学校法人中央工学校 中央動物専門学校

2) 筑波大学大学院 人間総合科学研究科  
4) 元 学校法人中央工学校 中央動物専門学校  
6) 新潟大学大学院 医歯学総合研究科

1) 〒422-8526 静岡市駿河区谷田 52 番 1 号

所在地は 1) のみ表記

### 【キーワード】

- ・動物看護科学生 (animal nursing students)
- ・動物介在実習 (animal-assisted practice)
- ・気分 (feelings)

### 【要約】

動物介在実習前後における学生の「気分」を調査した。今回対象となった学生は、全員、動物介在を行うことが初めてであった。実習後にある程度「緊張と興奮」が和らいだが、「疲労感」が強く現れ、「爽快感」を得るまでは至らなかった。実習の流れや対象者を把握し、この実習の意義や内容を十分理解し、学生自ら進んで行う姿勢が見られること、回数を重ねることにより、これらは改善され、より充実した実習が実現すると考えられた。また、それは介在した動物の負担軽減、対象者の生活の質 (Quality of Life; QOL) の向上にも繋がると考えられた。

### I. はじめに

現在、少子高齢化社会を迎え、人々の生活の質 (Quality of Life; QOL) が重要視されている。そのような中で、高齢者や障害者は家庭における看護・介護や支えが困難なことから療養型病院への入院や介護・福祉系施設などへの入所が急増している。このような中で高齢者や障害者は生きがいや楽しみをなくし、QOL が低下するケースが多々あるが、一部の病院や介護・福祉系施設では高齢者や障害者の QOL の向上を目指して動物介在活動が行われている。

動物医療においても人間の医療同様、看護師が誕生した。動物看護師になるためには、規定の単位を修得する必要がある。東京都北区にある動物看護師養成学校の科目の中には「動物介在実習」がある。現代社会はヒトからヒトが安らぎを得ることは難しい時代とも言われており、そのような中で今、動物が注目されている<sup>1)</sup>。

2000年12月1日に施行された「動物の愛護及び管理に関する法律」の法改正の背景には、動物の保護及び管理に関する法律の施行から26年余り経過した現在、動物、特に、犬やねこ等のペットは、単なる愛玩動物ではなく、家族の一員、人生の伴侶であるとの認識が高まっていることが関係している<sup>2)</sup>。この実習の目的は、学生にとって、動物看護を学んでいく上で、今まで見えてこなかった人と動物の関係、コミュニケーションなどを見つけ出すきっかけとなり、社会に貢献できる動物介在の手続きや心得を学ぶことであり、また、動物介在によって動物はなんらかの負担(ストレスなど)を生じるが、今後の動物を看護していく上で重要な学びとなる。

動物介在実習で動物同様、実習を行う学生にもなんらかの負担が生じると考えられるが、動物介在実習によって学生に生じた負担を分析した研究はこれまでにない。そこで、今回、動物介在活動を希望している特別養護老人ホームで動物介在実習を行い、その実習前後における学生の「気分」の変化を調査した。

## II. 方法

### 1. 対象者

東京都北区にある動物看護師養成学校の学生のうち、動物介在活動の経験がない動物介在実習を受講している学生18名。

### 2. 動物介在実習の手続きとデータ収集方法

動物介在実習を実施するにあたり、学生に対して①動物介在活動について、②訪問する特別養護老人ホームと対象者について、③対象者とのコミュニケーション技法について、④イヌのハンドリングについての講義を行った。

2004年5月9日に東京都渋谷区にある特別養護老人ホームPにて、そのホームを利用している高齢者31名を対象に、学校で飼育しているイヌ10頭、学生18名で動物介在実習を行っ

た。

高齢者10~11名のグループを3グループ、イヌ1頭に対し学生1~2名のグループを構成し、高齢者が多くのイヌと触れ合えるよう、10分~15分の触れ合いを3回実施した。3回の実施の間には、5分間の休憩を入れた。今回の介在実習には、獣医師が健康診断・適正検査を行い、高齢者との接触に問題がないと診断したイヌを用いた。

その実習前後において、学生に対して、坂野らが作成した気分調査票<sup>3)</sup>を使用し、質問紙調査を行った。本調査票は、特定の状況で一時的に引き起こされた心理的反応を見ることができる。この調査票の項目は、個人の特性や気分状態を査定するためにこれまでしばしば使用されてきた尺度のうち、POMS(Profile of Mood States)、STAI(The State-Trait Anxiety Inventory)、自己評価式抑うつ尺度(SDS)、および敵意的・攻撃的感情を測定する敵意的・攻撃インベントリー、身体的リラクゼーション感を測定するRelaxation Inventoryの5尺度を参考としながら、気分状態を測定するために適していると思われる項目を選択し作成されており、高い信頼性と妥当性を持っている。この調査票は個人の気分状態、あるいは、リラクセスに伴う心理的变化を即座に捉えることができる<sup>4)</sup>。

### 3. データ分析方法

坂野らが作成した気分調査票は「緊張と興奮」「爽快感」「疲労感」「抑うつ感」「不安感」の5因子から構成されており、それぞれ8項目ずつ計40項目からなっている。

「緊張と興奮」は「興奮している」「気分が高ぶってじっとしてられない」「緊張している」「そわそわしている」「怒っている」「焦っている」「いでもたってもいられない」「いらいらしている」の項目から構成されている。「爽快感」は「心静かな気分だ」「頭の中がすっきりしている」「くつろいだ気分だ」「物事を楽にやることができる」

“生き生きしている”“元気いっぱいである”“気持ち引き締まっている”“充実している”の項目から構成されている。「疲労感」は“何もしたくない”“面倒くさい”“物事に気乗りしない”“しらけている”“訳もなく疲れたような感じがする”“集中できない”“ぐったりしている”“誰にも話しかけられたくない”の項目から構成されている。「抑うつ感」は“気持ちがめいっている”“気分が沈んで憂鬱である”“みじめだ”“がっかりしている”“気が重い”“つらい”“むなしい”“一人きりのようで寂しい”の項目で構成されている。「不安感」は“将来のことをあれこれ考えてしまう”“何となく不安だ”“いろんな思いが心をよぎる”“自分のことが気になる”“とまどいを感じている”“自分の考えがまとまらない”“何か具合の悪いことが起こりはしないか心配だ”“何か物足りない”の項目から構成されている。

回答方法は「1=全く当てはまらない」から「4=非常に当てはまる」の4段階で示されており、因子ごとに粗点を合計し、18名の平均値を求め、介在実習前後についてそれぞれ対応のあるt検定を行った。

#### 4. 倫理的配慮

倫理的配慮として、調査の趣旨・内容について十分な説明を記載した説明書を添付し、調査目的、調査への協力は自由意志であり、拒否することや途中で中断できること、データは全体として統計処理をするため個人が特定されな

いこと、調査結果は研究目的以外には使用しないこと、学会・論文発表の公表などについて説明し、協力の同意の得られた学生のみを対象とした。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 対象者の概要

今回協力が得られた学生は、動物介在活動の経験がない動物介在実習を受講している学生18名(全員女性)であり、平均年齢(±標準偏差)は19.8(±1.5)歳であった。

#### 2. 気分の変化(全体) (表1)

動物介在実習前後における学生の気分の変化を因子別にみると「緊張と興奮」の平均(±標準偏差)は、実習前16.0(±2.8)、実習後13.1(±3.3)であり実習後に低値を示した。「爽快感」は実習前19.7(±3.1)、実習後18.8(±4.2)であり実習後に低値を示した。「疲労感」は実習前11.8(±2.8)、実習後14.0(±5.4)であり実習後に高値を示した。「抑うつ感」は介在実習前10.1(±2.5)であり、介在実習後11.8(±3.7)であり、実習後に高値を示した。「不安感」は実習前18.2(±4.6)、実習後17.6(±4.3)であり実習後に低値を示した。

「緊張と興奮」の因子において有意差が見られた( $p < 0.01$ )。

#### 1) 緊張と興奮

表1 学生18名全員の気分の変化 (Mean±SD)

因子	介在実習前	介在実習後
緊張と興奮	16.0±2.8**	13.1±3.3**
爽快感	19.7±3.1	18.8±4.2
疲労感	11.8±2.8	14.0±5.4
抑うつ感	10.1±2.5	11.8±3.7
不安感	18.2±4.6	17.6±4.3

\*\*  $P < 0.01$



実習前後において有意差がみられ( $p < 0.01$ )、また項目『気分が高ぶってじっとしてられない』『緊張している』『そわそわしている』についてそれぞれ有意差がみられ( $p < 0.05$ )、いずれの項目も平均値は実習後に低くなった。

## 2) 爽快感

実習前後において、有意差はみられなかった( $p = 0.57$ )。項目別においても、有意差はみられなかった。

## 3) 疲労感

実習前後において、有意差はみられなかった( $p = 0.06$ )が、項目『何もしたくない』『ぐったりしている』においてはそれぞれ有意差がみられ( $p < 0.05$ )、いずれの項目も平均値は実習後に高くなった。

## 4) 抑うつ感

実習前後において、有意差はみられなかった( $p = 0.10$ )が、項目『気持ちがいっている』においては有意差がみられ( $p < 0.05$ )、平均値は実習後に高くなった。

## 5) 不安感

実習前後においては、有意差はみられなかった( $p = 0.60$ )が、項目『とまどいを感じている』において有意差がみられ( $p < 0.05$ )、平均値は実習後に低くなった。

# IV. 考察

## 1. 緊張と興奮

今回の調査から「緊張と興奮」は実習前後において有意な差が見られ、項目別に見ると、「気分が高ぶってじっとしてられない」「緊張している」「そわそわしている」が有意に和らいだ。また、「興奮している」「怒っている」「焦っている」「いてもたってもいられない」という項目においても有意な差はみられなかったが、実習後に

低値を示したことから、状態が和らいだことが伺えた。今回、対象となった学生は動物介在活動の経験がなかったことから、実習前は気分の高まりや緊張、そわそわ感を抱いていたが、実習後は実習を終了したことによる安堵感や達成感に変化した可能性が考えられた。

## 2. 爽快感

「爽快感」は実習後に若干低値となった。実習後に低値を示した原因と考えられるのは、①今回は全員が初めての实習であり、気分の高まりや緊張、そわそわ感を抱いていたこと、②この実習に関する説明が十分でなかった恐れがあることから、学生の実習の流れや対象者(高齢者)の理解の把握が不十分であった恐れがあること、③理解が不十分であったことから、楽しみや充実感が得られなかったことが関与していると考えられた。この実習の意義や内容を十分理解し、学生自ら進んで行う姿勢が見られ、また、回数を重ねていくことにより、爽快感が得られると考えられた。

## 3. 疲労感

疲労感の項目「何もしたくない」「ぐったりしている」で有意な差がみられ、実習後に明らかな疲労感が伺えた。また、他の項目においては有意な差はみられなかったが、実習後に高値を示した。これも爽快感同様、この実習の意義や内容を十分理解し、学生自ら進んで行う姿勢が見られ、また、回数を重ねていくことにより、疲労感が爽快感や安堵感、達成感に転換していく可能性が考えられた。

## 4. 抑うつ感

「抑うつ感」は実習前後においてほとんど変化が見られなかったが、若干実習後に高値を示した。爽快感、疲労感同様、この実習の意義や内容を十分理解し、学生自ら進んで行う姿勢が見られ、また、回数を重ねていくことにより、

抑うつ感が爽快感や安堵感、達成感に転換していく可能性が考えられた。

### 5. 不安感

「不安感」は実習前後においてほとんど変化はみられなかった。項目の「とまどいを感じている」については介在実習後に有意に改善がみられたが、初めての体験ということから、実習が終了した安堵感や達成感が大きく関与したと考えられた。

## V. 結論

今回対象となった学生は、全員、動物介在を行うことが初めてであった。実習後にある程度「緊張と興奮」が和らいだが、「疲労感」が強く現れ、「爽快感」を得るまでは至らなかった。実習の流れや対象者を把握し、この実習の意義や内容を理解し、学生自ら進んで行う姿勢が見られること、回数を重ねることにより「疲労感」「抑うつ感」「不安」などが解消され、「爽快感」を得られる可能性が考えられた。このことにより、学生の動物介在に対する意識が高まり、動物と対象者、対象者と自分、自分と動物の関係が

明確となり、より充実した実習が実現すると考えられた。それは、介在している動物の負担軽減、そして対象者の QOL の向上にも繋がると考えられた。

謝辞：本研究にご協力いただきました東京都北区の動物看護師養成学校の学生の皆様に感謝いたします。

### 引用文献

- 1) 横山章光 (1996)『アニマルセラピーとは何か』p41～71・p131～150, 日本放送出版協会 (NHK ブックス)
- 2) 環境省ホームページ:  
[http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/amend\\_law/gaiyo.html](http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/amend_law/gaiyo.html) (2006.2.21 確認)
- 3) 坂野雄二, 福井知美, 熊野宏昭ほか (1994)「新しい気分調査票の開発とその信頼性・妥当性の検討」『心身医学』Vol.34 No.8, p629～636, 日本心身医学会
- 4) 堀洋道 (2001)『心理測定尺度集 I』p 249～254, サイエンス社

### Abstract

The feelings of nursing students before and after animal-assisted practice were investigated. All students who participated in the present study were involved with animal-assisted nursing for the first time. After the practice, the level of "tension and excitement" decreased slightly, but the level of "fatigue" was high, and students did not feel "exhilarated". It is thought that these issues will be improved once the students become familiar with the practice workflow and nursing home residents, clearly understand the significance and content of the practice, become more assertive, and gain experience, while improving nursing skills in the practice. Furthermore, this should lead to lower stress for the animals and improve the quality of life of nursing home residents.

## ●原著論文●

## ペット喪失時における対応についての調査

大路朋子、岡田蓉子、横山章光

Research on pet loss cases

Tomoko Oji, Yoko Okada, Akimitsu Yokoyama

帝京科学大学 理工学部(現 生命環境学部) アニマルサイエンス学科

〒409-0193 山梨県上野原市八ッ沢 2525 番地

## はじめに

近年、人とペットの関係がより親密なものになってきている。Rajaram ら<sup>1)</sup>の調査では、94.8%の飼い主が自分のペットを友人と考えていた。日本においては、内閣府国民生活局総務課調査室による国民生活選好度調査<sup>2)</sup>で、64%の人が「ペットも家族の一員である」と答えていた。日本においても、ペットは身近な存在と考えられているといえるだろう。それに伴い、ペットを喪失した人の悲嘆を和らげることは非常に重要なテーマとして取り上げられつつある。Marilyn<sup>3)</sup>らの研究では、ペットの喪失経験が、重要な人との関係の喪失に非常に似ていることが明らかにされた。また、横山<sup>4)</sup>は、『ペットの喪失は「心の拠り所の喪失」という点で、「対象喪失」の一部である』と述べている。小此木<sup>5)</sup>は対象喪失を「愛情や依存の対象を失う体験」とし、人々にとって最も重大なストレスの原因になると説明している。そのため、ペットを愛情や依存の対象としてみている人にとって、ペット喪失体験は、大変深刻な出来事であり、強いストレスになると言える。

しかし、日本においてペット喪失体験、およびその悲嘆感情は社会に認知されていない(香取)<sup>6)</sup>。一般社会の受け止め方として、“たかがペットが死んだくらいで”という風潮がまだまだ根深く残っているという(鷺巢)<sup>7)</sup>。それは、わが国ではペット喪失者が自分の悲嘆を自由に表現することが困難な環境に置かれていることを示している。さらに、そのような周囲からの無理解や喪失者への不適切な対応が、ペット喪失者の悲嘆を深刻にする要因の一つと考えられる。香取は同じ著書の中で、「人が亡くなれば残された家族は喪に服する。周囲の人達が一緒に死を悼んでくれるだろう」「人はそうして周囲の人に支えられつつ悲しむだけ悲しんだら、時間の経過と共に少しずつ心の整理をつけていって、なんとか立ち直っていく」と述べている。ここから、自分を理解してくれる周囲の人の存在は喪失者の大きな支えとなり、悲嘆の解決の手助けとなっていることが分かる。そのため、周囲の対応は、悲嘆の解決に大きく影響を与えるといえる。Lagoni ら<sup>8)</sup>はペット喪失者に対して助けになる対応として「共感を示し心から慰める、話をさせ

うっせきした感情から解放させる、癒すために抱きしめたり触れたりする」などを挙げ、助けにならない対応として「決まり文句で慰める、別の人と悲嘆を比べる、気をそらせようと忙しくさせる」などを挙げている。また、慰めの言葉について、「自分が大きな喪失を経験したことがないと、心からではなく頭で支援しがちになり、慰めになると信じている言葉(決まり文句)をかけてしまう」と指摘している。Stewart<sup>9)</sup>は、「最も重要なことは、そばにいて話を聞き、何度も何度も同じ話を繰り返し聞く覚悟でいることである」と述べている。このような対応については、Anderson<sup>10)</sup>や不破京三<sup>11)</sup>の著書などでも同様に挙げられている。これらを参考にして適切・不適切な対応をまとめると、適切な対応は「話を聞く、慰める、一緒にいる、悲しむ時間を与える、共感する、理解して認める、感情を共有する」、不適切な対応は「苦しみを些細なものとして扱う、批判や叱責、他の喪失と比較する、元気付ける、哀れむ、理解しない、決まり文句で慰める、気分転換を勧める、忙しくさせる」ということになる。

このような専門的な意見が存在するにもかかわらず、前述したように日本においてペット喪失者は周囲に理解されなかったり、間違った対応を受けたりすることが多い。この原因として考えられるのは、『これまで示されてきた「適切な対応」が世間に普及していないこと』『適切と言われる対応が実際は不適切なものだった』という

二点が挙げられる。

これらを検証する際必要となるのは、現実にはペットを失った場合、①喪失者が求めた対応と「実際に」受けた対応はどのようなものか、それらの間に「ズレ」があったかどうか、②喪失者に対して周囲はどのような対応をとろうと「考えて」いるのか、であるが、それらの視点からの報告は皆無である。

本研究では、①、②の具体的な内容と、飼育経験・喪失経験の有無によってそれらに差があるのかを明らかにすることを目的とし、アンケート調査を行った。

### 1. 方法

アンケートは、回答者の対象年齢を15歳以上とし、配票調査法と郵送調査法による、無記名方式で実施した。回答形式は、複数回答可の選択方式とした。質問内容は、性別、年齢、飼育歴、喪失経験の有無などとした。回答を得られた240名のうち、記入漏れのあったものを除外し、204名(男性106名、女性95名、不明3名、平均年齢は30.5歳)を分析対象とした。回収率は76%、有効回答率は65%であった。ここでの「喪失」という言葉は、「ペットの死・行方不明・譲渡・盗難」と定義した。

回答者は飼育経験・喪失経験の有無によってAからDの4つのグループに分類し、その中で比較を行った(表1)。

表1 回答者の分類

		喪失経験の有無	
		あり	なし
現在のペット	飼っている	102名	25名
	飼っていない	42名	35名

## 2. 結果

### 1)実際にペットを失った時、周囲に求めた対応

喪失経験のあるグループのうち、現在ペットを飼っているグループ(A)と、飼っていないグループ(C)を比較した(図 1)。現在ペットを飼っているグループは、「ペットの話をしたい」(23.5%)、「ペットの話はしたくない」(6.9%)と、ペットの話をしたいと考える人が多かった。それに対し、現在ペットを飼っていないグループでは「ペットの話をしたい」(16.7%)、「ペットの話はしたくない」(21.4%)と、ペットの話をしたくないと考えた人が多いことが分かった。差が大きく見られたのが「一人にしてほしい・一人で悲しみたい」という項目である。現在ペットを飼っていないグループでは「一人にしてほしい」を 19%、「一人で悲しみたい」を 26.2%選択していたが、現在ペットを飼っているグループでこの項目を選択した人は10%以下という結果であった。その他の項目では大きな差は見られず、「気持ちを整理する時間がほしい・普段通り接してほしい」を選択した人が両グループで多かった。

### 2)実際にペットを失った時、求めたことを実際に受けられたかどうか

喪失経験のあるグループのうち、現在ペットを飼っているグループ(A)と、現在ペットを飼っていないグループ(C)に対し、「ペット喪失時に実際に何らかの対応を受けたかどうか」について比較した。両グループの間に差はなく、「受けた・受けなかった・覚えていない」の割合がほぼ均等となった。実際に対応を受けた人は、喪失経験のあるグループ全体(A・C)の 35%程度であった。喪失経験のあるグループ全体(Aグループ・Cグループ)について、「彼らが求めたことを実際に受けられたかどうか」を調べたところ、実際に受けられたと回答した人は全体の 46%で、半分以上の人が求めた対応を受けられていないという結果になった。

### 3)実際にペットを失った時、受けて嬉しかった対応と嫌だった対応

喪失経験のあるグループ(A・C)の全体の結果である(図 2)。「一緒に悲しんだ・気持ちの整理を待った」などが嬉しかった対応として挙げられた。「一人にした・悲しみの共有を避けた」などが嫌だった対応として挙げられていた。続いて、本調査の中で、専門書<sup>9)</sup>での「適切な」対応に該当する「ペットの話を聞いた・傍にいた・一緒に悲しんだ・気持ちの整理を待った・気持ちを理解しようとした・慰められた」という項目については、嬉しかった対応として選択した人が多くなっていた。次に、専門書での「不適切な」対応に該当する「励まされた・気分転換を勧められた」という項目に着目したところ、「気分転換を勧められた」は、嫌だった対応として選択した人が多かった(嬉しかったと感じた人 9.8%、嫌だったと感じた人 23.1%)。しかし、「励まされた」は、嬉しかった対応として選択した人が多くなっていた(嬉しかったと感じた人 37.3%、嫌だったと感じた人 19.2%)。また、専門書で挙げられていなかった「普段どおりに振舞われた」という項目を嬉しい対応だと感じた人が多かった(48%)。

### 4)周りにペット喪失者がいたら、行おうと思う対応

4-1) 喪失経験のあるグループのうち、現在ペットを飼っているグループ(A)と、飼っていないグループ(C)を比較した(図 3)。

「無理に気持ちを理解しようとはしない」という項目では、同じ喪失経験があっても、現在ペットを飼っているグループは 3.9%しか選択していないのに対し、現在ペットを飼っていないグループでは 21.4%の人が選択していた。他の項目では差は見られなかったため、喪失経験のある人の間では、対応に大きな差がないことが言える。「ペットの話を聞く・普段通り接する」を選択した人が両グループで多くなっていた。

ペット喪失時における対応についての調査

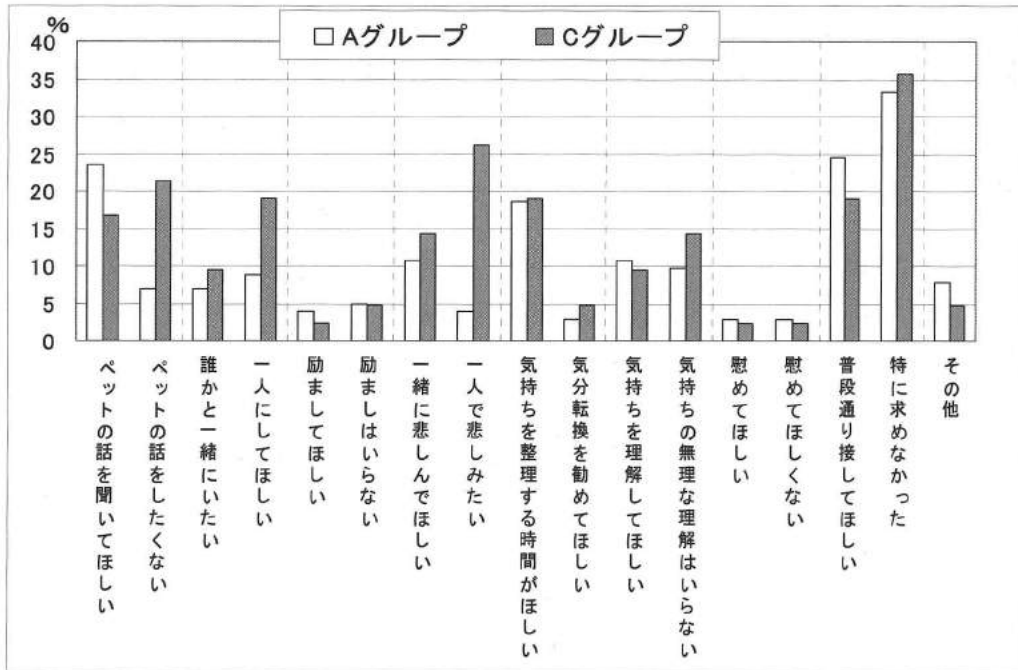


図 1 実際にペットを失った時、周囲に求めた対応

(喪失経験のあるグループのうち、現在ペットを飼っているグループ(A)と、現在ペットを飼っていないグループ(C)の比較)

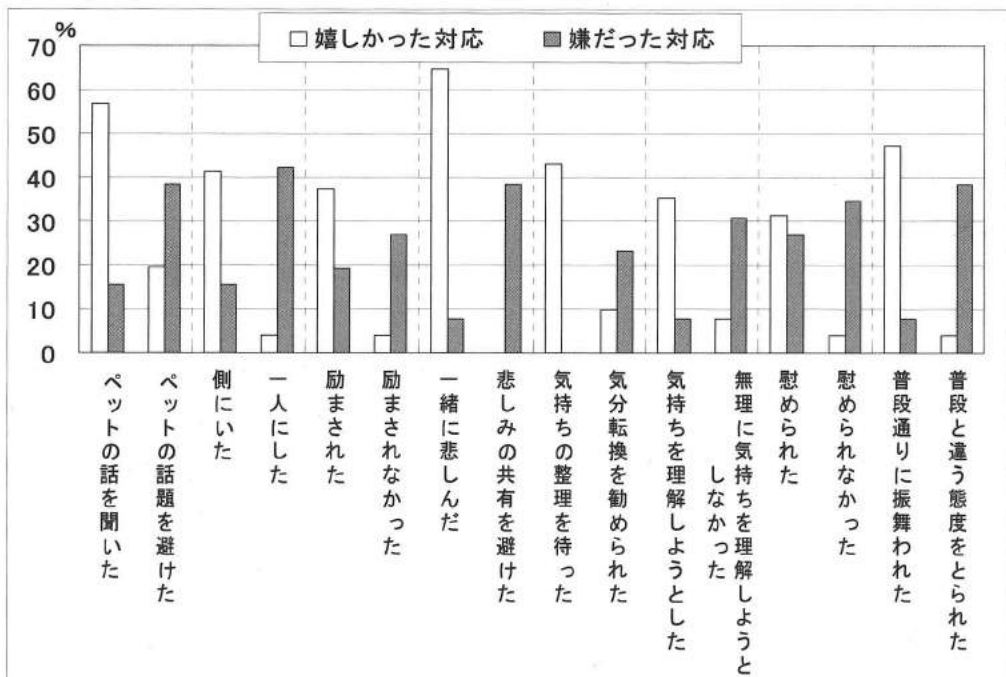


図 2 実際にペットを失った時、受けて嬉しかった対応と嫌だった対応

(現在ペットを飼っていて、喪失経験があるグループ・現在ペットを飼っておらず、喪失経験があるグループの全体)

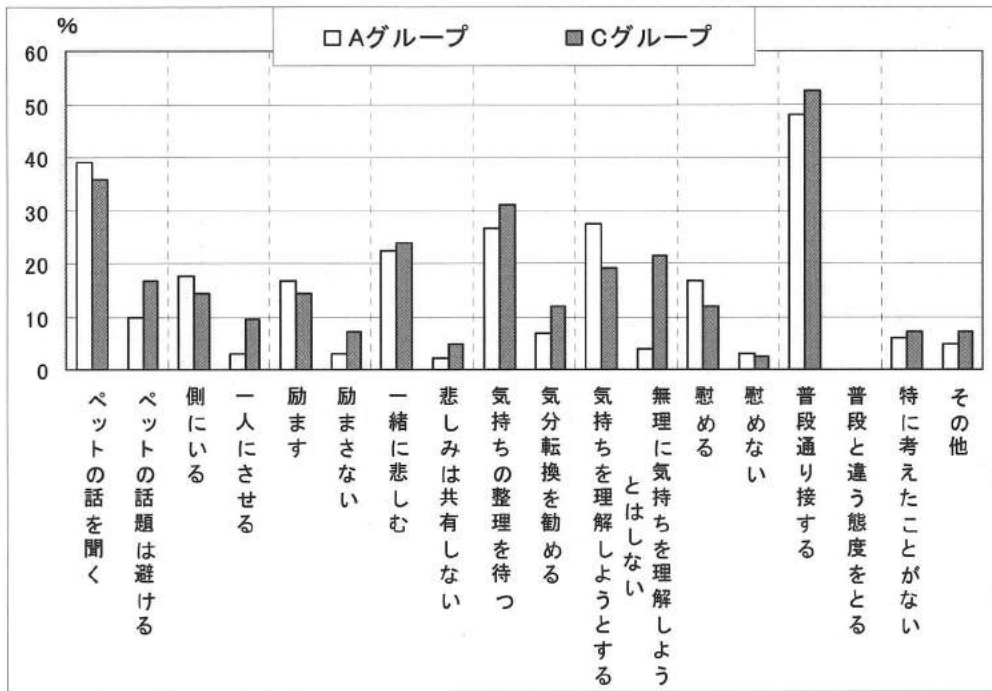


図3 周りにペット喪失者がいたら、行おうと思う対応

(「現在ペットを飼っていて、喪失経験があるグループ」と「現在ペットを飼っておらず、喪失経験があるグループ」の比較)

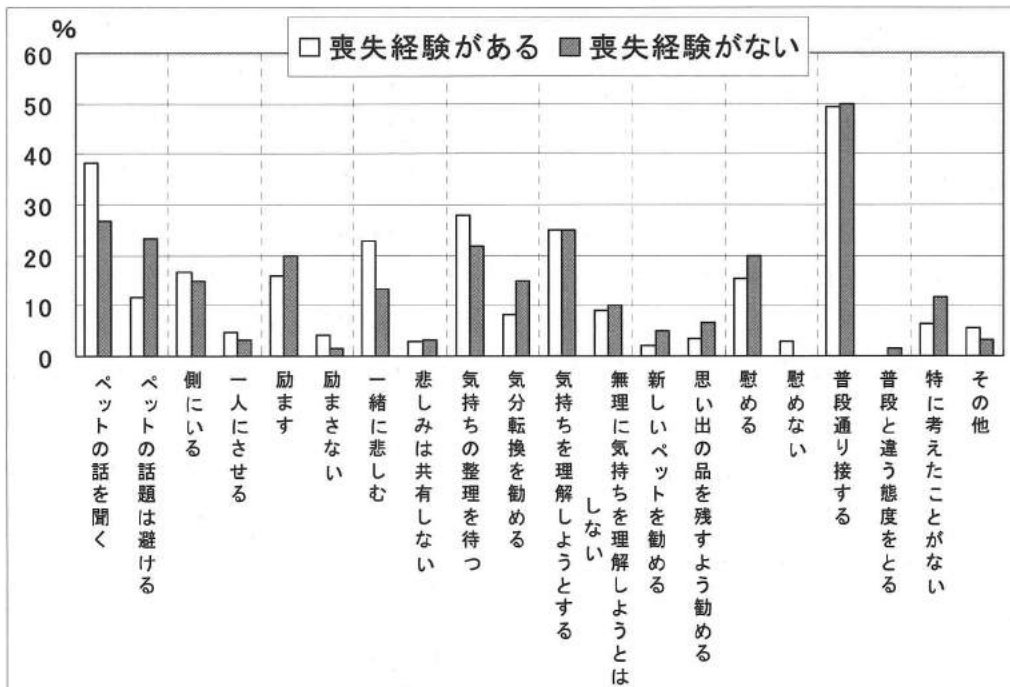


図4 周りにペット喪失者がいたら、行おうと思う対応

(現在ペットを飼っていて、喪失経験があるグループ・現在ペットを飼っておらず、喪失経験があるグループの全体と現在ペットを飼っていて、喪失経験がないグループの比較)

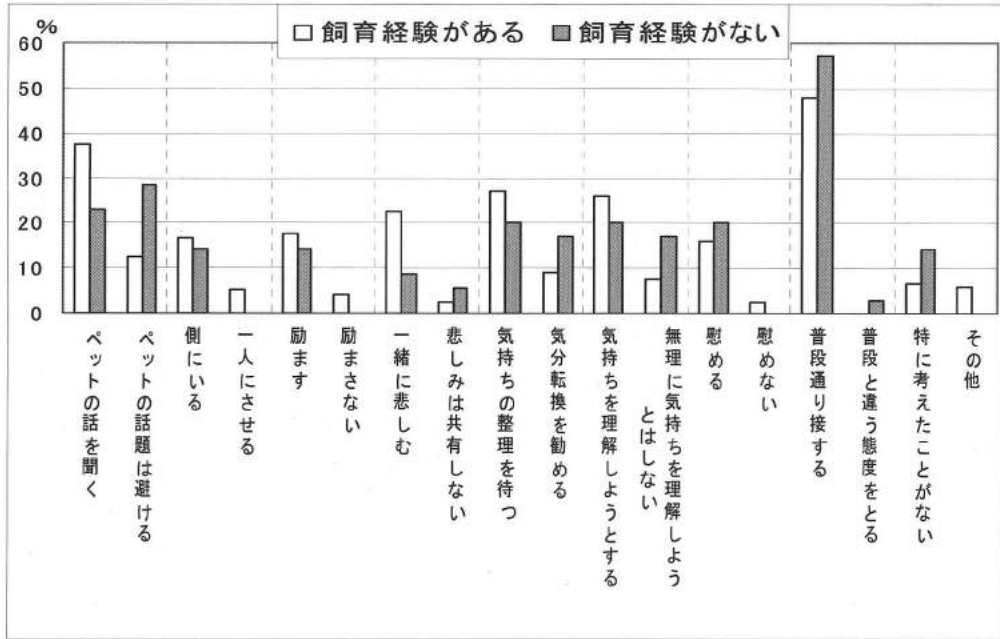


図 5 周りにペット喪失者がいたら、行おうと思う対応

(現在ペットを飼っていて喪失経験があるグループ、現在ペットを飼っていて喪失経験がないグループ、現在ペットを飼っておらず喪失経験があるグループの全体と、飼育経験のない現在ペットを飼っておらず喪失経験がないグループの比較)

4-2) ペット飼育未経験者を除いた、「ペットを飼っている、または飼っていた」グループにおいて、ペット喪失経験のあるグループ (A・C)と、現在ペットを飼っていて、喪失経験がないグループ (B)で比較した(図 4)。

「励ます」という項目で、わずかに差が見られた(現在のペット飼育の有無にかかわらずペット喪失経験のあるグループ:16%、現在ペットを飼っていて、喪失経験がないグループ:21.4%)。しかし全体的に大きな差はなく、喪失経験の有無にかかわらず、ペット飼育経験のある人の中には対応にあまり差がないことが分かった。ここでも「ペットの話聞く・普段通り接する」を選択した人が両グループで多くなっていた。

4-3) 一度でもペット飼育経験のあるグループ (A・B・C)と、ペット飼育経験の全くないグループ(D)とを比較した(図 5)。

グラフには違いが多く見られ、一度でもペット飼育経験のあるグループは「ペットの話聞く」

(37.3%)、「ペットの話は避ける」(12.4%)と、ペットの話を知りたいと思う人が多かった。それに対し、飼育経験の全くないグループでは「ペットの話聞く」(22.9%)、「ペットの話は避ける」(28.6%)となり、飼育経験の全くないグループはペットの話は避けたいと思う人が多いことが分かった。また、「気分転換を勧める」「無理に気持ちを理解しようとはしない」と答えた人が、一度でもペット飼育経験のあるグループでは 10%以下であったのに対し、飼育経験の全くないグループでは 17.1%と、飼育経験のあるグループよりも多くなっていた。そのため、ペット飼育経験の有無で対応に差が出てくると言える。

### 3. 考察

まず、ペット喪失経験のあるグループ (現在ペットを飼っている A グループと現在ペットを飼っていない C グループ)について検討する。実際にペットを失った時に周囲に求めた対応では、現在ペットを飼っているグループは積極的な対



応である「ペットの話を聞いてほしい・誰かと一緒に悲しみたい」という項目を多く選択していたのに対し、現在ペットを飼っていないグループでは消極的な対応である「ペットの話をしたくない・一人で悲しみたい・一人になりたい」という項目を多く選択していた。このような違いから、現在ペットを飼育しているか否かで、求めている対応に差があることが分かる。また、ペット喪失時に、消極的な対応を求めている人は、新しいペットを飼うまでに時間がかかっている可能性があると考えられる。次に他のペット喪失者に行おうと思う対応については、現在ペットを飼育しているか否かにかかわらず差は見られなかった。よって、ペット喪失時に周囲に求めた対応が違っても、ペット喪失者に対して適切だと考える対応は同じだと言える。

ペット喪失者に自分が行おうと考える対応は、ペット飼育経験の有無で差が見られた。一度でもペット飼育経験がある人は積極的な対応である「ペットの話を聞く・慰める・側にいる・一緒に悲しむ」を選択した人が多かった。それに対し、ペット飼育経験が全くない人は、積極的な対応である「ペットの話を聞く・傍にいる・慰める」、消極的な対応である「ペットの話を避ける・無理に理解しない」の両方を選択したという結果になった。そのためペット飼育経験が全くないの方が、積極的な対応の他に、消極的な対応をとろうとする部分があると言える。

専門書の内容と今回の結果を比較したところ、「適切」な対応は嬉しく思う人が多く、「不適切」な対応は嫌だと思う人が多くなり、専門書の通りであった。しかし、適切な対応に該当する「慰める」は嬉しいと感じた人、嫌だと感じた人がほぼ同数であったため、必ずしも「適切な対応」とは言い切れなかった。また、不適切な対応に該当する「励ます」については、嬉しいと感じた人、ペット喪失者に行おうと考える人の両方で多かった。そのため、「励ますこと」は必ずしも「不適切」な対応とは言え切れず、ペット喪失者への

対応を考える時、最初から除外する必要はないと言える。その「励まし方」が重要になってくると考えられる。今回、専門書には書かれていなかった「普段通り接する」という項目については、ペット喪失経験者と、ペット喪失者に対して何か行おうと考える人の両方において、選択した人が多かったという結果になった。そのためペット喪失者に対して「適切な対応」と言える。

以上のことから、今回の結果と専門書の対応には一致する部分が多く見られた。しかし、それらの専門書の多くは欧米での研究が基本となっているため、宗教や風習の違いなどで、日本人には合わない部分もあると考えられる。また、ペット喪失者が、ペット喪失時に求める対応が、専門書での適切な対応と一致しない場合もある。そのため、専門書は鵜呑みにするのではなく知識として活用し、ペット喪失者の求めることに敏感になり、相手の状況に合わせて臨機応変に対応していくことが最も重要だと考えられる。

### おわりに

今回われわれは、ペット喪失時に求めた対応と実際に受けた対応、そしてペット喪失者に対して行おうと考える対応について調査を行い、それらがペット飼育経験・ペット喪失経験の有無によって違いが見られるか比較を行った。その結果、喪失を経験したが現在はペットを飼育していない人は、喪失時に消極的な対応を求めていることが分かった。また、ペット喪失者に行おうと考える対応については、飼育経験の全くない人では積極的・消極的な対応の両方をとることが明らかとなった。

今後の見通しとしては、①ペット喪失時に求める対応の差、つまり積極的に出たり消極的に出たりする差が、その後ペット飼育が可能になるまでの期間に影響するのかどうかを調査していくこと、②専門書の対応が日本人に必ずしも合うとは限らないことから、日本と欧米での対応

の差を明らかにし、日本の風習にあった対応を調査していくことが望まれる。

引用文献

- 1) Shireen S. Rajaram, Thomas F. Garrity, Lorann Stallones, Martin B. Marx (1993) 「Bereavement-loss of a pet and loss of a human」『*Anthrozoös*』 Vol.5 No.1, p8～16, University Press of New England for Delta Society
- 2) 国民生活選好度調査 (2001)
- 3) Marilyn K. Gerwolls, Susan M. Labott (1994) 「Adjustment to the death of a companion animal」『*Anthrozoös*』 Vol.7 No.3, p172～187, University Press of New England for Delta Society
- 4) 横山章光 (1996) 『アニマル・セラピーとは何か』, 日本放送出版協会 (NHK ブックス)
- 5) 小此木啓吾 (1979) 『対象喪失－悲しむということ－』 p28 中央公論社 (中公新書)
- 6) 香取章子 (2004) 『ペットロス』 p50-51, 新潮社
- 7) 鷺巣月美 (1998) 『ペットの死、その時あなたは』 p2, 三省堂
- 8) Laurel Lagoni, Carolyn Butler, Suzanne Hetts (2000) 『ペットロスと獣医療－クライアントへの効果的な支援－』 (監訳: 鷺巣月美) p55, p144, チクサン出版社 (緑書房)
- 9) Mary F. Stewart (2000) 『コンパニオンアニマルの死－獣医療のための実際的、包括的ガイド－』 (訳: 永田正) p145, 学窓社
- 10) Moira Anderson (2001) 『ペットロスの心理学－悲しみを癒すための手立て－』 (監訳: 小杉正太郎, 訳: 廣川智子), インターズー
- 11) 不破京三 (2004) 『愛犬たちの不思議な能力とペットロス』 コアラブックス

●短報●

## ドッグラン施設における現状と課題

依田久美 (赤池ペットクリニック 動物看護師)

Current state and problem at "dog run" facilities

Kumi Yoda

〒400-0123 山梨県甲斐市島上条 746 番 5 号

### はじめに

昨今、人と犬の関係は親密さを増し、番犬からコンパニオンアニマルへと変化してきている。ペットフード工業会は、「テレビ CM などの影響で特に体重 10kg 以下の小型犬の室内飼育に人気が集まっている」、2003 年度推計で「犬の飼育は室内が 46%、屋外は 44%で、初めて室内が屋外を上回った」と報告している<sup>1)</sup>。

しかし、その飼育条件については、条例に基づく犬の繋留義務や都市化のため自由に遊ばせる環境がないなど、厳しい現状にある。民法 718 条 1 項は、「動物の飼い主は、動物の占有者として、その動物が他人に加えた損害につき賠償しなければならない。ただし、動物の種類及び性質に従い相当の注意をもって保管をなしたことを立証したときには免責される」と規定している<sup>2)</sup>。つまり、オーナーの不注意が原因で繋留中や散歩中の犬が放れてしまい、他人に怪我をさせた場合は、民事上不法行為として賠償責任を負うことになる。

そのような中で、犬をノーリードにして遊ばせることのできる民営のドッグラン施設を利用するオーナーを多く見かけるようになってきた (図 1)。



図 1 ドッグラン施設での人と犬の交流風景

### 1. 研究目的

現在、インターネット上でホームページを掲載している民営のドッグランは、山梨県において 8 施設、東京都や長野県などの近県には 15 施設以上ある。

ドッグラン施設の利用にあたり、不特定多数の犬や人が集まることから咬傷事故なども予測される。朝日新聞は、スイスの公園では、犬の「首ひもをはずして散歩させる人が多い」「1 歳半の赤ちゃんが顔をかまれて重症を負った」と伝えている<sup>3)</sup>。

そこで、動物看護師としてできる、飼い主と犬がドッグランを楽しむためのアドバイスは何かと考え、ドッグラン施設の現状と問題点を検討す

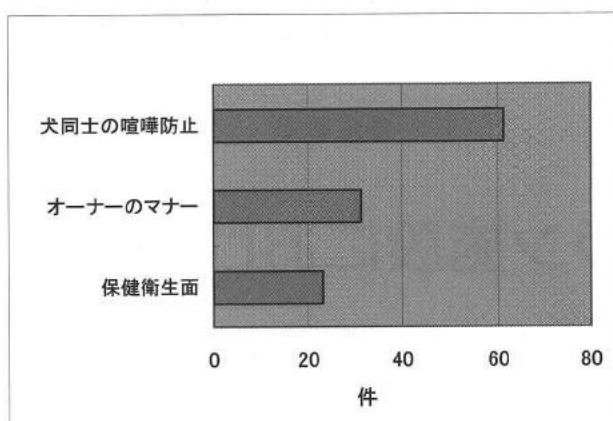


図 2 管理者がオーナーに求めるマナー

犬同士の 喧嘩防止 61 件	攻撃的な犬の入場制限	13 件
	相性の悪い犬同士のエリア分け	13 件
	発情中の雌犬入場制限	11 件
	犬がその場に慣れてからノーリードにする	8 件
	おやつ・おもちゃの禁止	6 件
	大型・小型犬のエリア分け	5 件
	マウンティングの禁止	3 件
	多頭引き禁止	2 件
オーナーの マナー 31 件	放送やスタッフによる注意の呼びかけ (犬の糞は各自で持ち帰る、フィールドの消臭 など)	12 件
	事故・怪我などは飼い主の自己責任	8 件
	子どもは保護者同伴	4 件
	人間の飲食禁止	4 件
	犬から目を離さない	3 件
保健衛生面 23 件	狂犬病接種確認	11 件
	混合ワクチン接種確認	10 件
	畜犬登録の確認	2 件

表 1 管理者がオーナーに求めるマナーの分類

ることとした。

## 2. 研究方法

### I. ドッグラン施設の利用規約内容をインタ

ーネットにて調査し、管理者がどのような点に注意をはらっているのかを把握する。

II. ドッグラン施設の管理者に面接を行い、実際に起きたトラブルの要因を把握する(柵の

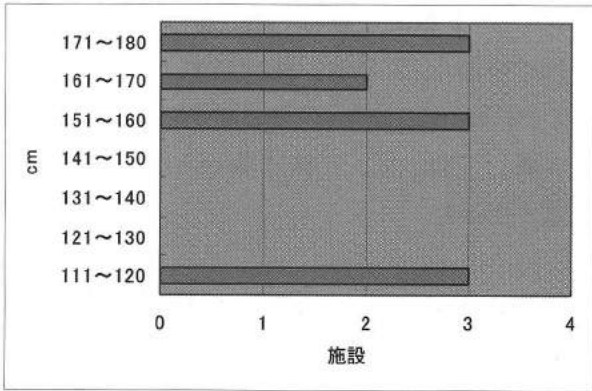


図 3 柵の高さ

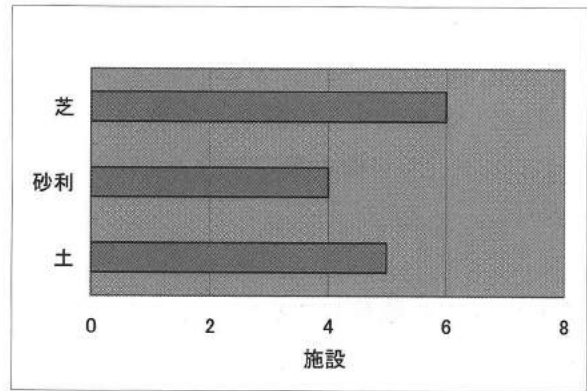


図 4 フィールドの種類

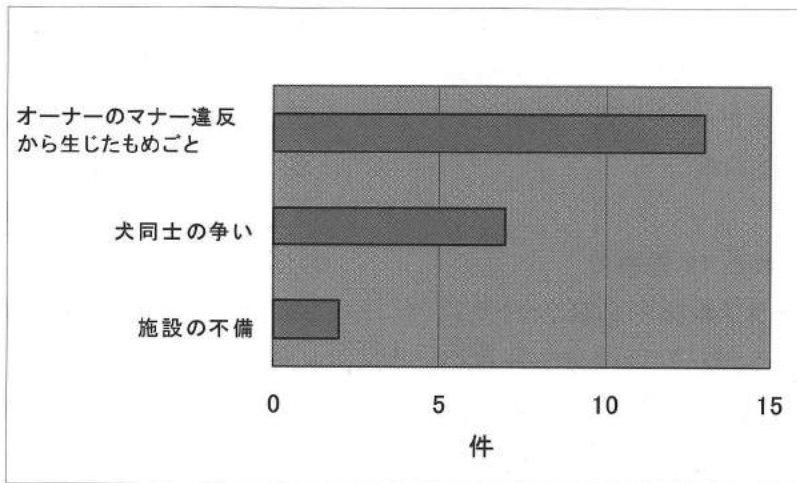


図 5 実際に起きたトラブル

高さ、フィールドの種類、利用犬の体格、実際に起きたトラブル内容)。

Ⅲ. ドッグラン施設へ実際に自分の愛犬を連れて利用し、その体験から現状と問題点を把握する。

### 3. 結果

#### <結果Ⅰ. ドッグラン施設の利用規約から

##### 施設管理者がオーナーに求めるマナー>

インターネットで検索した結果、近県 14 施設で 115 項の利用規約があり、その内容を『犬同士の喧嘩防止に関する事項』『オーナーのマナーに関する事項』『保健衛生面に関する事項』の 3 つに大別した(図 2、表 1)。

『犬同士の喧嘩防止に関する事項』が 61 項で最も多く、その中でも「攻撃的な犬の入場制

限」「相性の悪い犬同士のエリア分け」が多く見られた。

次いで『オーナーのマナーに関する事項』が 31 項で、特に「放送やスタッフによる注意の呼びかけ」が多く見られた。また、『保健衛生面に関する事項』は 23 項あり、狂犬病ワクチンや混合ワクチンの未接種犬は利用禁止と明記されていた。

#### <結果Ⅱ. ドッグラン管理者の聞き取りから

##### 得られた結果>

近県 14 施設のうち、山梨県 5 施設・県外 7 施設の計 12 施設の管理者から面接の協力が得られた。

#### ●柵の高さについて

151cm～180cm の柵を使用している施設が多くを占めていたが、111cm～120cm 未満の柵を使用している施設も3施設あった(図3)。いずれにおいても、犬が柵を飛び越えたという問題はなかった。

#### ●フィールドの種類について

土・砂利・芝の3種類がほぼ同数あった(図4)。管理者から利用後のオーナーの反応を聞くと、土のフィールドを使用している5施設中3施設において「雨が降った後は転びやすく汚れやすい」、砂利のフィールドを使用している4施設中1施設において「犬がパッドを傷つけた」というトラブルが報告されている。

#### ●聞き取りの得られた12施設で

**実際に起きたトラブル**実際に起きたトラブルは全部で22件あり、施設ごとの発生件数に偏りはなかった。その内容から『オーナーのマナー違反から生じたもめごと』『犬同士の争い』『施設の不備』の3つに大別すると(図5)、『オーナーのマナー違反から生じたもめごと』が13件と最も多く、「マナー違反を注意したらオーナーが怒り出した」「子どもがドッグラン内でサッカーやスケートボードをして、他の利用客から苦情がきた」「団体利用客の態度が悪く、個人の利用者から不満の声があった」「犬の糞が放置され不衛生、との苦情がきた」といった内容であった。『犬同士の争い』は7件あり、相性の悪い犬同士の喧嘩やマウンティングがきっかけとなり争いが生じていた。『施設の不備』は2件で、「駐車場が狭い」というオーナーからの不満があったそうだ。

### <結果Ⅲ. 実際のドッグラン利用経験から得られた結果>

山梨県2施設・県外4施設に、実際に飼育しているフラット・コートド・レトリバー(2歳/雌)を連れて行き、利用した。

- ・フィールドが土の場合、雨が降ったあとは水はけが悪く、犬の体が泥で汚れてしまうということがあった。また、フィールドの手入れが行き届いておらず、一部に草むらが見られる施設があった。

- ・柵の高さが111～120cmでは大型犬が柵を飛び越えてしまうのではないかと不安に感じたが、実際に120cmの柵を使用している施設を利用すると、犬が柵を飛び越えることはなかった。

- ・大型犬・小型犬の利用エリアが同じ施設では、小型犬のオーナーは大型犬が近づくと不安な表情を見せていた。実際に連れて行った犬は、大型犬種だが性格は穏やかであった。しかし、この犬が他のオーナーに近付くと、「うちの子は大きいワンちゃんに慣れていないので、怖いみたい」と言って、その場を後にするオーナーが3名いた。なお、小型・大型犬のエリア分けをしている所では、このような問題は見られなかった。

- ・ドッグラン施設の受付で「狂犬病の注射済み票を忘れてしまったのですが利用できますか?」と聞いたところ、「もし何かあった場合は飼い主同士で解決して下さい。」と言われ、全ての施設でドッグラン利用前に狂犬病ワクチンや混合ワクチン接種の証明書の提示は求められなかった。

#### 4. 考察

柵の高さについて、151cm～180cmの柵を使用している施設が多くを占めていた。そのため、111cm～120cmの柵では低いように感じられたが、管理者への面接と本研究の体験調査において、犬が柵を飛び越えたということはなく、120cm程度の柵であれば安全に利用できると言える。

フィールドについて、土のフィールドは犬の足が汚れ、砂利のフィールドは足のパッドを傷つけるという声があった。本研究の体験調査からも、土のフィールドは雨のあと利用すると、犬は腹部まで汚れてしまった。

ドッグラン施設を利用するオーナーへの適切なアドバイスとしては、土のフィールドを利用する際、体を拭くためのタオルを用意し、車のシートを汚してしまわないよう市販の防汚マットを敷いて対処してもらおう。また砂利のフィールドでは、雨のあと汚れる心配は少ないが、犬がパッドを怪我してしまうという報告があったことから、普段アスファルトの上を歩かない犬を連れて利用する場合は注意が必要である。芝のフィールドは、怪我の心配は少なく、雨が降ったあとも土に比べて汚れが少ないが、フィールドの一部に草むらが見られ、マダニ寄生の危険性が考えられることから予防が必要である。

ドッグラン施設の利用規約について、その内容を調査すると、犬同士の喧嘩防止に関する対策が多くを占めていた。長尾らは「動物に関するトラブルのうち、犬の咬みつき事故は昔からあったようで、ローマ時代の遺跡の中には屋敷の入口に“犬に注意”なる警告を見ることができると述べている<sup>2)</sup>。

しかしながら本研究の調査では、ドッグランでは犬同士の争いよりも、オーナーのマナー違反から生じたいざこざが多く挙げられた。体験調査においても、大型犬と小型犬が同じエリアを利用すると、小型犬のオーナーは大型犬に対して拒否的な態度を示していた。これはオーナーによって、利用目的が自分の愛犬とのコミュニケーションの場合と利用犬同士の遊びを希望する場合とで異なり、そうした飼い主が同時に施設を利用するため、トラブルが発生したと考えられる。

長尾らは、「より多くの人々が動物に愛情を注ぐようになり、反面、他人のペットにより迷惑を被る

人も出てきている」と述べている<sup>2)</sup>。そこで当院では、初めて犬を飼育するオーナーや犬と一緒に外出する機会の多いオーナーに対して、より多くの人や犬とかかわりを持ってもらうよう、山梨県動物愛護指導センターで行われている犬の飼い方教室・しつけ方教室への参加を促している。

そして、今回調べた利用規約の中には、狂犬病ワクチンや混合ワクチンの未接種犬は利用禁止との記載があったが、利用の際に証明書の提示を求める施設は一施設もなかった。愛犬を感染症から守り、病気を他の犬たちに蔓延させないためには、飼い主に対して、予防接種やノミ・マダニ予防など徹底した上でドッグラン施設を利用するようアドバイスする必要がある。

#### 引用文献

- 1) 朝日新聞 2004年3月9日朝刊「飼い犬最多 1114万匹 03年度推計(室内)が(屋外)こす」
- 2) 長尾美夏子(1997)『ペットの法律相談』p1~4・p114~118, 青林書院
- 3) 朝日新聞 2006年8月24日朝刊「闘犬被害で口輪規則 スイス・ジュネーブ州」

#### 参考文献

1. 赤池久恵(2000)「動物看護を考える」『Animal Nursing Vol.13 No.5, p19~24, 日本動物看護学会
2. 日本経済新聞 2006年6月25日朝刊「オートキャンプ 犬と一緒に楽しもう」太田潤
3. 太田光明(2003)「動物たちのもつ、多彩な優れた能力 犬の〈人への忠誠心〉」『「人と動物の関係」の学び方』インターズー
4. Edited by C.Thorne(1995)『The Waltham Book of Dog and Cat behaviour』(山崎恵子・鷲巢月美 訳) p136, インターズー(和訳刊 1997)
5. 高山直秀(2000)『ヒトの狂犬病—忘れられた死の病—』p15~19・p116~117, 時空出版



**犬の前立腺癌の看護**  
—私の愛犬の短い一生—

大島梨沙(神奈川県・相模原プリモ動物病院 本学会認定動物看護師)

今回、私の愛犬が前立腺癌になり、その時の経過を思い出しながら書きました。私にとって辛い経験だったので、その時の気持ちまで思い出してしまい、途中で何度もペンを止めて、涙を流しながら少しずつ進めていきました。

愛犬の死が私に大切なものをくれたと思い、この経験を生かし、終末期の患者のケアとその飼い主様の心のケアも出来るよう努力していきたいと思えます。

p10



**犬のしつけに困った飼い主との関わり**—“ドッグデイケア”を利用して—

小川千加美(広島県・西谷獣医科病院 動物看護師)

獣医療、動物看護師の過渡期といわれている現在、オーナーからの要望、期待も、以前に比べ大きくなってきているのではないかと感じています。なかでも、しつけに関する質問はとて多く、私達に何が出来るのか考えさせられました。

今回のデイケアで日誌を交換することにより、飼い主の思いも聞くことができ、より深く信頼関係も築くことができました。今後も、個々の飼い主の声に耳を傾け、一緒に考えながら取り組んでいけたらと思います。

p14



**起立困難な犬の看護、口腔内熱傷の犬の看護**—入院受け入れから退院後の支援まで—、当院における看護計画用紙(看護記録 1 号用紙)の分析—看護基準の作成をめざして—

西谷孝子(広島県・西谷獣医科病院

本学会認定動物看護師)

1 つの事例に出会うこと、そこには数々の学びがあります。1 つ 1 つ事例を大切にすることは、大

変です。看護は川の流りに例えられます。何も見えず、考えず、かたわらに立っているだけでも、時間は過ぎていきます。その川の流りに逆らい、手を入れ、川底から大切なものを見つける作業が事例研究だと思っています。簡単になどできません。

1 つの事例に出会うとき、動物が命をかけて、私に何かを教えてくれているような気持ちになります。だからこそ学会誌に発表し、大切な思いを言葉にして、皆さんと共有していきたいと思っています。

p20,25,30

**犬の帝王切開における母犬と新生子の看護**

—動物看護師の立場から—

三浦 望(新潟県・小島動物病院  
アニマルウェルネスセンター  
動物看護師)



動物看護師は飼い主様と動物たち、獣医師にとって良き理解者となり、チームワークをもって仕事をしています。帝王切開とその看護に限らず、日々の診療においても、飼い主様とのコミュニケーションはとて大切です。信頼関係を築くことで円滑な診療を行い、最良の医療とサービスが提供できるのだと思います。

今回の発表と投稿を通じ、あらためて動物看護師という職業について考えることができました。このような機会を与えていただいたことに感謝しております。今後も動物看護師として、またひとりの女性としても成長できるよう、日々努力していきたいと思っています。

p36

**動物病院における受付の対応マナー**

松沢ふみ(埼玉県・フジタ動物病院  
本学会認定動物看護師)



今回、動物看護師としての受付業務というテーマでまとめさせていただきましたが、病院の顔としての責任の重さをあらためて感じました。飼い主に病院の印象として残るとき、診察と並ぶくらい、



受付での印象は大きいものだと思います。

スムーズな診察を行うための流れをつくり、飼い主の気持ちを汲みとった応対を心がけることが、受付業務では大切なのではないかと思います。

p45



### 動物病院における 面会時の対応

大谷美紀(埼玉県・フジタ動物病院  
本学会認定動物看護師)

動物看護師として今回の発表を行うにあたり、あらためて考えさせられることが多かったと思います。入院管理を行うということは、単に動物の看護だけでなく、大切な家族を入院させている飼い主の心のケアも大事だということ。そのためには日頃からいろいろな角度からものを見て、考えていくことが必要だと思います。私の中の「気づきの眼」を持って、これからも日常の業務を行っていききたいと思います。

p50



### 動物看護学生が抱く 動物看護職のイメージ —学年差についての検討—

小嶋未来(ヤマザキ動物看護短期大学  
3年次 現在、新潟県・小島動物  
病院アニマルウェルネスセンター 動物  
看護師)

学生にもかかわらず、発表する機会をいただき、とても貴重な経験ができました。調査は大学のゼミのメンバーで行いましたが、今回だけではなく、各々の立場で今後にもつながる活動となりました。皆様、本当にありがとうございました。

当学会や動物病院での研修を通して、素敵な動物看護師の方々と出会い、夢や目標を持ち、自分を高めることができました。尊敬している動物看護師の方々に近づき、私らしく飼い主様、動物たち、病院のスタッフそして社会に貢献できるよう日々努めてまいりたいと思います。

p54



### 特別養護老人ホームでの動物 介在実習前後における動物看護 科学生の「気分」の変化

熊坂隆行(静岡県・静岡県立大学  
看護学部 成人・老人看護領域 助教)

動物とのふれあい活動や療法がさまざまな施設や病院で行われています。施設に入所している利用者様、病院に入院している患者様からも、強い要望が多数あります。利用者様や患者様の日常生活(入院生活)の援助をしている看護師として「動物様の力」に驚いています。いま、ヒトと動物の共生は、あらゆる場面・場所で必要とされています。

p64



### ペット喪失時における対応 についての調査

大路朋子(山梨県・帝京科学大学 ア  
ニマルサイエンス学科 4年生—投稿時—)

今回、このような調査を行っていくなかで、人間とペットの関係がとて密接なものになっていることが、あらためてわかりました。また、私自身も、ペットを失った人に対して、どのような態度で接するべきかを考えるよい機会になりました。

これから動物看護師として様々な面で成長し、少しでも飼い主のサポートができるように頑張りたいです。

p69



### ドッグラン施設における 現状と課題

依田久美(山梨県・赤池ペットクリニ  
ック 本学会認定動物看護師)

ドッグラン施設の現状を知り、狂犬病や伝染病を中心とした健康教育の重要性をあらためて感じました。動物看護師として、飼い主さんへの健康教育や環境教育を行うことはもちろんですが、今回の研究により、ドッグラン施設に犬を連れて行かれる飼い主さんに対して、施設の利用方法や必需品などを伝えていくことが出来ると思います。

今後も、飼い主さんと犬がより快適な生活が送れるよう、出来る限りサポートしていきたいです。

p77

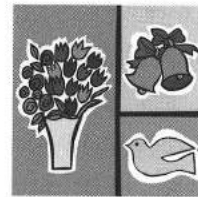
# 動物看護専門学校生による発表

今号では5報をご紹介します。

学生の皆さんならではの“意欲的な視点”が注目されます。

発表者の皆さんが、今後いっそう研究を進められることを期待するものです。

※レイアウトは投稿者による。 ※査読は経ておりません。



## ペンギンとカモ、ニワトリ、野鳥の羽毛の比較 田村沙耶 福岡動物病院看護士学院 第二期生

### 1. 目的

当学院ではケープペンギンを3羽飼育しています。昨年の本学会においてケープペンギンの飼育と行動学の発表をさせていただきましたが、今回は空を飛ぶことがなく、水に潜ることだけに特化したペンギンの羽毛の特徴を他の空を飛ぶ野鳥とカモ等の水鳥、そして空を飛ぶことのないニワトリと比較検討したので報告します。

### 2. 材料と方法

ケープペンギンの換羽時期に脱落した羽毛を拾い集め、頭頂部、頸部、背部、腹部、尾部、翼の6ヶ所に分類しました。そして、ニワトリ、野鳥（オオタカ・カラス・フクロウ・チョウゲンボウ・タシギ・キレンジャク・インコ・オオルリ・文鳥）、水鳥のカモと肉眼的、顕微鏡的に比較検討しました。それぞれの鳥の体長（頭頂～臀部）は以下のとおりです（表1）。

表1 調べた鳥の種類と体長

種類	体長
ケープペンギン	48 cm
ニワトリ	42 cm
マガモ	42 cm
オオタカ	36 cm
カラス	33 cm
フクロウ	32 cm
チョウゲンボウ	17 cm
タシギ	13 cm
キレンジャク	11 cm
インコ	9 cm
オオルリ	8 cm
文鳥	8 cm

### <測定方法>

- 肉眼的に、採取した羽毛を頭部、頸部、背部、腹部、尾部と翼に分け、定規で羽柄・羽軸・羽毛全体の長さの計測し、5枚から10枚の長さの平均値を出しました。また羽毛の密度も比較検討しペンギン、ニワトリ、野鳥、水鳥で面積辺り何枚くらいかを調べ比

較しました。  
 ② 顕微鏡的には、小羽枝の違いを比較検討しました。

3. 結果

次の写真は採取した各鳥の羽の一部です。  
 ケープペンギンの羽毛は全体的に羽毛が短くなっています。特に翼部分は一段と短くなっています (写真1)。

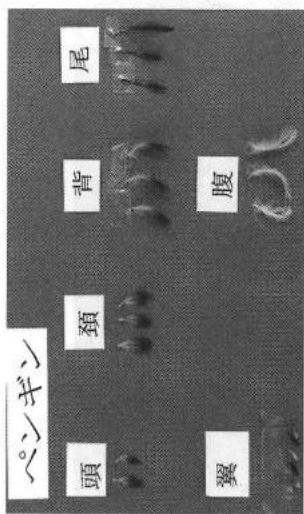


写真1 ケープペンギンの羽毛の一部

ニワトリの羽毛は先ほどのケープペンギンと比べると全体的に羽毛が長く、特に翼、尾の部分で長くなっています (写真2)。

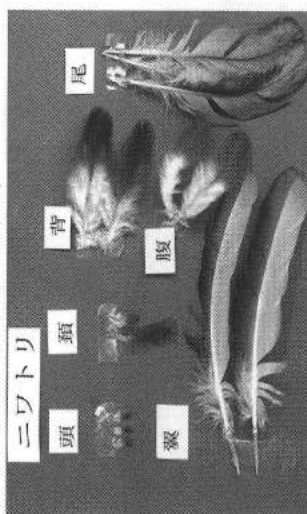


写真2 ニワトリの羽毛の一部

カラスの羽毛は頭部から頸部にかけての羽毛が他の部位と比べて非常に短いことがわかります (写真3)。

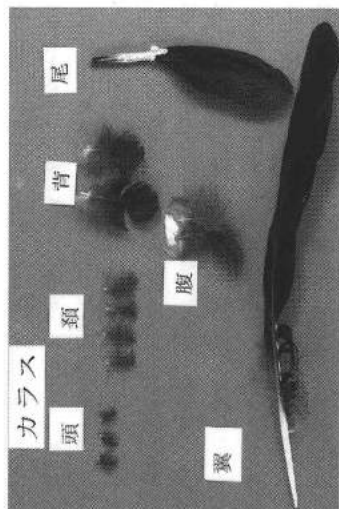


写真3 カラスの羽毛の一部

フクロウの羽毛はニワトリと同様全体的に羽毛が長くなっています (写真4)。

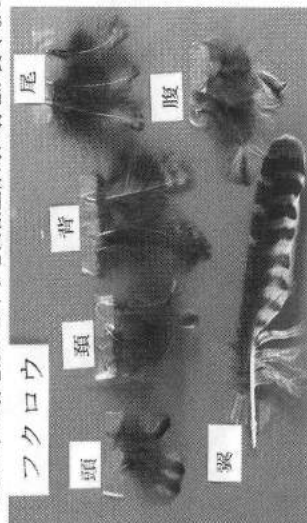


写真4 フクロウの羽毛の一部

タシギの羽毛は頭部から腹部までが短く、尾部と翼の羽毛は長くなっています (写真5)。

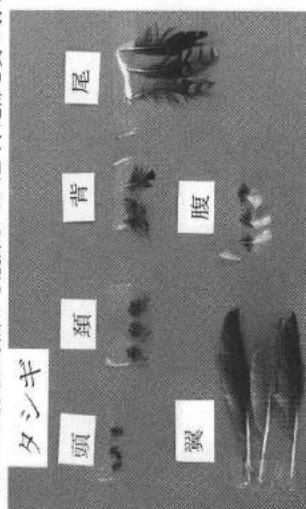


写真5 タシギの羽毛の一部

キレンジャクの羽毛は頭部から腹部まで比較的同じくらしいの長さの羽毛になっています (写真6)。

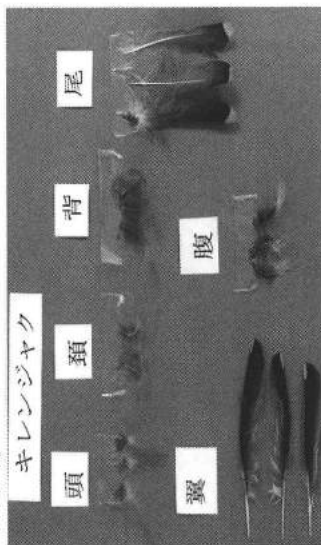


写真6 キレンジャクの羽毛の一部

インコの羽毛は尾部と翼が同じくらしい長さで、頭部から腹部まではとても短い羽毛になっています (写真7)。

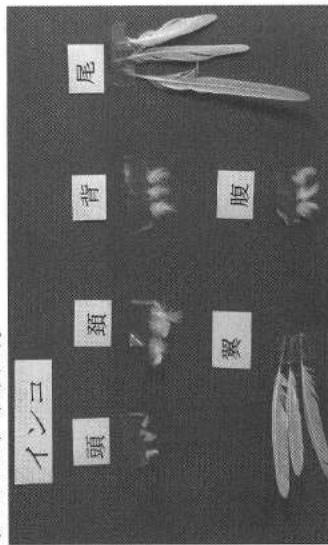


写真7 インコの羽毛の一部

オオルリの羽毛はタシギキ同様、頭部から腹部までが短く、尾部と翼の羽毛は長くなっています (写真8)。

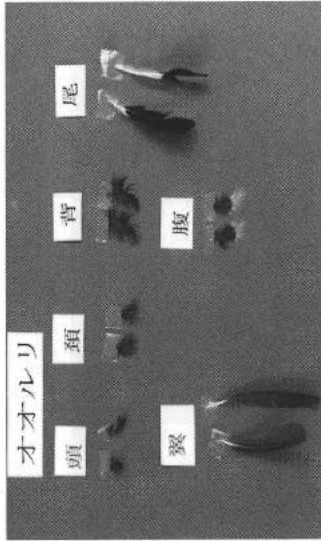


写真8 オオルリの羽毛の一部

カモの羽毛は翼と尾部の羽毛の幅が大きく、他の鳥と比べ羽毛が丸みを帯びています (写真9)。

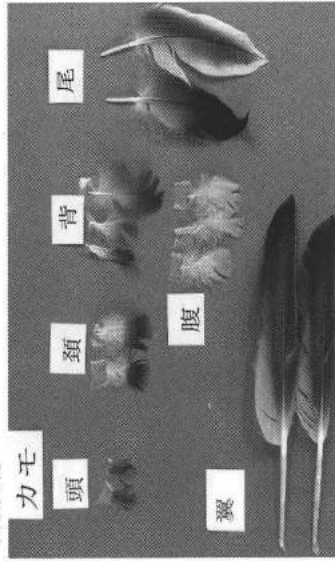


写真9 カモの羽毛の写真

表2は肉眼的に比較した各鳥の羽毛の全体の長さの平均値です。羽毛全体の長さで比較すると特に翼部分が大きく違い、カラスなどの野鳥は空を飛ぶために風切羽が長く大きく発達し、ニワトリも空は飛びませんが風切羽は長く大きく発達していました。特にチョウゲンボウの風切羽は、体長のわりに大変大きくなっていました。反対にペンギンは水中に潜り泳いで獲物を捕獲するために翼はヒレ状に特化し、風切羽は存在せず、長さが最も短い8mm程度程度の羽毛が翼の先端から中間までの後方付近に生えているのみでした。また、カモも潜水はしますが空も飛ぶために風切羽は長く大きく発達していました。翼だけを見ればペンギンだけが野鳥や水鳥、ニワトリと大きく違っていました。次に、頭頂部の羽毛を比較すると、ペンギンの羽毛が意外に長いことが分かります。潜水するために、全身の羽毛が短くなっていると思いましたが、頭頂部の羽毛は比較した中でフクロウに次いで2番

に長いことがわかりました。フクロウの頭頂部の羽毛はとび抜けて長く、さらに全身もニワトリと同様に比較的長い羽毛でおおわれていることがわかりました。その他の鳥は尾部の羽毛と翼が特に長く、頭頂から腹部まではほぼ同じような長さ、大きさの羽毛になっていました。

表2 各鳥の羽毛の長さの平均値

		頭	頸	背	腹	尾	翼
ペンギン	全長	19.4	17.6	30.6	29.4	22.2	8.7
	羽柄	2.8	1.6	3.8	3.4	12.2	1.2
ニワトリ	全長	25	42	96.8	70.4	165	171.3
	羽柄	1.5	2	2.8	3.1	14.5	25.6
オオタカ	全長	23	35.6	42.6	87.6	243.3	190
	羽柄	2	2	4	3.6	81.6	29.3
カラス	全長	11.6	22.5	58.5	23.4	135	254
	羽柄	1	2.25	3	2	40	37
フクロウ	全長	45.3	70.3	76.7	67	166	174.3
	羽柄	2.3	4	4.3	3.7	14.7	31.3
チヨウゲンボウ	全長	18	37.5	43	36.3	161	193
	羽柄	1.3	1.2	4.3	2	18.6	32
タシギ	全長	8.3	15	18.3	19	55	81.3
	羽柄	1	1	1.6	2	6.3	20
キレンジャク	全長	31	19.3	30	25.3	66	80.6
	羽柄	1	1	1	1	7.6	16
インコ	全長	9	20	14.6	17.3	87	77
	羽柄	1	2	1	1.6	9.6	16.3
オオルリ	全長	12.8	15.6	23.6	21	65.6	80
	羽柄	1	1	1	0.9	5	11
文鳥	全長	12.3	8.3	21.3	22.7	33.3	52
	羽柄	1	0.6	2	1.7	4	7.6
カモ	全長	17	19.5	49	35.2	91.4	158.3
	羽柄	0.5	1	6	3	14.4	47.6

続いて、羽毛の密度を計測しました。まずカモの地肌の写真です(写真10)。1cmあたり9〜12個の毛穴がみられます。そのひとつひとつの毛穴から生える羽毛の本数は2〜3本でした。

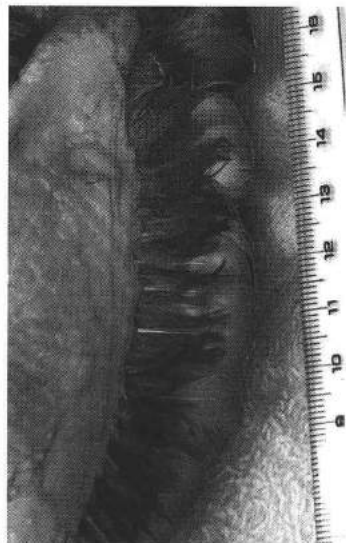


写真10 カモの地肌の写真

次に、ケープペンギンの地肌の写真です(写真11)。カモと同様1cmあたり9〜12個の毛根がみられます。しかし、カモと違いひとつひとつの毛穴から生える羽毛の本数は3〜4本で、カモと比べて約1.5倍となっています。ペンギンでは全身が体羽の生ずる羽区となっており、全身が羽毛に覆われています。同じ潜水をする種類の鳥でも、カモよりペンギンの方が羽毛の密度が濃いことがわかりました。

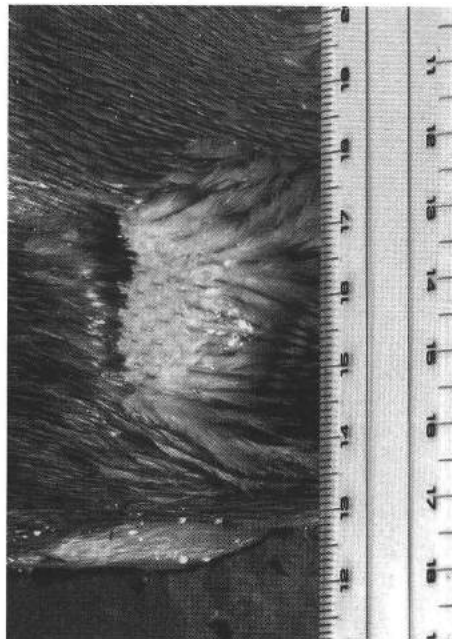


写真11 ケープペンギンの地肌の写真

次に、顕微鏡を使って正羽と綿羽の違いを調べました。写真12はケープペンギンとカ

#### 4. 考察

以上の結果から、空を飛ぶことがなく水中に潜って餌を食べることに特化したペンギンでは翼の風切羽が消失し、水の抵抗が少ないごく短い羽毛に覆われるだけのフリッパーとして特化したものと考えられました。また、胴体の羽毛も水中での水の抵抗が少なくなるようにその長さが他の鳥の約半分以下となり、その反対に羽毛の密度を増やすことで体温の漏出を防ぐような構造になっていることが分かりました。

#### 謝辞

今回、羽毛の採取のためにフクロウの羽を提供していただきました東京の池島愛さん、カラスの羽を提供していただきました宇都宮大学の杉田昭栄先生、野鳥の羽を提供していただきましたつしまネットワークの柚木修先生、ニワトリの羽を提供していただきました宗像保健所の千原和正先生、カモの羽を提供していただきました網野先生にお礼を申し上げます。

参考図書；1) 笹川昭雄 著 (2001)

『日本の野鳥 羽根図鑑』 世界文化社

2) 高田勝、叶内拓哉 著 (2004)

『羽原寸大写真図鑑』 文一総合出版

モの背部の正羽の顕微鏡写真です。比較するとカモの方が小羽枝が大きいことがわかります。また、鍵爪のような小鉤がたくさんみられ、しゅう毛もケープペンギンよりカモのほうが太くなっています。

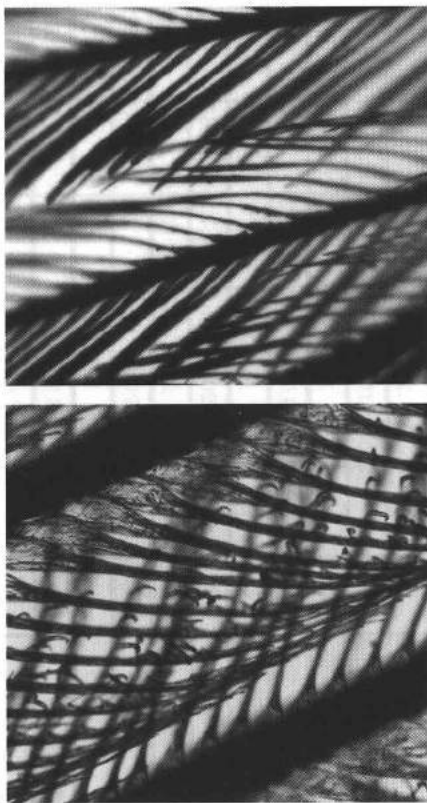


写真12 背部の正羽の顕微鏡写真 (左：カモ 右：ケープペンギン)

写真13は綿羽の顕微鏡写真です。カモの綿羽はケープペンギンより細く、小羽枝の小鉤にあたる部分がつぼみ状に膨らんでいますが、ケープペンギンではそのような構造は少ないようでした。

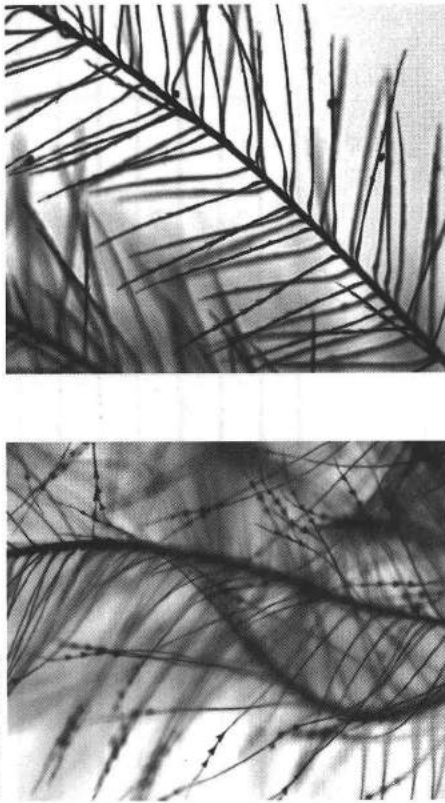


写真13 綿羽の顕微鏡写真 (左：カモ 右：ケープペンギン)

## 未病的診断としてのポータブルECGの小動物への応用

横道佳代 福岡動物病院看護士学院 第二期生

### 1. 目的

昨年の日本動物看護学会第22回例会においてヒト用のポータブル心電計を用いてイヌやネコ、ウサギなどの心電図が測定可能か否かを検討した結果、イヌでは心電図が録れるようになりましたが、ネコやウサギではうまくいきませんでした。そこで今回、これを更に小型の動物たとえばウサギやフェレットなど心拍数が200を越えるような小動物への応用を考えました。今回は、心電計の電極の改良や測定閾値などをいろいろ変更し、どうすればこのような小動物でも測定できるようになるのか検討しました。

### 2. 材料と方法

#### <機材>

カードガード社製のポータブル心電計 CG-2100 および CG-6106 を用いて、電極は中型と小型のカフスを改良したもの、および動物用のクリップを装着したものをしました(写真1)。



写真1：左は前回使用したヒト用のカフス(中型)を装着したCG-6106と小型カフスを装着したCG-2100。右は更に改良して動物用クリップを装着したCG-6106と小型カフスを装着したCG-2100。

#### <動物>

- 小型犬：ヨークシャ・テリア(♂) 体重 4.8kg
- ネコ：雑種(♀) 4.30 kg、(♂) 体重 3.6 kg
- ウサギ：ミニウサギ(♀) 体重 2.4 kg
- フェレット：(♀) 体重 1.3 kg
- チンチラ：(♀) 体重 410g
- ハムスター：(♂) 体重 68g

マウス：(♀) 体重 48g

ニワトリ：(♀) 体重 2.1 kg

ヤギ：(♀) 体重 29.7 kg

#### <測定方法>

ポータブル心電計で30秒間測定し、電話回線でコールセンターに送信した後、ファックスで返送されてきた心電図と、動物用心電計(カーディサニー-D500 フクダ ME 工業)で測定した心電図を比較検討しました。

また、返送されてきた心電図の紙送り速度を25mm/秒、50mm/秒の二種類に設定し、電位差も5mm/mV、10mm/mV、20mm/mVの三種類に増幅して最適な条件で記録しました。

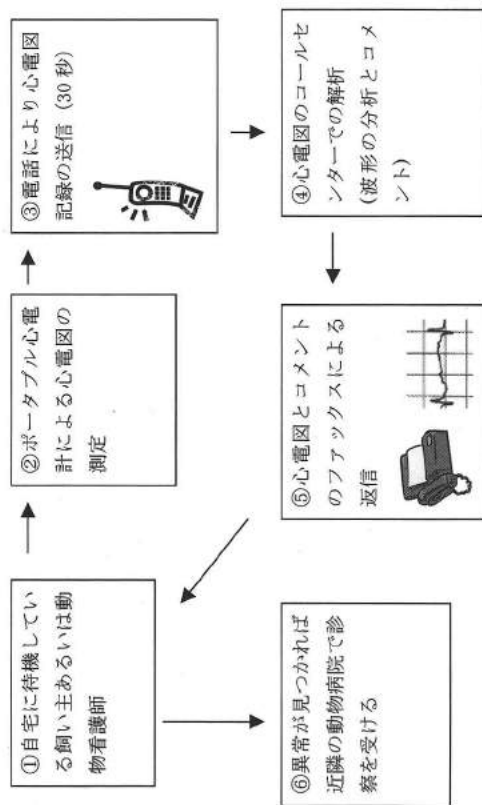


図1：ポータブル心電計測定の実際



写真2：左はヤギの心電図測定、右はイヌの心電図測定中の様子

3. 結果

イヌでは前回発表した大型犬や今回の小型犬でもヒト用のポータブル心電計で中型と小型のカフスを用いるとほぼ安定したデータがコーンセンサーから返送されてきて、動物用心電計で測定した心電図と比較してもほぼ同じ波形を示していました(図2)。しかしネコやウサギ、フェレットなどの小動物ではカフスを用いると両側肢の筋電図が混入するためと思われる細かなノイズ様の波形が見られましたが、動物用のクリップを使っても両脇皮膚から電位差を測定すると安定した心電図波形が録れました(図3, 5, 6)。同様にヤギでも動物用のクリップを使って測定すると安定した心電図波形が録れました(図3)。しかしながら心拍数が400以上を示すハムスターやマウス、ニワトリなどでは、動物用クリップを用いて紙送りスピードを速くして50mm/秒に変化させてもP波、R波、T波の区別がつきませんでした(図7, 8, 9, 10)。以上の結果を纏めたのが表1です。

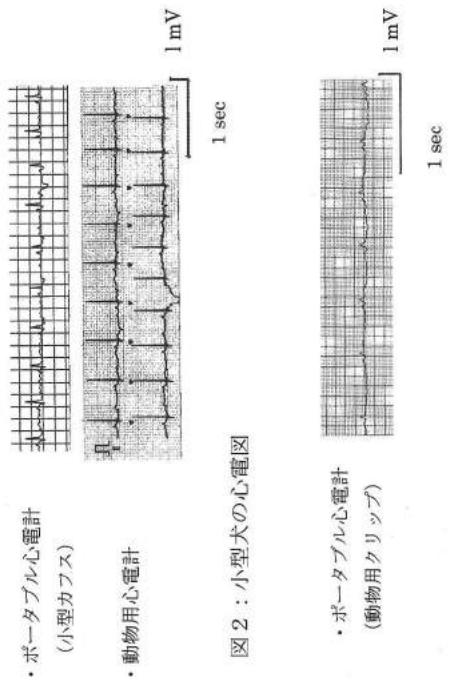


図2：小型犬の心電図

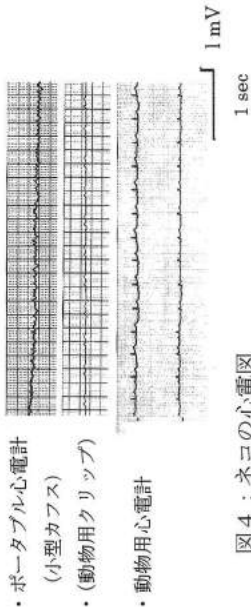


図4：ネコの心電図

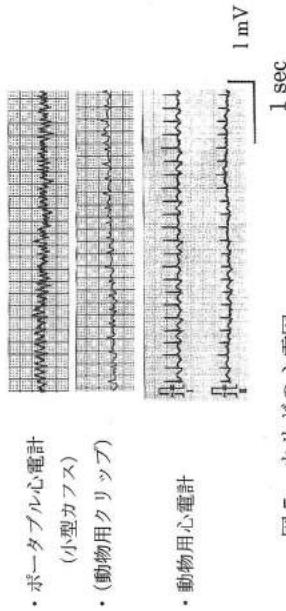


図5：ウサギの心電図

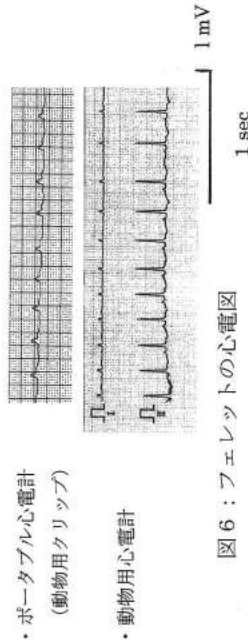


図6：フェレットの心電図

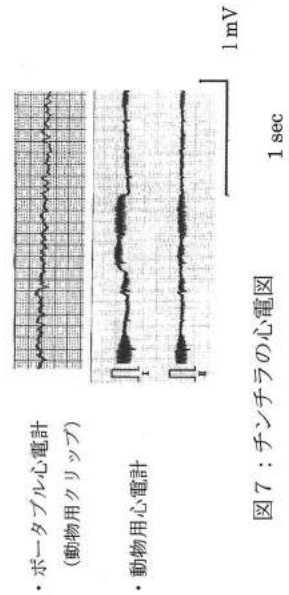


図7：チンチラの心電図

図3：ヤギの心電図



4. 検討

カフスを用いて両側前肢から心電図を測定する方法では動物が安静にしているかどうかにもよりますが、しばしば筋電図が心電図に混在することがあり、それがノイズのように心電図に重なるので、筋電図の除去が一つの課題となるように思われました。動物用心電計では、前胸皮膚および後両側ノ径部皮膚から電位差を録ること、およびある程度筋電図をフィルターにかけて除去できるようにしていますが、今回のヒト用のポータブル心電計ではそのような装置がついていないので、今後改造を要することが判りました。

謝辞

今回、全面的な支援をしていただきましたカード・ガード・ジャパン株式会社の松原恒二さんと、東大牧場の李俊佑先生にお礼を申し上げます。

文献

- 1) 山口友紀恵 (2006) 「ポータブル心電計端末による家庭犬の心電図の遠隔診断」 *Animal Nursing, Vol.11(1)*, p64-67
- 2) 小沢幸雄 著、笠巻祐二・Tuohayi Jiazina 著 (2004) 「イベント心電図：モバイル心電図・電送心電図の臨床」 中外医学社
- 3) N.J.E 著 若尾義人 監訳 (1997) 「獣医臨床 心電図マニュアル」 文永堂出版
- 4) Tilley,L,p Burtnick.N,L 著 竹村直行 監訳 (2004) 「イヌとネコの心電図検査」 ファームプレス

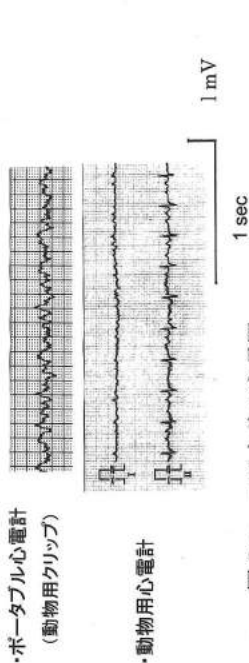


図 8： ニワトリの心電図

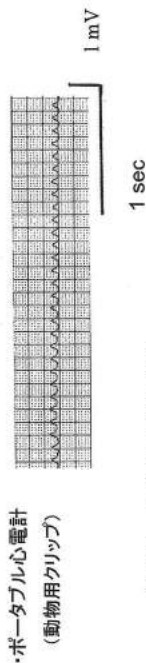


図 9： マウスの心電図

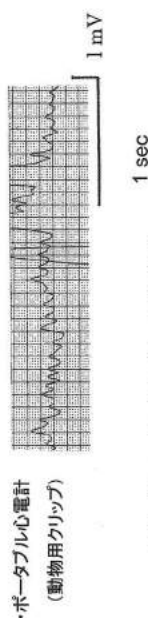


図 10： ハムスターの心電図

表 1. 結果のまとめ

	人用ポータブル心電計の適用性
◎	イヌ
○	ネコ・ウサギ・ヤギ
△	フェレット
×	チンチラ・ニワトリ・ハムスター・マウス

- ◎；カフス電極で十分に測定できる
- ；動物用クリップ電極で測定できる
- △；動物用クリップと紙送り速度や電位差の増幅組み合わせで測定できる
- ×；現在の方法ではまだきれいな心電図波形が見られない

天然ミネラル(リモナイト)含有食を犬、猫に経口投与した前後の

便臭、尿臭、血液性状の変化

松木 恵子 福岡動物病院看護士学院 第二期生

1. 目的

近年、ペットとして飼われている犬、猫は室内飼いが大部分となってきました。室内飼いをしている飼い主の悩みの一つである動物の臭い、特に糞尿の臭いをいかに軽減するかで日常生活環境も大きく変わってきます。実際、当学院の飼育室も入った瞬間臭いがとても臭くなります。そこで今回天然ミネラルの鉄分を多く含む、便臭の元となる硫化水素と結合し便臭を抑えると言われる鉄分サプリメント(リモナイト)を導入し、どの程度便臭が軽減するのかを感応テストで検討したので報告します。製品の効能書きには便臭のみでなく尿臭も軽減すると記されているので、尿臭への効果も検討しました。また含有するミネラル成分のうち鉄分が69%を占め、血液中の鉄分補給にもよいと言われているため、投与前・投与中の血液性状への影響の有無も検討しました。

2. 材料と方法

<材料>

Limonite (日本リモナイト社製) の成分

犬用: 鶏ササミ、おから、澱粉、鹿の角、高麗人參、リモナイト

猫用: 鶏ササミ、おから、澱粉、またたび、リモナイト

この製品のリモナイトとは阿蘇山から採れた鉄分を豊富に含んだ褐鉄鉱です。この鉄分には、臭いのもとになる硫化水素と結びつく「吸着力」というはたらきがあり、臭いを吸着し排泄することにより消臭効果があると記されています。

<動物>

犬: ヨークシャー・テリア雄 (体重5kg) 朝晩各2粒 (約10g) / 日

ウエルシュ・コーギー雌 (体重5.5kg) 朝晩各3粒 (約15g) / 日

猫: 雄1匹 (体重4.6kg)、雌2匹 (体重4.5kg、3kg) 朝晩各10粒 (約5g) / 日

<臭いの評価>

リモナイトを朝晩の食事に添加して与えた前後の便の色と、臭いの変化を5段階で判断し、一回目と二回目投与前後を毎日調査しました。投与期間、投与中止期間は共に二週間間隔で行いました。

臭いの判断基準【5段階評価】

1. ほとんど臭わない
2. 少し臭うがそれほど気にならない
3. 通常の便の臭い
4. かなり臭くなるほど臭う
5. 非常に臭って耐え切れないほどである

(臭いの実験人数)

- 1) 人数1名での評価
- 2) 人数5名での評価

<便の色>

朝晩のいずれかから採取した便を写真撮影。

<血液検査>

検査項目: ブドウ糖(GLU)、蛋白(PRO)、ビリルビン(BIL)、ウロビリノーゲン(URO)、pH、比重(S.G)、潜血(BLD)、ケトン体(KET)、亜硝酸塩(NIT)、白血球(LEU)

採血時期: 投与中5~12日目。投与中止7~12日目。

<尿検査>

検査項目: 白血球(WBC)、赤血球(RBC)、ヘモグロビン(HGB)、ヘマトクリット(HCT)、血小板(PLT)、血糖(GLU)、総コレステロール(T-CHO)、鉄中尿素窒素(BUN)、総ビリルビン(T-BIL)、グルタミン酸オキサロ酢酸トランスアミナーゼ(GOT)、グルタミン酸ビリルビン酸トランスアミナーゼ(GPT)、クレアチニン(CRE)

3. 結果

表1は便臭の評価を1人で行ったものです。投与開始2日目から3日目には減少し、猫ではさらに1.5まで減少し続けました。投与を中止してから2日目には通常の臭いに戻りました。表2は投与を中止し再投与した時の結果です。投与2日目から減少し、犬・猫共に減少し続け、再投与した時の方が効果が明確に現れました。

表1: 便臭の評価 一回目

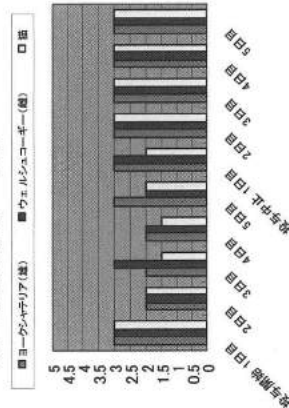


表2: 便臭の評価 二回目

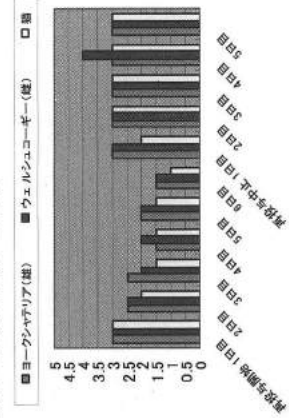


表3は便臭の評価を5人での比較した時のヨークシャーテリアの結果です。A・B・C氏は1日目から5日目まで少し臭うがそれほど気にならない2のままで、E氏では2日目、D氏では4日目で臭いが減少したと評価しました。表4はウエルシュコーギーの結果で、全体にバラつきがありますが、E氏は2日目に減少が感じとれ、B・C・D氏では5日目に2に減少したと感じました。

猫はA・B・C氏では2日目には2まで減少し、A氏では3日目には上がりましたが5日目には1.5までに減少しました。5日目には5人共減少したと感じています。5人での比較では臭いに対する感じ方に個人差が出ました。

表3：便臭 投与中 (5人の評価)



表5：便臭 投与中 (5人の評価)

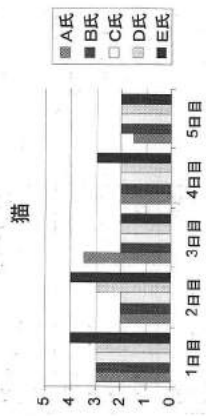
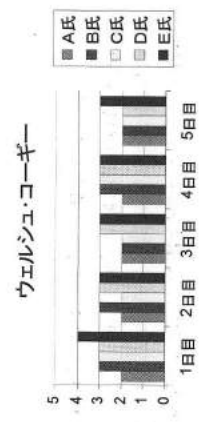


表4：便臭 投与中 (5人の評価)



猫

便色の変化は、ヨークシャーテリアでは1日目は通常の茶色でしたが、2日目から黒くなり始め、4日目では濃い目の黒色便に変わっていました(写真1)。投与中止1日目では黒色便ですが2日目から少しずつ戻り始め、4日目には通常の便の茶色に戻りました(写真2)。ウエルシュコーギーでは投与2日目から少し濃くなり、4日目では黒色になりました(写真3)。投与中止1日目ではまだ黒く、3日目から茶色に戻り始めました(写真4)。猫は投与1日目から黒くなり、4日目まで黒色が続きました(写真5)。投与中止1日目ではまだ黒く、2日目で少し茶色くなりましたが4日目でもまだ黒色の部分もありました(写真6)。



写真1：ヨークシャーテリアの便；投与開始2日目から黒くなり、4日目に黒色便になっています。



写真2：ヨークシャーテリアの便；投与中止2日目から徐々に色が薄くなり茶色に変化しています。

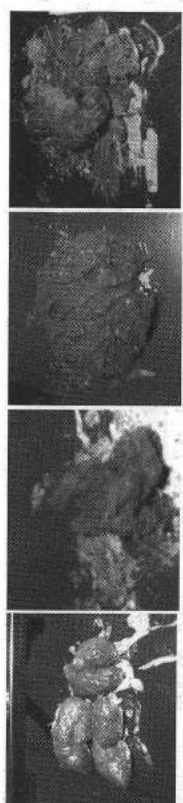


写真3：ウエルシュコーギーの便；投与開始2日目から黒くなり始めています。



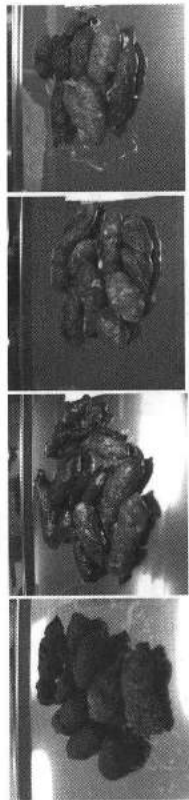
写真4：ウエルシュコーギーの便；投与中止3日目から茶色に変化しています。



写真5：猫の便；投与開始1日目から便の色が黒くなり始め、2日3日目に黒色便になっています。

表8：犬の血液検査結果

	ヨークシャーテリア(雄)			ウェルシュコーギー(雌)		
	投与前	投与中	基準値	投与前	投与中	基準値
WBC	10,500 個/ $\mu$ L	↓ 9500 個/ $\mu$ L	6,000~15,000	16400 個/ $\mu$ L	↑ 18,000 個/ $\mu$ L	
RBC	686 万個/ $\mu$ L	↑ 730 万個/ $\mu$ L	550~1000 万	686 万個/ $\mu$ L	↑ 739 万個/ $\mu$ L	
HGB	16.1g/dL	↑ 17.5g/dL	12~18	16.0g/dL	↑ 17.3g/dL	
HCT	47.0%	↑ 48.7%	40~55	47.8%	↑ 51.7%	
PLT	25.6 万個/ $\mu$ L	↑ 29.1 万個/ $\mu$ L	15~50 万	28.5 万個/ $\mu$ L	↑ 29.8 万個/ $\mu$ L	
GLU	108mg/dL	↑ 129mg/dL	75~128	84mg/dL	↑ 91mg/dL	
T-CHO	139mg/dL	↑ 144mg/dL	111~312	253mg/dL	↑ 198mg/dL	
BUN	18mg/dL	↓ 15mg/dL	9.2~29.2	18mg/dL	↑ 20mg/dL	
T-BIL	under0.2mg/dL	↑ 0.5mg/dL	0.1~0.5	under0.2mg/dL	→under0.2mg/dL	
GOT	17IU/L	↑ 25IU/L	17~44	21IU/L	↑ 31IU/L	
GPT	44IU/L	↑ 53IU/L	17~78	51IU/L	↑ 88IU/L	
CRE	0.9mg/dL	↑ 1.2mg/dL	0.4~1.4	1.0mg/dL	↑ 1.2mg/dL	



1日目 2日目 3日目 4日目

写真6：猫の便；投与中止2日目から便の色が薄くなり、茶色に変化しています。

尿検査ではヨークシャーテリアでpHが下がったほか特に変化は見られませんでした(表6)。ウェルシュコーギーはウロビリノーゲンがマイナスになり、他は特に変化は見られませんでした(表7)。

表6：尿分析結果

	ヨークシャーテリア(雄)			ウェルシュコーギー(雌)		
	投与前	投与中	基準値	投与前	投与中	基準値
GLU	± 50 mg/dL	± 50 mg/dL		± 50 mg/dL	± 50 mg/dL	
PRO	2+ 100 mg/dL	2+ 100 mg/dL		1+ 30 mg/dL	1+ 30 mg/dL	
BIL	- mg/dL	- mg/dL		- mg/dL	- mg/dL	
URO	1+ 2 mg/dL	1+ 2 mg/dL		1+ 2 mg/dL	mg/dL	
PH	9.0	7.5		9.0	9.0	
S.G.	1.030	1.030		1.020	1.010	
BLD	- mg/dL	- mg/dL		- mg/dL	- mg/dL	
KET	- mg/dL	± 5 mg/dL		± 5 mg/dL	± 5 mg/dL	
NIT	1+	-		1+	-	
LEU	75 Leu/uL	- Leu/uL		- Leu/uL	- Leu/uL	

血液検査(表8)ではヨークシャーテリアで赤血球がわずかに増え、総ビリルビン、GOT、GPT、クレアチニンの値も増加しました。ウェルシュコーギーでも赤血球がわずかに増加し、GOT、GPT、クレアチニンの値も増加しました。猫(表9)は雄ではGOT、GPTが減少しました。猫の雌では赤血球はわずかに増加し、GOT、GPTは減少しました。

表9：猫の血液検査結果

	猫(雄)			猫(雌)		
	投与前	投与中	基準値	投与前	投与中	基準値
WBC	7900 個/ $\mu$ L	↑ 8700 個/ $\mu$ L	6000~15000	10500 個/ $\mu$ L	↓ 8700 個/ $\mu$ L	
RBC	899 万個/ $\mu$ L	↓ 794 万個/ $\mu$ L	550~1000 万	980 万個/ $\mu$ L	↑ 1014 万個/ $\mu$ L	
HGB	13.5g/dL	↓ 11.3g/dL	8~14	14.8g/dL	↓ 14.1g/dL	
HCT	41.0%	↓ 36.8%	25~45	47.1%	↓ 46.4%	
PLT	20.2 万個/ $\mu$ L	↓ 10.7 万個/ $\mu$ L	15~50 万	10.5 万個/ $\mu$ L	↑ 13.6 万個/ $\mu$ L	
GLU	73mg/dL	↑ 79mg/dL	71~148	75mg/dL	↑ 80mg/dL	
T-CHO	196mg/dL	↑ 202mg/dL	89~176	199mg/dL	↓ 175mg/dL	
BUN	28mg/dL	↓ 27mg/dL	17.6~32.8	25mg/dL	↑ 25mg/dL	
T-BIL	under0.2mg/dL	→under0.2mg/dL	0.1~0.4	under0.2mg/dL	→under0.2mg/dL	
GOT	15IU/L	↓ 10IU/L	18~51	20IU/L	↓ 19IU/L	
GPT	68IU/L	↓ 45IU/L	22~84	103IU/L	↓ 72IU/L	
CRE	1.7mg/dL	↓ 1.5mg/dL	0.8~1.8	1.7mg/dL	↑ 2.1mg/dL	

4. 考察

リモナイトを餌に混ぜて投与すると、便臭の抑制作用は猫ですぐに現われ、犬では中程

**動物飼育室におけるナノテクノロジー空気清浄機設置前後の落下細菌数の変動**  
佐々木美保 福岡動物病院看護士学院 第二期生

**1. 目的**

当学院には5頭の犬たちがいる飼育室があり、毎日朝と夕方に清掃をしていますが、飼育室の扉を開けると毎日の清掃だけでは消いきれない、室内に充滿した臭いで顔をしかめることが度々ありました。消臭すべきなのはもちろんのことながら、この状態では空中浮遊菌の増加やその菌による感染も有り得ると考えられました。そこで今回、抗菌と消臭効果があると言われているナノテクノロジー空気清浄機を用いて犬飼育室の殺菌と消臭の効果の有無を検討したので報告します。

**2. 材料と方法**

今回使用した機材は光触媒による抗菌とマイナスイオンによる消臭が可能という“ナノテクノロジー空気清浄機”です。株式会社サトカントパニ-社製のMS-4100とMS-4101の大型と中型の2台を使用し、犬飼育室内で4日間稼働した場合と稼働しない場合の飼育室内落下細菌数と臭いの変化を調査しました。殺菌性の検証には寒天培地で細菌コロニー数を計測し、消臭性の検証には臭気度を感応テストで20人に評価してもらいました。犬飼育室は広さが45㎡、飼育している犬は、ラブラドル♀20.2kg、ビーグル♂11.8kg、ミニチュアシュナウザー♂7.8kg、ウエルシュコーギー♀5.5kg、ヨークシャーテリア♂5.0kgの5頭です(図1)。飼育室の温度は空調機で24時間24℃に設定しました。犬飼育室内には、出入口近くの2箇所に空気清浄機を設置し(図1の★印2箇所)、寒天培地は床に配置しました(図1の★印4箇所)。

＜殺菌効果を調べるための寒天培地による空中浮遊菌の採取方法＞

- ① 飼育室内に寒天培地を置き、30分間ふたを開放。  
朝、犬の給餌と散歩が終わってから1時間後の11:00~11:30の30分間で採取。  
寒天培地は空気清浄機近くの2箇所と離れた所の2箇所の計4箇所測定。
- ② ヒーター式インキュベータ(三洋電機バイオメディカ株式会社製 MIR-162)を使い、37度で30時間培養。
- ③ 培養後の細菌コロニー数を計数比較。
- ④ 細菌コロニーはスライドグラスに塗抹添付して、グラム染色し顕微鏡で菌の確認。

＜消臭効果を調べるための5段階評価による感応テストの方法＞

飼育室に入った最初の臭いを評価してもらいました。  
評価者の人数は20人。  
判断基準の段階(感応テスト)「1、ほとんど臭わない」

度の抑制作用を有し、便の色は猫は翌日から黒色化し、犬で少し遅れて黒色化しました。これは犬と猫ではリモニイトの鉄分が臭いの元となる硫化水素を吸着する作用時間の違いがあり、それが反映されているのではないかと思われます。血液検査は犬・猫共に各項目とも基準値内での変化で、犬と猫(雌)で赤血球数がわずかに増加し、血漿GOTやGGP T、BUNの値に変化は見られず、肝臓、腎臓への急性毒性等は見られませんでした。今後長期的に投与し変化を観察していきたいと思ひます。感応テストでは個人差が大きいため、臭いを評価する実験人数を更に増やして検討したいと思ひます。前もって実験の意図と想定される結果を検査していただく人々に教えない旨検テストでやるべきだと考えられますが、現場の事情や小人数の規模では実際上はそれを厳密に行うことは困難でした。

**謝辞**

今回、実験に使用したリモニイトは熊本にある(株)日本リモニイト社より提供して頂きましたので、ここにお礼を申し上げます。

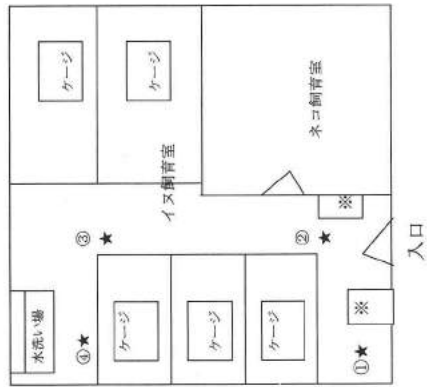
- ・ 矢印；ナノテクビーム空気清浄機設置場所
- ・ 黄色星型枠内；寒天培地の配置場所

### 3. 結果

寒天培地による空中浮遊菌の採取の結果を写真に撮りました(写真2)。空気清浄機の稼働前と稼働中の寒天培地より稼働中の寒天培地は細菌コロニー数が減少していることがはっきり分かります。この飼育室内落下細菌コロニー数を表にしました(表1)。空気清浄機を稼働させていない時の細菌コロニー数は、入口に近い設置位置の2箇所での平均は13個で、入口から遠い2箇所での平均は5個だったのに対し、空気清浄機を稼働させた時の細菌コロニー数は、近くでも速くでも平均2個と明らかに細菌数が認められました(グラフ1)。室内全体の落下細菌数が減り、殺菌効果があることがわかります。グラム染色をした細菌を顕微鏡で確認した細菌像の写真を撮りました(写真3)。主にブドウ球菌、真菌が見られました。他にわずかですが酵母様菌も見られました。しかしながら、空気清浄機稼働中の細菌コロニーに真菌は見られませんでした。

- 「2、少し臭うがそれほど臭にならない」
- 「3、通常の便の臭い」
- 「4、かなり気になるほど臭う」
- 「5、非常に臭って耐え切れないほどである」としました。

図1 犬飼育室の見取図



広さは45㎡、飼育犬数は5頭、室内温度は24℃、※はナノテクビーム空気清浄機の設置場所、★は落下細菌数の測定のための寒天培地設置箇所

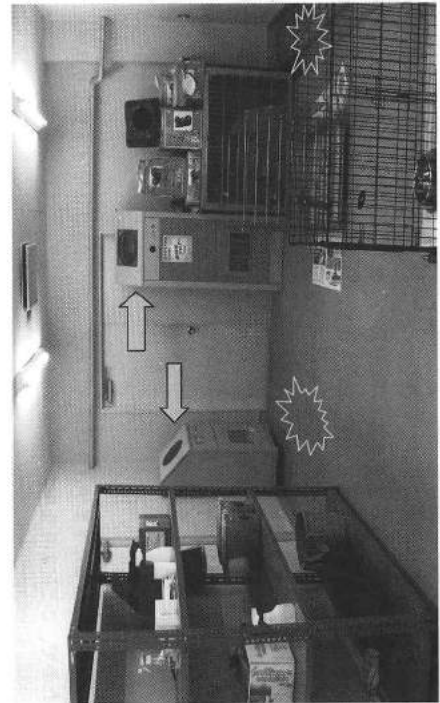


写真1 犬飼育室の設置状況

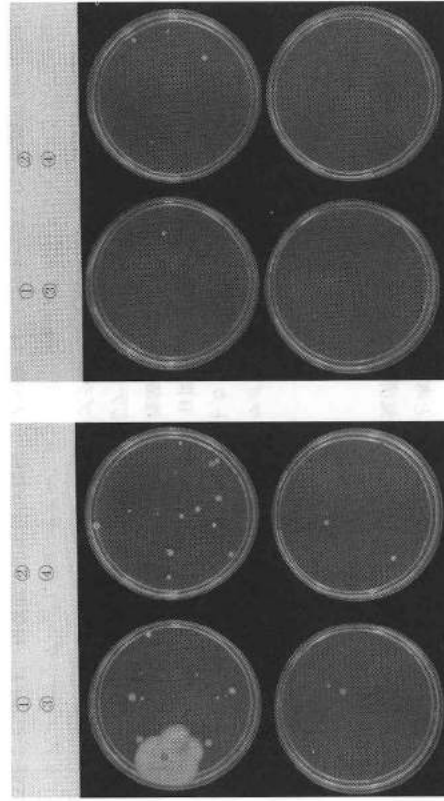


写真2 細菌コロニー数の変化

A；ナノテクビーム空気清浄機稼働前 B；ナノテクビーム空気清浄機稼働中

寒天培地を配置した4箇所各々で落下細菌コロニーが3-15個認められる  
左①②では真菌も見られる  
4箇所全ての寒天培地の落下細菌コロニー数が稼働前より減少している

表1) ナノテクビーム空気清浄機稼働前の落下細菌コロニー数

	培地①	培地②	培地③	培地④	合計
1日目	5	1	1	1	8
2日目	14	14	4	4	36
3日目	1	3	3	4	11
4日目	34	32	16	8	90
平均	13.5	12.5	6	4.25	36.25

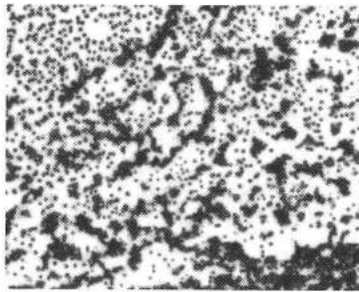


写真3 飼育室内の細菌像(グラム染色)

左はブドウ球菌で、紫色に染まるグラム陽性、球菌がブドウの房状に配列しているのが特徴。右は真菌で、紫色に染まるグラム陽性、細長く筋があるのが特徴。

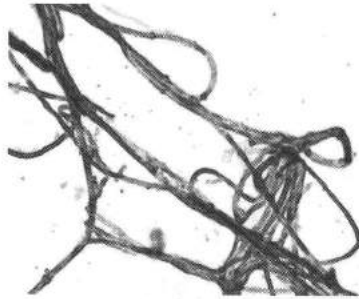
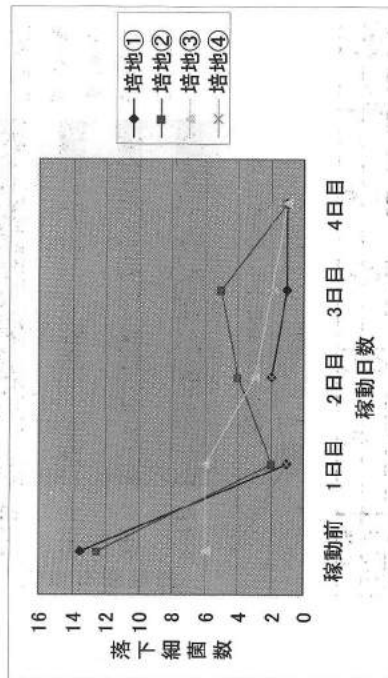


表2) ナノテクビーム空気清浄機稼働中の落下細菌コロニー数

	培地①	培地②	培地③	培地④	合計
1日目	1	2	6	1	10
2日目	2	4	3	2	11
3日目	1	5	2	2	10
4日目	1	1	1	2	5
平均	1.3	3	3	1.7	9



グラフ1 殺菌性の効果；稼働前の培地①、②の13コロニーが稼働1日で2コロニーまで激減

表3) ナノテクビーム空気清浄機稼働停止中の臭いの評価結果

・「1、ほとんど臭わない」は0人  
 ・平均評価が「3、通常の便の臭い」から  
 「5、非常に臭って耐え切れないほどである」へ移行

	1段階	2段階	3段階	4段階	5段階	平均
1日目	0	5	10	5	0	3.0
2日目	0	0	12	7	1	3.5
3日目	0	0	0	2	13	4.6
4日目	0	0	0	2	18	4.9

消臭効果の5段階評価による結果は、空気清浄機を稼働させていない時は20人の平均評価が3段階目の「通常の便の臭い」から約5段階目の「非常に臭って耐え切れないほどである」へと、時間の経過と共に感応テストの評価は悪くなっていきまし（表3）。それに対して、空気清浄機を稼働させている時は、5段階目の「非常に臭って耐え切れないほどである」と評価する人はなく、2段階目の「少し臭うがそれほど臭いにならない」と評価する人の数が大半を占めるようになりました（表4）。平均評価からも数値が下がっていく傾向が見られ、消臭性があることが認められました。この表を分りやすくグラフにしたグラフ2、3からも分かるように、稼働していない時は5と評価する人が増加しており（グラフ2）、逆に稼働している時は5と評価する人は見られません（グラフ3）。稼働中には2の評価が増えていることがわかります。

結果をまとめると殺菌性の効果として、細菌コロニー数は稼働前が平均9.0個±2.6個で、稼働中が平均2.2個±0.3個と減少し有意差 (p<0.01) がありました。

消臭性の効果として、臭気の5段階評価では、稼働前20人の平均評価は4、稼働中20人の平均評価は2.2と減少しました。

4. 考察

殺菌効果を調べるために採取した落下細菌数は、『空気清浄機の近辺ほど少ない』と予測していましたが、実際は、むしろ空気清浄機の位置から離れた“飼育室の隅”のほうが少ないようでした。その理由のひとつとして、動物の世話のために人が出入りする動態の影響が考えられます。消臭効果に関しては、20人の5段階評価で臭気の評価を計測すると、明らかに臭いの軽減効果が見られましたが、無臭に近い状況にはなりません。また、面積に対して大きめの空気清浄機を設置すること、夜間も空気清浄機を停止させないことも影響を及ぼすようでした。加えて、フィルターの目詰まりすると消臭効果が半減することとがわかりましたので、月に1回から2回は掃除の必要性がありました。

今後、ナノテクビーム空気清浄機の設置場所や、台数を変えた場合に、どのような変化が見られるのか? ということや、今回空中浮遊菌を採取した以外の場所での細菌状況などを課題として、調査・報告させていただきたいと思います。

謝辞

今回、動物飼育室の飼育・清掃及び感染テストに協力してくれた学院の同級生たちに感謝します。

参考図書; 1) 水口康雄・中山宏明・南嶋洋一 著 (2003)

「ナースのための微生物学 改訂4版」 南山堂

2) 天児和暢・南嶋洋一 著 (2001)

「疾病のなりたちと回復の促進 [3] 微生物」 医学書院

3) 西山弘一・平松啓一 編集 (2002)

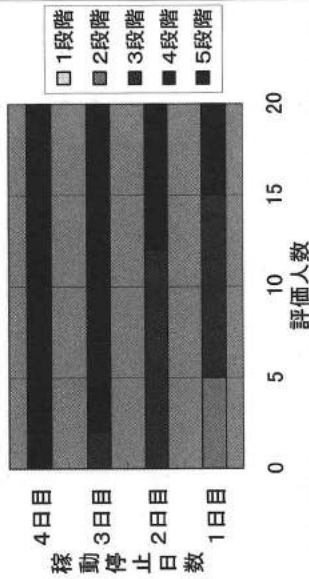
「標準微生物学 第8版」 医学書院

表4) ナノテクビーム空気清浄機稼働中の臭いの評価結果

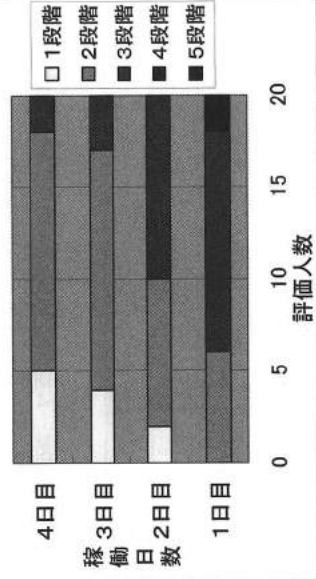
・「5、非常に臭って耐え切れないほどである」は0人  
 ・「2、少し臭うがそれほど臭いにならない」が大半を占める

	1段階	2段階	3段階	4段階	5段階	平均
1日目	0	6	12	2	0	2.8
2日目	2	8	10	0	0	2.4
3日目	4	13	3	0	0	2.0
4日目	5	13	2	0	0	1.9

グラフ2) 稼働停止中の消臭効果



グラフ3) 稼働中消臭効果





肝機能検査のためのイス、ネコの尿中硫酸抱合型胆汁酸の測定

福谷由美<sup>1)</sup>、寺尾伸一<sup>2)</sup>、鈴木武<sup>3)</sup>  
 福岡動物病院看護士学院<sup>1)</sup>、若松臨床検査研究所<sup>2)</sup>、ヘルスダイナミクス研究所<sup>3)</sup>

1. 目的

尿中の硫酸抱合型胆汁酸の測定法は1990年代の初めに開発され、ヒトの新生児の胆道閉塞の早期発見のための有効な方法と考えられ、獣医療の分野でもイスやネコの尿について二、三の討論報告がされています。本報告では、イスばかりでなくネコ、ウサギ、その他チンチラなどのエキゾチックアニマルと産業動物(牛、豚、羊、山羊)にも範囲を広げることになりました。例数が限られています。通常の肝機能検査(血液検査)に比べて尿検査のほうがより早期にみつけられるのか検討することを目標としました。さらに胆汁酸がヒトでは多くが硫酸抱合型ですが、イスでは硫酸抱合型ではないといわれ、ネコはその中間型と報告されていますが、その真偽の程も問うことになりました。血液検査の結果よりも胆管閉塞や門脈シャントの兆候を早期に把握できれば動物の健康に対して末病的な対処ができるかと考えられます。

2. 材料と方法

対象とした動物はイス51匹、ネコ19匹、フェレット、チンチラ各2匹とジリス1匹、カメ1匹、ウサギ4羽、ウシ10頭、ヤギ8頭、ヒツジ5頭、ブタ26頭です。対照としてヒトの尿も8検体測定しました。小動物のフェレット、チンチラ、ジリス、カメの尿は代謝ケージを用いて採取しました(写真1)。大動物では自然採尿が尿道カテーテルによる強制採尿により尿採取しました(写真2)。これらはマルキンバイオ社で開発された試薬キット(ユーバステック・オート)を用い、若松臨床検査研究所で尿中の硫酸抱合型胆汁酸塩(USBA)とイス用として開発されたキットで、総胆汁酸塩(UTBA)を測定し、両者の比率を求めました。一部は肝機能をみるための血液検査を本学院、横浜ベッツ医療センター、若松臨床検査研究所で行いました。

尿中硫酸抱合型胆汁酸測定用キットの構成と総胆汁酸測定用キットの構成は以下のようなになります(表1)。

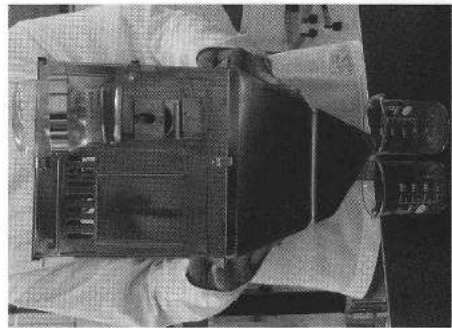


写真1: 小動物の尿を採取した代謝ケージ

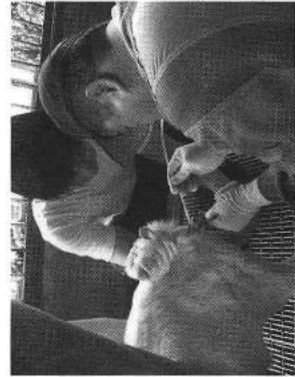


写真2: ヤギのカテーテルによる導尿操作

表1: 尿中硫酸抱合型胆汁酸測定用キットの構成  
 (ユーバステック・オート, マルキンバイオ社)

【試薬組成】USBA

1. 第一試薬酵素剤  
 β-ヒドロキシステロイド脱水素酵素  
 ジアホラーゼ  
 ※3-オキソ-5β-ステロイドΔ<sup>4</sup>-脱水素酵素  
 β-ニコチンアミドアデニンジヌクレオチド(酸化型)  
 ウオーターソルブル・テトラゾリウム-1 (WST-1)
2. 第一試薬溶解液: 0.1M HEPES 緩衝液 (pH7.5)
3. 第二試薬酵素剤  
 胆汁酸硫酸スルファターゼ
4. 第二試薬溶解液: 0.1M HEPES 緩衝液 (pH7.5)
5. 標準液: グリコリトコール酸-3-硫酸

尿中総胆汁酸測定用キットの構成

【試薬組成】UTBA

1. 第一試薬酵素剤  
 β-ヒドロキシステロイド脱水素酵素  
 ジアホラーゼ  
 β-ニコチンアミドアデニンジヌクレオチド  
 ウオーターソルブル・テトラゾリウム-1 (WST-1)
2. 第一試薬溶解液: 0.1M HEPES 緩衝液 (pH7.5)
3. 第二試薬酵素剤  
 胆汁酸硫酸スルファターゼ  
 ※3α-ヒドロキシステロイド脱水素酵素  
 β-ニコチンアミドアデニンジヌクレオチド  
 ウオーターソルブル・テトラゾリウム-1 (WST-1)
4. 第二試薬溶解液: 0.1M HEPES 緩衝液 (pH7.5)
5. 標準液: グリコリトコール酸-3-硫酸

※ 硫酸抱合型と総胆汁酸測定キットの違い

3. 結果

各動物の胆汁酸測定結果の平均値を表 2 に示しています。今回の測定方法はヒトの硫酸抱合型胆汁酸 (USBA) 用キットに小動物用の総胆汁酸 (UTBA) キットを併用し、USBA/UTBA 比率を算出したものです。従来ヒトでは USBA が多く、イヌでは UTBA が多く、ネコではその中間型といわれてきたものの、ヒトでも両者の比が 9%、イヌでは 14% でネコが 50%、フェレットが 37% でネコに次いで二番目に多い値を示しました。またブタ、ヤギ、ヒツジ、ウシが各 9%、3%、1% で予想していたよりも USBA が少なく、UTBA が多く検出されました。

表 2: 各動物の硫酸抱合型胆汁酸と総胆汁酸の平均値とその比率

動物種と数	USBA $\mu\text{mol/l}$	UTBA $\mu\text{mol/l}$	USBA/UTBA
ネコ (n=19)	16.52	39.86	50%
フェレット (n=2)	1.56	4.20	37%
ジリス (n=1)	1.01	4.64	22%
イヌ (n=51)	2.83	31.47	14%
ケツメリクガメ (n=1)	14.56	137.65	11%
ブタ (n=26)	5.79	51.13	9%
ヤギ (n=8)	2.26	33.28	9%
チンチラ (n=2)	4.48	85.59	5%
ヒツジ (n=5)	0.43	16.98	3%
ウサギ (n=4)	2.43	94.91	3%
ウシ (n=10)	2.85	680.6	1%
ヒト (n=8)	2.75	26.95	9%

4. 検討

上記のような種差がみられたのは、胆汁酸の抱合能の差による可能性があり、イヌはアセチル化能が欠き、ネコはグルクロン酸抱合能がなく、ブタは硫酸抱合能がなく、反芻獣はこれらの抱合能が高いといわれています。

例数が限られているので、想定されていたように胆道シヤントの犬や猫、兎は今回の検査対象にはいませんでした。そもそもヒトでも 1 万人に 1 名位と言われているので、よほど大量の検体を集める必要があると思います。新生児などのスクリーニングに本方法で検査すると、少なくとも胆道の不全がないという保障が出来るので、生体販売者や購入者にとって有用であると思われまます。さもないとヒトの新生児と同様黄疸の発生が予知できずに対処が遅れることになるからです。胆道シヤントがないというスクリーニングテストとしての意義があったと思われまます。

今回の血液検査の結果では血清中の肝機能障害を示す GOT, GPT, ALP などの異常を示す検体はありませんでした。ヒトと異なり小動物では採尿は必ずしも容易ではなく、特にメスでは難しく、今回はメタボリックケージによって、小動物の採尿を行うと比較的容易に採尿が出来ました。

ヒトとイヌ、イヌとネコ、その他の動物との種差もこれまで報告されてきたように、ヒトでは尿中胆汁酸は主として硫酸抱合型で、イヌではその大部分が硫酸抱合型でなく、ネコではその中間型であるとのことでしたがネコについてはそのとおりでした。イヌとネコでそのような差異がある原因は不明です。しかし、ヒトでは今回の 8 人の例でみると硫酸抱合型が多くはなかつたので、いずれも今後例数を増やし、また小動物用の測定キットの開発を進めてこの問題に取り組む必要性を感じました。

5. 謝辞

動物の尿採取にご協力頂いた東北大学の佐藤英明先生、東京大学の眞鍋昇先生、李俊佑先生、山本牧場の山本政生先生、柳コンサルタント事務所の柳智樹先生、横浜ベッツ医療センターの山根先生、佐賀大学の森本正敏先生及び尿測定方法のご助言を頂いたマルキンバイオ株式会社の足立憲一先生に感謝いたします。

【文献】

- 1) 足立憲一, 大田泰弘, 塚田陽二, (1998) 採血のいらない肝機能検査, 化学と生物, 36: 649-655
- 2) Balkman, C.E., Center, S.A., Randolph, J.F., Trainor, D., Warnar, K.L., Crawford, M.A., Adachi, K., Hollis, N.C., (2003) Evaluation of urine sulfated and nonsulfated bile acids as a diagnostic test for liver disease in dogs. JAVMA, 222:1368-1375
- 3) 上野山林造他, (1995) 胆道系疾患におけるあたらしい Sulfatase を用いた尿中硫酸抱合型胆汁酸測定の臨床的意義 肝胆臓, 31: 315-326

# 行事レポート

p102~116

- ・一部敬称略しています。文責は本学会事務局にあります。
- ・第16回大会の発表者は、筆頭発表者のみ記載しています。
- ・第16回大会の発表要旨文は、抄録をもとに事務局でまとめたものです。

学会ホームページにも随時行事報告を載せています。  
<http://www.jsan.gr.jp> (学会名で検索できます)

## 第24回例会

2006年11月 大阪

2006年11月19日(日)、日本動物看護学会第24回例会が大阪・中之島のグランキューブ大阪で開催されました(第27回動物臨床医学会年次大会にて)。動物看護師、獣医師ら100名近い来場者を迎えて盛況のうちに終了しました。

客席では、終始メモをとりながら真剣な表情で聞き入る、動物看護師らの姿がたくさん見られました。

### 講演 1

わが国における動物看護学の成り立ち

—本学会10年の歩みとこれからの課題—

桜井富士朗(本学会副会長、帝京科学大学客員教授)

本学会の10年間にわたる活動経緯と現状、今後の方向性が述べられた。本学会は設立当初から、「動物看護師は獣医師の単なるアシスタント」ではないとの立場をとり、つねに「既存の獣医学では扱いきれない視点や学問領域」を提示してきたこと、学問的にも職業としても未熟・未整備な状態を前にしながら「動物看護学とは何か」について、地道に考えてきたことが具体的に報告された。

そしていま、動物看護師養成過程を有する4年制大学3校と短大1校が生まれており、本学会では、これらの教育機関とも意見交換を行ったことが報告された。

最後に、「動物看護師自身による動物看護報告の報告」がいっそう活発化することにより、多くの議論が交わされ、より盛況な学会活動が期待されると述べられた。

### 講演 2

獣医師と動物看護師による効果的連携を、

どのようにして築くか

A. 事例に学ぶ「チーム医療による動物病院の活性化」

西谷利文(広島県・西谷獣医科病院 院長)

現在わが国の獣医療は早いスピードでレベルアップを続けており、高度医療の充実も多く叫ばれている。こうした中、地

方で開院する立場としては、飼主の心の中に入り込める獣医療を目指すべき、という目標を立てたことが述べられた。

そしてこれを達成するために、獣医師だけでなく動物看護師の育成にも力を入れて、病院全体で飼主と動物たちにかかわってける体制、すなわちチーム医療づくりを始めたことが話された。

この実践は決して容易ではないが、病院に勤務する全員が「動物たちのために仕事をしている」という一つのシンプルな目標に向かうことが大切であり、この姿勢さえしっかり共有できていれば結果はごく自然に表れて、社会から認められる動物病院になれるだろう、と述べられた。

### B. 「治療と看護の連携体制」の事例報告

南場里美(同院獣医師)

小川千加美(同院動物看護師)

同院の獣医師と動物看護師より、同院における「日帰り手術と入院におけるプロセス」が事例報告された。ここでは発表の要点のみを記す。

- 動物病院は医療というサービスを提供し、飼主の満足を得て、飼主に選ばれることで病院として成功する。このため「医療におけるサービスの質の保証」が必要となる。したがって、獣医師と飼主間のコミュニケーション不足や医療事故の頻発は、病院に対して不信感を抱かせる主因となる。そこで獣医師と動物看護師が互いの専門性を生かし、協力し合いながら業務を分担していくことが大切である。
- 医療機関の業務は複雑に絡み合っているため、各業務をプロセスとして考えて文章化することで、獣医師と動物看護師が過不足なく仕事を遂行し、うまく連携を取ることが欠かせない。これにより、飼主の満足や動物の安全管理につなげることができる。
- 各業務のプロセスが、医療サービスの質を本当に向上させているかにつねに配慮し、問題点を見つけて改善する必要がある。必ずしもプロセスに沿って行うだけではなく、飼主や動物によって対応を変化させる必要もある。

●医療の質を確保するためには、飼主と病院側、獣医師と動物看護師との密なコミュニケーションや情報の共有が大切である。また効率よく働くためには、スタッフ全員がプロセスの意味を理解して作業に取り組む必要がある。病院が一丸となって治療にあたることで、初めてチーム医療が成り立つ。



桜井先生



座長 阿部令子さん(京都市・アニマルサポートオフィス・ミチヨ、本学会認定動物看護師)



座長 崎山法子さん(奈良県・王寺動物病院、本学会認定動物看護師)



左から南場先生、小川さん、西谷先生

## 第25回例会

2007年3月 埼玉

2007年3月3日(土)、日本動物看護学会第25回例会が埼玉県の大宮ソニックシティで開催されました(日本獣医臨床病理学会2007年大会にて)。来場者は動物看護師、専門学校生ら130名近くにのぼり盛況のうちに終了しました。

### 講演①

ホメオパシー(同種療法)とは何か

—基礎を正しく学ぶ、獣医療における可能性を探る—

廣田順子(本学会副会長、アリスどうぶつクリニック院長、  
帝京科学大学アニマルサイエンス学科教授、  
日本ホメオパシー医学会認定獣医師)

ホメオパシーとは、約200年前にドイツ人医師・ハーネマンが確立した医療のこと。ホメオパシーという言葉は、古代ギリシヤ語で「同じような症状を引き起こす」という意味。人や動物が、本来体に有している自然治癒過程を促進する治療法と言える。日本語では同類療法あるいは同種療法と訳される。

健康体に与えると、いま患者が示している症状と同様の症状を引き起こす物質を希釈して患者に与え、その自己抵抗力と治癒力を強力に刺激し、高めることによって治療するもの。つまり「似たものを似たものによって癒す」という発想である。



3,000以上あるレメディ(ホメオパシーの薬)は植物、鉱物、動物など、ほとんどが自然界に存在するものから作られる。ごく微量に希釈されているので、毒性や副作用もなく安全な医療と言われている。したがって、人医療や獣医療においてその可能性が注目されているが、不確かな指導方法がしばしば横行している現状がある。

この講演では、最初にホメオパシーの基礎を正しく知り、次に、臨床での活用事例をとおして獣医療における可能性を探る内容が話されていた。

## 講演②

ペットフードを上手に活用するために  
— 製造工程、添加物、表示方法を詳しく知る —

大木富雄(日本ペットフード常務取締役、  
ペットフード工業会)

獣医師との連携の下、飼主への栄養指導を希望する動物看護師が多いようである。この日の講演では、ペットフードの基礎を知ること为目标とした、基礎的・総論的な内容が話されていた。

ペットフードの定義や製造過程・添加物・表示方法・法規制などについての解説が行われた。また次の点に言及されていた——「添加物の表示義務はないが、業界では表示義務に向けて表示方法の検討作業を実施中である。飼育者は、



廣田先生



大木先生

ペットが健康で長生きであることを望んでいるので、多くの機能性原料が利用されているが、その告知に際しては薬事法に抵触しない範囲での表示が要求されている。ペットフードを上手に利用するためには、パッケージの表示をよく見て、ペットに合ったフードを給与基準に沿って使用することが大切だ。

## JAHA・日本動物看護学会共催 動物看護師シンポジウム 「動物看護師は本当に専門職と言えるのか」

2007年6月 東京



2007年度JAHA(社団法人日本動物病院福祉協会)年次大会における「JAHA・本学会共催動物看護師シンポジウム」**「動物看護師は本当に専門職と言えるのか—各院の実情を通して問題点を考える—」**が、2007年6月17日(日)に東京・永田町の都市センターホテルで開催されました。

JAHAと本学会は、これからの動物看護師のあり方や生涯教育の必要性などについて意見交換を行った上で、互いの活動趣旨を尊重しつつ、活動面での連携を行っています。この行事はその一環として昨年に続いて開かれました。



a



b



c



d



e



f



g



h



i

司会 細井戸大成(JAHA 副会長) 写真 a

### JAHA パネラー

原大二郎

(愛知県・獣徳会動物医療センター、院長・獣医師) b

塩谷明美

(愛知県・獣徳会動物医療センター、JAHA 認定1級VT) c

楠目麻乃

(大阪府・ネオベッツVRセンター、JAHA 認定1級VT) d

## 日本動物看護学会パネラー

兼島 孝

(埼玉県・みずほ台動物病院、院長・獣医師) e

南山奈津子

(埼玉県・みずほ台動物病院、本学会認定動物看護師) f

中俣由紀子

(茨城県・かしま動物病院、本学会認定動物看護師・

本学会理事) g

西谷孝子

(広島県・西谷獣医科病院、本学会認定動物看護師・

本学会理事) h

ゲスト報告者 高橋真規子(月刊「as(アズ)」編集長) i

この日は、両団体の獣医師と認定動物看護師がパネラーとして参加した。最初に、両団体の認定動物看護師から「自院における獣医師と動物看護師との連携体制」が報告され、その後、意見交換に移った。下記の点などについて幅広く意見交換が行われた。

1. 職務内容—いま何をしているか、どこまで出来得るか、それらの理由は
2. 給与体系—いまの職務内容と給与額は見合っているか
3. 動物看護師自身が抱える問題点—忙しすぎて学習時間が作れない? 努力に欠ける人も多い? 力量を高めてこれを広くアピールには何をすべきか?



途中、「as」編集長・高橋さんからは「動物病院取材を通して考えること」として、以下3点が指摘された。

### ①「長時間労働」が当たり前になっている、という実情

- ・ 仕事熱心さによる一方で、動物の命を扱う職業であるため時間で仕事を区切りにくい。
- ・ 労働時間に対してお金が支払われるという意識が、業界全体に大変低いと思われる。
- ・ 長時間労働が、体調不良などを招く一因になっていると思われる。9割以上が女性と思われる職業なので、この点が、結婚・出産という女性にとっての転機を迎える上で障害になっているのではないかと。就業後3~4年での離職者が多く見られ、長く働き続けづらい状況があると思われる。

### ②「低い給与額」が当たり前になっている、という実情

- ・ このため「男性の看護師を雇えない」「一人暮らしの人を採用できない」といったケースもあるようだ。社会人として自立しづらい職業が専門職といえるのか。
- ・ (これは悪いことではないが)動物看護業務だけでは昇給が望めないことから、トリマーとの兼務を申し出たり、マネージャーなどとして病院経営にもかかわることによって、収入増を見込めるよう動物看護師が志願するケースもある。

### ③「動物看護職の認識—どういふ視点に立ち、何の仕事をする職種なのか—」の認識がまちまち、という実情

- ・ 理想の動物看護師像として、院長からは「自分のコピーに近い、自分と同じ考えでフォローしてくれる有能な動物看護師」という回答が返ってくるが多い。いっぽう、動物看護師からも「獣医師がしてほしいことを先回りして動ける、気配りのできる動物看護師になりたい」という回答が見受けられる。それも大切であるが、「有能なドクターアシスタントをめざしているのか」、それとも「よりよい動物医療を行うために、獣医師とあえて異なる視点から動物看護を行うべきと考えているのか」、認識の違いがあると思われる。
- ・ 動物看護を追究したくても、動物看護を評価する獣医師が少ない。獣医師は、ドクターアシスタントの仕事の方を高く評価しているのではないかと。「獣医師と動物看護師は、動物医療における対等なパートナーをめざすべき」とよく言われる。しかし、動物看護師にとっての獣医師は雇用主でもあるため、自ずと、雇用主に評価される仕事を優先して取り組む傾向はないか。獣医師の側が「動物看護師とはどういった視点で仕事をする職種なのか」という点をよく考えてくれば、動物看護師がその力をより発揮でき、ひいては動物医療の向上につながるのではないかと。



この2~3年で、こうした意見交換の場を団体の枠を越えて持てるようになったのは、大きな進歩だろう。それではこの先、動物看護師は自らの職域保全と地位向上のために、いったい何をすべきなのか。各自が何を考え、何を実行し、それらは果たして大きな流れを作れるのだろうか。これからの着実な積み重ねが問われるだろう。



## 第16回大会 第13回定時総会

2007年7月 東京



2007年7月8日(日)、東京・港区の慶應義塾大学三田キャンパス・北館ホールにおいて「日本動物看護学会 第16回大会・第13回定時総会」が開催されました。

今回の発表題数は、前回比3倍の15題に達しました。入場者も、動物看護師・動物看護を学ぶ大学生・専門学校生を中心に、獣医師や研究者も含めて前回比100名増の220名を迎えました(本学会大会の過去最高入場者数)。会場からの質問も相次ぎ、大変盛況のうちに終了しました。

総合司会／小松千江

(本学会理事、東京都・新ゆりがおか動物病院、動物看護師)



開会あいさつ／今道友則

(本学会会長、  
日本獣医生命科学大学  
名誉教授・元学長)

13回)並びに年次大会(第16回)が、今年もお馴染の慶應義塾大学三田キャンパスで開催されます。同大学の関係各位の御理解と御協力に深く感謝いたします。

第1部では、招待講演として、岐阜大学医学部看護学科・箕浦とき子教授にお願いして、「人医療の看護に学ぶ—その進展経緯と職業観に学ぶ—家族看護学と動物看護学の接点を考える—」という演題で広い視野で有益なお話を伺い、引き続き公開ミーティングという形式で会場の皆さんを交えて活発な意見交換を行い、動物看護学の発展に役立てたいと思います。

第2部の研究発表の部では、公募演題のみで15題(昨年の3倍量)集まったことと、多くの演者が新人であることは誠に嬉しい次第であります。4年前に始まった本学会の「動物看護師資格認定試験」にすでに合格された、新進気鋭の動物看護師の活躍が始まっている証しであります。会員の研究活動が更に活発化して、多数の発表と出席者で会場が埋め盡(つく)される日の到来も近いと予測されます。

さて、今回の発表演題15題の発表者の所属を見ると、獣医学の附属動物病院から2題、大学の研究室から3題、動物看護関係専門学校から1題、グループ研究から1題、及び開業動物病院5病院から8題となっております。

獣医学の附属動物病院が動物看護師の職場として機能し始めた成果が今後ますます顕在化するでありましょうし、専門学校の教育に研究的要素が加わって教育内容が高められることは好ましいことでもあります。

一方、研究活動が活発な一部の病院を除いて、一般に小規模の動物病院では多忙な診療業務と人手不足に追われて研究に手を廻すゆとりがないことも実状でしょうけれども、他病院の動物看護師と連携して、共通のテーマを取り扱う同好会的な研究グループを結成して研究活動を行うことも、現実的な解決方法といえます。

先般開かれた理事会でも、このような動物看護師の研究活動を助長するため、学会としては、従来行ってきたグループ研究に対する会合場所の提供(事務局会議室)に加えて、今大会で行われた研究発表と討論の状況を録画したCD-ROMを希望者に配布することに致しました。

動物看護学が関与する対象は広範多岐に亘りますが、御多忙な日常業務と併行させて、小さな研究テーマを選んでデータを記録して積み重ねて、系統的に整理することが研究の始まりであります。会員の皆様の御健闘を祈ります。

※当日のテキスト序文より転載(今道友則 記)

平成19年(2007年)度の日本動物看護学会の総会(第



## 第1部 / 講演と公開ミーティング

### 人医療の看護に学ぶ

#### —その進展経緯と職業観に学ぶ—

##### —家族看護学と動物看護学の接点を考える—

人医看護と動物看護をいちがいに比較・同一視できるとは限らないと思われる。しかし、「人医療における看護師の地位が今日までに上がるためには、どのような経過をたどったのか」「現場の看護師の方々の苦労や意識変化はどのようなものであったのか」——これらを知ることから動物看護師が学ぶべき点は多いと思われる。

この日は、「動物看護が人医看護から学べること」というアプローチにより、人医療の看護学研究者であり、かつ、ご自身も豊富な看護師経験をお持ちの箕浦先生にお話しいただいた。家族看護学と動物看護学との接点にも言及していただくことができた。

お話の後には、会場を交えた意見交換の場が設けられた。「動物看護師とは、獣医師の優秀な補助職であれば、それでよいのか」「わが国の動物医療の発展のために、動物看護の観点でできることは何か」「わが国に動物看護学という分野ははたして根づくのか」といった点について、指定討論者である長田先生のコメントも交えて質疑応答が行われた。



#### 講演者

箕浦とき子先生

(岐阜大学 医学部看護学科  
成人・老年看護学講座 教授)



#### 指定討論者

長田久雄先生

(桜美林大学大学院教授—老年心理学—、  
本学会常任理事)

#### 進行

西谷孝子さん

(広島県・西谷獣医科病院 本学会認定動物看護師、本学会理事)

**1. 看護の発展過程** ①看護とは何なのだろうか ②看護のあゆみ——看護の発生と発展過程・専門職としての位置づけと看護の確立(専門職とは・看護教育制度)

**2. 看護の対象と看護実践** ①発達課題から見た対象と看護実践 ②レベルと看護実践 ③家族看護学と看護実践——家族看護学とは・家族看護学誕生の背景と発展過程・家族看護学における看護者の役割(看護者の役割・家族支援時の看護者としての姿勢)

**3. 動物看護学と人看護学との接点** ①人にとって動物の存在は? ②動物にとって人の存在は? ③人看護学と動物看護学との接点は?

**4. 動物看護学の必要性** ①最近の傾向——動物も家族の一員・動物も高齢化・習慣病の発生 ②動物看護の役割——治療への参加・飼い主への対応(予防・回復・健康維持・終末期への対応)・記録の充実

**5. 動物看護学への期待** ①教育の充実——看護は実践の科学→実践を通しての教育の必要性・教育体制の拡充(カリキュラムの充実・どのような人が教育に携わるのか) ②制度化への努力——動物看護師としての役割の積極的遂行・自らの役割の主張(日々の信頼される看護実践→評価・外部へ向かっての主張)・教育の制度化

## 第2部 / 動物看護に関する発表

### A. 「動物看護師のあり方」と「人とペットとの関係が持つ意味」を考える

解説 / 安藤孝敏(横浜国立大学 教育人間科学部 准教授、本学会評議員)

進行 / 中俣由紀子(茨城県・かしま動物病院、本学会認定動物看護師、本学会理事)

## ①動物看護師が考える動物病院における対応

甲田菜穂子(東京農工大学 比較心理学研究室  
准教授)・三家詩織(同研究室)

動物看護師を対象に質問紙調査を行い、「動物病院における飼主にとってのよい対応と悪い対応について、動物看護師はどのように捉えているか」「その認識は、業務の経験年数で違いはあるか。よいと思われる対応と悪いと思われる対応に違いはあるか」を調べたものであった。

この結果から2つの結論を導き出していた——「動物看護師の経験年数と経験業務との関係から、しつけ・カウンセリングという飼主や動物との対話性がかなり重要視される業務を除き、動物看護師は比較的短期間で多様な業務を経験し、一人前になっていること」「経験年数と回答傾向との間の関連が薄かったことから、経験年数の長い動物看護師を対象とした、対応に関するスキルアップの機会が不足している可能性が考えられること」。そして、「動物看護師は、飼主と関係する業務の中で対話性を最重視していた。今後は、インフォームド・コンセントの場面における役割も含めて、動物看護師における飼主とのより包括性・継続性のある対応の充実が課題となるであろう」と結んでいた。

## ②動物看護師と利用者が考える

医療における対応 発表者は①と同じく

人医療が患者への対応が主であるとは異なり、獣医療では飼主と動物の双方に対する対応への配慮が求められる。本研究では、「動物病院におけるよい対応と悪い対応について、飼主と動物看護師ではどのような認識の違いがあるか」などについて調べていた。この結果、「飼主と動物看護師ともに何より『対話性』が重要と考えていること」「動物病院では、包括性、説明(病状・飼い方・動物種・予防、質問・相談回答)をより求めていること」を挙げていた。

そして、「飼主の要求をより満たすためには、対応の中の

『包括性の充実』が求められる」として、動物病院における人と動物の生活全般に渡る幅広い支援の実現を求めている。加えて、適切なインフォームド・コンセントを行えるような動物医療関係者と利用者との関係を築くために、飼主への指導の必要性も示唆していた。

## ③愛着の観点からみたペットの安楽死に関する大学生の意識

—オーストラリア人大学生との比較を含めて—  
杉田陽出(大阪商業大学経済学部 准教授/社会心理学)

発表者によれば、「欧米人に比べて、日本人はペットの安楽死に対して消極的だとよく言われる。安楽死に対する両者の意識の差については、両文化の宗教や思想に基づく動物観の違いから論じられることが多い」とのことである。「ペットを安楽死させるかどうかの判断には、日本、欧米の別を問わず、飼主とペットとの関係が影響するのではないだろうか」の観点から、日本とオーストラリアの大学生を対象にアンケート調査を行った。

この結果から次のことを示唆した——「日本人大学生とオーストラリア人大学生では、ペットへの愛着のタイプが異なる」「日本人大学生は豪州人大学生に比べて、ペットの安楽死に対して否定的である。しかし、ペットへの愛着のタイプによって安楽死に対する意見が異なる。飼主にとって、ペットが人の代替役割を持つ場合には安楽死に否定的だが、飼主が人とは異なるペットの特性を認めている場合には、安楽死に肯定的である」「オーストラリア人大学生においては、総じて安楽死を容認する傾向がある。ペットを不必要に苦しめることを虐待ととらえる文化においては、安楽死を判断する際には、ペットへの愛着よりもペットが現在おかれている状況を優先させるのかもしれない」。欧米に比べて日本ではペットの安楽死についてのデータ類が見当たりにくいことにも触れていた。

## B. 動物看護の現場から

解説/石岡克己(日本獣医生命科学大学 獣医学部 獣医保健看護学科 講師)

進行/中俣由紀子(茨城県・かしま動物病院、本学会動物看護師、本学会理事)

### ①歯科処置における準備と注意点

三浦紫陽子(埼玉県・フジタ動物病院  
本学会認定動物看護師)

歯科処置においては、術者の指示に従って速やかに必要な器具を揃えることと、処置を速やかに進めるために獣医歯

科学の知識を身につけることが、動物看護師にも必要となる。発表者は「歯科処置における準備とそれに伴う注意点」について報告した。

そして次の点を大切なこととしていた——「動物における一般手術は全身麻酔下で行う。いかに麻酔時間を短くし、適

切な処置を行うかが重要となる。これに対して歯科処置の場合は、事前に歯垢歯石除去のみ行う予定の症例が、急きよ拔牙や歯内治療が必要になる場合も多い。したがって、早急に各処置に必要な器具機材を準備できなければならない。

これに対応するため発表者の院では、「複数のスタッフが歯科処置前準備や歯科処置助手を行うので、必要最小限の器具とその名前などを書き込んだ写真を使用して準備チェックを行っている」「薬品や備品などの管理は担当制とし、器具の不具合や不足品等が生じた際は早急に対処している」と報告していた。適切な準備による円滑な処置が動物の負担を最小限にし、術者の処置への集中を促すと述べていた。

## ② 当院におけるトリミング時の疾患別注意事項

平田佳子(埼玉県・フジタ動物病院 動物看護師)

動物病院では、高齢犬や何らかの疾患を持つ犬や猫に対してもトリミングを行うことがある。しかし、疾患を持つ犬や猫にトリミングを行うことはストレスを与え、状態を悪化させることも考えられる。発表者は、こうした動物をトリミングする際の対応方法を具体的に報告した。「心疾患の場合」「高齢の場合」「膝蓋骨脱臼、椎間板疾患などの場合」「皮膚疾患の場合」「目に慢性的疾患がある場合」「鎮静をかける猫の場合」に分けて詳しく述べられた。

発表者は、「近年、動物医療が発達し動物たちの寿命が延び、それに伴い各種疾患を持つ動物が増えている」とした上で、「日常の健康管理の一環として、動物病院でのトリミングを希望する飼主も増加傾向にある」ことに触れた。そして、「動物病院は一般のショップとは違い、各種疾患のある犬猫を持つ飼主にとっては、不安な中にも比較的安心してトリミングに預けられる所と考えられているのではないかと」述べていた。加えて、「動物看護の知識や経験、飼主との十分なコミュニケーション能力が、動物病院におけるトリマーには求められていると痛感している」「動物の容態を観察する力を持つことが、病気の早期発見・早期治療につながり、その結果、動物たちも気持ちよく過ごせるのではないかと」主張していた。

## ③ 術中の看護過程の展開

—手術における動物看護師の役割を考える—

永尾秀一(広島県・西谷獣医科病院 動物看護師)

手術における動物看護師の役割として、手術が安全に行えるように動物の管理をしなければならないことが挙げられる。そのためには無菌的操縦の徹底が重要であり、手術侵襲に対する生体の反応を十分に理解していなければならない。そ

して何より、「観察—判断—実行」という手術の一連の流れが、短時間で安全、確実かつスムーズに終了するよう援助することが最大のポイントである。

この点を踏まえた上で発表者の院では、入院動物の看護に対して「記録用紙を用いた動物看護過程」を実践している。術前の受入から術後に麻酔から覚醒するまでの各段階における、看護計画の立案と実践内容の詳しい報告が行われた。症例は老齢のジャイアント・シュナウザーで、右後肢端にできた腫瘍の治療を目的とした断脚手術であった。

今回得られたこととして、「術前の情報を収集し、解釈判断し、個別に看護上の問題点を挙げることで、患者である動物に対する看護の視点や方向性が明らかになったこと」「術中の看護計画を終了後に見直して評価することで、今後の看護に必要な問題点が明らかにできること」を挙げていた。

## ④ 下半身麻痺の犬の看護とリハビリ

長嶺孝太(沖縄ペットワールド専門学校)

動物看護学科 動物看護師コース 2年生)

発表者が下半身麻痺の犬の看護とリハビリについて学ぼうと思ったのは、たまたま保護した犬が下半身麻痺になってしまったことがきっかけであった。最近、脊椎に関する疾患が多くなっていると聞き、この犬を通して、今後同じ事例に役立てられないかと考え、「家庭でできる下半身麻痺の犬の看護とリハビリ」を勉強し経緯をまとめた上で述べていた。

「保護から手術・術後の状態」の報告に続いて、「リハビリと経過・現状」について、各段階の詳しい報告が行われた。術後1年1か月から取り入れた水泳療法における観察の様子や、合併症として膀胱炎、血尿、尿結石(ストラバイト結石)になったことへの対処も報告された。

発表者は、「約1年間、下半身麻痺の犬の看護とリハビリをしてきて、リハビリ開始時期や、下半身麻痺になるとどのような機能制限・運動障害が起こり、それに合わせてどういった看護やリハビリを行うか、また回復にしたがってどのようにリハビリの計画を考え実行するかなど、犬に合わせて計画を立てることの難しさを学んだ」と述べていた。※この犬は現在発表者が飼っており、食欲・元気ともに旺盛とのこと。

## ⑤ 外来看護記録用紙の作成—臨床動物看護

研究会におけるグループワーク—

遊座晶子(つくば国際ペット専門学校・教諭)

本学会認定動物看護師)

動物たちはペットから伴侶動物へとその扱われ方も変化し、

人間の生活により身近なものとなってきた。それに伴い近年、動物病院を訪れる動物はその数も種類も増え、通院や在宅でのケアが必要になる場面が多く見られている。

こうした中で、発表者は「動物看護師は動物医療チームの一員として、どのような場合であっても、安定した信頼のおける動物医療の提供に貢献することが求められている。診療記録としてカルテがあるように、看護についてもその過程を記録に残すことが必要になってきている」と指摘した上で、「入院看護記録の概念から記録方法」と「看護記録の重要性」について、グループワークで学んだ成果を以下の項目ごとに報告した——「①外来看護の役割とは何か」「②外来看護の対象は何か」「③どのような業務をどのくらいの時間で行っているのか」「④外来看護記録を導入する目的や利点は何か」「どのような内容を外来看護記録用紙に記載するべきか」。

今後は実践で生かせるような、個々の病院に見合った外来看護記録用紙の作成・導入のための研究を続けていきたいと述べていた。看護記録がよりよい看護につながることを主張していた。

## ⑥ 当院での外来看護記録の作成

齋藤みちる(神奈川県・七里ガ浜ペットクリニック)

本学会認定動物看護師)

発表者は、「外来では、短時間で患者動物の健康状態・飼主の要求を把握し、さらに看護の必要性を判断し援助することが要求される。動物看護師は、快適な外来環境を提供し、動物の負担軽減と継続看護を実践させる役割を担う」と述べた上で、外来看護記録の作成について必要性和この試みを報告した。

発表者の院では通院治療を積極的に実施しているため、慢性疾患の通院が多く入院が少数であることから、外来での看護の必要性が高いと発表者は認識したとのことである。しかし、症例ごとに動物の状態、飼主の考えをすべて把握することは難しいことから、院の現状と診療方針にあった外来看護記録がその手助けになると考え、これを作成することとしたとのことである。

外来看護記録によって、「動物の健康状態の把握が容易にでき、飼主の心理的・精神的なケアも可能になり、院内スタッフ間の情報共有がスムーズになる利点があった」と述べていた。しかし、問題点としてカルテとの重複を挙げて、「時間の無駄であるという考え方」と「問題の再認識につながるという考え方」の両極端な指摘が、院内から出ていることにも言及していた。動物外来看護における看護とは、動物看護師が飼主を指導するというよりも、むしろ、飼主が家庭で行う看護を補助することだと感じると指摘していた。

## ⑦ 動物眼科二次診療施設における外来看護

中井江梨子(東京都・どうぶつ眼科 Eye Vet)

本学会認定動物看護師)

発表者はまず、「眼科看護の役割には『苦痛の軽減』や『治療継続への援助』があり、その一端は飼主側に委ねねばならないという特徴がある。飼主側の理解と協力なくして予防や管理は成り立たない」ことを指摘した。

その上で、発表者の院は「動物眼科専門の二次診療施設である」「飼主はホームドクターである主治医の紹介によって来院する」ことから、専門医の治療に対する飼主側の期待はより高いと認識し、これに対して動物看護師は、「限られた時間や状況下で情報を収集、飼主側のニーズを把握し、今後の援助に向けた外来看護を行わなければならない」と述べていた。

これを達成するため、今回の発表では、「遠方から来院した点眼困難との訴えのある症例に対し、初めて外来看護記録を作成し、動物看護過程を展開した経過」と、ここから得られた「外来看護における動物眼科看護の役割のついで示唆」を述べた。点眼治療管理と続発性疾患予防につながったことが報告された。

「記録に残すことで何度も振り返ることができ、その重要性を身をもって感じる事ができた。改良を加えながら記録症例を増やし、他病院との外来看護サマリーのやりとりへとつなげていきたい」と感想を語っていた。

## C. 二次診療施設(大学病院)における取り組み

解説/桜井富士朗(東京都・桜井動物病院院長、帝京科学大学アニマルサイエンス学科 客員教授、本学会副会長)  
進行/中井江梨子(東京都・どうぶつ眼科 EyeVet、本学会認定動物看護師、本学会評議員)

## ①大学病院における動物看護師の役割

田村浩美(北海道・帯広畜産大学附属家畜病院)

本学会認定動物看護師)

発表者の院は、十勝地方のみならず道内各地からの紹介症例、その他一般外来も行っているということであり、発表では、「そのような紹介症例を多く含む高度獣医療施設において、動物看護師として何に重点をおいてその役割を果たすべきか」についての考察が述べられた。

大学附属の動物病院における動物看護師の役割として、「学部学生の指導教育を担う点が含まれること」「決して数が少なくない動物の死後のフォロー」「より高い専門知識の習得の必要性」を指摘していた。さらに、「より細やかで密接なオーナーとのコミュニケーション」が求められ、「獣医師の目が届かないところにこそ動物看護師の力を発揮するべきだと考える」と主張していた。

そして、「ホスピス医療が多い今の現場において、これから一人でも多くの飼主オーナーが救われるように、飼主の心のケアに努めていくこと」「動物看護師が積極的に学会やセミナーに参加し、知識を広げること」を目標として挙げていた。



## ②血液ドナー犬の管理

—麻布大学附属動物病院の方法—

和田優子(神奈川県・麻布大学附属動物病院)

本学会認定動物看護師)

発表者が勤務する大学附属の動物病院における「血液ドナー犬の管理」について、その取り組みが詳しく報告された。

最初に、その実施上の以下の論点が述べられた——「獣医療の発展に伴い輸血の必要性が増加していること」「安定供給が急務であること」「安定供給の方法について」「血液ドナーの飼育」「動物の愛護と福祉に配慮する必要」。続いて、同院におけるドナー管理基準(年齢・体重・採血量・採血頻度)が詳しく説明された。そして、月別輸血量やドナーの現状、ドナーの選択における条件、ドナーの赤血球容積比(PCV)、採血量などについて言及された。

血液管理については、「輸血動物使用記録表と健康管理表双方に採血状況を記入している」「過剰採血防止や採血間隔管理のため、記録を残している」「スタッフ間で情報が共有できるよう輸血情報ボードを作成している」ことが報告された。

ドナー管理に関しては、健康管理記録、定期健康診断、感染症予防処置、食事管理などの詳細が紹介された。ドナー犬の引退については、限界年齢を8歳程度に設定しているが、一般家庭での引き取りを考え6歳程度で引退せよとのことである。

## D. 動物看護師がひらく新たな方向性

解説と進行はCと同じ

### ①山梨動物看護師勉強会

「PRIDE & CONFIDENCE」3年間の報告

高橋真由(山梨県・赤池ペットクリニック)

本学会認定動物看護師)

本学会の大会や学会誌・動物看護師向け学習誌などでも、その活動状況がひんぱんに報告されている、山梨動物看護師勉強会「PRIDE & CONFIDENCE」も、誕生してすでに4年目を迎える。この発表では、これまで3年間の活動内容と運営方法が詳しく述べられた。活動費・定期勉強会や記念大会の内容とその様子・各種記念大会・親睦行事などの説明に加えて、定期総会・会計報告・会報発行などについても詳細が報告されていた。

また発表者は、「毎日の業務において、飼主からの診療についての質問は、動物看護師へもよく問いかけること」「動物看護師は、飼主に適切な情報提供や指導に加えて、

動物のQOL(クオリティ・オブ・ライフ、生活の質)の向上を担う大切な役目を持った職業であること」を主張していた。

動物看護師が集まる機会がまだまだ少ない中で、この勉強会は今後も活動を継続して行くとのことであった。「動物看護師が積極的に集まり、互いに知識や技術を高め、飼主側に適切な情報提供をして行きたい」「自分の仕事に対して誇りと自信を持っていきたい」と語っていた。

### ②当院におけるインシデント・アクシデントの低減

—ヒヤリ・ハット帳を利用したの評価と課題—

瀬戸晴代(広島県・西谷獣医科病院)

本学会認定動物看護師)

「一般的にもヒューマン・エラーはゼロにはできないと認識されている。それを低減させるためには、個人の責任とその職場での確認システムを徹底させることが大切である」と指摘

● 今大会の発表者ら ●



甲田さん



杉田さん



三浦さん



平田さん



永尾さん



長峰さん(向かって右)



遊座さん



齋藤さん



中井さん



田村さん

左:PC操作:玉城さん



和田さん



高橋さん



瀬戸さん



総合司会・小松さん

した上で、発表者の院において「現状把握と個人の安全確認に対する意識向上」「スタッフ間での情報共有化」のため、インシデント・アクシデントの低減策の一環として導入したヒヤリ・ハット帳の活用成果が詳報された。なお「ヒヤリ・ハット帳」とは本来、すでに起きてしまった事故やミスを記帳するものではなく、「ヒヤリとした出来事やハットした体験を報告するもの」とのことである。

ミスを犯してしまう原因としての確認不足・認識不足に対する、細かな検討・分析の結果が報告された。ヒヤリ・ハット帳を活用した結果、ミスを低減させるには、「院内で発生するミスは、どのような内容や場面・原因で起こるのかを知る」「自分や自分以外のスタッフの性格やエラー特性を、日頃から洞察し把握しておく」ことが必要と認識したとのことである。現場の管理者である看護師長として、自分自身がまず業務の中に潜むリスクと危険因子を認識する能力を養い、病院全体で事故防止対策に向けて取り組みたいと述べていた。

③ 避妊手術後に見られる犬の痛み行動について  
—動物のいたみ研究会ペインスケールを利用して—

齋藤みちる(神奈川県・七里ガ浜ペットクリニック)

本学会認定動物看護師)

発表者の院では、痛みをバイタルサインの1つとして重要視しているとのことである。発表では、「痛みの共通認識の共有」について詳しく述べられた。

目的は、「犬の避妊手術後に見られる痛み行動を、動物のいたみ研究会の作成によるペインスケールを用いて調査すること」と「実際によく見られた痛み行動で、評価に注意が必要であった事例について考察すること」としていた。

結果としては、「去勢手術と避妊手術の比較では、最もよく見られる痛み行動には差が見られた。避妊手術は去勢手術に比べて、より強い表現の痛み行動が増加していた」ことなどを指摘していた。ペインスケールの問題点としては、「手術内容によって痛みの行動が異なること」「そもそも痛み行動の定義がはっきりしていないこと」「その行動が本当に痛がっているのか分からない」などの点が指摘された。

今後は、「様々な手術内容に“特異的に見られる”痛み行動の調査を行うことや、痛み行動の詳細を記録し、スタッフ間で検討して痛み行動の定義づけを行うこと、観察方法の統一を図ることが必要であろう」と述べていた。

大会終了後1時間ほど、会場の別室で「交流会(立席パーティー)」が行われました。

乾杯に続き、おつまみをいただきながら、全国から集まった動物看護師、動物看護を学ぶ大学生・専門学校生、獣医師、研究者の皆さんが、交流・激励の和やかなひとときを過ごしました。大勢のパーティー参加者で会場は超満員!! でした。皆様ありがとうございました、おつかれさまでした。

◆本大会の収録 DVD を、本会会員と本学会認定看護師に限り希望者に有料配布しました(ニューステア 07 年 9 月号で告知)。

◆大会当日は「本学会 第 13 回定時総会」も開かれ、「2006 年度 活動報告・収支報告」「2007 年度活動内容案・予算案」が承認されました。

◆大会ご協賛に対し御礼申し上げます——アニコム、インターズ、学窓社、マスターフーズ リミテッド、緑書房(敬称略・五十音順)

日本獣医内科学アカデミー学術大会(JCVIM2007)/

日本動物病院福祉協会(JAHA)/日本動物看護学会 合同 動物看護師シンポジウム

「動物看護職の国家資格化を考える—動物医療の将来をふまえて—」

2007 年 8 月 東京



2007 年 8 月 11 日(土)、第 4 回 日本獣医内科学アカデミー学術大会(東京・新宿 京王プラザホテル)にて、同大会・日本動物病院福祉協会(JAHA)・本学会の 3 団体共催企画「動物看護職の国家資格化を考える—動物医療の将来をふまえて—」が行われました。パネラーの動物看護師・獣医師らに加えて客席からの発言者も多数あり、様々な立場から考えが述べられました。



総合司会

細井戸大成

(JAHA 副会長)

## 第 1 部 ● 動物看護職の立場で日々考えること

### JAHA 側パネラー

塩谷明美(愛知県・獣徳会動物医療センター、

JAHA 認定 1 級 VT)

富永良子(大阪府・ネオベッツ VR センター、

JAHA 認定 1 級 VT)

### 日本動物看護学会側パネラー

遊座晶子(茨城県・つくば国際ペット専門学校 教諭、

本学会認定 動物看護師) 司会兼任

和田優子(神奈川県・麻布大学附属動物病院 勤務、

本学会認定 動物看護師)

第 1 部では、動物看護師 4 名による話し合いが行われた。第 1 部司会の遊座さんは冒頭、「動物看護とは、決して“目盛りをよむ”だけではないであろう。動物や飼主の援助を行い、

その過程を共に歩むこと。目標に至るまでのプロセス全体を指すのではないかと述べた。

また遊座さんは、「動物看護職が国家資格化に向かう前提として、自分たちの業務内容をより明確に対外的に示さねばならないだろう。業務内容を記録に残して広く提示・共有することが必要ではないか。動物看護職が、動物医療においてなくてはならない職種になるためにも、専門性を追究してゆきたい。また国家資格化は歩み寄って来るものではなく、自分たちで動き求めてゆくものだろう」と述べていた。これを受けて他のパネラーからも発言が相次いだ。

「動物看護記録をつけて、これを明文化して広く発表することが必要。セミナーやシンポジウムなどを通して、動物看護師同士が交流と結束を高めて行くことも大切」(富永)

「こうした場へパネラー参加することが、院内での動物看護師の認知向上につながると感じる。また、当院は獣医師の教育施設でもあるので、研修を希望する獣医師が集まる。当院における動物看護師への評価が、開業前の獣医師の動物看護師観をも左右すると思う。したがって、つねに院内での動物看護職の浸透を念頭においている」(和田)

「動物看護師の地位向上のために動いてくれている獣医師がいる一方、自らの職種の地位向上について、あまり興味を持っていない動物看護師も多いのではないだろうか。獣医



塩谷さん



富永さん



遊座さん



和田さん

師あつての動物看護師であるが、動物看護師は動物看護師としての努力を、もっとすべきではないだろうか」(塩谷)

会場からは、「動物看護師の中には、社会人としての最低限の常識を持っていない人もいる。人とのコミュニケーション力があまりに低い人も多い」という指摘も出ていた。

## 第2部 ● 獣医師・動物病院経営者は、動物看護職をこう考えている

### JAHA 側パネラー

原大二郎(愛知県・獣徳会動物医療センター 院長、  
JAHA 専務理事)

### 日本動物看護学会側パネラー

小嶋佳彦(新潟県・小島動物病院アニマルウェルネスセンター院長)  
村中志朗(東京都・広尾動物病院 院長、  
日本動物看護学会 常任理事) 司会兼任



原先生



小嶋先生

第2部では、獣医師3名による話し合いが行われた。小嶋先生は、〈今から25年前、来日した米国VTのすぐれた仕事ぶりにおどろいたこと〉〈米国の著名な獣医外科専門医であるDr. マッカーニンの言葉「診断・処方・手術以外のすべてがVTの職務」〉〈動物看護に関する学会発表こそが、動物看護師の国家資格化につながる道〉を念頭に、「これからは動物看護師がその実績を対外的に示すことにより、自らの手で道



村中先生



を切り開くことが大切」と述べられた。また、「飼主をも巻き込んだチーム医療の実践においては、人とのコミュニケーション能力が問われる。すなわち話すことが仕事と言える。礼儀・あいさつ・正しい身なりこそは、苦しくて来院されている飼主にやさしい心で接する際の前提となろう」とアドバイスされた。

原先生からは、「動物看護師が早く辞めてしまうことが多いと言われる背景として、動物病院の就労環境に未整備な点

が多いことも推測される。より近代的な形をめざさねばならない」ことが指摘された。

「動物看護師だから低賃金でよいという悪しき慣習を改める」「社会のニーズに見合う動物看護職になる必要がある」「的確な知識を有する動物看護師が動物をまもる」という意識を育む必要がある」という声も挙がっていた。

### 第3部 ● 動物看護職は国家資格化され得るのか。動物医療の将来とは

総司会・パネラー全員に加えて、

ゲストスピーカー2名ご参加

大森伸男先生(日本獣医師会 専務理事)

鷺巢月美先生

(日本獣医生命科学大学 獣医学部獣医学科

獣医臨床病理学教室 准教授 -JCVIM2007 側代表-)



大森先生



鷺巢先生

大森先生からは、私案「動物医療技術に対する高度化・多様化要請に応えるために(獣医師プラスαの専門職の資格制度化)」が述べられた。その内容は、〈1.動物の診療と関連行為との関係(現状)〉、〈2.資格制度の目的及び制度化に当たっての条件——目的、条件、専門職資格(免許)のイメージ〉、〈3.専門職としての資格制度化に向けて——当面、制度化のための法整備と養成・認定システム実施体制の整

備)からなっていた。

また鷺巢先生は、動物診療現場におけるコミュニケーションの向上、インフォームドコンセントの普及、ペットロスへの対処、介助犬の社会的地位向上などにかかわっておられる立場から、動物看護職がこれからの動物医療に欠かせないことを述べられた。

動物看護師の地位向上のため、動物看護師各自にできることは何だろうか。勤務先の獣医師(院長)が動物看護職をどう位置づけているか、小動物臨床のあり方をどう考えているか、どのような姿勢で病院経営を行っているか、そうした身近な環境によっても左右されることだろう。

しかし状況を打開するためには、動物看護師側が専門職

としての自覚と向上心を今以上に持ち、自らの実績を自らの手で、獣医師や動物医療関係者・飼主をはじめとする社会全般に対して、広く積極的にアピールしてゆく… 新たな道を拓くにはこの過程が欠かせないのではないだろうか。その先に、動物看護師の国家資格化もより現実味を帯びる気がする。他力本願では現在の閉塞状況は変わらないだろう。

## 日本動物看護学会 教育講演

2007年8月 東京

2007年8月12日(日)、第4回 日本獣医内科学アカデミー学術大会にて、「①口腔内疾患・

歯牙疾患の治療と看護・飼主指導」(埼玉県・フジタ動物病院 院長・藤田桂一先生、三浦紫陽子さん)、「②ウサギ・ハムスター・フェレットの治療と看護・飼主指導」(神奈川県・Exotic Pet Clinic 院長・霍野晋吉先生・和田知美さん)の講義が行われました。三浦さんと和田さんは、両分野を特に詳しく学ぶ本学会認定動物看護師です。

## ① 口腔内疾患・歯牙疾患の治療と看護・飼主指導

埼玉県・フジタ動物病院 院長 藤田桂一先生、同院 本学会認定動物看護師 三浦紫陽子さん

「主な口腔内疾患・歯牙疾患」「治療と看護および飼主指導—処置前の用意、検査／処置中の補助／処置後の管理、飼主指導」について、映像による豊富な資料を用いて講義されていた。

3歳以上の犬や猫の80%以上は歯周病であると言われており、口腔以外の主訴で来院された個体でさえ、口腔内を検査すると歯周病が認められる個体が多いとのことである。



藤田桂一先生



三浦紫陽子さん

## ② エキゾチックアニマル（ウサギ・ハムスター・フェレット）の治療と看護・飼主指導

神奈川県・Exotic Pet Clinic 院長 霍野晋吉先生、同院 本学会認定動物看護師 和田知美さん

「ウサギの三大疾病と看護」「ハムスターの身体的特徴と飼育指導」「フェレットの予防医学と臨床検査」について、本講義のためのオリジナル動画を含む豊富な映像資料を用いて講義されていた。

エキゾチックアニマルについては、治療に先立つ保定・検査・病態についても情報不足が多い中、場内には動物看護師と共に学ぶ獣医師の姿も目立った。



和田知美さん 霍野晋吉先生

### 本学会理事が他団体で講演しました

2007年度 JAHA 認定 VT セミナーに、本学会理事・本学会認定動物看護師の西谷孝子さんが講師として招かれました。6月16日・東京会場(写真)での受講者数は200名近くに及びました(大阪・福岡でも開催)。

講義内容は「動物看護とは何か」「動物病院のチーム医療における動物看護の専門性」「動物看護記録のまとめ方」などでした。西谷さんは「今後は、獣医師と動物看護師が互いの専門性を生かしてチーム医療を行うことが求められるのではないか。そのためには、動物看護師自身が動物看護の本質や専門性を意欲的に学ぶことが必要ではないか」と話されていました。

西谷理事は、福井県獣医師会の動物看護師研修会においても講演されました(同テーマ・8月5日)。

※両団体のご厚意に深謝申し上げます



お盆前の猛暑の中、全国から大勢の動物看護師の皆さんが来場されました。

### 第6回「動物看護師資格認定試験」終了

2007年3月11日に実施し、同29日に合格発表を行いました。受験者408名、合格者329名、合格率81%でした。計6回の合格者数は1,276名となりました。「本学会認定動物看護師」は「動物看護についての一定の知識と技術を持ち、動物看護師としての適格な資質を有する」と本学会が認定した方々です。認定者には、獣医師や飼主・広く社会の人々と協力し、さらに充実した動物看護と動物医療の発展に貢献することが求められています。

●第7回試験は2008年3月9日(日)に実施します(詳細は学会ホームページに告知)。

## ●動物看護師が担うべき、大切な役割とは何か●

＜本学会認定看護師の率直な声から、動物看護職のあり方を考える＞

本学会開催「動物看護師のためのペット栄養指導者養成セミナー(本学会認定動物看護師向け、2006年度開講・第2期)」において、課題の一環として受講者から「動物病院経営における動物看護師の役割の重要性(診療補助面以外)」を募ったところ、様々な示唆に富む回答が寄せられましたので、ここにご紹介いたします。

回答から、動物看護師が今後いっそう取り組むべき業務について考えることができますでしょう。

※敬称略・五十音順。執筆者より掲載許可を頂きました。



大久保寿子

(千葉県・佐倉動物病院、本学会認定動物看護師)

### ・入院管理

食餌管理:「給与量の算出」「採食量の記録」「好んで食べられる工夫(食べやすい大きさに丸める、好きな缶詰などを少し混ぜる、口元まで手で与えてみる、食べやすい器に変えてみる、など)」「強制給餌」

排泄状況:「回数・状態などの報告と記録」

### ・飼い主への指導

「処方食の給与量・方法の指導」「投薬方法の指導」「歯みがき指導」「肥満傾向のある動物には、理想体重の算出と減量指導」「ワクチンプログラム、フィラリアなど病気の予防のすすめ(予防を続けてもらうための管理、DM など)」「質のよい食餌のすすめ(ライフステージや体質にあいそうなフードのサンプルを渡す)」

・爪切り、グルーミング(当院ではグルーミングは行わず)

・ノミ、ダニ予防の指導(フロントラインの使用説明など)

以上から、動物看護師の役割には、主に栄養指導、病院や寄生虫の予防、家庭での管理に関することが多いことが分かる。

獣医師が行き届かない部分を補い、飼い主が病気

以外で気になる部分を気がねなく聞ける存在であること、それに対し的確な返答ができる存在であることが動物看護師に求められるといえる。



川村和美

(東京都・桜井動物病院、本学会認定動物看護師)

一般的に考えられている動物看護師の役割としてまず挙げられるのは、「獣医療における疾病治療の補助」であろう。多岐にわたる動物看護師の業務において、それらは大きな割合を占めてはいる。しかし、それだけがすべてではない。

では動物看護師が日々従事している業務にはどのようなものがあるのか。当院での実務に基づいて以下に例を挙げた。

「院内清掃、消毒」「院内外の環境整備」

「待合室の啓蒙掲示物作成」「電話対応」

「受付業務」「カルテ管理」「診察時の保定」

「各種検査の実施、補助」「薬剤の調剤」

「各種証明書の発行」「会計」

「オリジナルブランドのフードの販売・管理・発注」

「その他物品の販売」「手術前準備」

「手術補助」「入院看護」

「各種処置の実施、補助」「備品の管理・発注」

「薬剤の管理、発注」「処方食の管理・発注」

「院内セミナー、研究会の運営」

「ワクチン・フィラリア等の案内 DM の発行」

「機器のメンテナンス」

「栄養相談、減量に伴うカロリーの計算」

「しつけ相談、問題行動の相談」

「ドッグトレーニングプログラムの作成」

大まかなものだけを挙げてみたが、疾病治療に直接関わらない業務もかなりあることがわかった。

「院内外の環境整備」では、院内の道具のレイアウトや玄関の鉢植えの手入れ・歩道のコンクリート整備にいたるまで様々な業務がある。見栄えさえよければよいというわけではないが、飼い主に対して初めに与える印象は、その後大きく反映されるということも頭に入れておくべきであろう。

「待合室の啓蒙掲示物作成」や「ワクチン・フィラリア等の案内 DM の発行」は、疾病にかからないように促す予防医療の面においても有効である。さらに当院では、独自に開発したフードを販売している。栄養の相談や減量・疾病に関連したフード選びも、当院における動物看護師の重要な業務である。

これらの業務のうち、特に私が力を入れているのは「ドッグトレーニング」の分野である。例えば、ワクチン等であ来院した幼犬と飼い主に対し、診察の合間をぬって個別に時間を取り、しつけの話をする。同時に短時間に起こりうるワクチンアレルギー反応のチェックもできるため、よりよい医療サービスと愛犬のしつけという付加価値を飼い主に提供することが出来る。

ドッグトレーニングの基本として「信頼関係の構築」というのがあるが、これはなにも犬と飼い主に限ったことではない。初めて病院を訪れる飼い主に対しては、病院側と飼い主との信頼関係を築ききっかけ作りにもなりえる。診察自体もちろんだが、会話を通してのコミュニケーションは極めて重要である。

また、犬に対しては、動物病院という特殊な環境下に慣れさせ恐怖感を取り除くことで、スムーズな診察や無用なケガの防止が見込める。犬も飼い主も病院スタッフも、過度にストレスを感じる事のない環境作りが必要だと考えている。

私が思う動物看護とは、あらゆる動物とその飼い主を対象にして、健康・不健康にかかわらず、すべての健康レベルに対して行なわれるものだ。

実際、ワクチンやフィラリア、ノミダニ等の予防や爪切りなどの定期的な健康診断、散歩の途中に立ち寄って体重をチェックする等、動物病院の負っている役割は疾病治療にとどまらない。

そうした中で、スタッフ全員が一つのチームとして、また、個人一人一人がそのチームの中で何が出来るのかを模索し実行する。それらが単一のやり方では得られない質の高い動物医療を提供し、病院経営の向上にもつながるのではないかと考える。



児玉由美子

(東京都・Pet Clinic アニホス、本学会認定動物看護師)

私たちの病院では、動物看護師が「飼い主様向けセミナー」「歯磨き指導」「フード指導」「パピークラス」を行っています。

「飼い主様向けセミナー」は毎月1回行っており、その時々で業者の方々とも協力しながらセミナーを行っています。具体的にはノミの防止、フィラリアの予防、歯磨きセミナー、フードの選び方、爪切りなどのお手入れ指導などを行っています。

診察の後、飼い主にこのセミナーを行い、病気予防のためにはいつから予防を行うのがよいか、フードの切り替え時期、フードの見極め方、フードの給与量の見方など様々な指導をしています。

「歯磨き指導」では、最近は飼い主も歯磨きへの興味が高く、子犬から高齢犬にいたる様々な飼い主から質問を受けます。

当院では、様々な立場の飼い主に対して、動物看護師が歯磨き指導を行います。歯ブラシを使った磨き方から、ガムや歯磨き粉(動物用)・デンタルスナックを用いる場合など、磨き方の手順をステップ1,2,3と順番をつけて、飼い主の方々に少しずつ頑張ってもらっています。

「フード指導」については、飼い主によっては給与量が分からず、やせ気味の子犬や、だいたい太めの犬や、避妊、去勢後の体重管理のための食事の選び方など、多くのケースが来院されます。

子犬のフードの切り替え時期などは、小型犬、大型犬によってもだいぶ変わるので、その時期の相談なども獣医師に代わり受けることがあります。避妊や去勢後の体重管理はとても大切です。また、疾病によっても処方する食事が違い嗜好性も様々なので、飼い主ともいろいろと相談しながら行います。

「パピークラス」では、ワクチン3rdを接種した4~5ヶ月令の子犬を対象に行っています。家族の一員となる犬とより良い関係を作るために必要なコミュニケーションを取るための方法、基本的なしつけを飼い主様と一緒に学習します。

講師である訓練士の先生に教えていただきますが、

来院された飼い主様に対しては、最初に動物看護師からパピークラスについての説明をしています。

ほかにも飼い主の相談相手となり、いろいろなお話などをお聞きすることもあります。獣医師にはなかなか話せなくても動物看護師に対しては話せる飼い主もおられます。そうした中で、どう飼い主と獣医師をつなぎ合わせるかも動物看護師の重要な役割だと思っています。



堤 章江

(群馬県・伊藤動物病院、本学会認定動物看護師)

動物看護師の役割はいろいろあるが、疾病治療以外に関する役割として挙げられるのは整理整頓である。待合室や診察室など、飼い主の目が届く場所が重要なのは言うまでもないが、たとえ、目が届かないかも知れないOP室やX-Ray室、倉庫なども重要であることに変わりはない。

倉庫などは整理整頓していなければ、在庫数も分からなければ、使用期限や薬品の場所・種類なども分からない。OP室は特にホコリがあってはいけないし、電気なども点灯するか、チェックをしないとイケない。

また、在庫管理におけるリストの作成や不足分の補充なども大切な仕事である。特に、常に使用する薬品やフードなども重要だが、緊急時に使用する、あまり日常では使用しない薬品が、とても重要である。あまり使用しないと、使用期限が切れてしまっていることがあるので、使用期限のチェックやリスト作成が大切である。

リストの中でも、最も飼い主にかかわる物が、ワクチンやフィラリア予防などのリストである。私たちはリストによってDMを発送する。しかし、このリストが外部に出ることがあってはならないし、取り扱いには注意が必要である。これらは、病院経営にはとても重要なことである。DM発送によって飼い主の再来院を促す。リストの取り扱いにより、飼い主の信用を得ることが出来ると思われる。

私が特に心がけている点としては、DMを発送する際に、また、疾病治療などで来院している飼い主に対して、または来院して治療が済んだ飼い主へ、一言「具合はいかがですか？」などの言葉を添えることがある。

他にも、リストの作成や未収金がある飼い主への支払通知書の作成など、事務的なことが多いように思う。しなけ

ればならないことが多くあり、他の動物看護師と分担して行うが、私自身がまだまだだと思うことが多い。特に他の動物看護師への指示を出すことが苦手であり、日々反省をくり返している。

私自身の考えとして、学校で勉強(専門的な内容)をしていようとなかろうと、一步動物病院へ入り勤め始めた時から、飼い主から見たらプロであるということを常に頭に入れ、初心を忘れないように責任を持って働いていこうと思っている。



松田 渚

(千葉県・佐倉動物病院、本学会認定動物看護師)

#### ①子犬(子猫)のしつけ

当院ではしつけ教室は行っていませんが、しつけは、飼い主さんや動物・私たちにとって、とても重要だと思います。スムーズに診察を行えるかどうかはこれで決まると思います。

しつけというより、当院では診察に慣れてもらうのにおやつ(ビスケット)を使っています。例えば注射を打つ直前・最中・直後に少しずつ食べさせて、注射が打たれている感覚を感じさせないようにしています。これでほとんどの子が痛みを感じずにいるので、動物、飼い主さんにとってとても良い印象を与えています。

#### ②栄養指導

栄養指導というと、やはりダイエットが大部分を占めています。当院では手作りフードは使っていないので、処方食がほとんどです。BCSを調べて理想体重を出し、それに合ったカロリー量と給餌量を出して指導しています。大部分の子が処方食を受け入れてくれますが、受け入れてくれない子はやはり手作りフードになってしまうと思うので、それに関する知識ももっと養わなければならないと思います。

#### ③歯のケア

歯石が原因で起こる問題を抱えている子が多いので、歯のケアの指導を行ったり、歯ブラシを無料で飼い主に差し上げています。歯石除去などを行った子は定期的に来院してもらい、歯ブラシをしてチェックしています。

#### ④グルーミング

当院ではグルーミングは行っていませんが、常に被毛の状態や毛づや、ノミ・ダニ、爪の長さ、耳の汚れなど

エックをしています。体をよく触っていると、飼い主さんや獣医師が気づかない腫瘍や病変を発見できます。

#### ⑤ 飼い主さんへの気配り

獣医師はほとんど手が回らないことが多いと思うので、常に気をつけています。獣医師と飼い主さんの間に入る、時には通訳(?)のような役割だと考えています。

以上、5つに分けて書きましたが、動物看護師とは獣医師の手が回らない所をサポートする立場だと思うので、コミュニケーションを密に取り、獣医師の考えを一足先に読み、スムーズな診療および経営ができるよう貢献していきたいと考えます。



間谷一絵

(前 千葉県・若山動物病院、本学会認定動物看護師)

動物看護師は、受付や電話で最初に飼い主さんに対応する立場にあることも多く、病院にとっては「第一印象を決める」という経営上重要な役割を担っていると言えます。

明るく安心できる話し方や清潔感のある身だしなみ、取り扱い物販商品の熟知と十分な説明能力、無駄のない発注能力、病気予防全般のアドバイス、病院周辺を含めた施設の清掃、しつけや問題行動に対する的確なアドバイスなど、看護以外にもこれら全ての業務が病院経営を左右する大切な仕事となってきます。

これらの日常の役割に加え、私の勤務した病院では「サービス業である病院は顧客である飼い主さんにどんなことが提供できるか」を常に試行錯誤していましたので書いてみたいと思います。

生まれた時から身近に犬がおり、犬と兄弟のように育て育った自分にとって、犬は幼い頃からの心の友であり家族でもあったので、子育ても一段落した時にたまたま目に留まった求人広告をきっかけに動物病院の面接を受けました。募集していたのは雑用係でしたが、動物看護師も募集していることを聞いて動物看護職を希望し、幸いにも若い方と一緒に採用していただきました。

私が就職した前の年から、病院ではオーナー教育を目的とした飼い主さんとの交流を模索していましたので、どんなことが企画できるかを考えて実現させるという役目

が、私たち動物看護師にも課せられました。「病院は病気になった動物の治療をするだけの施設を脱却しなくてはならない」ということがいろいろなセミナーでも言われ始めていた時期でした。

それまで病院発行の季刊誌や院内セミナーに、飼い主さんの参加を募ることがすでに試行されていました。

季刊誌では、その季節に必要な予防、なりやすい疾患の注意を呼びかけ、病院でできる検査の紹介、療食の紹介などの内容を盛り込み、A3 二つ折りで4~8ページくらいの紙面に先生や動物看護師で手分けして原稿を書き、校正し、数日かけて印刷をして発送していました。

スタッフの自己紹介や、家での看病記録の寄稿を飼い主さんをお願いしたりするを通して、待合室や診療中でも話題を共有したり質問を受けたりすることが多くなりました。

この季刊誌は現在も続いており、内容のマンネリ化を避けるための苦労が年々増していますが、新しいフードや予防薬を紹介したり、病院の予定を告知することで患者さんとのスムーズなコミュニケーションに大変役立っていると思います。

オーナーさん向けのセミナーも数回企画したそうですが、会場が病院ということで敷居が高いのか、参加費は資料代だけということが返って怪しまれるのか、参加がはかばかしくないということでした。それでは運動会などの「行事」をしてみてもどうかということを提案し、準備を任せられることになりました。

開催できる広い場所を探したり、競技内容を考えたり、賞品や備品を考えて揃えたり、保険については院長にお願いし、診療の合間をぬってみんなで準備を進め、ようやく第一回目の運動会の開催にこぎつけました。当日は一番心配していたケガや事故もなく、お昼のバーベキューではスタッフも含め集まった飼い主さん同士の交流も図れ、楽しんでいただけたと思います。とてもアットホームな雰囲気での運動会でしたので、その後スタッフとの親近感も増していただけたように感じます。

運動会はその翌年もゲームの趣向をいろいろこらしてより楽しいものに進化し、近隣の病院との合同開催が実現した年は100名近い人と50匹近い犬が集まり、盛況すぎる賑わいとなりました。さすがに翌年は縮小して、も

つと一組一組の顔が見える運動会にもどした経緯がありますが、会場が地主さんの都合で借りられなくなるまで続きました。

一方、どうしたらセミナーにも飼い主さんが来てもらえるかということもみんなで検討し、試しに会場を外に借りて参加者も公募してみてもどうかという案をもとに、メーカーさんに講師を依頼することにして「ライフステージに応じた栄養」と「犬のしつけ・座学」を開催したところ、30組近い参加がありました。よその動物病院の患者さんも分け隔てなく受け入れて開催したセミナーは、地域への貢献もできよかったです。

その後、「犬のしつけ・実技」を病院内で開催したところ多くの参加者があり、引き続き「しつけ方教室」としてトレーナーさんに来ていただいて教室を開く形になりました。

そして、地域にも「犬との楽しい生活」を広めたいということになり、トレーナーさんと一緒に市役所に交渉し、公園を借りての「しつけ方教室」を毎月2回開催することになりました。ここでは近隣の動物病院にも一緒にやりましょうと声をかけ、獣医師と動物看護師でアシスタントをしました。そのうち「しつけのできた犬と旅行もしてみたい」という希望が飼い主さんから出て、旅行会社の方に企画をお願いして2回のバス旅行も実現しました。

その頃、私も「しつけ方」についての相談を診察中に多く受けることから、きちんとした応答がしたいと感じ、JAHAの主催するテリー・ライアンさんのしつけセミナーに行かせてもらっていました。そのセミナーを通して「子犬の社会化」の大切さを知り、子犬のお遊び会の開催を提案しました。

初年度ワクチンに来た子犬を対象に、診察時に「社会化」の大切さをお話することから始めて、2回目のワクチンまで問題なく完了した子犬対象に定期的にお遊び会を開催し始めました。

千葉郊外ではまだ外で飼われる犬も多く、「安心して遊ばせることのできるチャンスは短く、しかもその時しかない社会化期」について飼い主さんにわかっていただくことは大変でしたが、参加して下さった飼い主さんは、子犬たちの変身して行く様子を見て「社会化」の大切さを実感して下さっていました。会の中で、オシッコの失敗や甘噛みなど、同じ悩みを持つ飼い主さん同士の経験談

を聞いたり、動物看護師の側から健康面でのアドバイス、フィラリア症予防、避妊や去勢、歯磨きやブラッシングなどの手入れの話も盛り込むようにしました。

このお遊び会からは、成犬になってからもニコニコしてシッポを振って来院してくれる子が育ち、診療もスムーズにできるので、病院で社会化プログラムを行う大切さを実感させてくれました。最近ではドッグ・ランで犬を遊ばせたり旅行やカフェに犬を連れて行くことも多くなり、飼い主さんの「社会化」や「家庭犬のしつけ」への感心も高まっているので、自らしつけ教室に通われる飼い主さんも増えているようです。

子犬を迎えてまず訪れる動物病院での対応が、その子犬の人生(犬生)を左右するかもしれないと考えると、病院スタッフは「しつけや犬の行動学」についても常に自分で情報を持ってそれを更新し、最良のフォローをしてあげることが大切だと思います。世界的にも「しつけ」の分野は日進月歩しています。犬の行動学の勉強は日頃の診療の保定や看護にも大変役立ち、ケガ防止にも病院への信頼にもつながると思います。

勤め始めて4年目頃に病院が開院20周年を迎えると同時に、初代の動物たちの高齢化が目だって寝たきりの犬が出てきました。中には飼い主さんも高齢の方があって、病院に来たくてもなかなか思うように動けないというケースがありましたので、動物看護師で何か役立てないかと考えました。そして獣医師が立てた在宅介護計画に沿って飼い主さんをお手伝いしたり、床ずれ防止や沐浴方法のアドバイスに訪問したり、病院での日中お預かりを始めました。

また病院でストレスがかからないように、留守時のシッターに出かけることも動物看護師で担当しました。中には9ヶ月に及ぶ介護をされたご家族もあり、「人に話して少し楽になった」と言われることも多く、介護にかかわる心労や不安が少しでも和らぐようにと、飼い主さんと色々なお話をするように心掛けました。

これらの経験が高齢介護の参考になればと動物看護師の手で「介護を快互に」という小冊子に衣食住の項目別にまとめ、寝たきりの犬の飼い主さんにさしあげていました。

飼い主さんそれぞれの介護や看取りの形があり、動物看護師もその考え方に寄り添った中で介護のアドバイスをするように努めました。いずれ訪れるお別れは大変

悲しいことですが、後から報告に見える飼い主さんの表情にはさすがにさしさを覚える時もあり、「いい看取りをされたんだなあ」と安堵しました。

こうして振り返ってみると動物看護師の役割はまさに、「ゆりかごから墓場まで」という言葉のように、動物の一生にかかわっているのだと言えるのではないのでしょうか。「動物病院はサービス業である」と院長は私たちスタッフに常に言っていましたので、自分にとっては「顧客満足」や「病院の付加価値」を考えているいろいろな試みをした7年間でした。しかし、これらはリスクを考えては決して経験させてもらえなかったことで、院長の考え方や仕事場の環境によるところが大きかったと大変感謝しています。このほかにも飼い主さんへのサービスばかりではなく、動物病院や看護師の社会的な役割ということでは、CAPP 活動への参加やヒューマンアニマルボンドへの関心も挙げられると思います。

昨年私は病院を退職してホリスティックと言われることについての勉強を始めたのですが、在職中に知っていたらマッサージもできたのに、フラワーレメディも活用したのに、あれもこれもしてあげたかったと覚えることが後から後から出てくるのです。つまり動物看護師の役割は限りなく広く、深く、終わりが無いということです。もう10時間勤務というような働き方ができない体力の限界を感じていますが、「人も楽しい、動物も楽しいつながり」を目指していく中で、自分の役に立てることをしていけるように、これからも勉強を続けていきたいと思っています。



森 由紀子

(長野県・上原動物病院、本学会認定動物看護師)

動物病院スタッフの対応や説明はいつでも親切・的確であり、かかりつけの動物病院から紹介される商品は安心して用いることができるという信頼感を飼い主サイドから得られていることこそが、なにより大切なこととなる。

このことから、健康・予防サービスの向上には、飼い主との最前線で向かい合う動物看護師の能力の向上が不可欠である。動物の看護のプロとして責任を持ち、日頃行っている動物に対するケアをお家で飼い主さん

の生活スタイルにあわせてうまくできるよう、やはりきちんとした知識をもって接していかななくてはならない。

動物看護師の仕事として、まずは掃除や整理整頓が挙げられる。院内はいつも清潔を保ち、衛生面に気を配ることで、飼い主サイドから見る感じを自分たちでも客観的に見ておくことが大切。そして身だしなみも重要な点である。

受付業務は病院の窓口であり顔であるが、やはり親切な対応と分かりやすい説明、獣医師と飼い主を結ぶガイドラインとして、飼い主の不安をと取り除いてあげることが大切になってくる。カルテをすぐに出しておけば、次の診察をスムーズにまわしていくことができる。

入院動物の看護では、動物ができるだけストレスのないように、飼い主と同じ気持ちで接することにより、飼い主がお預かりやトリミングなどを安心感を持って当院を選んでくださるよう配慮することも大切である。病院は選ばれる側なので、任せて安心だし、とてもよくしてくれるなど理解してもらうため、何事にも病院を気に入ってもらえる気遣いを怠らないことが大事である。

診察補助も大切なことである。診察をスムーズに行い、より多くの患者さんを診られるようにするため、保定や診察機械器具の用意・検査をすることで、待ち時間を減らしたり、飼い主や患者に少ない負担でいくつもの検査をスムーズにこなしたりできるようになるメリットがある。オペ補助・検査も、獣医師がやりやすいよう、動物看護師が気を遣い先回りすることが大事である。

トリミングは、愛犬や愛猫がきれいになり病気発見・緊急治療につながるという一石二鳥な点が、飼い主側としては安心かつ楽でもある。

また、ダイレクトメールの作成により、ワクチンの時期やフィラリアの時期を知らせることができ、お悔やみカードなどで飼い主がもっと病院を信頼し気軽に足を運べるように、飼い主ケアもできる病院が理想なのかもしれない。

栄養指導・フードの提供に関しても、飼い主が正確な知識をきちんと理解できるように説明し、質問にもきちんと答えられることが、結果として信頼を得られ、飼い主の動物に対する適切な食事につながると思う。

私は、これらすべてのことが動物看護師の仕事であり、これは大変なことであるとあらためて気づかされた。いままでも獣医師・動物のためにと仕事をしてきたが、今はプラスαで飼い主のためにという気持ちも加わり、本当にいろいろなところに気づける人でないといけないと思った。



自分が飼い主として来院する時、こんな病院がいいなという理想を、形にしていきたいと思う。ただし、それは院長の了承の下だということも忘れずにいたい。



#### おことわり

わが国における「動物看護師」はあくまで任意の呼称です。それは、わが国の法律にはまだ、「動物看護」や「動物看護師」についての記載がないからです。

人医療領域では、法改正によって「看護師」と表記されるようになりました(2001年改正、2002年施行。改正前は「看護婦」)。こちらは国家資格であるので法律で規定されています。

動物医療領域の「動物看護師」を、人医療領域の「看護師」と一概に同一視はできないと思われます。しかし、「人医療領域における看護」から多くを学びたいとの認識に立ち、本学会ではこれに準じて近年「動物看護師」の表記を用いています。

2007年12月 日本動物看護学会 編集委員会

### 美術作品に見る動物たち 第3回

ペットとして飼育されている兎(ウサギ)はアナウサギで、明治時代以降、家畜として肉と毛皮を取るためヨーロッパから輸入された外来種である。巣穴を作りハーレム型の群れを形成する。妊娠期間は約30日である。出産時、子どもに毛は生えておらず目・耳は開いていない。

江戸時代以前の様々な物語に登場するのは、日本在来種のノウサギである。ノウサギは巣穴を作らず、妊娠期間は約42日で、目・耳は開き体毛も生え揃っている。

右絵の作者・西村卓三(1908~1955)は、昭和30年に47歳で夭折した奇才画家である。父は、動物の瞬時の動きをとらえて定評のあった西村五雲である。五雲は京都画壇の竹内栖鳳から動物画の衣鉢を継いでおり、子の卓三は、ときに父を超える鬼気迫る観察眼で動物画の傑作を物した。近代最大の動物画家の称は、長生きした同門の山口華揚に帰せられているが、この兎図は、華揚さえも敬服してやまなかった卓三の最も優れた秀作の一つといえるだろう。



兎(西村卓三画) 個人蔵  
文・白居惣右衛門(鎌倉逍遙庵・本会会員)

2007年度

## 動物看護研究 助成金(アニコム助成金)

### 応募方法



この制度をより積極的に活用していただくために、今年度、事務手続の一部を簡素化します。  
この説明文も、より分かりやすくしました。皆様の積極的なご応募をお待ちしています！

日本動物看護学会では、動物看護学についての体系的教科書『動物看護学（総論・各論）』の発行や「動物看護師資格認定試験」の実施など、動物看護師育成のための各種事業を積極的に行ってまいりました。そして2004年度より、動物看護学のいっそうの発展を促すべく「動物看護研究助成金事業」を発足させています。この助成金は、動物看護師の皆様が自発的に行っておられる研究会や会合などに対して、運営費用などの一部を学会側で負担し、その研究活動を支援することを目的としています。

動物看護師向けのセミナーや講習会は、当学会主催のものをはじめ数多く催されていますが、地方在住のため、または勤務上の都合などの理由から、これらに参加できず、学習の機会を失っている方も多いと思われます。

この助成金事業は、こうした皆様が、地元の動物看護師の方々同士で自主的に集い、動物看護師としてのスキルアップをするための勉強会を行うことを、積極的に支援するものです。

毎日の看護業務は大変お忙しいことと思います。しかし、この制度を利用して資金面での助成を得て、まずは小さな規模からでもよいので、こうした場を作られてはいかがでしょうか。学びを継続することにより、動物看護のいっそうのエキスパートをめざしましょう。

日本動物看護学会 会長 今道友則

この助成金制度は、アニコムクラブ(anicom(動物健康促進クラブ))様の援助協力を得て実施しています。同クラブ理事長・武村俊治様におかれましては、日頃より本学会の活動にご賛同くださり、誠にありがとうございます。この助成金制度を活用して展開される、本会会員動物看護師の皆さんの動物看護進展のための取り組みが、アニコムクラブ様の理念である「どうぶつの健康を促進し、さらにどうぶつと人間とのよりよい共生関係を築く」にも大きく寄与することと存じます。

アニコムクラブ ホームページ <http://www.ani-com.com/anicomclub/index.html>

右ページの応募手順をよく確認の上、ふるってご応募ください ⇒

ぜひ積極的に助成金を得て、これを一助として自主学習を活発に行ってください。

1. 応募対象——「動物看護に関する勉強会」

※院内セミナーや、仲間同士の自主的な集まりによる勉強会など、広く応募対象となります。

2. 応募期間——2007年6月1日～2008年2月29日

※応募する勉強会の実施期間は2007年4月1日～2008年3月31日とします。

3. 助成金の用途——自由です

※勉強会関連であれば、講師謝礼代、書籍雑誌購入代、会場代、交際費(飲食代)など、有効に自由にお使いください。

4. 申請者の条件——

- <本学会員 かつ 日本動物看護学会「動物看護師」資格認定者>であること。
- 1 勉強会の「参加者が5名以上」で、これに「本学会員2名以上」を含むこと。

5. 支払額——1勉強会に対して20,000円が支払われます。

※ここでのいう1勉強会とは「1回のみ単発開催のもの」「複数回開催のもの」を共に指します。1勉強会を複数回行う場合は、その全体に対して20,000円が支払われることとなります。

※2007年度の予算枠は200,000円であるため、先着10組まで受け付けます。

6. 「申請～助成金の支払～実施報告の提出」の流れ——

**「申請用紙」への記入・提出**——学会事務局から「申請用紙」を入手します。これに、申請者名と連絡先・参加者名・会の名称(仮名称でも可)・開催場所・勉強会の趣旨(400字前後)・助成金支払時の振込先などを記して学会事務局へ提出します。提出は、郵送・FAX・添付メールで可

↓

**審査結果の通知と助成金の支払**——提出された「申請用紙」の審査が行われます。審査結果通知後、速やかに助成金が振り込まれます(振込手数料は学会負担)。「申請用紙」が、勉強会の趣旨を含めて正しく記入できていれば、審査は通ります。な

↓

**「実施報告文」の提出**——勉強会終了後1週間以内(複数回実施の場合は、最終回終了後1週間以内)に学会事務局必着にて「実施報告(体裁は自由だが、実施内容と申請者の感想を約400字で具体的に報告)」を必ず提出してください。提出は、郵送・FAX・添付メールで可

- この制度による助成金支払が認められた場合、申請者を含めて、申請した勉強会に参加したく本学会「動物看護師」資格認定者>全員が、1回申請につき「学習ポイント」1ポイントを別途取得できます。

問合せ・申込先——日本動物看護学会 事務局 (TEL・FAX・E-mailはp1に記載)

昨年度は10件のご応募があり、これらに対して助成金が支払われました。

# 日本動物看護学会規約

1995年12月9日制定

1997年11月29日改正、1999年6月6日改正

## 第I章 総則

1. この学会は、日本動物看護学会と称する。
2. この学会は、動物看護に関する研究を中心として、関連する諸領域相互の情報交換の場を設け、この分野における研究の進展を図ることを目的とする。
3. 前述の目的を達成するため、次の事業を行う。
  - ① 動物看護師の諸問題についての事業
  - ② 会員の研究発表、シンポジウム、ワークショップ等の開催
  - ③ 学会誌などの発行
  - ④ 目的を達成するために必要なその他の事業

## 第II章 会員

1. この学会への参加はこの分野に従事する者および関心を有する者とする。
2. この学会の会員は、正会員および賛助会員とする。
3. 正会員は、この学会の主旨に賛同し、会費を納付する個人とする。ただし2ヵ年度分以上滞納の場合は退会とみなす。
4. 賛助会員はこの学会の目的事業を賛助し、賛助会費を納付する者とする。
5. 会員は学会の主催する研究発表会などに参加し、この学会の発表する出版物などの優先的配布を受けることができる。

## 第III章 役員および会議

1. この学会には次の役員をおく。

会長（1名）・副会長（3名以内）・監事（2名）・事務局長（1名）・理事（若干名）。
2. 理事および監事は、総会において正会員の中から選任される。
3. 会長、副会長、事務局長は理事の互選により選出される。
4. 会長は、この学会を代表し、会務を総理する。会長に事故ある時は、副会長がその職務を代行する。
5. 理事は、総会の承認を受けて決定される。
6. 理事は、理事会を組織して会長を補佐し、この学会の運営に当たる。
7. 理事は、互選により事務局長を選出し、事務局長は事務局幹事を任命し、運営の実務を司る。
8. 役員の任期は2ヵ年とし再任を妨げない。
9. この学会には、評議員若干名をおく。
10. 評議員は総会において正会員の中から選任され、第III章の規定が準用される。
11. 学会活動に功績のあった会員を、顧問とすることができる。顧問は理事会が推薦し、総会において決定される。
12. 通常総会は、毎会計年度終了2ヵ月以内に会長が招集する。
13. 臨時総会は、会長または理事会が必要と認めるとき、いつでも招集できる。
14. 理事会は随時会長が招集する。

## 第IV章 会計

1. この学会の経費は、会費その他の収入をもってこれに当てる。
2. この学会の会計年度は4月1日に始まり3月31日に終わる。
3. 理事会は、毎会計年度の収支決算を通常総会に報告し、承認を受けなければならない。

## 付則

1. この学会の会費は、年額理事6,000円、正会員3,000円、賛助会員一口30,000円以上とする。
2. この定款は1995年12月9日より施行する。
3. この定款の変更は総会の議決による。
4. この学会の議決は出席者の過半数の賛成をもってする。
5. この学会の事務局を東京都千代田区猿楽町2-6-3におく。

注) 2005年5月より下記に移転  
東京都千代田区神田淡路町2-23  
アクセス御茶ノ水2階

## ■日本動物看護学会 役員

### 会長

今道友則 (日本獣医生命科学大学名誉教授)

### 副会長

桜井富士朗 (桜井動物病院 院長)

廣田順子 (アリスどうぶつクリニック 院長)

渡辺 茂 (慶應義塾大学文学部心理学専攻 教授)

### 事務局担当理事

村中志朗 (広尾動物病院 院長)

### 理事

上野 純 (日本動物看護学会事務局) (事務局長、編集担当)

大城朋子 (四街道動物病院 動物看護師)

大和田一雄 (山形大学医学部附属動物実験施設 助教授)

長田久雄 (桜美林大学大学院国際学研究所 教授)

栗野 悟 (動物病院モルム 院長)

小杉正太郎 (早稲田大学文学部心理学教室 教授)

小松千江 (新ゆりがおか動物病院 動物看護師)

酒井健夫 (日本大学 獣医衛生学研究室 教授)

高橋英司 (帝京科学大学 アニマルサイエンス学科 教授)

高橋和明 (日本獣医生命科学大学名誉教授)

多川政弘 (日本獣医生命科学大学 獣医外科学教室 教授)

田中吉春 (株式会社アイビーテック)

中俣由紀子 (かしま動物病院 動物看護師)

和 秀雄 (広島国際大学 社会環境科学部 教授)

西谷孝子 (西谷獣医科病院、動物看護師)

幅田慶子 (センターヴィル動物病院 獣医師)

牧田登之 (福岡動物病院看護士学院 学院長)

若尾義人 (麻布大学獣医学部 外科学第一研究室 教授)

渡辺隆之 (有限会社エム・ビー・ネットワーク、獣医師)

### 監事

竹内吉夫 (看護編集者)

高見澤重昭 (弁護士)

## ■日本動物看護学会 評議員

青木香代子 (青木動物病院 動物看護師)

青木信夫 (榊エイシス代表)

赤池久恵 (赤池ペットクリニック 保健師)

阿部令子 (アニマルサポートオフィス・ミーチョ代表、動物看護師)

安藤孝敏 (横浜国立大学教育人間科学部 准教授)

池田千佳子 (動物看護師)

石橋 晃 (日本科学飼料協会 理事長)

石丸昌子 (大阪コミュニケーションアート専門学校 講師、獣医師)

伊藤勇夫 (千葉大学医学部 動物病態学)

植松一良 (昭島動物病院)

白井玲子 (白井犬猫病院 院長)

小方宗次 (麻布大学獣医学部附属動物病院 副院長)

岡ノ谷一夫 (独立行政法人理化学研究所 脳科学総合研究センター)

加藤清雄 (酪農学園大学獣医学部 獣医生理学研究室 教授)

金川里津 (入江動物病院 動物看護師)

金山喜一 (日本大学生物資源科学部 獣医生理学教室 教授)

金児 恵 (東京大学大学院人文社会系研究科 研究員)

草山太一 (昭和大学教養部)

甲田菜穂子 (東京農工大学大学院 共生科学技術研究院 准教授)

紺野 耕 (日本獣医生命科学大学名誉教授)

斎藤 徹 (日本獣医生命科学大学 実験動物学教室 教授)

坂田省吾 (広島大学大学院 総合科学研究科 行動科学講座 教授)

佐久間明美 (編集者)

佐藤 克 (佐藤獣医科 獣医師)

島田真美 (獣医師)

清水 誠 (まこと動物病院 院長)

杉山尚子 (山脇学園短期大学 准教授)

高倉はるか (相川動物医療センター 行動治療科 獣医師)

種市康太郎 (聖徳大学人文学部 臨床心理学科 准教授)

辻 弘一 (辻動物病院 院長)

椿 志郎 (北里大学名誉教授)

戸塚耕二 (明和学園短期大学 非常勤講師)

富澤保浩 (実験動物技術師)

中井江梨子 (どうぶつ眼科 Eye Vet 動物看護師)

信永利馬 (東北大学医学部附属動物実験施設 准教授)

三嶋淳子 (動物看護師)

森 裕司 (東京大学大学院農学生命科学研究科・農学部応用動物科学専攻 教授)

山崎由美子 (独立行政法人理化学研究所 脳科学総合研究センター)

谷茂岡良佳 (日本動物愛護協会)

## ■日本動物看護学会 動物看護師認定試験委員会

### 委員長

桜井富士朗 (桜井動物病院 院長)

### 委員

小方宗次 (麻布大学獣医学部附属動物病院 副院長)

長田久雄 (桜美林大学大学院国際学研究所 教授)

加藤清雄 (酪農学園大学獣医学部 獣医生理学教室 教授)

栗野 悟 (動物病院モルム 院長)

酒井健夫 (日本大学生物資源科学部 獣医衛生学研究室 教授)

高橋英司 (帝京科学大学 アニマルサイエンス学科 教授)

高橋和明 (日本獣医生命科学大学名誉教授)

椿 志郎 (北里大学名誉教授)

西谷孝子 (西谷獣医科病院 動物看護師)

廣田順子 (アリスどうぶつクリニック 院長)

福所秋雄 (日本獣医生命科学大学 獣医保健看護学科 教授・学科主任)

牧田登之 (福岡動物病院看護士学院 学院長)

村中志朗 (広尾動物病院 院長)

若尾義人 (麻布大学獣医学部 外科学第一研究室 教授)

渡辺 茂 (慶應義塾大学文学部心理学専攻 教授)

## ■日本動物看護学会 編集委員会

### 編集長

桜井富士朗 (桜井動物病院 院長)

### 副編集長

甲田菜穂子 (東京農工大学大学院 共生科学技術研究院 助教授)

### 編集委員

太田能之 (日本獣医生命科学大学動物科学科 准教授)

草山太一 (昭和大学教養部 講師)

栗野 悟 (動物病院モルム 院長)

小松千江 (新ゆりがおか動物病院 動物看護師)

高倉はるか (相川動物医療センター 行動治療科 獣医師)

竹内吉夫 (看護編集者)

種市康太郎 (聖徳大学人文学部 臨床心理学科 准教授)

中俣由紀子 (かしま動物病院 動物看護師)

牧田登之 (福岡動物病院看護士学院 学院長)

村中志朗 (広尾動物病院 院長)

敬称略・五十音順・2007年11月1日現在

【投稿規定】

(1997年11月1日施行)

(2002年9月10日改正)

日本動物看護学会 会誌

【Animal Nursing (アニマル・ナーシング)】


(Journal of Japanese Society of Animal Nursing)

1. 投稿論文は動物看護領域に関する未発表の英文の Full Paper (原著)、Note (短報)、Review article (総説)、および和文の原著、総説、技術講座、資料、論文紹介、トピック等とする。
2. 著者または共著者は会員、非会員を問わない、また投稿料は無料とする。
3. すべての投稿論文は編集委員または編集委員会が委嘱した論文審査員が審査し、編集委員会が採否を決定する。編集委員会は原稿の訂正を求めたり返却したりする場合がある。動物の福祉面に問題のある論文は採択しない。
4. 原著論文の構成は各分野の慣習に従うが、要約 (Summary)・序文 (Introduction)・材料と方法 (Material&Method)・結果 (Result)・考察 (Discussion)・引用文献 (Reference) から成ることが望ましい。
5. 要約は欧文 (または和文) とし、150語前後で内容を簡潔にまとめ、3～5語の Key Word をつける。原著論文以外の報文も、欧文表題を必ず付け、欧文要約があることが望ましい。
6. 和文原稿は新仮名遣いとし、なるべく当用漢字を用い、外来語と生物の和名は片仮名とする。原稿はパソコンまたはワープロを用いてA4判用紙に作成する。手書きの場合はA4判横書き原稿用紙を用いる。欧文原稿は厚手のタイプ用紙にダブルスペースでタイプし、左端2.5cm あける。
7. 文献は本文に引用したものに限り、アルファベット順に記載する。個々の文献の記載例を下に掲げる。  
〔雑誌〕 著者名 (発行年次) 表題名, 掲載誌名, 巻数: 最初の頁-最後の頁: 発行所.  
例 1) 赤池久恵 (2001) 糖尿病の犬と飼い主への関わりを通して看護指導の意義を考える, アニマル・ナーシング, 7: 4-19: 日本動物看護学会.  
2) Dennis, R (1997) Veterinary Diagnostic Imaging: into a new era, Veterinary Nursing, 12: 12-13: J. B. V. N. A.  
〔書籍〕 著者名 (発行年次) 書名: 最初の頁-最後の頁: 発行所.  
例 1) 熊倉正樹ほか (2002) 動物看護学各論: 50-51: 日本動物看護学会.  
2) Paul W. Pratt (1994) Medical, Surgical and Anesthetic Nursing for Veterinary Technicians: 259-342: American Veterinary Publications, Inc., Goleta.
8. 図および表の番号は「Fig. 3, Table. 2」または「図3、表2」のようにする。図と表は本文原稿とは別にして、挿入希望箇所を本文原稿中に指定する。図が手書きの場合には黒インクを用い、白地用紙あるいは青罫のグラフ用紙を用いる。
9. 上記以外で執筆中の詳細は、執筆者に配布される執筆要綱による。
10. 著者校正は初校までとする。原則として誤植の訂正に限り、新たな文章やデータを付け加えることはできない。また、原稿、原図などは、著者に返却される。
11. 投稿論文については、カラー印刷に要する費用は著者の負担とする。
12. 別刷論文は1編につき50部まで無料、それ以上は著者の負担とする。
13. 本誌に掲載された論文の著作権は、日本動物看護学会に属する。

※詳しいことは、学会事務局までお問い合わせください。ご相談を承ります。

## ● 新刊のご紹介 ●

『動物看護師になるには』 井上こみち著 ペリかん社 B6判 1,270円(税別) 07年11月刊行予定

本書は、わが国の動物看護職の最新現状を詳しく紹介している好著です。本学会も取材に応じました。本学会認定看護師をはじめ、様々な動物看護師の方々の様子—仕事の内容・仕事への取り組みなどが、多く紹介されています。著者の井上さんは本学会員で、『ディロン・運命の犬』などの作者でもあります。中高生向けの職業案内書ですが、現職者が読んでも、これからのわが国の動物看護職を考える上で大きな参考になると思われます。目次から——**第1章 ドキュメント 命と健康を見つめて(高レベルの医療を地域の動物たちに提供できる場で/得意分野のエキスパートになりたい/看護技術を身につけて行き場のない動物の救済に役立てたい)** **第2章 動物看護師の世界(動物看護のプロフェッショナルの今までとこれから/動物看護師がいてこそ、の動物医療/羽ばたく動物看護師/動物看護師の生活と収入)** **第3章 なるにはコース(動物看護師の適性って何だろう/資格について/知識と技術を得るために/就職について)**  カラー口絵つき

## 編集後記

本学会の事務局は、東京都千代田区北部(皇居の北側)の神田淡路町にあります。交通の便がよく、JR中央線・総武線の御茶ノ水駅・地下鉄淡路町・新御茶ノ水・小川町の4駅より徒歩2分です(秋葉原にも、皇居のお堀にも徒歩10分)。本会は、わが国唯一の動物看護学の学会です。世間にその心意気を見せようと、事務局もあえて首都の中心部に設置いたしました。隣地の神田駿河台は学生街で、神保町は世界一の古書店街です。周辺の史跡も湯島聖堂・ニコライ堂・神田明神など豊富に残っています。動物看護学の学問的イメージアップにもつながるのではないのでしょうか。

2007年5月には、2年に1度の江戸三大祭りの一つ「神田祭」の例大祭が開催され、周辺が1週間もピーヒャラドンと大変なにぎわいでした。神田明神は平将門を祭り、江戸時代は祭りの神輿が江戸城の中まで入ったという大変格式のある神社です(神田明神下には銭形平次も住んでいた)。次回の例大祭は2年後、平成21年5月です。本学会員でお祭り好きで由緒ある祭礼の神輿をかつぎたい方は、あらかじめ事務局までお申し出ください。淡路町2丁目町会の氏子として、半纏と鉢巻は町会が用意してくれますが、お祭りスタイルに最低必要な地下足袋とか半だこ(短パン)などをお持ちでない方は、女性で1万5千円、男性で8千円くらい費用がかかります。ちなみに私は今年、左脚のひどい肉離れで、杖をつきながら泣く泣く平服で神輿について歩くという不様な有様でしたので、2年後の活躍を大いに期しております。一緒に江戸三大祭りで神輿をかつぎましょう。(F.S)

学会事務局/上野 純(編集担当)、

柏原香月

協力/桜井陽光、小菅知恵

本誌発行にあたり、株式会社アグレの松澤

秀見様、伊原英治様に深謝申し上げます。

本誌内のイラスト(挿絵)はすべて、

著作権フリーのものを用いています。

## 日本動物看護学会 学会誌

Animal Nursing (アニマル・ナーシング) Vol. 12 No. 1

2007年12月1日 第1刷発行

定価2,000円(税込) 本誌の購読料は会費に含めて徴収しています。

編集●日本動物看護学会 編集委員会(委員長 桜井富士朗)

発行人●今道友則

発行●日本動物看護学会(会長 今道友則)

〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町2丁目23番 アクセス御茶ノ水2階

TEL. 03-5298-2850 FAX.03-5298-2851 E-mail info@jsan.gr.jp

印刷/株式会社アグレ・松澤印刷株式会社

本誌の内容を無断で複写・複製・転載することを禁じます。

# as

アニマルスペシャリストのための  
ワークマガジン「月刊 アス」

## animal specialist



### 現場で役立つ実践的な情報が満載

- 「飼い主さんのため動物のため、より知識を深めたい」
- 「一生の仕事として誇りをもって働きたい」
- 「アニマルスペシャリストの横のつながりを広げたい！」

そんな読者の皆さんの要望に「as」がお応えします！

#### 動物看護に必要な学習情報を「知識」と「実践」を意識した2本立てで展開

基礎獣医学から飼い主さんの心のケア、クレーン対応法などのコミュニケーションスキルまで、多角的な視点で動物看護師に必要な知識、技術をフォローします。またトリング記事にも対応。イラストや写真を多用して分かりやすく読みやすいデザインで！

#### 読者間の「交流」を「as」が積極的にバックアップ！

悩み相談や読者間の意見交換の場を誌面に反映。また、動物看護師同士の「横のつながり」を提供することを目的にas CLUB会員を募り、活動中。会員情報を掲載するページなども設け、読者間の結びつきを大切にします。

#### セミナー・学会情報をいち早くお届け。求人情報の件数の多さにも注目

獣医療界などのタイムリーなニュースや新製品情報、セミナー・学会などの勉強会情報をいち早くお届けします。また求人情報の件数も業界トップ！

#### レベルアップ、社会的地位向上をバックアップする企画も満載

動物看護師、トリマー・グルーマーの職業の安定と社会的地位の向上を応援するため、関連企画や記事を掲載します。また、動物看護関連資格試験の受験情報や対策も掲載します。

A4判 88頁 毎月10日発行

一冊定価 1,600円

定期購読

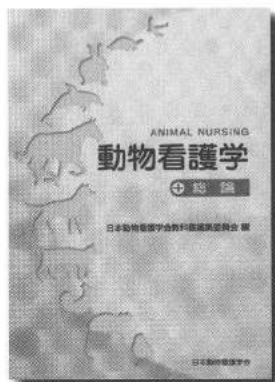
- 1年(計12冊) 12,000円  
★毎月買うより7,200円もおトク！
- 2年(計24冊) 22,000円  
★毎月買うより16,400円もおトク！

## 動物看護師が修得すべき標準的な知識・技術を提示

# 動物看護学【総論・各論】



動物看護学の学問的基礎が、わかりやすく身につく。  
総論と各論から成り、各分野を系統立てて学習できる。

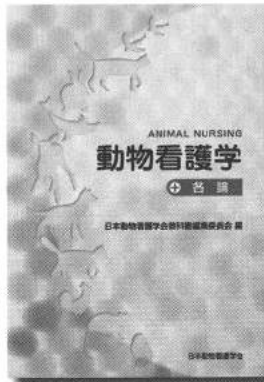


#### 動物看護学【総論】主要目次

- 第1章 動物看護概論
- 第2章 動物看護における業務と技術  
カラー写真 看護の対象動物
- 第3章 看護の対象動物
- 第4章 動物看護学研究法
- 第5章 関連法規  
資料

#### 動物看護学【総論】

日本動物看護学会教科書編集委員会 編  
B5判並製 326頁 2色刷 定価 10,290円



#### 動物看護学【各論】主要目次

- 第1章 解剖生理学 第2章 内科看護学
- 第3章 外科看護学 第4章 薬理学
- 第5章 感染病学 第6章 繁殖と遺伝
- 第7章 動物心理学・動物行動学
- 第8章 動物栄養学
- 第9章 動物看護公衆衛生学
- 第10章 動物看護師のための輸液
- 第11章 動物看護師の放射線学

#### 動物看護学【各論】

日本動物看護学会教科書編集委員会 編  
B5判並製 318頁 2色刷 定価10,290円

発行:日本動物看護学会 発売:(株)インターズー



as BOOKS エキゾチックアニマル・ブック

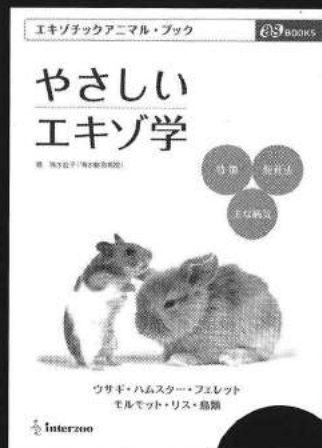
— ウサギ・ハムスター・フェレット・モルモット・リス・鳥類 —

# やさしいエキゾ学

特 徴

飼 育 法

主 な 病 気



最新刊

ペットとして人気急上昇中のエキゾチックアニマルは今後来院数が増加すること必至!

エキゾの飼育経験や触れる機会が少ない動物看護師さんはもちろん、飼い主さんにもわかりやすく、一緒に学べるエキゾの基礎知識から好発疾患までをやさしく解説した1冊です!

著 清水宏子 (清水動物病院)  
A4判 並製本 96頁 (本文オールカラー)  
定価 5,250円 (税込)  
新刊特価 **4,800円** (税込) ※2008年2月末まで

## おさえておきたい 6動物種を掲載

ウサギ・ハムスター・フェレット・モルモット・リス・鳥類といった人気動物種で比較的来院数が多い動物種を厳選。

## エキゾの特徴や 飼育法がよくわかる

動物種ごとの基礎知識はもちろん、飼育に不可欠な食餌や飼育環境などもイラスト化して一目瞭然。

## 好発疾患を やさしく解説

主な病気の知識だけでなく、病気に対する予防法や健康を維持するためのケアポイントを解説。

## 過去5回の問題を完全網羅!

日本動物看護学会主催

# 動物看護師資格認定試験 過去問題集'08

解答つき

最近5回の問題と傾向分析 (筆記試験Ⅰ、筆記試験Ⅱ、実地試験)

## この1冊で2008年の受験対策は万全

- ◆ 日本動物看護学会主催の動物看護師資格認定試験に対応
- ◆ 過去5回の出題傾向を分析
- ◆ 全問解答つき
- ◆ 写真・図版はカラー掲載
- ◆ 付録・2008年3月度の動物看護師資格認定試験受験案内

この問題集は日本動物看護学会が主催している動物看護師資格認定試験のあと、受験した人々からの聞き取り調査をしてまとめたものです。

出題傾向は過去5回に出題された問題を分析することで、次回の出題傾向がみえてきます。また、出題された問題は日本動物看護学会編の「動物看護学〈総論、各論〉」に記載されている項目に関連した部分から多く出題されています。



好評  
発売中

動物看護師資格認定試験対策研究会 編  
B5判 228頁 (実地試験オールカラー)  
定価 **4,200円** (税込)

interzoo

〒107-0061 東京都港区北青山3-5-12 青山クリスタルビル5F  
〒530-0004 大阪府大阪市北区堂島浜1-2-6 新ダイビル9F

※発送手数料は一回のご注文につき一律525円いただいております。

受注専用フリーダイヤル TEL ☎0120-80-1906 FAX ☎0120-80-1872 ホームページ <http://www.interzoo.co.jp/>

WALTHAM®

# 食べる量を減らさずに カロリー制限できませんか？



最新の研究によると、高タンパク質と高食物繊維の組み合わせにより、満腹感を得られやすいということがわかってきています。

ロイヤルカナン・ウォルサムは、この理論を応用し、優れた嗜好性を持つ犬用食事療法食「満腹感サポート」を開発しました。

犬用

新発売

## 満腹感サポート SATIETY SUPPORT

ロイヤルカナン・ウォルサム 犬用「満腹感サポート」は、減量時の食事量を確保するとともに、減量時のリーンボディマス（除脂肪組織）保持のために高タンパクに設計された食事療法食です。本製品は減量を必要とする犬のみならず、便秘や線維反応性疾患の犬にも適しています。



原寸大



パックサイズ：1kg・3kg・8kg

  
**ROYAL CANIN**  
VETERINARY DIET



“ウォルサム”製品群の栄養に関するご質問は  
ウォルサム テレフォンサポート

**0120-761-101**

受付時間 10:00~12:00, 13:00~16:00 (土日、夜日を除く)

[www.royalcanin-waltham.jp/](http://www.royalcanin-waltham.jp/)

マスターフーズリミテッド  
〈総販売元〉  
**共立製薬**  
東京都千代田区入船1-5-10